

556
2

556-282



1200501511001

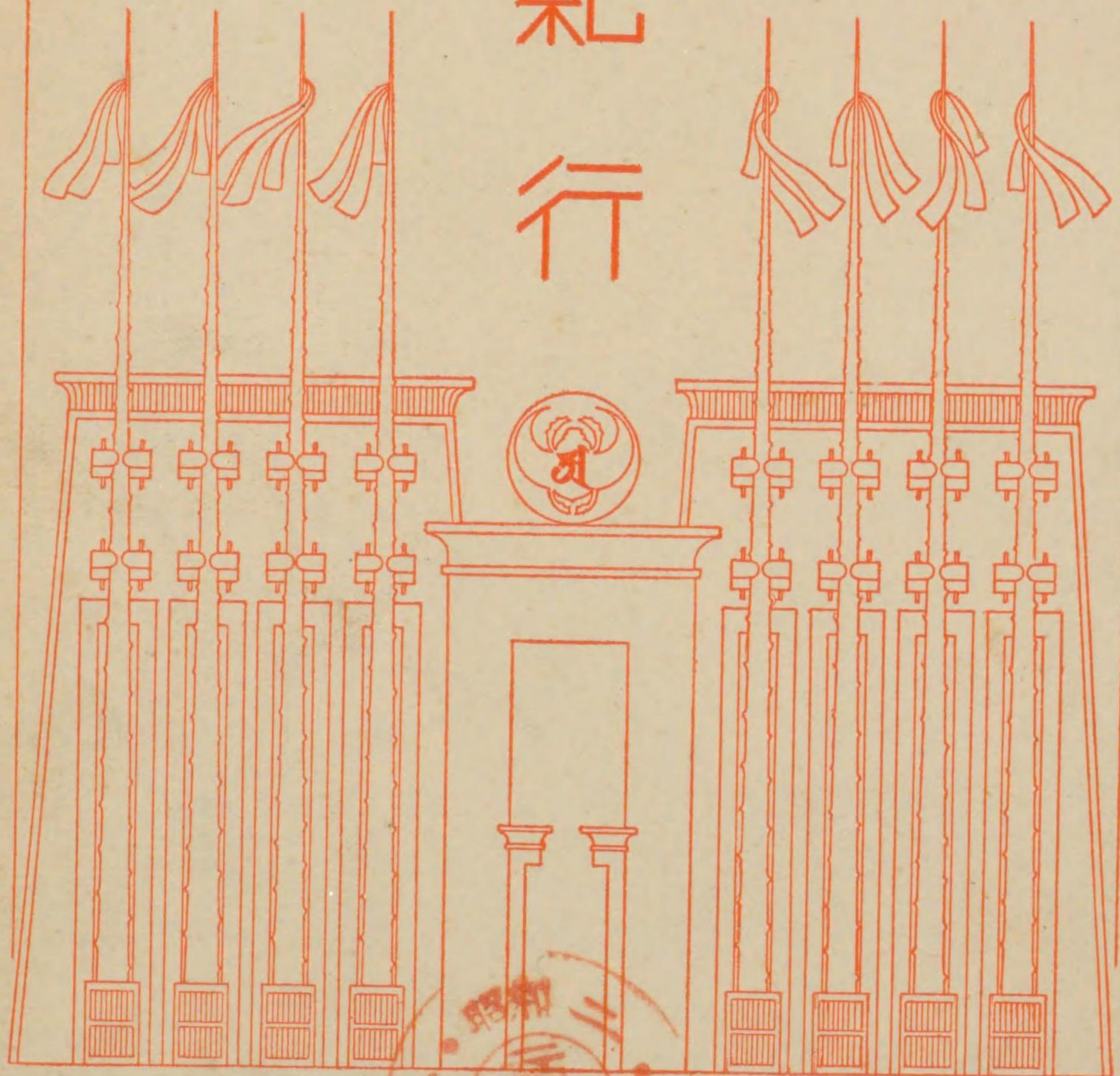
32 1 23

2-1095



埃及

紀行





Ra-hotep 公及び妃 Nofret の坐像
開路陳列館出陳（【埃及彫塑集】より複寫）



Ra-hotep 公及び妃 Nofret の坐像
開路陳列館出陳（【埃及彫塑集】より複寫）



Ra-hotep 公の頭部 (〔龍の進化〕より複寫)



妃 Nofret の頭部 (【埃及彫塑集】より複寫)

はしがき

埃及紀行といふと題は可なり大きいから、少なくとも蘇丹邊迄行つた様に思はれなくもないが、實は大正十一年十月中旬、歐羅巴から歸りがけに坡西土へ上陸し、十一月初旬へかけて開路市から内流河を遡り、幾多の古蹟を割愛し、僅に四五ヶ所を大急ぎで一通り見物し、明日庵までで歸つたのである。今になつてみると *Kharjūm* は兎に角、萬障繰合せせて *Abu Simbel* 丈でも覗いておけばよかつたと思ふが、あの時はそんな事は少しも考へなかつた。

此の記事は大正十二年の七月から同十四年の三月まで、大阪で發行してゐる雑誌『建築と社會』へ連載したもので、足かけ三年に渡つてゐるから、

初めの方と後の方と書き方は少し違つたところもある。此度一冊の書物として出版する事になつたに就ては、全部書き直さぬにしても、全編を通じ統一した書き方に改めればいゝのは判つてゐるが、どうしてもさうしてゐる暇がないから其儘にして置き、たゞ書き間違へたところを訂正したり、少し書き加へたりした位でおいたのである。

記事は頗る非學術的で、たゞどこをどう歩いて、どんな事に出會つたかを記したに止るから、毒にも藥にもならぬ。先づ汽車中で新聞紙を讀んで了つたあとか、又は床の中で寝ながら讀む程度のものである。私は倫敦にゐたとき、歐洲へ行きがけに蘇士へ上陸し開路市へ一泊がけで行き、GIZAの Pyramid 丈けみて坡西土へ出て、再び船へのつて來た人から、埃及は大變におそろしい土地で、到底一人では宿屋から一步も出られぬ位だから

上埃及の獨り旅等は思ひもよらぬときかされたが、扱て行つてみると、うるさいにはうるさいがそんなものではない。こちらが相手になりさへせねばいゝので、決してとつて喰はれる様な心配はない。要するにこちらのやり方一つで、氣を落つけて居さへすれば何でもないのである。私は私が出會つた有のまゝを記したのだから、此の記事が將來埃及を遊覽してみやうといふ人に幾分でも参考になれば、夫れこそ思ひがけぬ事と言はねばならぬ。

地名其他には随分當字を書いたが、これはたゞ書いてみたので、London を「倫敦」Paris を「[田]里」Berlin を「伯林」New York を「紐育」の調子でどこ迄行けるかやつてみたまでである。止むを得ぬの丈假名又は羅馬字のまゝとし、其以外は總て漢字を當籤めておいた。例へば Benihasan 二

「紅波山」Cairo に「開路」Edfu に「江戸府」の如きで、成るべく原音に近い音の字を用ひたのである。「伯林」や「紐育」はなれてゐるから讀めるが、San Franciscoを「桑港」とかいたのなどは、初めに會つたのでは難かしくてとても讀めまい。Fahrenheitを「華氏」としたのも日本では大分無理である。

私が本文の中に用ひた當字は、出来る限り斯様なのは避けた積りである。

挿入の寫眞は平面圖及び木彫・石刻・銅像・繪畫等を除いた以外の風景や建築物は、何れも私自身で撮影したものである。拙いことは斷るまでもないが、私にとつては思出の種で、何れも捨るに忍びぬもののみであるから。成るべく夫れを多く入れたのである。平面圖は外國の本の圖を複寫したのと、私が引直したのとある。また彫刻繪畫等は繪端書・寫眞・『埃及彫塑集』(Egyptischen Plastik)・『龍の進化』(Evolution of Dragon)・『古埃及神話傳説集』(Myths and Legends of Ancient Egypt)・『古埃及人の文化』(The Civilization of the Ancient Egyptians)其他等から複寫したものである。

昭和二年三月一日

京都市に
於いて

天 沼 俊 一

埃及紀行目次

緒言	一
埃及及入國開路市滞在	一
ギザの寶形塔	一〇
マメリユーク墓地 老馱島 古開路	二〇
メンフキスの廢墟とサツカラ見物	二六
イブン・ツルーン寺からアタベル・ハドラのバスの窓	三四
太陽の町から回教寺院への巡禮	四六
ツールン王の水道 フオスタート廢墟 赤寺	六四
開路市よりミア迄	七三
紅波山の窟墓 張玲の木賃宿	八八

アバイドスの遺跡 一〇六

張圻 ケナ デンデラ ラクソル 一二三

シブスの東岸の一日 一四一

シブス西岸の第一日 一五七

シブズの西岸の第二日 一七六

ラクソルから古夢・御坊へ 一九二

古夢・御坊から明日庵へ 二〇八

拜禮嶋 大石堰堤 窟墓 象嶋 二二四

象嶋見物 開路市歸着 二五四

回教寺院と博物館 二六六

開路市 坡西土 暴夜墓地 解纜 二八四

埃及紀行

緒言

大正十一年十月一日に白耳義國安土府解纜の大阪商船會社貨物船「アトラス」丸は、途中極めて平穩無事なる二週間の航海の後、同月十四日早朝坡西土に入港した。此船は神戸漢堡線に使用されつゝあるので、此度も漢堡を出て安土府に寄港した時に便乗したのである。客は私の他に東北大學教授の長谷部言人氏丈で、互に名丈は知り合つてゐたが會つたのは初めてであつた。併し種々の點で話があふので、私は此二週間を面白く暮した。其上私の最も得意な日本語であらゆる用事を便し得たのと、船長小西氏機關長龜山氏等と毎日會食したため、食後いろ／＼珍らしき話をきき、大に見聞を擴め常識を養成し得たから、私にとつては洵に愉快なる航海であつた。

埃及入國 開路市滞在

十月十四日

(土曜、好晴)

緒言

六時四十分起床、甲板に出れば船は既に入港して正に碇泊する所であつた。八時朝食、九時商船會社代理店より出迎の艇へ船長、長谷部氏等と同乗し、序に私の手荷物四箇をのせ税關前へ上陸をした、即ち初めて亞弗利加の土地を踏んだのである。荷物は艇へ置き去りにして、同地唯一の日本商店南部商會より迎に來た土人に案内せられて、私共三人は其商店へ行つた。斷つておくが右の土人は船長丈けを迎へに來たので、私たちは附録として行つたのであつた。

主人は南部憲一と呼び、徒手空拳渡坡してから十二年間奮闘努力、同地で成功した唯一の日本人ださうで、若い太つたおそろしく感じのいゝ人、小西船長に紹介して貰ふと直に手荷物受取の一件で大に主人を煩はした。あとできくと埃及入國の殆んど總ての日本人は皆かくの如く南部氏に厄介になるのださうである。主人こそ迷惑千萬であらうが、誰に對しても一列平等に氣持よく世話をしてくれるのださうで、當代には珍らしい人である。私は主人と共に税關へ行つた。先刻艇の中へ殘して來た荷物は全部檢閲場の机の上のせてあつた。こゝで暫時主人と税關吏との問答を聽いてゐたが、暴夜語だから私には全然分らぬ。併し結句申告書の空欄へ夫れ々必要事項を記入し、記名して役人へ渡すと、彼は夫れを一見した上、たゞ一箇の荷物を開かせ形式的に内容に手を觸れた丈けで四箇共通過。其まゝ同店へ歸ると、あとから店の使用人が車へのせて運んで來た。

次に主人は船長同道領事館へ趣き、長谷部氏は番頭を案内として買物に出かけた。私は一人同店に残つてゐたが、開路市行の汽車は午後零時半と六時との事に、なるべく零時半のに乗車せんと欲し、必要品の若干を買求め、折柄歸來の主人に十一月初旬孟買行汽船切符の購入を依頼し、手荷物二箇を同店の倉庫へ預け、残りの二箇を持つて停車場に向ひ、豫定通りの汽車にのる事を得た。



所謂「村長」の木彫立像
(繪端書複寫)

汽車は坡西土の終點を發して暫時は蘇西運河に沿うて走る。砂は日光を反射する事頗る強烈で、窓外をみてゐると私の様な視力の弱い者は、色眼鏡なしにはぢきに眼が痛くなる。空は彌が上に青く、砂は白く、運河の水は濃厚なる群青で、早や既に熱帯氣分、埃及氣分が漂つてゐる様に思はれた。漸くにして汽車畑中を走るに及んで色眼鏡を取り去るを得たのであつた。

正四時半開路市着、旅館 Shepherd's Hotel (牧羊館) の乗合自動車も案内人のアーメッド・サラーム、南部氏が坡西土から打電しておいてくれたので、驛に來てゐた。サラームには明朝八時旅宿

に来るべく命じ、直に宿に趣き地階の静かな一室を占領したのは一時間後の午後五時半であつた。埃及入國も開路の入市も、可なり手数のかゝる様に聞いてゐたが、最早平和なる今日左程まで嚴重に取締るにも及ばずと見えて、何の取調べもなかつた。旅券は船にゐた間に、早朝乗込んで来た旅券係と事務長との間で檢閲終了せしなるべく、全然何等の面倒をも見なかつたのは、甚だ好都合であつた。

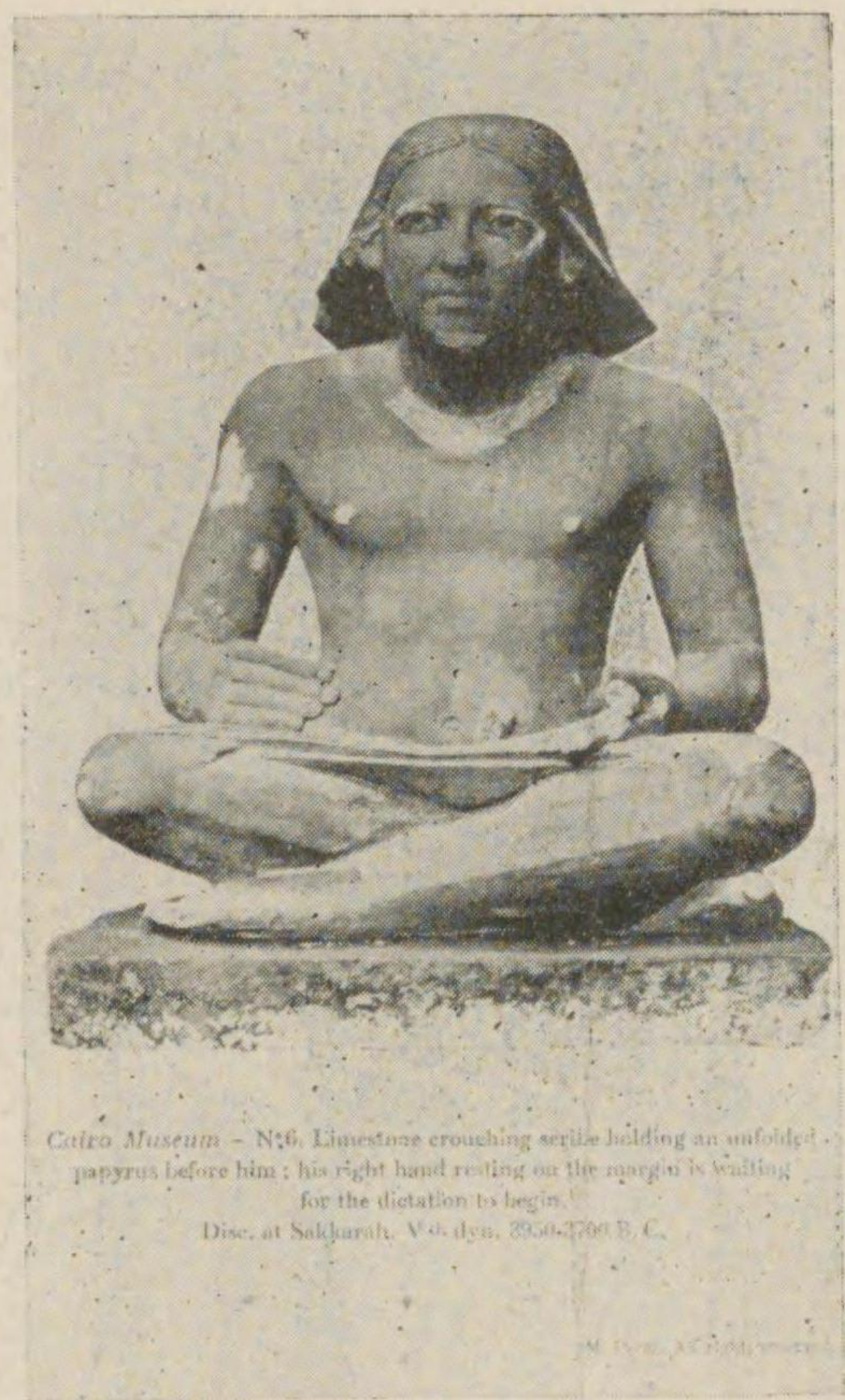
十月十五日

(日曜、好晴)

言ふ迄もなく歐米の大都市では、日曜日には官公衙商店は何れも休業し、殊に英國の田舎等に於いては、唯一の交通機關たる汽車は休止するか又は僅に一二回ほか運轉せざるが故に、私共にとつては不便至極であつたが、こゝは回教國であるから金曜が休日で日曜は何でもない。だから土人の商店は終日、歐人の午後一時迄營業してゐるから、恰も歐米の土曜日の如くである。博物館も同時刻迄閉館せりと事に、先づ第一に町の光景を見ながら徒歩で博物館へ向つた。

埃及博物館は内流河畔、廣潤なる地域に獨立して建てるが故に火災の虞れもなく、而も最も便利なる位置を占めてゐる、館は安政四年に佛人埃及學者 Mariette の創立するところ。現在の建築は今を距る凡二十年前、工費約五百萬フランを以て建立せしもので、頗る堅牢宏壯なるも、其式を埃及に採らずして希臘羅馬式とせしは遺憾である。

階下には多く古代の彫刻繪畫、階上には古帝國の英主の木乃伊——Rameses I, II, III, Amenophis I, Sethos I, II, Thutmosis I, II, 等——及寶物等の陳列で、殊に寶物は何れ劣らぬ希世の珍、我が正倉院の御物に拮抗し得るもの、世界廣しと雖も唯此寶物あるのみ。如何に英國博物館が横暴を極めても、到底此に及ぶべくもないのは蓋し當然である。



胡坐せる書記の像
(繪端書複寫)

階下古代彫刻室に於いては、豫て繪でのみ見てゐて、埃及の様な國にもかゝる威嚴ある容貌の貴公子や氣高い婦人がゐたかと思つてゐた Ra-Hotep 公及び妃 Nefert (又は Nofret) の等

身坐像に初めて接し、今より五千年前の大昔に彫刻の技術が、阿弗利加の一角に於いて既に斯様な程度に迄發達してゐたかと、今更の様に感歎之を久うしたのであつた。

紐育の中央美術館に於いて其模造を見、實物は如何に生氣潑刺であらうかと想像をしてゐた、サ

ツカラ發見の所謂 Sheikh el-Beled (村長) の生けるが如き木彫立像も亦像と一室を隔て、陳列せられてあつた。惜哉兩足其他若干の部分は發見後の修繕を経たれども、全體の肉附及び溫和善良なる面相は前者に劣らざる伎倆の熟達を示してゐる。

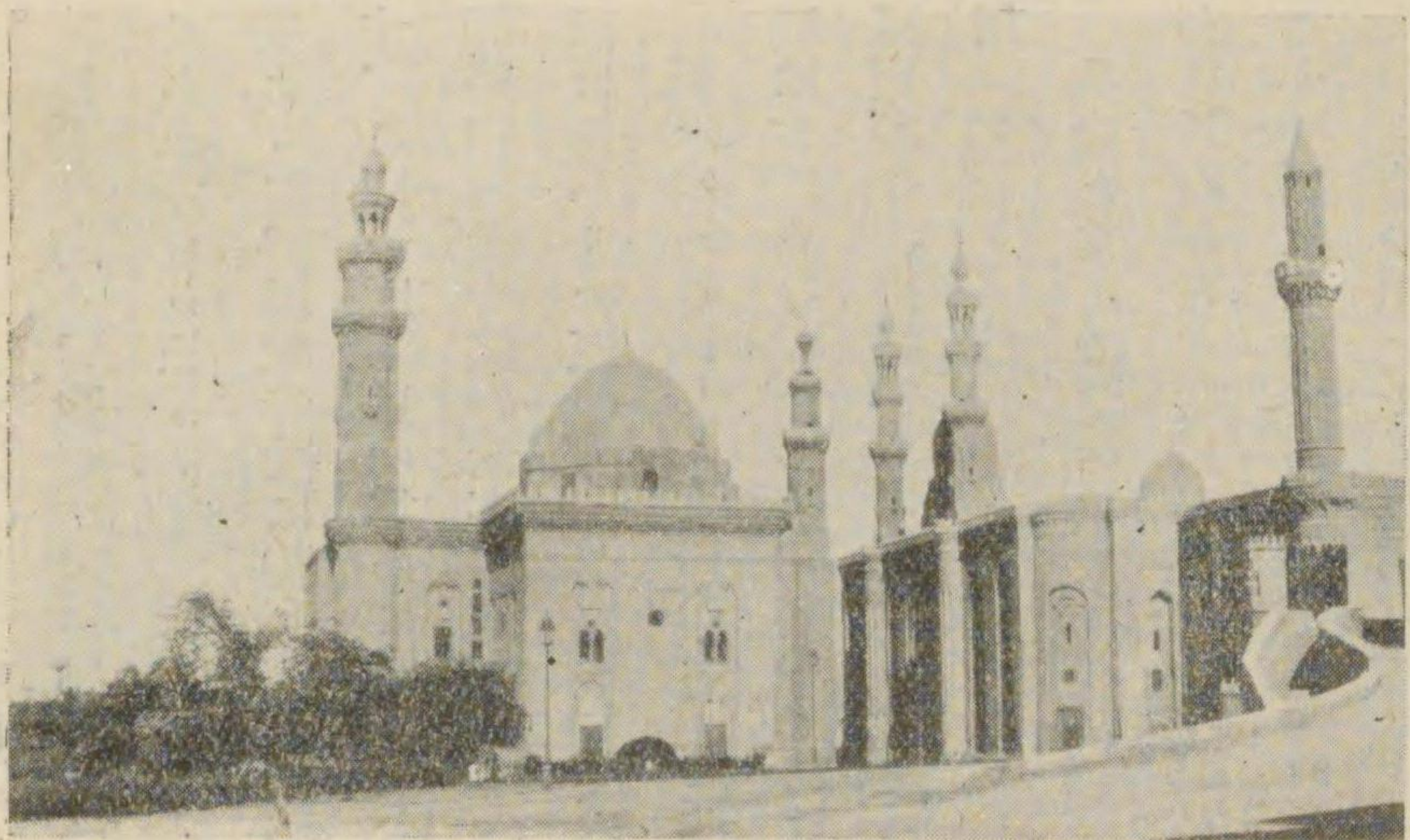
其他ケフレンの像も見逃すべからざるものゝ一つである。胡坐してパイラスの紙を擴げ將に筆記を初めんとする書記の像の風丰姿勢、其他無數の木彫、石刻、銅像等、一つとして觀者の注意を惹かぬものはない。

階上珍寶室に於ける古代の装身具は、何れも善盡し美盡せるもので、一々記載をしては何冊かの書物になるであらうし、また其爲めに相當の時日を費し、仔細に研究せざれば能はぬのである。私は豫てから如何なる種類の昆蟲が裝飾に應用されるゝかを注意してゐたところ、古今東西を問はず最多なるは、言ふ迄もなく優美婉麗並ぶものなき鱗翅類であつた。然るにこゝで偶然 Amosis の母に當る女王 Aah Hotep の寶物類の中に、大蠅三疋で出來た飾があつたのを見つけた。蝶蛾に亞では蟬・蜻蛉・蜂・其他小蟲で嘗て蠅の如きものを飾りに用ひたのは見た事がなかつたが、蠅とは如何にも奇抜である。而も大した傑作でもない上に大さ三寸もあるのだから、奇異の感を起したのである。其上全部が金製である。何故斯様な不思議なものを飾にしたのであるか。其他小蠅二疋連いたのもあつたが、但し此方は翅が銀製であつた。

午後の閉館は朝から覺悟してゐたから、更に他日を期し、一時を相圖に館を出て電車を利用して歸宿、晝食を終つてからは市内の回教寺院の二三を觀覽する事にした。

午後は Shâria Mohammed Ali (シャムニム・アリ 一町) の突き當りに建てる Gâmi Sultân Hasan (ハルタン・ハサン寺) へ行つてみた。此れはハサン王の爲めに十四世紀の中葉に建立され、Herz Pasha の修理を経たる當市に於ける最良なる建築の一つである。外部から見たところは、大した裝飾もなくて古殿堂の如き莊重の感を惹起せしむるのである。

此寺の建立に就いては、従事した建築家が再び此以上の傑作を残さぬ様、寺の落成と同時にハサン王は此建築家の右腕を切斷すべき嚴命を下したといふ口碑がある。併し事實寺は王の死後二年たつて漸く落成した



Sultân Hasan寺(左)と Rifaiyyeh寺(中)と El-Mahmoudiyeh寺(右)。左端の樹木は Saladin 廣場 (Midân Saladin) の一部

のださうであるから、腕切斬はうそである。

外壁は高く、壁面は窓の部分以外に左したる凹凸なきも、軒は數段に突出せる鐘乳飾を以て裝飾せられ (Stalactite Cornice)、モハメッド・アリー町に面せる正面入口の意匠亦凡ならず。南側の兩壁よりは、回教寺院に特有なる光塔 (Minaret) 天に沖するも、東方のもの割合に低くして美ならず、これ一度震災の爲めに崩壊したのを、後に小規模に再建したからである。西方のものは反之、開路市回教寺院の光塔中最高のもので、高さ實に二百八十五呎ある、そして兩光塔の間に圓屋根を頂けるハサン王の靈廟が方形に突出してゐる。

正面の入口より圓天井の玄關を通り、狭き道路を過ぐれば廣き中庭 (Sahn el-Gâmi) に出る、中庭は大理石を敷きつめ、其中央には沐浴用噴水 (Meida) があり、此中庭を中心として其四方に穹窿天井の大なる室 (Liwan) がある、故に全體は十字形をなしてゐる。南側の室には半圓形の禮拜所 (Kibla) と説教壇 (Minbar) とがあり、其後方が先に記したハサン王の靈廟になつてゐる。

此寺と並んでリファイエー寺 (Gâmi Rifâiyeh) がある、落成したのは大正元年、漸く十年にはかならぬから、新しく大に綺麗である。モハメッド・アリー町の突き當りで電車を降りると、そこが廣場になつてゐて、今記した二つの寺が並び建てる有様は實に壯觀である。

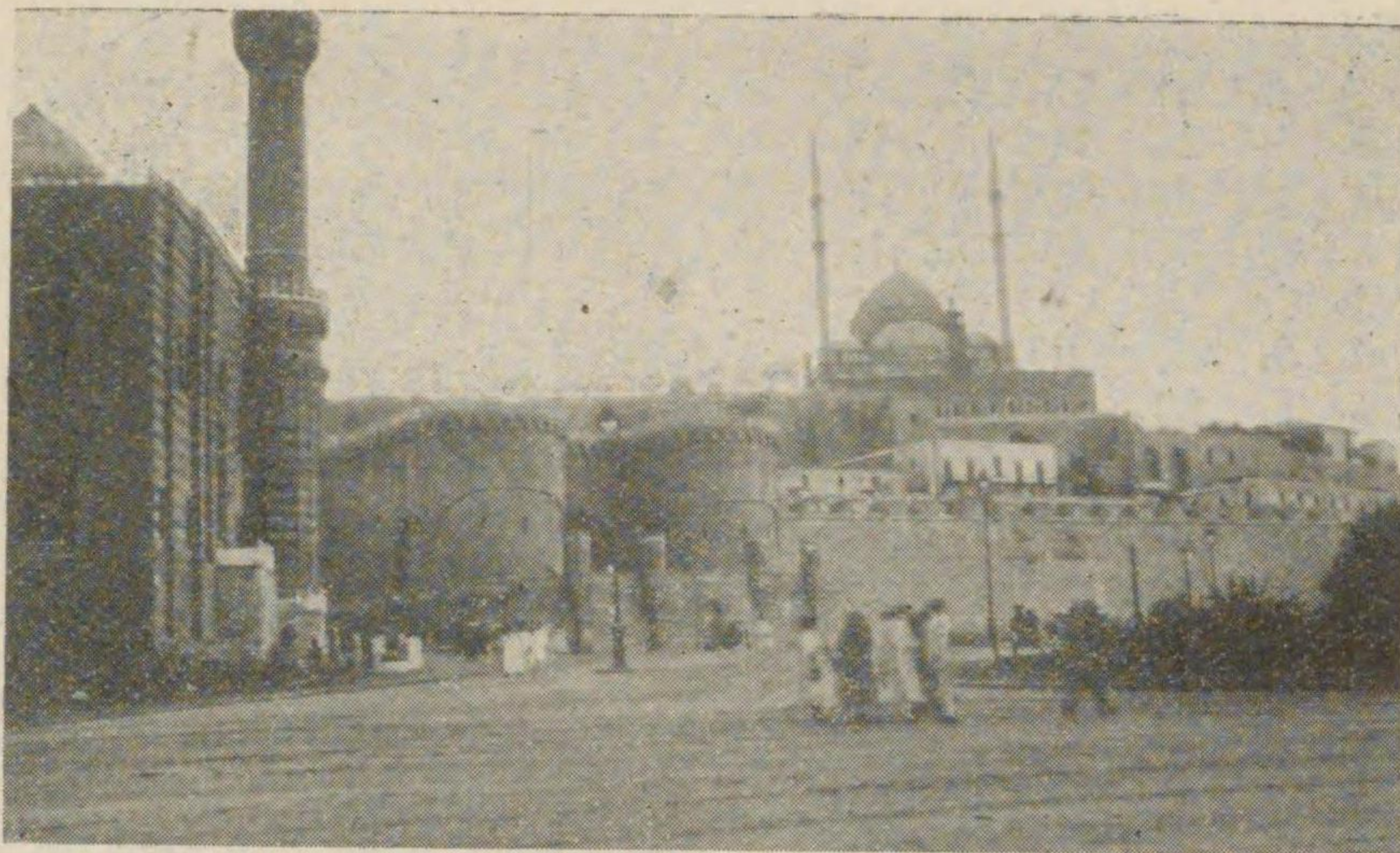
此兩寺の間を通つて、サラヂンの廣場 (Midân Saladin) に出ると、左手に小さい乍ら壁に赤白

の線入のマムーヂェー寺、前には (Bâb el-Azab)

麻布門を隔て、後方高地にモハメッド・アリー寺 (Gâmi Mohammed Ali) が建つてゐる。

此高地は即ち古の城砦で、治承三年 Saladin が Giza の小ピラミッド (以下「寶形」塔と譯す) より採取した石を以て築造したのでさうである。寺は君府の Nuri Osmaniyeh 寺を摸したのでさうで、寫眞で見ると能く似てゐる。其光塔は細く高く頗る著明にして、開路市及び其近郊よりの好目標である。現埃及王朝の始祖モハメッド・アリーが、文政七年創建に著手し、三十三年を経て安政四年 Saïd Pasha 此を落成せしめたのであるさうな。中庭も内部も左して感興を起さぬ、たゞ内部へ入つてみて一寸東羅馬氣分を味ふ位の事である。

寺はかくの如くで、這入つてみると左程ではなく



左端は (El-Mahmoudiyeh 寺 (前圖の右端)。中央は麻布門 (Bâb el-Azab)。右端の樹林は Midân Saladin の一部 (前圖の右端)。高地に在りて二光塔を有せる東羅馬式建築はモハメッド・アリー寺 (Gâmi Mohammed Ali)

寧ろ下から遠くに見てゐた方がいゝが、この城砦からの展望は實に絶景である。寺をみてゐる間に薄暗くなり、出た時は最早黄昏時であつたが、夫れでも無数の光塔の建てる開路市を一目に見渡し得たのみならず、内流河を隔て、雲烟模糊の間に朦朧と紫色に霞んだギザの三寶形塔の輪廓を見ることが出来たのである。此等の塔が古代埃及王の墳墓であることを知つてから、正に三十餘年で假令遠方からにせよその佛をみたのであるから、暫らくは一種の感に打たれ、たゞぼんやりと眺めてゐたのであつたが、やがて文字通り暮色蒼然、三大塔を覆ふに及んで止むを得ず歸宿したのであつた。

ギザの寶形塔

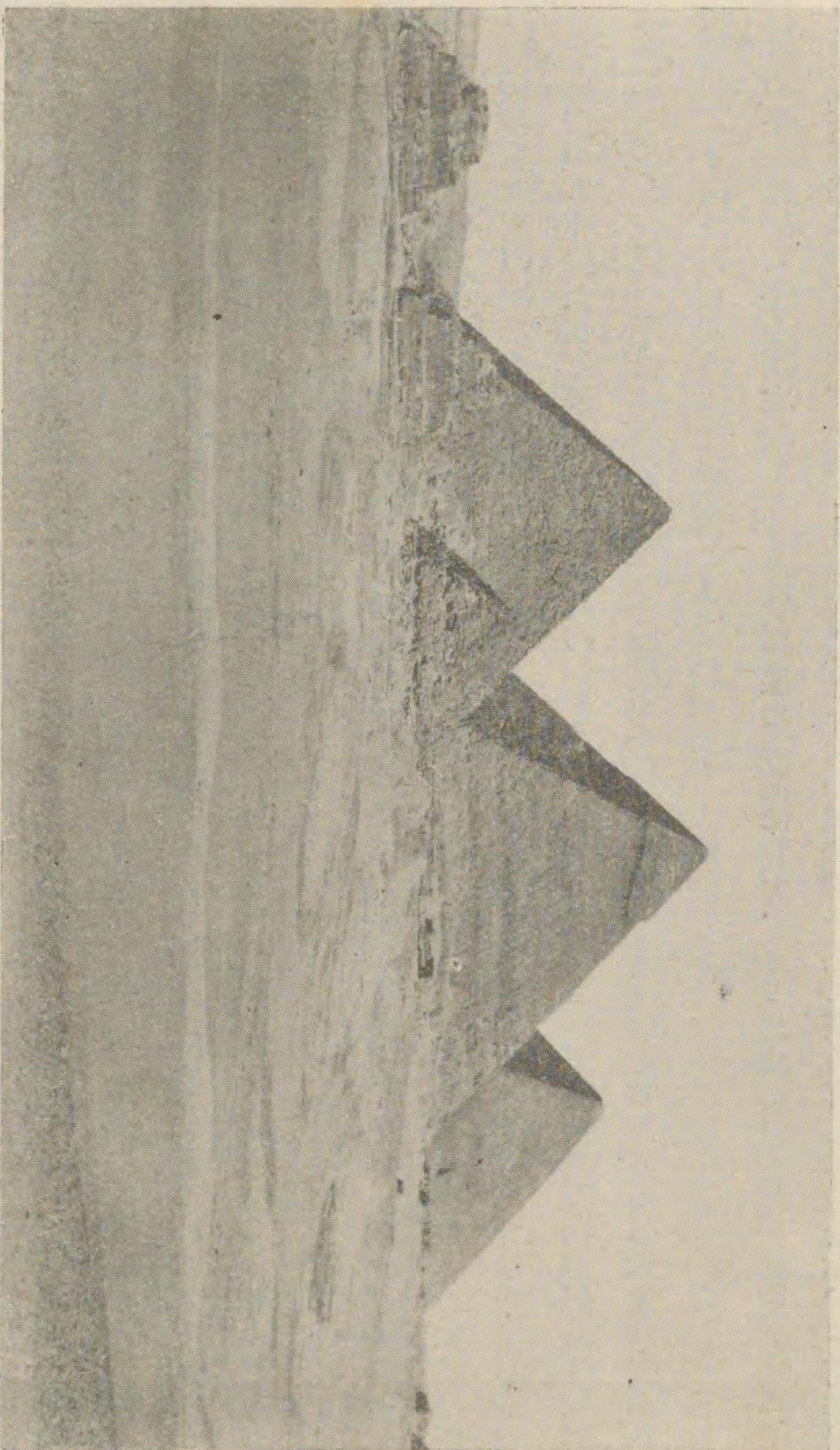
十月十六日 (月曜、好晴)

ギザ行の電車はアタベル・ハドラ (Atabet el-Khadra) の廣場から出る。こゝ迄宿から近いがサラリーに重い籠入の辨當を持たして歩かせるのも可哀相と同情して、宿から數十歩の *Boytak* 通の角から此廣場迄市街電車にのり、こゝでギザ行の電車を待つ。私は寶形塔見物に最も安價な乗物を選んだのである。電車は一等車及二等車の二臺連結であるが、二等は殆んどいつでも満員で、一等に多少の空席があるのは、巴里でも開路でも同じである。今日もいつもの通り二等は満員であつたから、一等を奮發したら一人前片道四十ミリム即ち四ピアスタア (約四十錢) で、凡そ一時間餘りかゝつた。

やがて電車内流河を渡ればそこが即ちギザの町で、こゝから大寶形塔の所在地迄道路は一直線に通じてゐる。此路の一侧にはアカシア樹を他側にはユーカリ樹を植ゑ、道路の兩側眼の及ぶ限り砂糖黍・玉蜀黍・棉の畑が連り、其間には田舎に珍らしき洋風の住宅が所々に建つてゐる。此等の住宅は廣大なる耕地を有し多くの小作人を使役せる大百姓の家で、彼等は夏期かゝる所に、冬期開路市へ歸住するのであるといふ。

漸くにして所在地近くなると、道路の兩側は一面の水で、棗の木が水の中から生え、陸の一寸出てゐる所には人家が點々とある、勿論かゝる家に住んでゐる人々は、この大路へ出るのには小船によるのである、水の深さは大概平均一尺位だといふ。これが所謂内流河の汎濫ださうで、かくして泥土を沈積せしめ、土地を豊饒ならしむるのださうである。豫てきいてゐた内流河の汎濫とはこんなものか、成程百聞一見に如かずであると感服をした。水の中から生えてゐる棗の木立の間から遠景に寶形塔をみたところは甚だ絶景である。

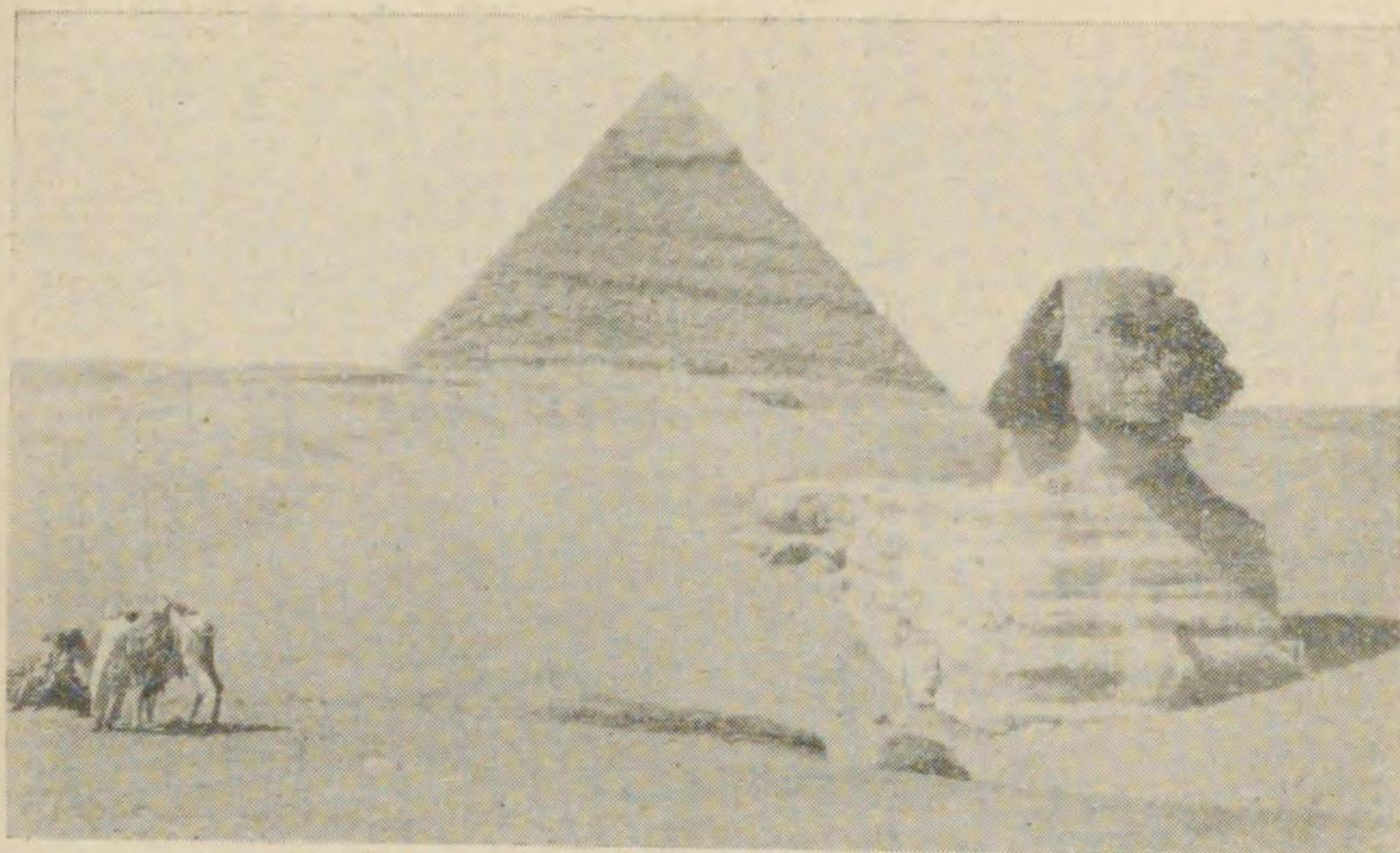
電車の終點は即ち塔の所在地で、リビア沙漠の一端にして、こゝには *Mena House Hotel*、郵便局・警察署等がある。下車すると旅客待受の土人等數名、駱駝に乗る事を勧めたが、一切排斥し



Gizaの三大寶形塔
右より大塔 (Kheops), 第二 (Khephren), 及第三 (Menkewre) 塔

て徒歩第一寶形塔に向つた。途中馴々しく話かくる歐人あり、彼は寫眞師にて記念寫眞の撮影を勧めたが、應ぜずして前進すると觀覽切符賣捌所の前へ來た。こゝで案内人四五人先を争ひ互に口々に罵り合ふ。此時警備の任に當れる巡查來合せ、彼等を取鎖め中の一名を選び内部を案内せしむる事とす。内部觀覽料は五ピアスタア(約我五十錢)である。此時私の案内人のサラは豫て相談しておいた通り、案内料と心附 (Bakshish といふ) とにて五ピアスタア丈け與ふべしと新に此所で雇入たる案内人に言つたので、私は五ピアスタアの銀貨(我國の新五十錢、銀貨位の大さ)一枚丈けを隠しへ入れ、所持金全部を豫め用意したる手提鞆の中に入れ、サラに保管を命じてから内部に入る用意をした。蓋し規定の料金以外に如何にしても多少の金を與へざるべからず。彼等は一切恥を知らぬ。事實上の鐵面皮は埃及の下層民に於いて見る事が出来るのである。金錢以外何物も彼等の眼中にないのである。旅人の前に立ち塞り手を延べて金錢を要求するは正當なる権利の如く考へてゐる。多額の金を所持して内部に入り殆ど全部を強奪せられたとの話は屢々聞いたところである。假令誇張の言にせよ要心にしくはないから右の様にしたのである。

ギザの大寶形塔は今更事新しく述ぶる迄もなく其大さ並に寸尺等に就ては、如何なる建築歴史の書物を繕いても一番先きに記してあるし、また苟も建築に志す者は誰人も知つてゐるのであるが、今これを眼前に見ると實に其大きいのに驚くのである。私の入らうとしたのは最大なる第一即ちケ



ケフレンの寶形塔とスフィンクス

オプスのである。此入口は當初は地上四十八呎の高さにあつたのであるが、今は其部凡そ三十呎許りが地中に埋つたので、極く樂に入れる。いくら埃及でも三十呎も埋る事はあるまいと思ふ人があるかも知れぬが、こゝは前にも記した通りリビア沙漠の一部で、少し風が吹くと沙は自由に動く。五千年の間に三十呎は極て少ない方である。もつと埋まつてゐたのを大分に掘つたのであらう。日本の様な土地でも僅に千三百年の間に北方に連れる緩傾斜地から流れた土砂で、法隆寺歩廊の舊石壇を全部埋めて了つたではないか、況や沙漠に於てをや。埋つて了ふのが當然である。

扱て此入口から案内人について入ると、そこに蹲つてゐた一人の男が立ち上つて後からついて来る、態度が面白くないから何者かと訊くと、番人と答ふ。暫く進んで王室並に女王室の分れ途へ來ると、此所から王室迄が所謂 Great Hall であつて、上の方は黑暗々で懐中電燈や蠟燭では到底

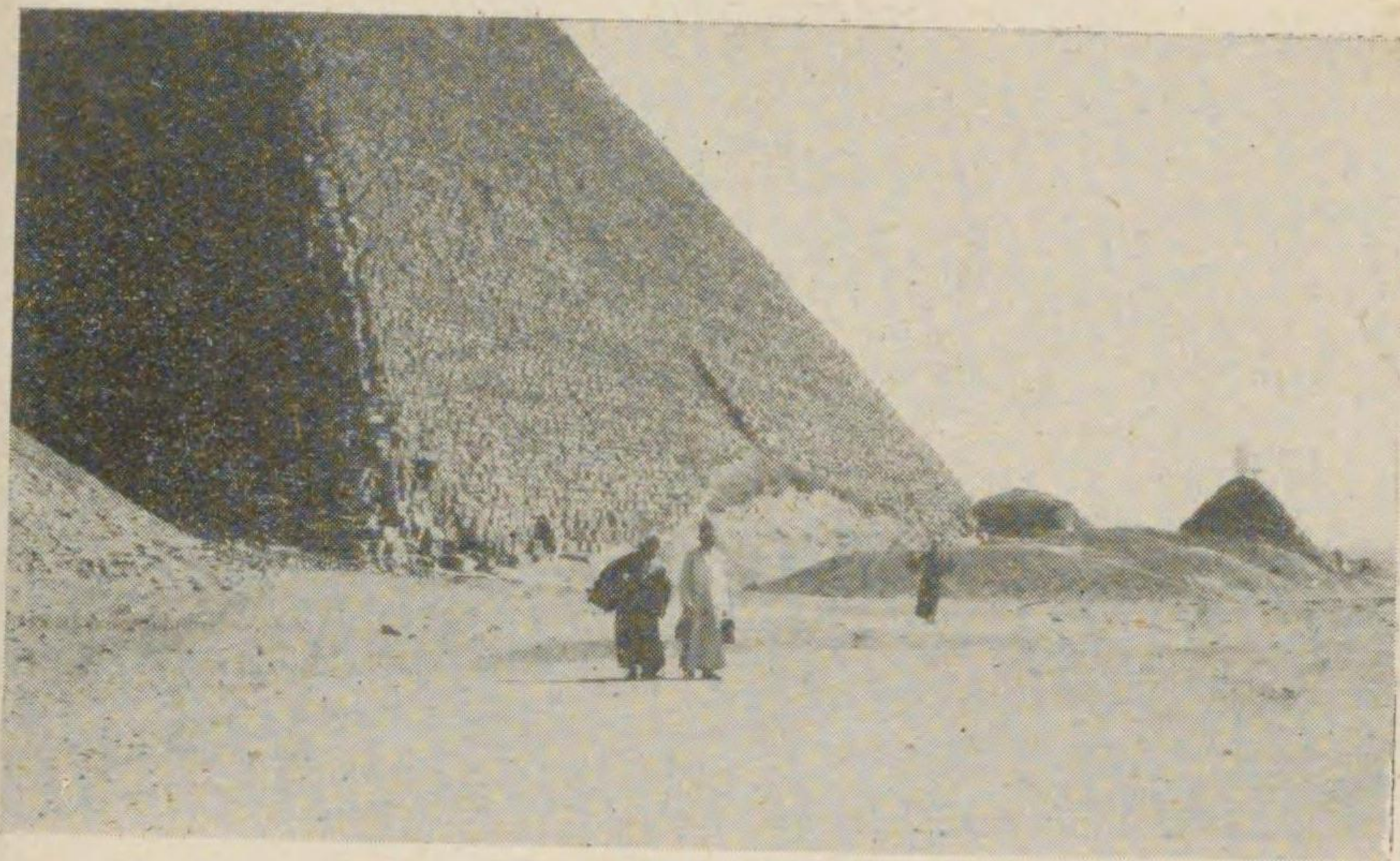
Giza の Sphinx の背面



底何物も見えぬ。恰も此時彼の番人は懷中より何物かを取出して案内人に渡した。案内人は私に向て五ピアスタアを彼男に與へれば、此のマグネシウムに點火させると、成程うまい考へである。そこ迄は氣がつかなくかつたが、折角此所へ入りながら内部の様子を見ざれば何にもならず、其目的を達するには此際マグネシウムに及ぶものはないのである。五十錢でも一圓でも價の高下を云々すべき場合ではない。即ち點火を命じた。かくして此大室を初めとし、王室並に女王室共假令一瞬時にせよ隅々迄明瞭に眼底に印する事が出来たのであつた。

外部へ出ると案内人は多少の心附を要求したが、元より巡查立會の上決めた料金であるから、應ぜずして約の通り五十錢を與へ、不服なら巡查に訴へるがいと云つて歩を進めた。これで無事内部の見學を了つた。

次に第二を見て第三を巡り、其東側に沿へる Mortuary



ケオプスの寶形塔と附屬小塔

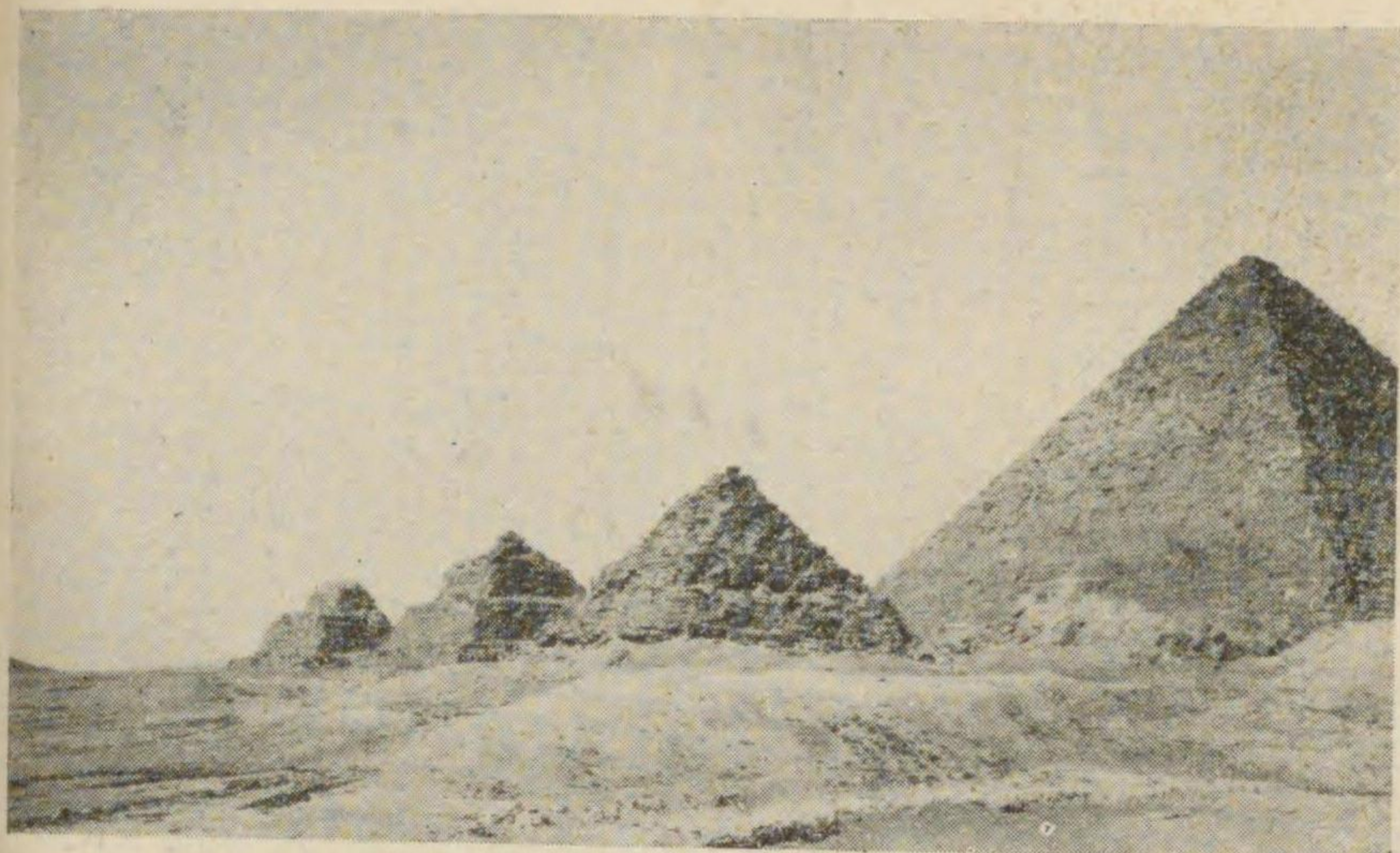
Temple (葬禮堂) に入り、東方に引返し、 Campbell's Tomb に出た。此れは第二十六王朝の家族墓で、天保八年に Vyse 大佐が発見したもので、此時の英國總領事キヤメル大佐の名をとつてつけたものである。上部は全部破壊して、了ひ今では上からのぞいて見る事が出来る、こゝから人面獅子像の後ろを通つて Valley Temple of Khephren (ケフレン堂) へ出た。

沙漠に於ける此人面獅子の後面は、其色といひ形といひ宛然たる大松茸である、此大松茸は元と一石より刻み出され、僅か不足の部分をつめたのであるさうで、第二即ちケフレンの大寶形塔建築中の職人等が、自然に多少獅子に似た様な岩があつたのを、工事の手すきにケフレンの似顔をもつた獅子に刻み上げたのであらうといふが、或は左様かも知れぬ。

此人面獅子は西紀前一四五〇(日本紀元前七九〇に當る。年表によると一バビロニア、ア

ツシリヤの獨立を) 承認す」とある) に Thutmosis IV. によつて發掘され、其後トレミー王朝及び羅馬時代に於いても何度も修理されたのである。又後に至つて Mamelukes (後出) はこれを標的に用ひたりして人工的にも破壊を逞くしたが、最近文化十四年 Caviglia なる人が全部を發掘した際、前肢の間に一殿堂を發見したさうであるが、いつかまた埋つて了ひ、今は首から上と背とが出てゐる許りである。記録によると總高さ六六尺、前肢の先端より尾端迄一八七尺、顔幅一三尺ありといふ、そして尙ほ現在では相當雄大なる記念像の一たるを失はぬ。

此人面獅子の近くにケフレン堂がある、嘉永六年マリエットの發見するところで、近頃迄 Granite Temple と呼ばれてゐた。最近明治四十二年より同二年にかけて Von Sieglin の探檢隊によりて完全に發掘されたのであり、建築史に多少なりとも趣味を有するものゝ見逃すべからざる堂である。此堂はケフレンの大塔及葬禮堂へ通する道の入口に建てた一種の聖殿である。建坪約方一五〇尺にして、大室と小室とは撞木形に接續し、大室には十本小室には六本の花崗石方柱建ち、尙ほ此二室の壁に沿ひて、元と二十三軀の大像立ちしが、今其大部分を失ひ、今は僅に其臺座を残すのみ、内數軀は開路市の埃及博物館に藏せらる。此小室より更に通路で幅の狭い前室に通ず、こゝにある井戸からマリエットは今埃及博物館出陳のケフレンの像を發見したさうである、小室の南端からは貯藏室に通じてゐる、此室は上層及下層に分れ、各層三室づゝある、小室の北端から西北に進



Giza の第三塔及附屬の三小塔

むと、左方に一室あつてアラバスタアより成る、右方には屋上に達する階段がある、尙ほ續て西北に進めば前記の葬禮堂に達するのである。但し此室の創建年代に就ては諸説あつて一定しないが、第二寶形塔と關係を有するのであるから或は其時代を距る事遠くないのであらうか。

堂の見物を了つて外へ出ると、今朝案内人の争ひを取鎮めたる巡查が未だ去らずに佇立してゐた。此堂の案内人も性質不良であるから恐らく巡查は保護の任に當つたものと見たので感謝の意を表し、獅子像の前を過ぎんとした時美々敷装ひたる駱駝を牽き來れる土人があつた。私に連りに其駱駝に乗つて記念の撮影をすることを勧めたが、必要なし、撮影を欲せずと斥けて第一寶形塔に向ひ、其東に沿へる三基の小寶形塔の内最西端のもの、北側の階段形に積まれたる石上に休憩して、牧羊館より持參の辨當に空腹を醫したのであつた。

私共の休憩した小塔の東方約百尺餘りに一つの墓がある。サライ曰く此墓は三年程以前に發見されたもので、ケオプスの娘が結婚後間もなく死去したので此所に埋葬したのであると。私は其眞偽を知らぬが、墓の四壁には例の薄肉彫刻があり、玄室の入口には面白い柱が同一手法で刻してあつた。

此所より東の丘上には各時代の古墳が多い。此邊で最後に見たのは、約一ヶ月前に發見した許りで、目下發掘中につき一般の觀覽は許可せぬが、特にと勿體をつけてサライが引張り込んだ墓である。果して一ヶ月以前の發掘にかゝる否や知らぬが、兎に角輕便軌條を引込み、土運車をおいてある等一見發掘中なる事が分る。内部に入つてみると、我國の土砂に埋まれる古墳の如く、時には匍匐せざれば通れぬ所もある。奥の一室には夫婦の棺が並び、其近くの下より七八尺許り掘り上げた現在の天井——無論土天井で何れ地上迄掘上げるものと思ふ——の土の間からは、脚の骨や骨盤や木乃伊等が出かけてゐた。

以上で見物を了り、電車終點のメナ・ハウス・ホテルの庭で小憩の後、電車にて歸路に就き、歸宿したのは夕刻であつた。但し歸りは二等であつたから、賃金は往の半額即二十ミリムであつた。渡歐の途次開路市並に大塔を觀覽した人々に、私は滯歐中遇ふ毎に様子を訊いてみたら、甲は大塔の内へは可成二人連れで入るがよろしい、獨りの時は用心せよと教へてくれた。乙は埃及には追

剝や強盜許りの様な口吻であつた。丙は大塔見物の爲め乗物から下りたら可成徒歩にせよ、駱駝は埃及氣分はするが大して愉快なものではなし、其上駱駝人足が約束以外に金を強要して煩に耐へぬと忠告してくれた。私は此等の忠告を斟酌し、總て徒歩し其上細心の注意を拂つてゐたから、幸ひに何の損害もなく無事見學を済ましたのであつた。

マメリューク墓地 老駄嶋 舊開路

十月十七日

(火曜、好晴)

歐洲各國や印度旅行には、クック社で汽車の切符を求めると、其通用期間内は途中下車自由で甚だ便利であるから、埃及でも同様と思ひ牧羊館より程近き同社支店へ行き、アスアン迄の切符入用の旨申込んだところ、係員は途中ラクソルにて下車ができる丈けだが、夫れでも差支がないかといふ。不便極るが規則とあらば致し方なし、買ふのをやめ更にラクソル迄隨所案内人を雇ひ得るやをきくと、當地にて雇入れ目的地へつれなければならぬ。溫良正直にして地理に精通せるものを選び、午後宿へ差向けるといつた。今迄の經驗によれば此社は相當信用ができるから、案内人の選定を依頼したが、あとでこれは大失敗であつた事がわかつた。

右の用事をすませたあと、市の南端に近き Tombs of Mamelukes (マメリューク墓) の見物をした。私は墓標に就て多大の興味を持つてゐるので亞米利加から始めて到る處で墓調べをした、今度こゝへ来たからにはマメリューク墓もコプト墓も出來得る限り見學せんとしたからである。

マメリュークとは中世及び近世埃及に於ける外國種の武士の一階級で、第十三世紀の頃、土耳其出身の王が西亞細亞及び埃及全國を領した時、征服した國から少年を連れて來て近衛兵に仕立てたのであつた。これを Mamluks と呼んだが、此等が漸く勢力を得、遂に建長二年 Kutuz なるもの王位を篡奪した。然るに十年の後更に Beibars 王位に即き代々君主となつた。以降マメリュークは永正十四年土耳其人に征服せらるゝ迄埃及の主権者であつた。其王は何れもよく國を治め且つ富ましめ、尙文學・建築・美術を保護獎勵したのであつた。此年以來埃及は表面土耳其總督の支配下に隸せしも、事實はマメリュークの知事が數州づつを管轄してゐたのであつた。嘗て那翁に征服せられた軍隊も實はマメリューク軍であつた。斯様な次第であつたが文化八年總督 Mohammed Ali の爲め、マメリュークは總て國外に逐放せられ又は殺害されたのであつた。

此のマメリューク墓は市外なるも市に接し、el-Karfeh 門外に在り、新古の墓標混ぜるも、古墓は保存法宜しきを得ないのでひどく破損してゐる。其上建築上美術上價值あるものは殆んどないと云つて可い。

此所より程遠からぬ Imam Shafii 寺に近くモハメッド・アリーの家族廟 (Hōsh el-Bāsha) が

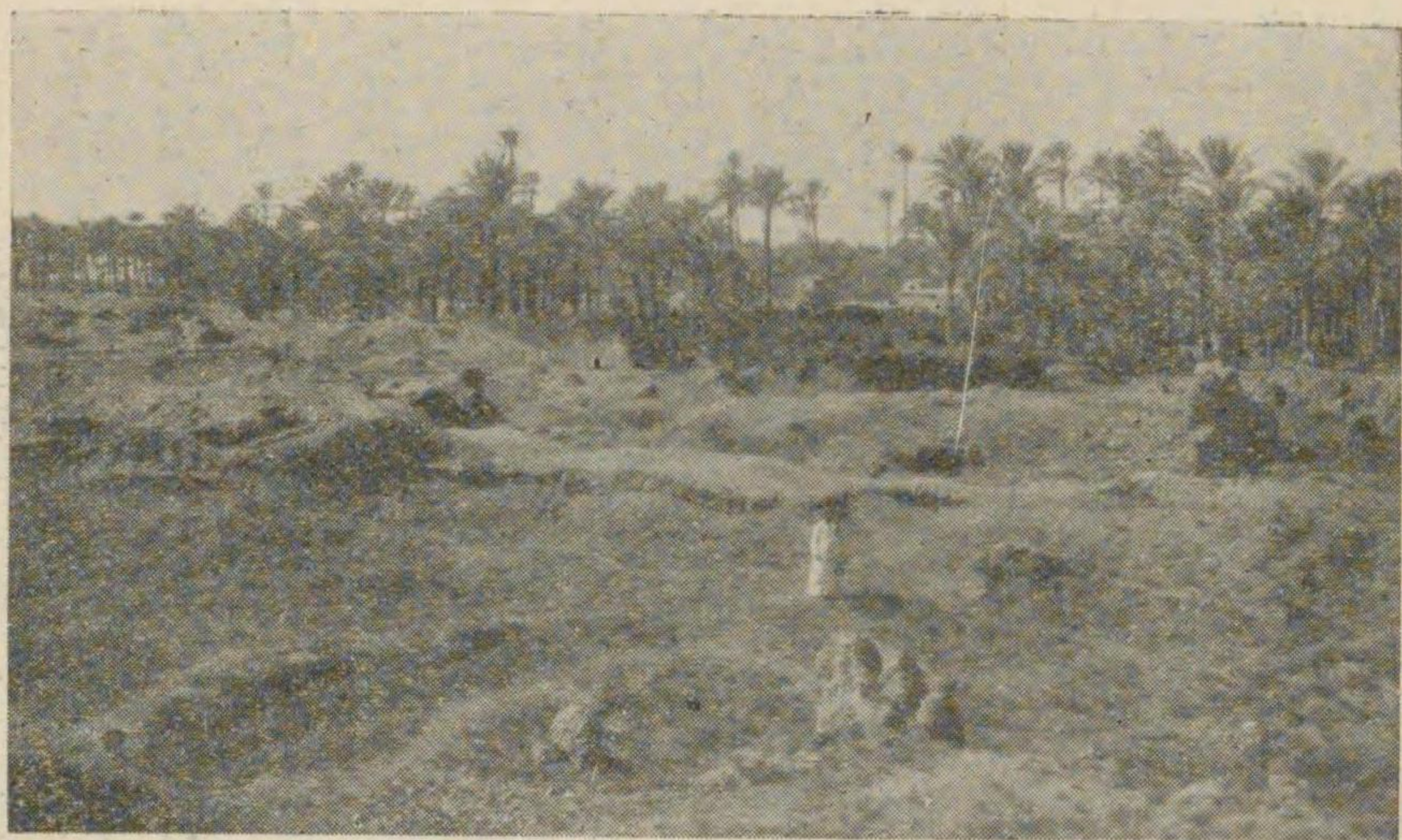
ある。内部の墓標は總て白大理石にコラン經典の句を浮彫とし、地は朱或は青色にて埋めてあり、希臘乃至アルバニア國工人の作といふ。美麗にして俗人の目を奪ふに足るも、是亦美術上の價値に乏しく、廟は圓屋根を架せる大建築であるが、墓標同様平凡にして恰好また言ふに足らぬ。

午前の見學はこれ丈けに止め、歸宿して晝食を認め自室に休憩してゐると、約の如くクツク社よりの案内が來訪した。名をフアラージ・ヘメダと呼び年齢五十歳前後なるべく、英語の會話に熟達し地理も相當に心得居るものゝ如きも、何となく好ましからぬ男であつた。併し一人の知己なく、公使館も領事館もなき開路に於いて、他に獨力適當なるものを雇入れ得る見込なければ、クツク社の推薦とあるを信するより他に方法がないから、來る二十三日より四日間雇入るゝ旨を約して去らしめた。

午後は舊開路の見學を兼ね此方面に行き、先づ渡船により老駄島 (Island of Roda) に渡り、其南端突角より上流及び右岸即ち古開路の沿岸景色を觀賞す。毎年九月より約三ヶ月間は汎濫期とて所謂濁流滔々。島の突角には有名な Nilometer (土語 Mykvas) あり、靈龜二年 Caliph Suleiman の命により初めて建設したもので、河水の高低を測定するの器で數回の修理を経て今日に及んだのである。

既にして此島を去り舊開路に戻り、狭い曲つた土人町を通り抜けて El-Moallaka 寺に行き戶外に立ちて案内を乞へば、教育ある年若き瀟洒なる寺僧出て應接し、流暢なる英語を操り懇切に案内をしてくれた。後にサラーにきいたら、其答に若僧は開路大學々生だといつた。道理で上品な若紳士で、開路の普通の坊さんとは雲泥の差があつた。

此寺の平面は、可なり面白く、先づ入口より廣庭に入ると、こゝよりは幅廣き階段によつて前室に通ず、次にまた中庭があつて最後に堂内に出るのである。此處では説教壇と寄木の羽目とが注目しに値した。見終つて外に出たら日は既に傾いたが尙ほ暮るゝ迄には一時間餘りあつたから、フォスタート廢墟の概念を得べく徒歩して行く。Fostat とは埃及に於ける回教國民の最初に建設した都會であつて、五世紀の間繁榮を極めたが、仁安三年十字軍の侵入に遇ひ、其掠奪を恐るゝの餘り最後のファチマ系カリフの爲めに燒盡され、爾來數百年間、さしも繁華を極めた大都市も、徒



メンフキスの廢墟

に開路市民の芥捨場と化して了つた。捨てた塵芥は山積して、當時幸ひに焼け残つた家屋迄も埋めて了つたが、最近七八年以前より大規模の發掘を初め、今では大部分が地上に現はれ、印度タキシラに於けるシルカツプの様な小ボンペイ市を此所にも見出したのである。だから此所へ來れば此中世に於ける都市の有様を眼前に觀る事を得るのである。

此廢墟に通ぜる途を進むと第一に事務所に達する、觀覽券は此所にて求め得べく價二ピアスタアである。事務所附近には東羅馬式柱並に無數の同様式柱頭を植木鉢の如くに積み、化粧漆喰、陶器破片、土器其他の出土品が夫れ々々分類しておいてある。

町の道路は不規則にて幅狭きも四通八達し、各家屋に設けられたる浴場及水道、飲用水を得る爲めの堀井戸、家屋壁の煉瓦の積み方、壁に設けたる小さき棚其他何れも面白きものゝみであつたが、就中石臼及油絞石と稱するものは甚だ面白かつた。殊に油絞石は其大きこそ全く比較にならぬが、大和國高市郡岡なる彼の有名な酒槽石及び其後同大字出水發見の石造物を想起せしむるものであつたが、時既に晩く寫眞も實測も共に不可能であつたから更に他日を期して歸途に就かんとした時、一緒について來た番人の頭が、サラ―と何か二言三言話しあつてゐたが、聽て持つてゐた杖である煉瓦壁の入隅の土をはね除けた。みると綠色藥鍍燒物の形恰も我國の醬油注の如き古代ランプが一つ出た、サラ―は黙して夫れを拾ひ上げ隠しへ入れる、續て一つ、復一つ、合計三つ出た。出たのではなくて出したのである。あとの二つも隠しへ納めて了つた。私は少なからず驚いたが左あらぬ體にしてゐた、次に外壁を一巡する間に日は全く暮れたので愈引揚る事にした。

番人頭は途中迄見送つて來たが、サラ―は心附として彼に五ピアスタアを與へられ度しといふ。此男は暴夜語以外は知らぬから、サラ―を介して時々質問を發してみたが、説明甚だ親切丁寧なので、申出なくとも若干金を與へんとしてゐたのだから、直に承諾して小銀貨を與へたら、彼は職務の手前一度は辭退したが、サラ―の勸告を汐に受納したのであつた。

此男と分れてから案内人は私に番人頭の事を次の様に語つた、『あの男は私の親友——彼は Great friend と云つた——で極くいゝ男だ、先日ランプを頼んでおいたら此通とつておいてくれた、あれは頼むと何でもしてくれる』と、尙語をついで『も一人あれの仲間があるが、その男は性質甚だ頑固で不良性を帯びてゐるからいけない、併しアブダラは何と云つても fine fellow だ』と再び褒めた。こゝいらでは、此位のこととは不正とは思はぬのであらう。不正どころでなく、甚だ正當と思つてゐるのかも知れぬ。かくては金さへあらば、あの東羅馬式柱頭は勿論、完全なる柱を得る事も比較的容易であらう、購ひ歸つて標本室に陳列し度きものなどゝ考へ乍ら歩いてゐるうち、ハサン寺前停留場にきたので、こゝから例の如く電車で歸着したのは七時過ぎであつた。

メンフキスの廢墟とサツカラ見物

十月十八日

(水曜、好晴)

サツカラ行は汽車を利用するが最も安價なる方法であるが、時間の都合を考慮し自動車を雇ひ、



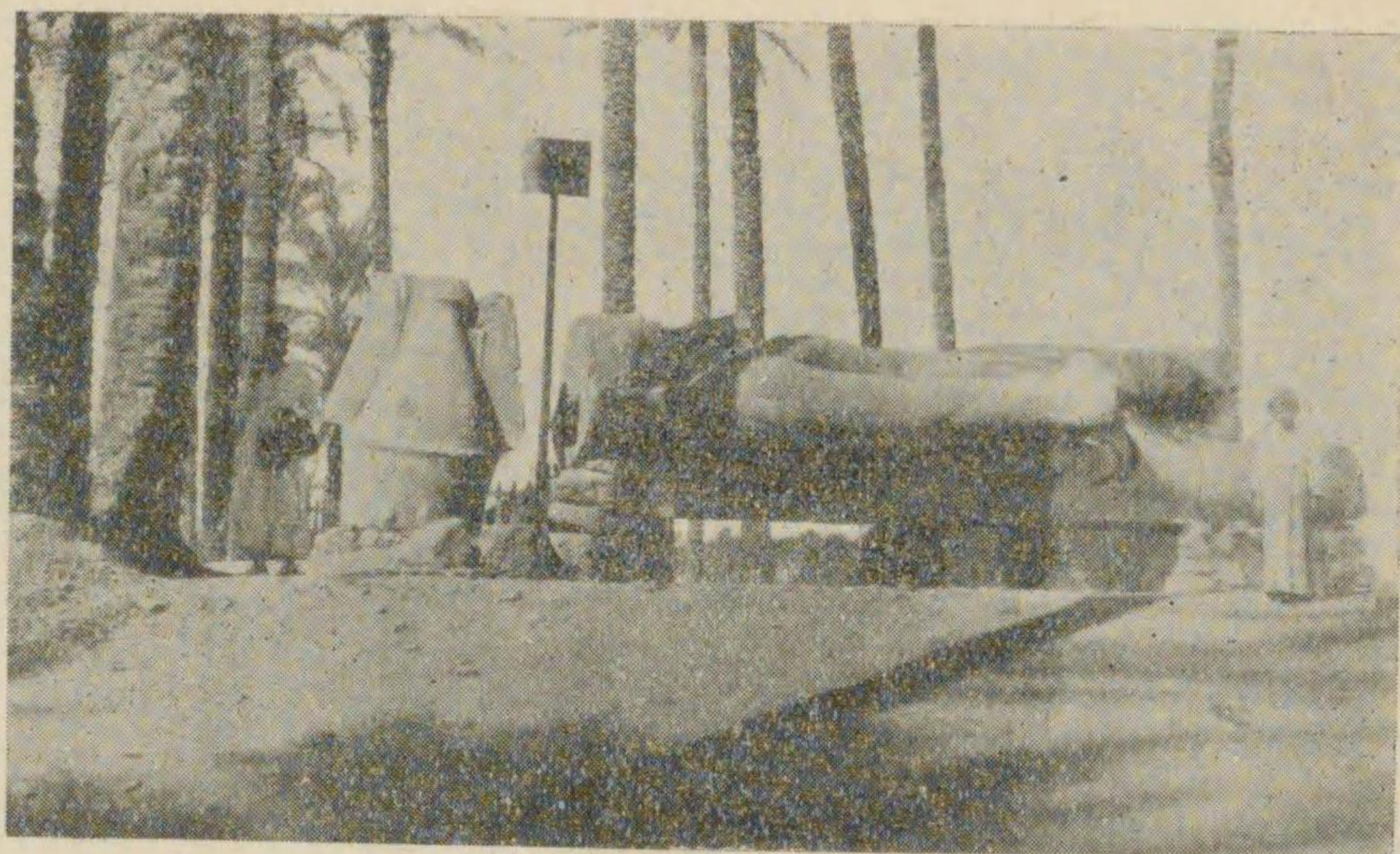
メンフキスに於ける人面獅子像

内流河を渡り一昨朝通つたギザ行の道路を約三分の一ほど進みたる所より左折し、再び左折し左岸に出で、河に添うて走る事約八哩、更に右折して Bedrasha'in の部落を経て約一哩進めば、道路の左右は即ち Memphis の廢墟であるが、凸凹甚だしき地表に壁の一部が出てゐる丈け。これは明治四十

一年以降 Flinders Petrie 教授監督の下に發掘されたのださうである。道路を進むこと幾何もなく北側に沿ひてラムセス二世の大像あり、Syenite (赤花崗岩) を彫刻したもので、明治二十一年

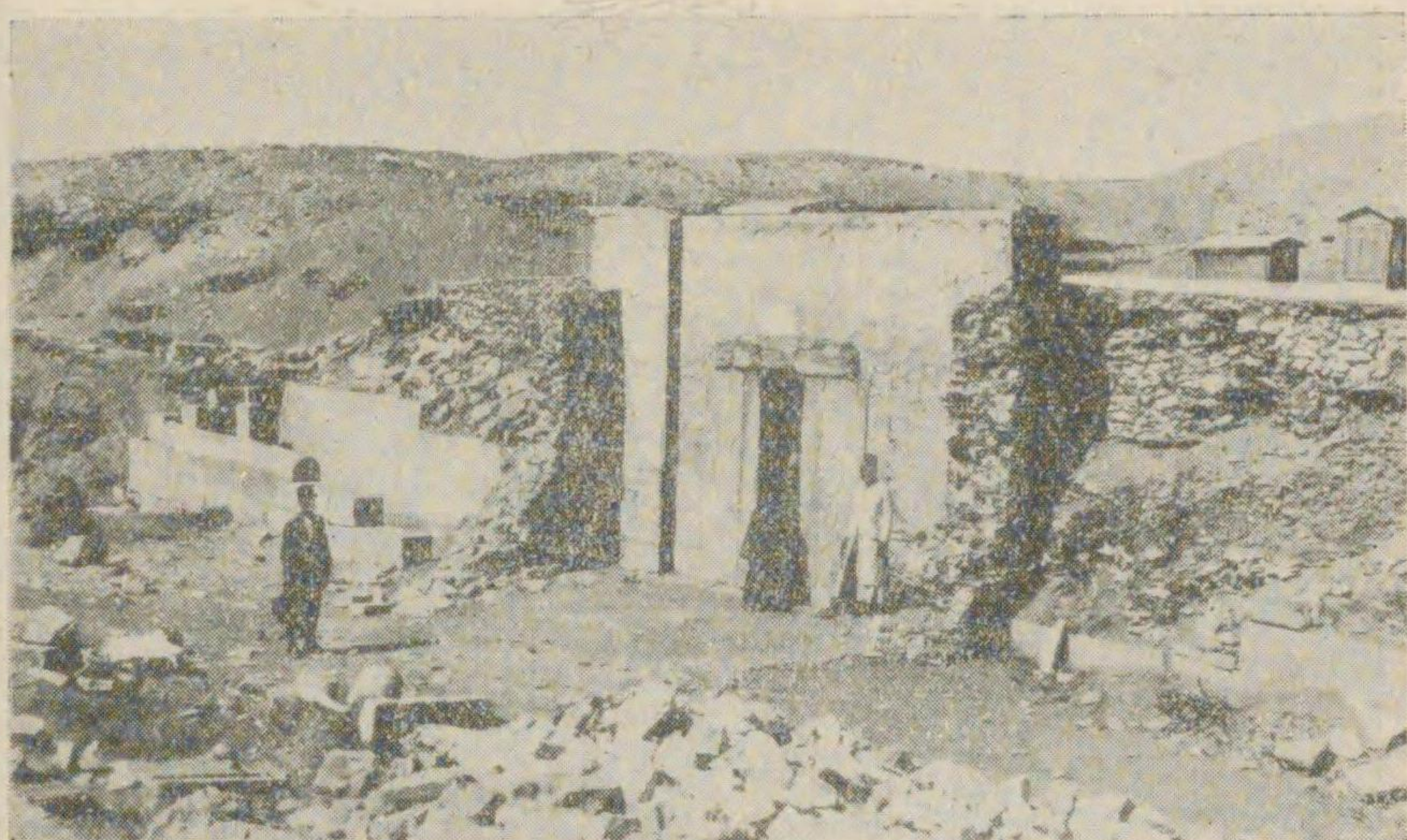
の發見に係る、身長約二十尺冠高六尺、背を下にして地上に在り。此處より少しく進めば左側池中に明治四十五年發見の人面獅子像あり、アラバスタアを彫刻せしもので長二十六尺高十四尺、最も良好に保存せられ製作も亦頗る傑出してゐる。次に同じく左側に茅屋あり、内に同じくラムセス二世の大像がある、石灰石より成り長四十二尺あつたといふ事である。

棕櫚林の間を通ぜる此道路の突き當りは土堤であつて、前面の耕地は内流の汎溢せし漫々たる水を湛へ、此臨時の大湖を隔て、前方遙かにサツカラの部落を望み、其背景としては沙漠中に Step Pyramid (段塔) を初め數多の大小塔が點々散在してゐるから、其方から眼をはなさざる間に、車は遠慮なく全速力で堤上を進み行く。丁度我國の七月頃の氣候で、太陽はカンカン照りつける、だから薄着をして自動車に納つてゐる



メンフキス附近路傍にあるラムセス二世石像、左方にあるは高さ約六尺の冠である

メンフキスの廢墟とサツカラ見物



メレルカの墓入口所在サツカラ

と甚だしい氣持と同時に、金満家の様な氣持になつた。ほんとの金持乃至出張を命ぜられた人は、常にこんな氣分で旅行してゐるのだらう。併し貧乏な「文留」にはこれが空前の大奮發であつた。もう二度とあるまいからゆつくり走つてくれ、ばい、のにおそろしく早いのでつまらぬ。

サツカラ墓地に入るや直に右折して「ト」塔の前を通り Mereruka の墓をみる。此は第六王朝（西紀前約二六二—五—二四七五）迄溯る事を得るもので三十餘室より成り、三區に分たる。第一區はメレルカ、第二區は妻、第三區は息の廟になつてゐる。

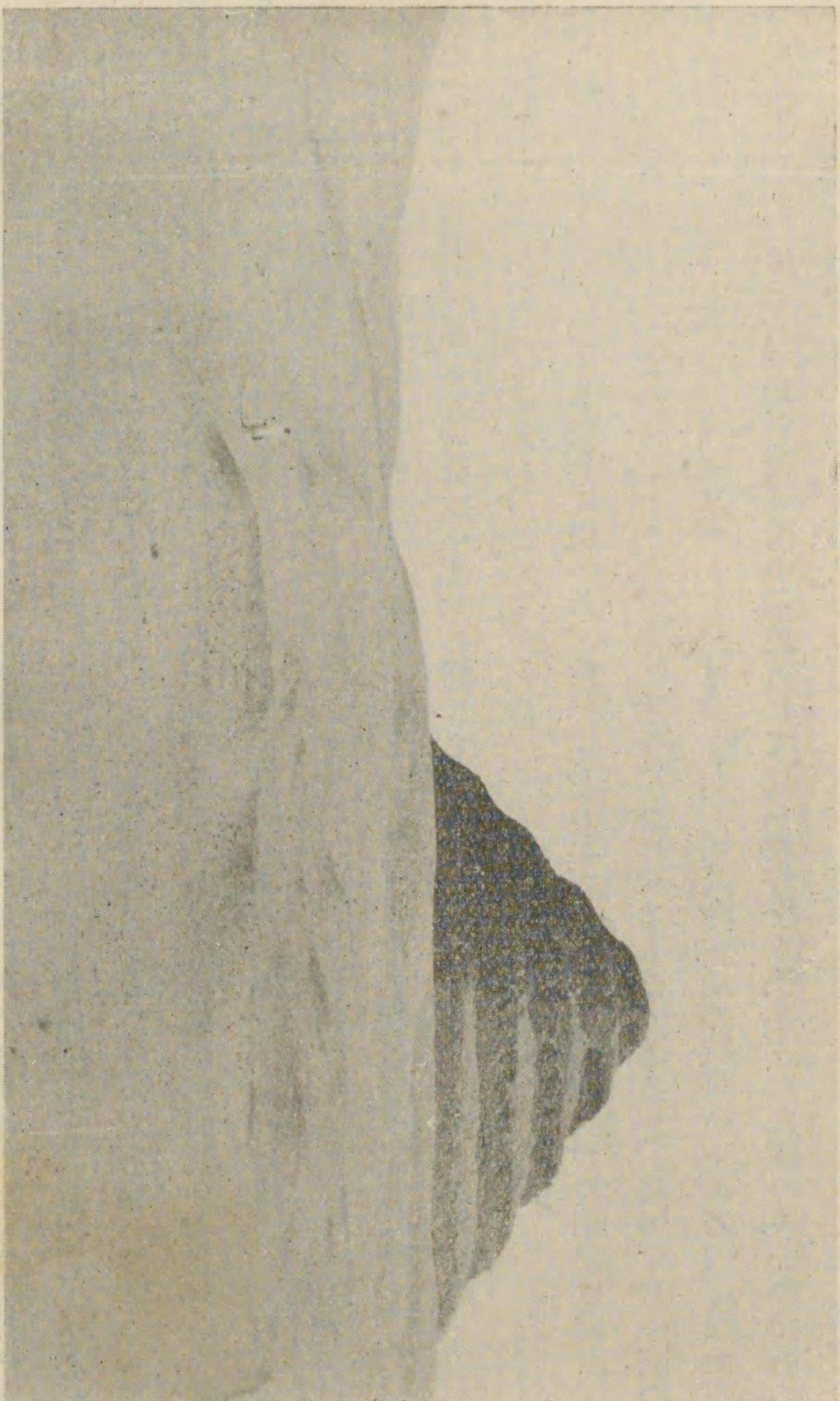
各室の中最も注意を惹いたのはメレルカ立像のある大室で、中央六臺の大方柱の間には犠牲の牡牛を捧ぐる爲めの臺がある。此室にてメレルカ像の寫眞を撮つたが惜しい事に失敗をしてつた。此室のみならず殆んど總ての室には壁に薄肉彫刻があるから、各室何れも甚だ美事である。

これより元の道へ戻る間に車は砂に埋まりて動かず、忽ち何處よりか服裝の賤しき男二人出で來り、運轉手と共力して砂を掘り漸く運轉の出來る様にした。此の内の一人は村の headman ださうである、してみるとこれこそ眞の "Sheikh el-Beled" である。博物館のと大分に違ふと心の中で思ふ。澁紙で貼つた様な顔に白木綿の鉢巻をして、煮めた様なヨレ／＼の衣を纏ひ跣足である。彼は眞偽不明の古物——貨幣、甲蟲等——を取出し、買はん事を勧めたが、眞偽如何に係らず購求の意志なきが故に拒絶をし、サラ―をして心附の金を與へしめたところ、彼等は默禮して其まゝ何れへか退却してつた。

漸く進行すると車は再び砂中に埋まつたから、そこで降りて、徒歩段塔の傍を過ぎマリエツト・ハウスに着して椽に休憩した、此處へ達する途から北方遙に Abusir 及 Giza の寶形塔を地平線上に望み得られる。

涼を納れた後 Mastaba of Ti に向つた、此墓は第五王朝（西紀前約二六二—五—二四七五）の初期に當り、時の大官にして兼て大地主であつた Ti ので、元は地上に營みたるものであるが、長い年月の間に全く地下に埋まつて了つたのを、マリエツトが発見發掘し、埃及考古局の監督の下に修理を経たのである。此墓壁の薄肉彫は古帝國時代美術の最良にして且つ最もよく保存されたものゝ一つであつて、其壁には犠牲牛の屠殺・鳥料理・鶯鳥及鶴の飼養・船遊・建築工事・造船・耕作播種・事務室の光

メンフキスの廢墟とサツカラ見物



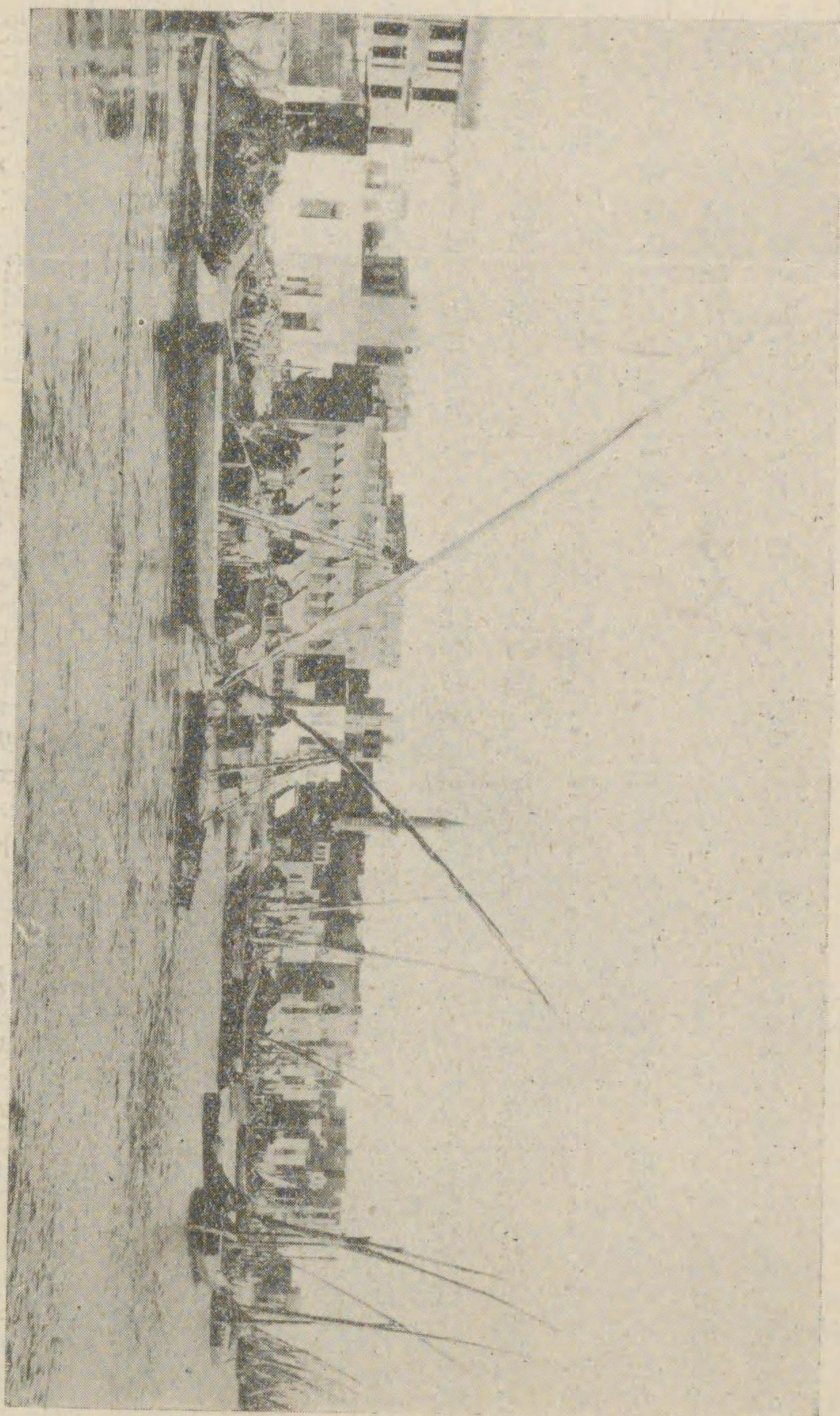
サツカラの段塔

景等多種多様の彫刻がある、こゝこそ仔細に観察せば數日を費すの價値は充分にある。

次に見たのは Serapeum である、嘉永四年マリエツトの發見するところ、これは牛の墓で、通路の兩側に室を設けこゝに大石棺を置く、側室の數約三十、内石棺を存するもの二十、一箇は蓋と身と位置を異にして通路に横はれり。残存せる石棺の全部をみたのではないから、全體然るか否かを知らぬが、棺のあるものは黒花崗石水磨で、蓋に突起を缺ける他は、其形我國の古墳に普通なる所謂「家形」のものであつた。

埃及では古來各種の動物が禮拜された、即ち牡牛・牝牛・鰐・猫・獅子・Ibis(アイビス一種の鳥)・鷹・兀鷹・牡羊の如きものであつて、例へば Horus は鷹、Thout は Ibis, Sobek は鰐、Khnum は牡羊の形をとると信ぜられてゐたから、従て此等の動物が禮拜されたのである。右の外古代より特種の斑紋を有せる動物を尊崇した、従て此特種の動物を神殿に飼養し、死後は莊重盛大なる儀式を以て町重に埋葬し、更に其神殿内には代りのを飼つたのであつた。此種の著名な例はメンフキスの古都に於いて禮拜されたる神聖なる牡牛 Apis で、其資格は黒地に白點あり、前額に白色の三角形、右脇に新月形の型を有するものであつたといふ。前記セラペウムは即ち此等の牛の墓である。

時間も可なり経過したから、も一つ Ptahotep の墓が残つてゐるのを割愛し、再び段塔の傍を通り歸路はギザに出たが、途で三度土堤の砂に車が埋つたので、運轉手は大に努力して砂を掘り石



老馱島より内流右岸舊開路をみる

木端をかひ、將に發車せんとしたときに、群がり來つた土人十數人後方より車體を押しつれば、車は難なく運轉しだした。埃及に於いては、斯様な事が何度もあるから、多少のエキストラを考へておかねばならぬ。印度でも自動車は河渡りをするが、これは橋のないところを渡るのだから、渡る方が悪い、だから土人が出て來て押し渡したら、金をやるのは當然であるが、埃及のは途が悪くて車がめり込むのである、馬鹿氣てゐるが止むを得ぬ。こんな始末で大分の時間を空費して開路市へ戻つたのは午後三時であつた。

市中の洋食店で簡単に晝食をすませ、舊開路に Abu Sargel 寺をみた、此寺は回教徒の征服以前の創立にかゝると傳ふるも、地下室のみ或は然らん、傳説には聖母幼き基督を抱き此處に逃れ、此地下室に一ヶ月を過したといふ事である。恰も今はナイルの増水にて地下室は一面の水で、到底入るを得ざるを以て、上から覗いた丈けであるが夫れでも Nave と Aile とに分れてゐるの丈けは分つた。此の寺今は全部復原修理を経てゐる。

今日も亦歸途 Fostat へよつた、目的は例の油絞石の實測と寫眞撮影とにあつたのである、然るに案内人は私が油絞石を見度いといふ意を解せなかつた爲め、漸くそこへ行つた時は最早晩くて寫眞が撮れなかつたから、更にもう一度出直す事にして歸宿をした。朝は自動車で堂々開路市を乗り出したが、夕は電車内へ立往生、洵に槿花一朝の榮を染々と感じたのであつた。

イブン・ツルーン寺から アタベル・

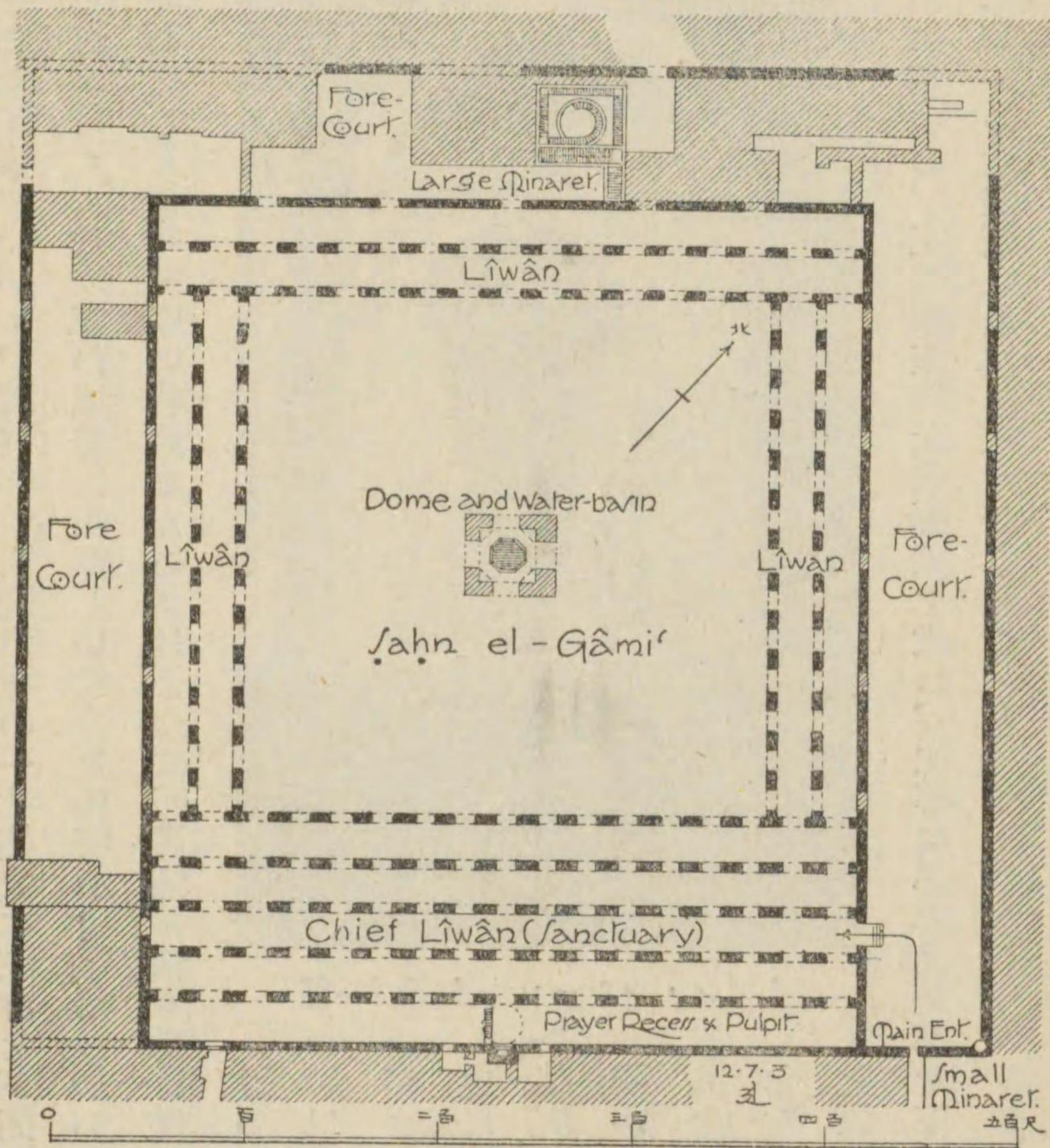
ハドラのバスの窓

十月十九日

牧羊館から例のアタベル・ハドラ迄徒歩して此所からサラジンの廣場迄電車で行く。開路の市電は一等十二の二等六ミリム均一(一ミリムは約我一錢)である。此所で下車してあとは徒歩、不規則な土人町を通つて Gâmi Tbn Tulûn (イブン・ツルーン寺)へ行く、拜觀料四ピアスタアであつた。開路の寺院は何所でも皆これ丈の拜觀料を徴するのであつたが、今迄各寺へ行つた時は案内人が料金を支拂つてゐたので、別に氣にもとめなかつたが、今日初めて何れも四ピアスタア(約我四錢)を要せしをきき、其餘りに高價なるに聊か驚いたのである。

寺は貞觀十八年に着手、三年を経元慶三年に落成したもので、開路市に於ける最古の回教寺院である。町から石階數級を昇りて入口に達するのである、入口は大中庭の一隅にあるから、内部へ入るところが即ち Chief Liwân で、禮拜所も説教壇もこゝに在る。他の三方は歩廊を廻らし、中庭の中央には圓屋根を頂ける大水盤がある。寺の四周は矮屋櫛比頗る混雜してゐるから、此の大中庭の廣いのと建築物の堂々たるのとで、非常に宏壯雄大な感じがするものである。

開路市イブン・ツルーン寺平面圖



イブン・ツルーン寺から アタベル・ハドラのバスの窓

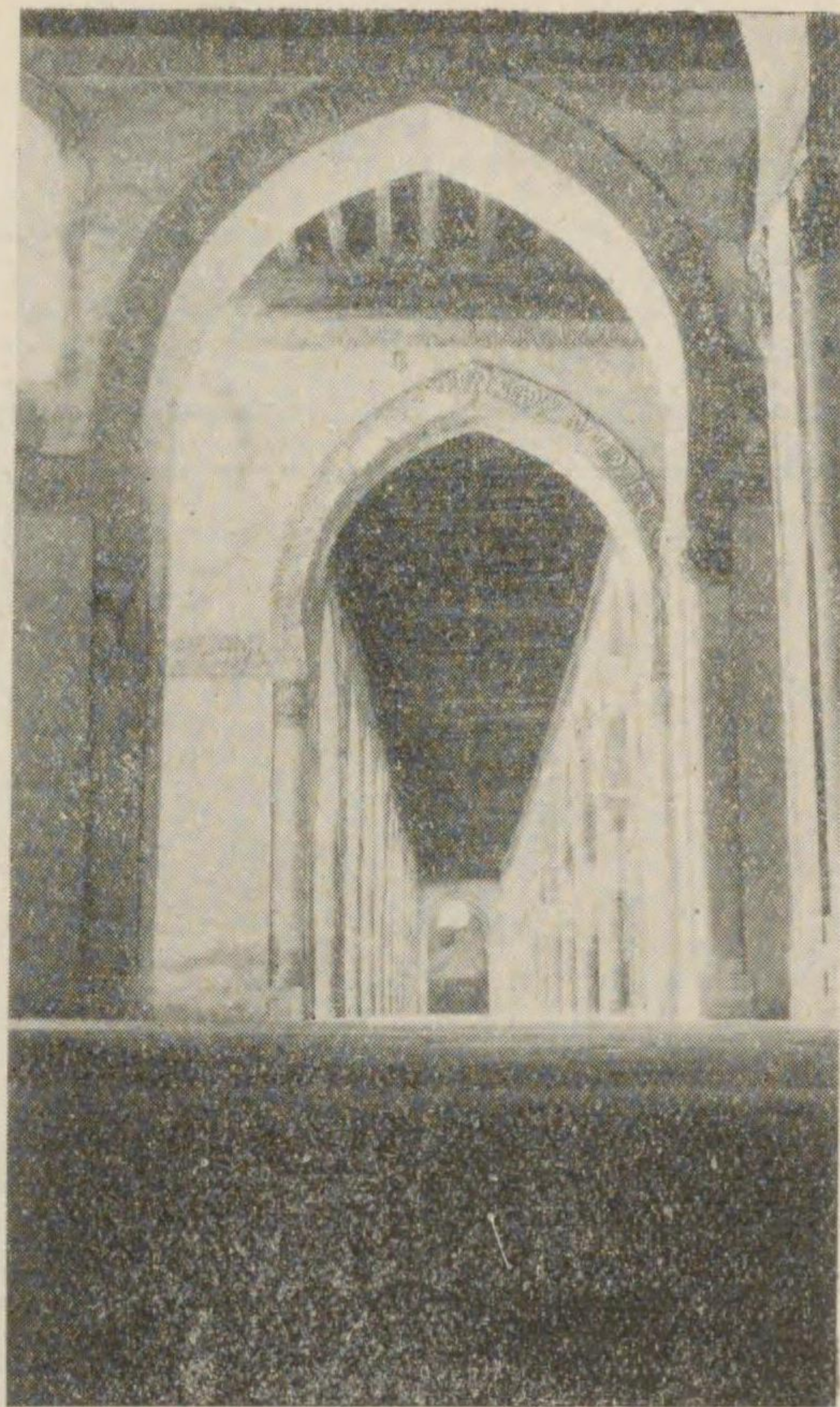
此の伽藍建立縁起に次の一節がある。伊太利亞に於いては、初期の耶蘇會堂建築に當りて、上古の殿堂から柱を失敬して利用したものが、夫れと同様に當國でも、回教伽藍新築の際にはコプト會堂の柱を無斷借用するのが慣例であつた。コプト會堂の位ならまだ罪が軽い、ひどいになると古代殿堂の大きな一本石の柱でも盗みかねなかつたのである。

施主のイブン・ツルーン

王は最初此工事について、信任厚き希臘出身の一建築家に設計を下問せられたところ、同人は會堂の柱三百本なくては大王の威勢に相應しい大寺を建築する事はむつかしう御座ると上奏したところが、流石に Tulunid 王朝の建設者たる丈けあつて、憐憫の情も殊に深く在した王は耶蘇會堂を略奪

するのは良心が許さなかつた。

以前大王の殊遇を蒙り頗る羽振がよかつたが、今は事に坐して獄中に呻吟せる耶蘇教信者の建築家某右の趣傳へ聞き、時機至れりと密かに喜び、苦心慘愴漸くにして人をもつて大王の爲めに一本の柱をも用ひずして世界第一の大伽藍を設計する旨を上奏せしめた。此



イブン・ツルーン寺歩廊の一部

策美事に適中し、王は即座に此建築家を赦し、工事に必要品全部を下賜せられた、斯様にして此所謂世界第一の大伽藍は建立されたのである、と。

縁起といふものは、古今東西を問はず眞偽半々いゝ加減なもので、大概は後人が作成したものである。此の場合も勿論さうであるが、紀伊道成寺縁起や倫敦サザック寺 (Southwark Cathedral) 縁起の様に、これもないよりあつた方が面白い、口碑傳説等といふものは微分積分の様に肩が凝らないでいゝ、そんな馬鹿な事があるものかと口角泡を飛ばすには當らぬ。

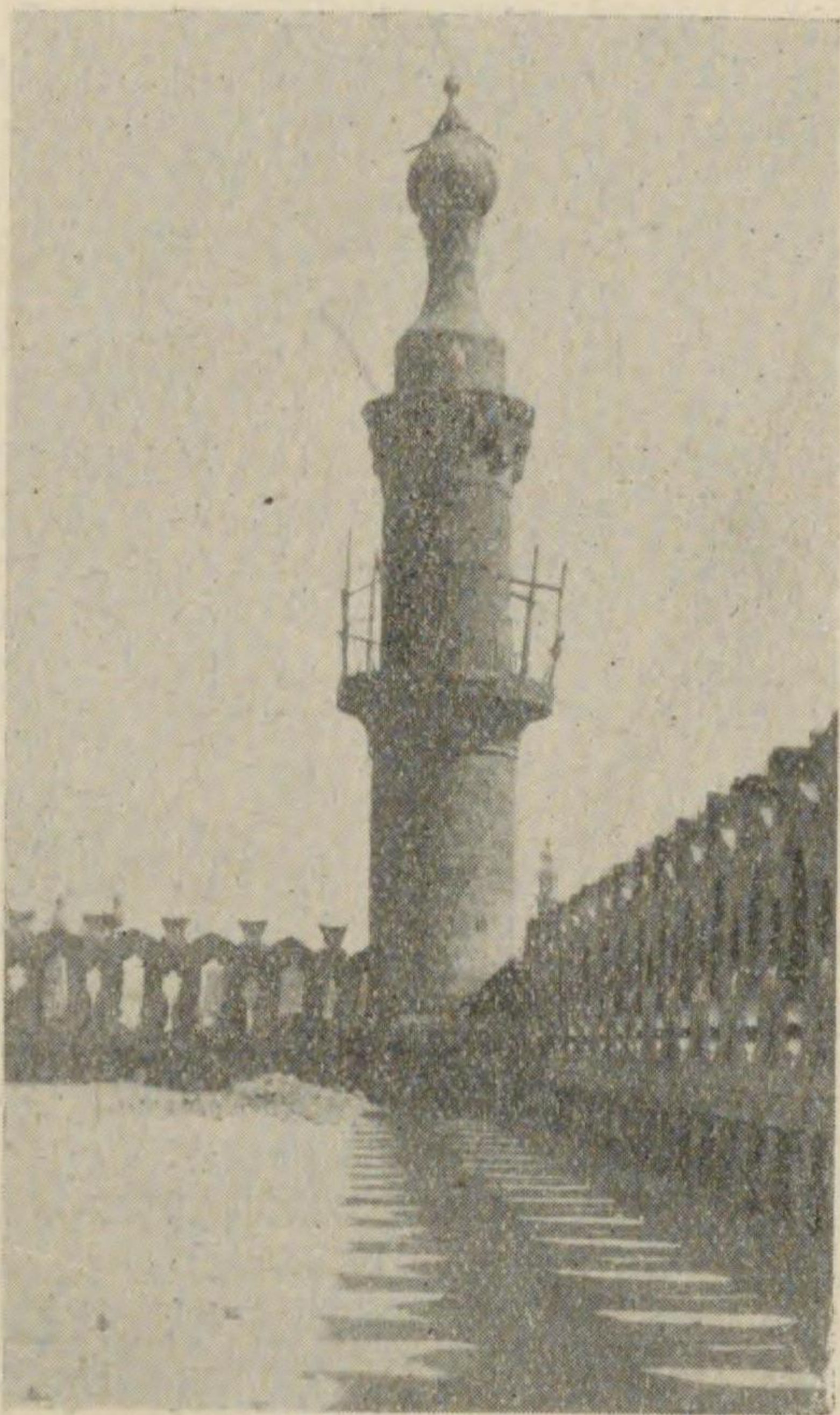
此寺にも勿論柱は使つてあるが、石のでなくて煉瓦石を積み周囲は漆喰が塗つてある、壁も亦其通りである。當寺は Mecca の Kaaba に摸したとも言ひ、また Mesopotamia なる Samareh の Wathek Ibn Mutassim の直寫ともいふ。何れが眞か私はどちらも知らぬし、繪や寫眞をみた事もないから判断の下し様がない、併しまた西北側中庭外に建てる大光塔は Tigris の Samarra の眞似であるとする。Samareh も Samarra も同一であらう、してみると後者は主として此光塔の事を言つたのかも知れぬ。此塔に就いても亦口碑がある。

ツルーン王は或時どうも考へがうまく纏らず、ぼんやりしながら、つかうか〜と指頭で紙を繕つて渦を作つたが、不圖思ひついて此のつまらぬ仕事に理窟をつけてしまった、即ち工事監督の技師を呼んで

『コレ〜、朕の伽藍の塔はこの様にせい、朕は卿の爲めに斯様な模型を作つたぞよ』と仰せられて、渦にした觀世縵を下賜されたさうである。

大中庭は約方三百尺、其中央水盤の覆屋は十三世紀の末葉 El Mansur 王の建つところ。歩廊

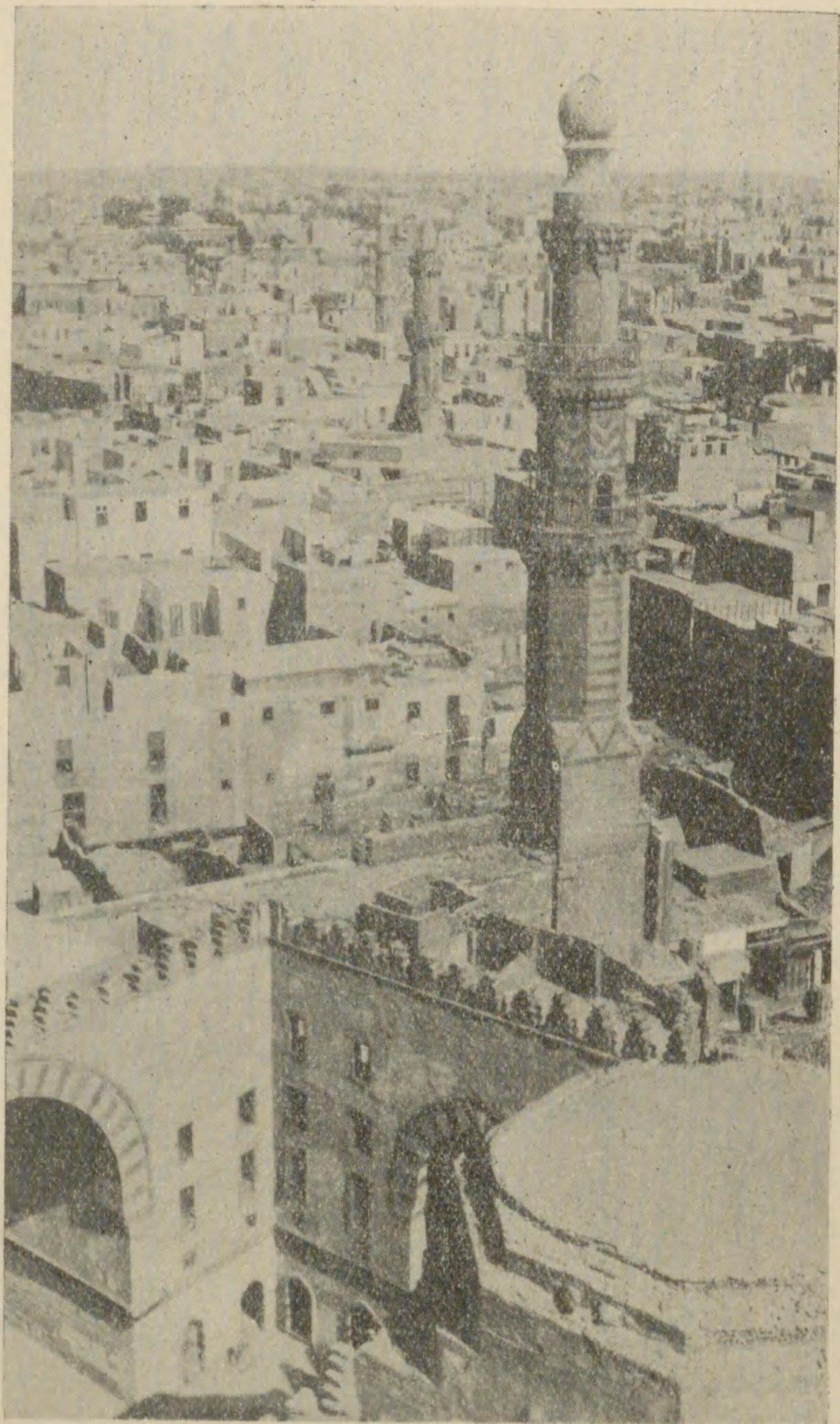
の尖拱は此種の早期の例である。壁の上部には埃及無花果 (Byeamore) 材に經典の句を刻した長押がある、此れはツルーン王自身アラット山で發見したノアの方舟 (Ark) の船材の一部であるといふ證言をした者があるさうである。偽證罪に問はれねばいゝが。



イブン・ツルーン寺歩廊屋上より東北隅の小光塔をみる。

光塔の上からの展望は實に絶景でダージュールやギザの大寶形塔は勿論、内流河の下流は遙に眼の及ぶ限り三角洲の沃野をも展望し得べく、東方には舊城砦及び Mokattam 丘蜿蜒南北に走り、近く四方には市内回教寺院の光塔、宮殿邸宅、民家建ち並び、流石

は埃及國第一の大都會殷賑の有様を眼下にみる事が出来る、殊に北方直ぐ足元にある Medresah Sarghutmash の光塔が、他の回教寺院の光塔を背景として樹てるところは甚だ美觀である。Sarghutmash は何と讀むか、一に Suyurghamish と綴つてある。私が案内人にきいたらシヤ



イブン・ツルーン寺大光塔上より Sarghutmash 寺の光塔をみる

「ガトマツシと聞える、二三度きと直したが何度でもさういふ、試みに其通り言つてみて間違ないかときくと確かだといつた。方々のいろ／＼な名前が難かしいので甚だ困る。

塔から降りがけに廻廊の上を歩いた、上は陸屋根だからゆつくり四方の景色を觀賞しながら散歩が出来、一巡すると可なりであるが、其東北角の小光塔を近くみる事が出来る利益がある、屋上の胸壁も一寸面白う。

降り来ると案内人は私に歩廊屋上の歩行は禁止してあるが、此番人——私共について歩いた寺の番人を指して——は自分の Great friend だから貴下の行爲を默認したのであるから、多少の心附を興へられたといつた。又しても金か。案内記には歩廊屋上の一巡を勧告してあるのに、こんな事はない筈であるが、知らぬ顔も出来かねたから銀貨一片を興へたところ、彼は一禮して隠しへ納めて市は榮えた。

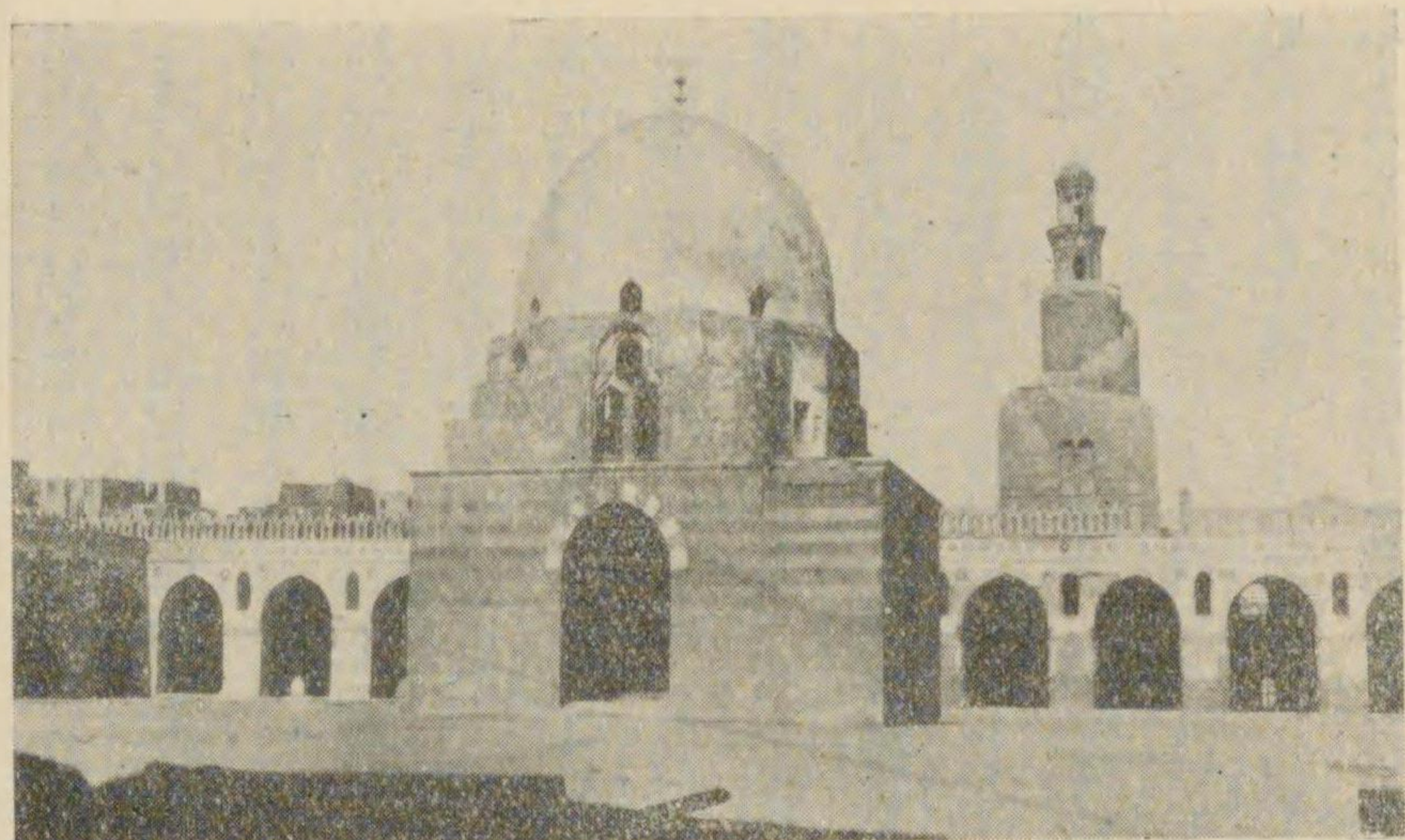
次に Kait Bey 寺へ行かうと思ひ案内を命じたらサラはあんな寺は詰らぬ、何も見るものはないと云ふ。『無くともさ、行つてみる』『切符がない』『切符は入口で買へばい』『入口では賣らぬ』『何處で賣るか』『Office で賣る』『では Office へ行く』『遠う』『遠くても行く』とまるで喧嘩の様、要領を得る迄に時間の空費が頗る多う。漸くの事で切符はある役所で賣るが、此所から大分遠方だし殊に今頃行つたのでは時間に無駄が出るから一層の事午前中暴夜博物館を觀覽し、明早朝切符を求め順序よく各寺院を觀覽する方が得策である事が判つた。うそかほんとか知らぬが、此上頑張るのも考へものだから今日はカイト・ベイ寺を斷念した。

そこで圖書館と暴夜博物館とをみるべく行く。圖書館は Khedivial Library と稱し、博物館の階上なるが入口はモハマッド・アリー町にある、明治三年 Khedive Ismail の創立に係る、七五五〇〇冊の書を藏すといふ、就中波斯の Illuminated M. S. は類稀れなる美術品である。

階下暴夜博物館の入口は東方に開く、館内には重に開路市の廢寺又は其他民家よりの美術的並に考古的物品を蒐集陳列せるもので、本館落成以前は總てエル・ハキム寺に出陳しありしが、一九〇三年全部を此處に移し、漸くにして安全に保護し得るの運びになつたのである。言ふ迄もなく美術並に考古學を修むるもの、及一般觀賞家を益する事多大なるものがあるが、觀光客の大多數は時間の關係上殆んど觀るものがないさうである。洵に惜しい事である。

午後はエル・アザア寺へ行つた。アタベル・ハドラから乗合馬車で適當なところ迄行つて下車、先づ Muristan Kalāhūn と其隣りの Medresh and Tomb of En Nāsir の外廊をみた。

此附近一體に Bazar がある。金銀細工の美術品、絹布、小間物、其他種々雑多のものを賣る。町幅は極めて狭く曲つて居て、兩方の店から手を伸ばせば町の真中で握手が出来る位、幾多のアリーヤハツサンは凄い目を光らして椋鳥の引懸るのを待つてゐる。アリーヤハツサン許りでなく、此所



イブン・ツルーン寺中庭中央の水盤と歩廊後方の大光塔

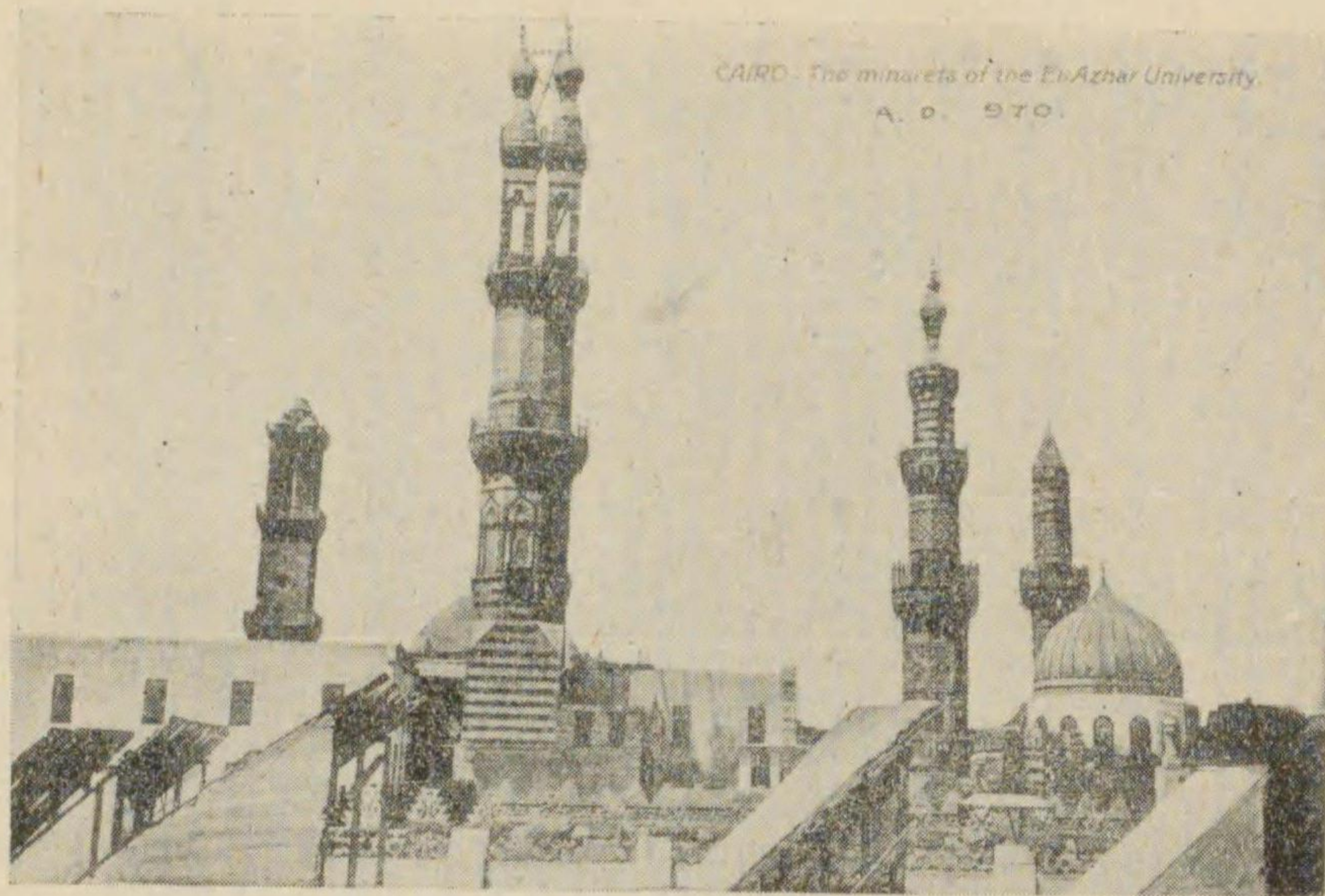
には歐人の店もある、私には歐人とはかりで國籍は分らぬが、いづれ土耳其や希臘やアルバニアあたりの喰ひ詰めものであらう、併し言葉は英語で引子は手を把らん許りにして店へ連込まうとするけれども、既に博物館の寶物室で多くの珍寶を觀た眼には、此等の美術品は問題でない。問題であつてもどうせ買はぬのだから見る必要がない、案内人は自己に好都合なる店へ引込まうとしたが應ぜずして歩を早め、Gami el-Azhar の前に出た。

當寺は西紀九七〇年、ファチマ系のソルタンたりし El Muizz の大臣 Gohar の建つるところにして、ファチマ系全盛時代の最重要な建築であり、且つ世界に於ける有名な宗教大學で、學生總數一萬四千人と稱し、學生は回教國の各地より勉學に來り總て無料で授業せらる、必修科目はコラン經典に關するもので、他に暴夜語の讀み書き、初等算術及地理とださうで此寺が University になつたのは長

徳四年 Caliph El Aziz の時であつたとす。

嘉元元年の大震災には當大學も大損害を蒙つたが、相續けるマメリューク公子の大信仰心より此を修理して元の如くならしめた、其後凡そ五回の修理及建増を経て今日に及んだのであるといふ。寺の前には廣場ありて、こゝに天幕を張り武装して着劍した銃を持てる巡查立番をなし、天幕内には數名の同僚が休憩をしてゐた。其光景警戒可なり物々しい。眞偽は知らぬが、つい近頃迄此附近頗る物騒で、時には争鬪殺人等もあつたとか、其爲めの警戒ださうだが、此頃土國の勢稍や回復したので、此邊も大に平靜になつたさうである。大學の入口は此廣場に面してゐる。

正面入口より入りて大中庭を過ぐれば、突當は即ち Liwan el Gami 卽ちこゝは講義室になつてゐる、約百五十尺に三百尺の大廣間、床は一面の敷石の上に蔭



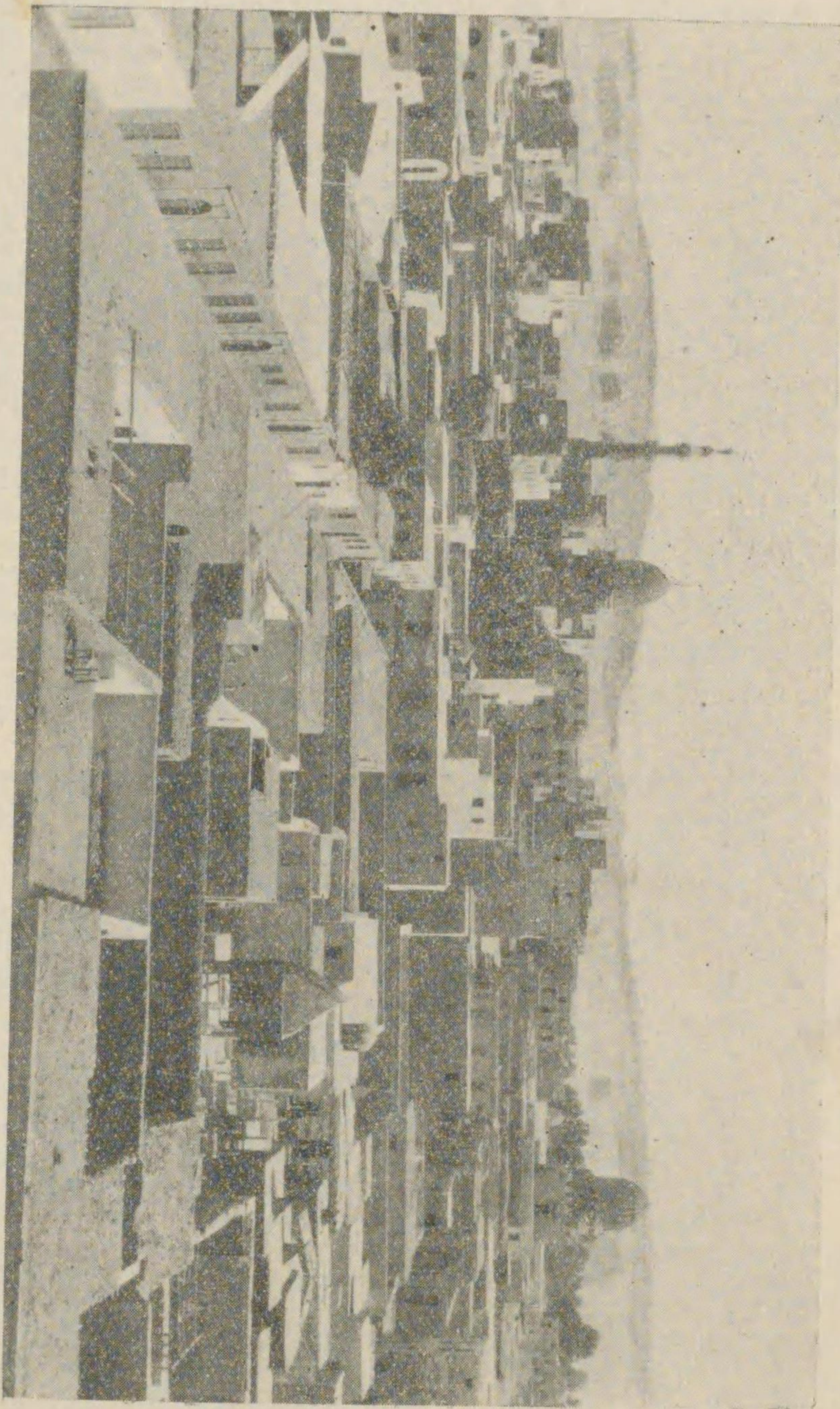
回教大學 (El-Azhar) 夫婦塔及光塔群 (繪端書複寫)

イブン・ツルーン寺から アタベル・ハドラのバスの窓

が敷いてある、此上に恰も魚河岸に鮪がついた様に、若い學生が無秩序にゴロ／＼寝てゐる。奥まつた一室には禮拜所があつて、こゝで回教徒二名連に此所に向つて禮をしてゐた、此拜所は常に西面してゐるので、此所に向つて拜せば拜者は常に東面す、即ちメツカに向ひ拜する事になるのだといふ。大講堂の左右即ち南北側の小室は寢室兼仕事室に用ひらる、此室より沐浴所(大さ七十尺に達する様設計してある、私は沐浴所の一見を申出たが拒絶されて了つた。)

回教大學を辭してから徒歩カリフ墓(後出)に向ふ途中、左方の高地へ登つてみたところ、墓の圓屋根は民家の平屋根の上に抜き出て、そこへ夕日を斜に受けて總てが極めて明瞭に見えてゐた。色は全部土色、背景のモツカタムの丘も、墓も民家も足元の高地も何も彼も土色であるうちに濃淡があり變化があり、空の青色と奇妙に調和して洵に熱帯の夕景に相應しい色であつた。反對の側は開路市が一望の下にあつて、特有の光塔が今朝ツルン寺の光塔から見たよりも數多く、たつた今みた許りのエル・アザの夫婦塔は目の下にある、此の方面は裏光線で、其輪廓極めて明らかに描き出され、別種の趣があつた。

此高地はフォスタート廢墟發掘の土を捨てた爲めに出來たさうである、此の脚とアタベル・ハドラとの間、即ち先刻乗合馬車の通つた道路を、バスが通つてゐる。ガタ馬車もバスも料金は同じで一人一回半ピアスタア(約我五錢)。此間夕景の混雜は一通りでない。我國の大都市と選ぶ所なき亂雜な、



物見臺 (Point de vue, 後出) より所謂カリフ墓遠望

イブン・ツルーン寺から アタベル・ハドラのバスの窓

歩道も磔石もなき砂ほこりの大道に騒然雜然混沌として秩序なく、驢馬車・乗合馬車・客馬車・自動車・自轉車等が群集を押し分けて來往せる間に、新婚の夫妻を自動車にのせ、前後に徒歩の行列を組み樂隊を先頭に立て、廣目屋の廣告式に悠々閑々と練り歩く。殊に電車通との交叉點に於ける混雜は到底名狀する事が出來ぬ。一人の交通巡查があるでなし、狭い道路へ四方から車がぎつしり詰まつて、進むも退くも出來ぬ有様、併し流石に先を争ふ様子もなく、十四五分の間何とてか處分はついたが、こんな所をみてゐては、いくら眞面目にみても半開國とほか思へぬ。

私はバスの窓から此有様をみて、つい半月許り前に別れを告げた倫敦市の巡查や群衆を想起せざるを得なかつた。彼の靜肅にして一絲亂れざる交通と、此の喧々囂々灰神樂を揚げた如き無秩序とは、洵にいゝ對照である、アノードとカソードである、我國の群集は如何と自問して苦笑せざるを得なかつたのであつた。

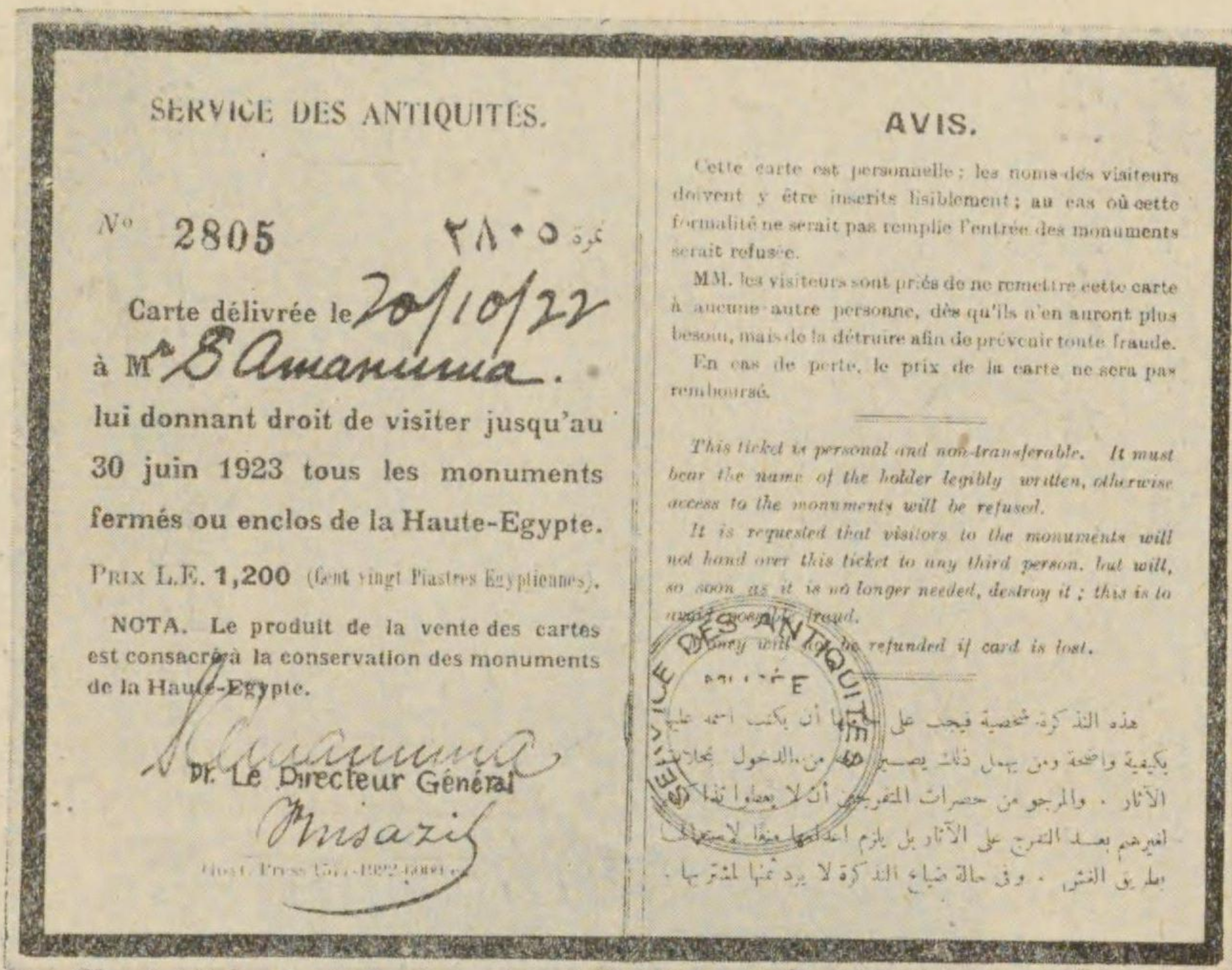
六時歸宿、先日來の寫眞は博物館にて撮影の分光線不足で失敗に歸したが、他は全部成功した。

(大正十二年七月十五日稿了)

「太陽の町」から回教寺院への巡禮

十月二十日

(金曜、好晴)



内流沿岸古蹟觀覽券 (幅五寸三分高四寸一分、二つ折)

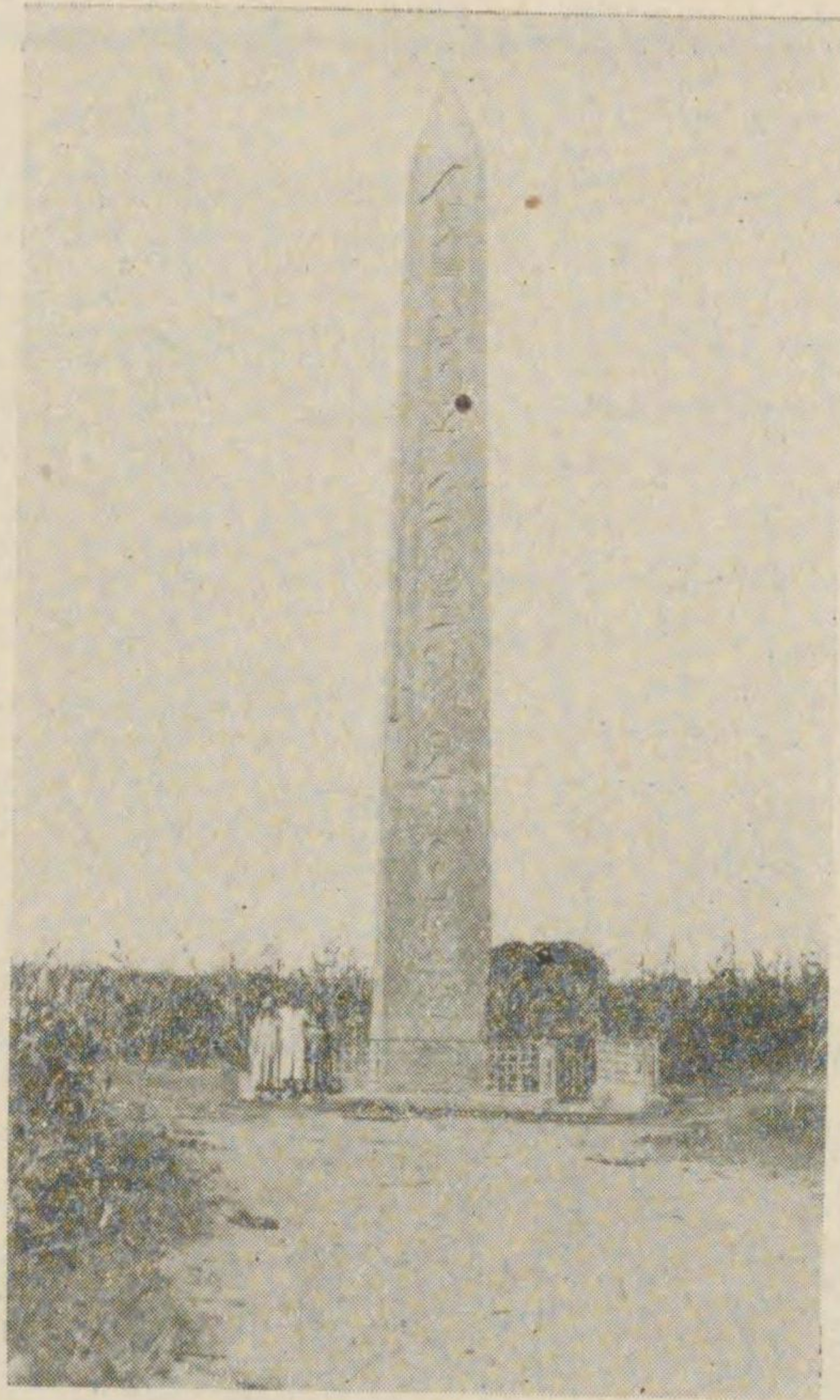
今朝またクツク社へ行つて、ベニ・ハサンよりファイレーに到る内流沿岸の古蹟觀覽券を買つたところ、來年六月三十日迄有効の切符で、價百四十八ピアスタアであつた、即ちざつと我十四圓八十錢に當る、二つ折赤表紙の無賃乗車券の様なもので、隨分高い。成るべくなら通期間は半ヶ月か一ヶ月位でいゝから、もつと安いものはないかときいてみたが、そんな都合のいゝのはお生憎さまださうで、仕方なしに夫れにした。

夫れから電車で停車場へ行きマタリエ (Matariyeh) 驛迄の切符を買つた、目的は開路市を距る事遠からぬヘリオポリス (Heliopolis) へ Obelisk (方尖柱) を見に行くである。幸ひに餘り待つ事なく汽車は出で間もなくマタリエ驛着、

「太陽の町」から回教寺院への巡禮

改札口を出ると馬車や驢馬をうるさく勧めたが、近いところに乗物は無駄だから一切知らん顔で徒歩した。

ヘリオポリスは埃及に於ける最古の都の一として知られ「太陽の町」を意味し、埃及人は *On* と



ヘリオポリスの玉蜀黍畑に淋しく立てる方尖塔

いつてみたさうである。此所には鷹頭の *Ré-Harakhte* と人頭の *Atum* とを祀つた立派な殿堂があつたが、今は唯一基の赤花崗岩方尖柱に古へを偲ぶのみ。

此方尖柱は *Sesotris* の建てたもので、いふ迄もなく元は二本あつたが、一本は第十二世紀迄建つて居たが今は亡く、これ

が唯一本漸く残つたのださうである。高さ六十六呎四方に象形文字を刻す。上部兜巾形のところ及び象形文字の頭字たる鷹の形は、當初金屬を以て覆はれてゐたが、今は亡失してしまつた。

折から天晴れ一點の雲なく、周圍は玉蜀黍の生ひ茂れる耕地で、水磨きせる大方尖柱が強烈なる日光を反射して特立せると、此地に獨特なる四圍の景趣とは、到底他では觀能はざる所である。といつても、此れは敢て方尖柱が珍らしいのではない、方尖柱丈なら紐育でも倫敦でも巴里でも、殊に羅馬に於いては殆んど總ての廣場に於いてみられる。併し斯様な所に於いては、四周の地理的氣候的其他の條件が伴はぬから駄目で、恰もゴツクの大伽藍を我國に建て、法隆寺を紐育に移した様に、物に變りはないが、かうなると一種の骨董品として不自然極る状態に於いてみるのだから、一つの殘骸に過ぎぬので、眞味は半減されて了ふのである。冬期咫尺を辨ぜざる濃霧中に建てる *Cleopatra's Needle* を考へては、たゞ悲痛の感を深くするのみで埃及氣分なんか到底起り得ないのである。

元來た途に引返すと、そこに半ば破損した水車があつた、灌漑用水を井戸より汲み上ぐる爲めのもので、原始的機械仕掛が一寸面白いから寫眞を撮らうとしたら、適ま畑の草取をしてゐた農婦二人、些少の金を惠まれば命のまゝ撮影さるゝも可なりと、案内人を介して申出た。此時案内人は *Peasant women* と言はずに *Ladies* とつた、埃及には農婦なんて言葉はないかと思つた、併し假令此等が *Princess* 達であらうとも、最早種板の餘裕がないから折角だが斷つて早速マタリエ村に戻り、聖母及耶穌が嘗て休憩せりとの傳説ある埃及無花果樹 (*Sycamore Tree*) を一見して驛に引返し、折柄着せる上り列車に投じて開路へ戻つた。

「太陽の町」から回教寺院への巡禮

驛前からまた直に電車でアタベル・ハドラ迄、こゝからバスで眞東に、昨日の通りを突き當り、下車して復た例の高い所へ登つて開路市の眞晝の景色を見下ろした。書き忘れてゐたが此所は風車丘(Windmill Hill)と呼ばれ、其頂界線の南端に近い邊を物見臺(Point de vue)と云つてゐる、今日もこの物見臺へ登つたのであつた。

折角こゝ迄來たのだし、此邊に料理屋はなし、晝食は後廻しとして、せめて Boursbey 廟の外側丈けでも近くで見度く思つたから、物見臺を下りカリフ墓の部落を通り抜けて目的の廟へ向つた。其途中にある澤山の墓は、何れも葱花屋根がかゝつてゐるので、遠くでは何度もみたが、近くでは初めてであるし、夫れが大好物の墓標であるところから、田舎者が銀座通(註に曰く震災以前を云ふ)淺草の仲見世(註、前同斷)を見物する如く、右顧左眄、寫眞を撮り乍ら且つ頭へ詰め込み乍ら歩くので、進みは極て遅々たるものであつたが、遂に目的の廟に行きて内部をみ、序に此ソルタンの墓をも一見し得たのであつた。

まだ此カリフ墓の一廓には見學せざるべからざるものが澤山にあるが、本日は午後を休養と定めたので、これでやめて同じ途を逆に戻り、風車丘の脚なるバスの終點より、半ピアスタア即ち五ミリームを奮發してアタベル・ハドラへ向ふ途中、丁度昨日婚禮の行列を見た邊で、反對に葬列を見た。棺はむき出しの寢棺で、綺麗な切地で上を覆ひ、夫れを人夫が擔いで行く。其後から坊さんや會葬者が行列を作つてねり歩くのは、恰も我國の舊式葬列の通りであるが、殊に目立つたのは列の最後について、土人の女七八名が荷車の様なものへ乗つて泣き乍ら行くのであつた。所謂泣き女であらうが、會葬が皆相當の服装をしてゐるのに、此等の女共は盲縞の土人服を纏ひ、態と泣き顔を見せ乍ら行くのだから、甚だ失禮な言辭で恐縮だが、恰も江戸時代末期の焼きそこなひの鬼瓦を見る様であつた。

今日のバスの相客は界限の下層民の女が多かつた。頭から黒布を冠り全身を覆ひ、顔は僅に兩眼と鼻が半分位出てゐる丈けで、鼻の中心に沿ひ眉間の邊迄、數節を有する金色燦爛たる圓筒形の裝飾金具をあてがひ、鼻の先から顔半分黒色の網を長く下げてゐる、だから鼻の高低大小精粗等は到底判らぬ、故に鼻の比較的高からざる婦人に取つて至極便利な服装である。印度國ペシヤワールでみた婦人は、頭から踝迄純白の布を冠り、兩眼の所丈けは粗い網になつてゐた。だから全然どこも見えぬ。斯様な婦人二人、夕暮の薄暗い人通りの少ない淋しい町を歩いてゐたが、服装が服装だから、まるで幽靈の様で悽愴の氣人に迫るやうに思つたが、白でも黒でも外觀頗る上品である。

婦人は決して肌を出さぬ、我國の或る種の女子の如き無作法は常夏の埃及國に於いてはみる事が出来ぬ。斯様な上品に見える婦人が、大概跣足であるのは甚だ異様な感がある。其跣足の婦人達がバス内に於ける喧しさはお話にならぬ。三人よれば姦しいと言はれるのが、十人以上も集つたのだ

から、其賑な事警ふるにもなく、こつちが婦人客と思つて成るべく遠慮すると、いゝ氣になつてのさばり出す、所詮開路市の下層の婦女は黙つて立たしておくか又は繪にかいておくに限る。

バス内では男が割合におとなしいが、亂暴なものになると車の横に入口があるに、態と後ろの窓から入つて来る、車掌は見ても夫れを制止せぬ、だからいゝ氣になつて斯様な亂暴を働くのだ。嘗てある年の暮の卅日、夜行列車で京都から九州へ向つた時の事であつた、汽車は非常に澤山の乗客で、あとから乗つた客は座席なき爲め、通路に荷物を置いて其上に腰を掛けてゐた始末であつた、こんなで汽車が神戸驛に着した時、若い男が二等車の窓から飛び込んで來たのを目撃したのであつた、本人の無作法はいふ迄もない事ながら、あの混雑では、あゝでもしなければ到底乗る事も何も出來ないから、其責の一半は、乗れぬ汽車を運轉せしめ且つ無制限に乗車切符を發賣した鐵道省の運輸課長が負ふべきものだと思つた事があつた。かゝる次第だから人の事は言へた義理ではないが、今の場合には聊か此れと異り、充分入口から乗れるにも係らず、窓から入つたのである、本人は勿論だが、夫れを黙つてみてゐる車掌がけしからぬ、斯様な風ではいつ迄たつても駄目である。ガタ馬車はバスとはいくらか構造が異なり、自然亂暴は働けぬが、客種はどつちも同じ位である。

電車は熱帯の事として、車の兩側全長に沿ひて踏段があり、明け放して皆横から乗る様になつてゐる。「踏段に立つべからず」の掲示が出てゐるにも係らず、皆立つてゐる。夫れを巡查も車掌も知らん顔をしてゐる、だからいゝ氣に成てやる。ひどいものになると踏段へ腰をかけてたゞ乗をする。停留中運轉中を問はず物賣が乗つて來て、鼻の先きへ商品を出して可なりうるさく勧める。煙草や新聞紙は便利でいゝが、菓子や果物等もある、其菓子を勤務中の車掌乃至便乗の巡查が撮み喰ひをする、そして勿論金を拂はぬ、多分役徳といふのだらう。米國に居た時ロス・アンゼルスからパサデナへ行つた事があつたが、其折勤務中の電車の運轉手がバナナを食べ、續て麵麩を頬張つたのを見た時、米利堅は行儀が悪い、我國にはこんなものはないと思つたのであつたが、開路電車の車掌は此れ以上である。果物や菓子の行商はまだいゝとして、最も奇抜であつたのは萬年筆賣であつた。「乗降は先づ降客を先きにせられ度し」の掲示も役に立たぬ、電車が停ると我勝ちに先を争つてゐる事、どこかの國の住民と同じである。

獨立をしたと大威張で、鼻息は頗る荒いが、首都には英國の兵營があり、英國旗が今でも翻つてゐる半開の埃及國も、歐洲の強國に戰爭で勝ち一等國に昇進したといふ日本國も、どうやら文明の程度は同じ位らしいので、今日は大に悲觀せざるを得なかつた。

宿に近い安料理屋で晝食をしたら、給仕への心附迄入れて合計十九ピアスタアですんだ、當地では甚だ安價な方である、直に歸宿をしたがもう三時が過ぎてゐた。連日歸りが晩くなるから、夕食をすませ日記をつけるといつでも十時が過る。こんな風で入浴のひまもなかつたが、今日は午後休

養をしたから、相當にひまが出来、開路着後七日目で漸く湯に入れたのであつた。

十月二十一日

(土曜、好晴)

今朝三度クック社へ行つて埃貨金五十磅を引出し、他に所持の英貨五磅と白貨十一フランを埃貨に兩替をしたら、合計五十五磅三十五ピアスタアとなつた、明後日から田舎巡りをする爲めの準備である。

案内人のサラは、今から古跡保存事務所へ各寺院の拜觀券を買ひに行かうといふ、一昨日此切符の事で同人と争つたが、Okeo.といつたのは此れらしい。成程夫れはさうかも知れぬと早速同意して直に出かけ切符八枚を買つた。かう書くと恰も窓口へ金を拂ひ引かへに切符を手に入れた様であるが、中々さう簡單には行かぬ、先づ此の役所のさる一室へ入ると机を控へた役人がある、其の役人の前へ行くと、先方から活字刷りの紙をくれる、其空所へ姓名・國籍・職業・旅行の目的等を記入する。さうすると其役人が夫れを受取り、一通り檢閲して給仕に渡す、受取つた給仕は夫れを持つて室外に消える。待つてゐる間に役人はいろいろ話をしかける。流石に英語はうまい。感心してきいてゐて三度に一度位いふ事が判つても判らなくても、そんな事は一切構はず Yes じ No 一つ隔きに返事をし乍ら、心中早く切符の來らん事を祈つてゐたら、其うち役人は私に暴夜語を話すかと問うた。頭の悪い役人もあるものだ。暴夜語が出来る位ならヌビアの土人なんか連れて歩くも

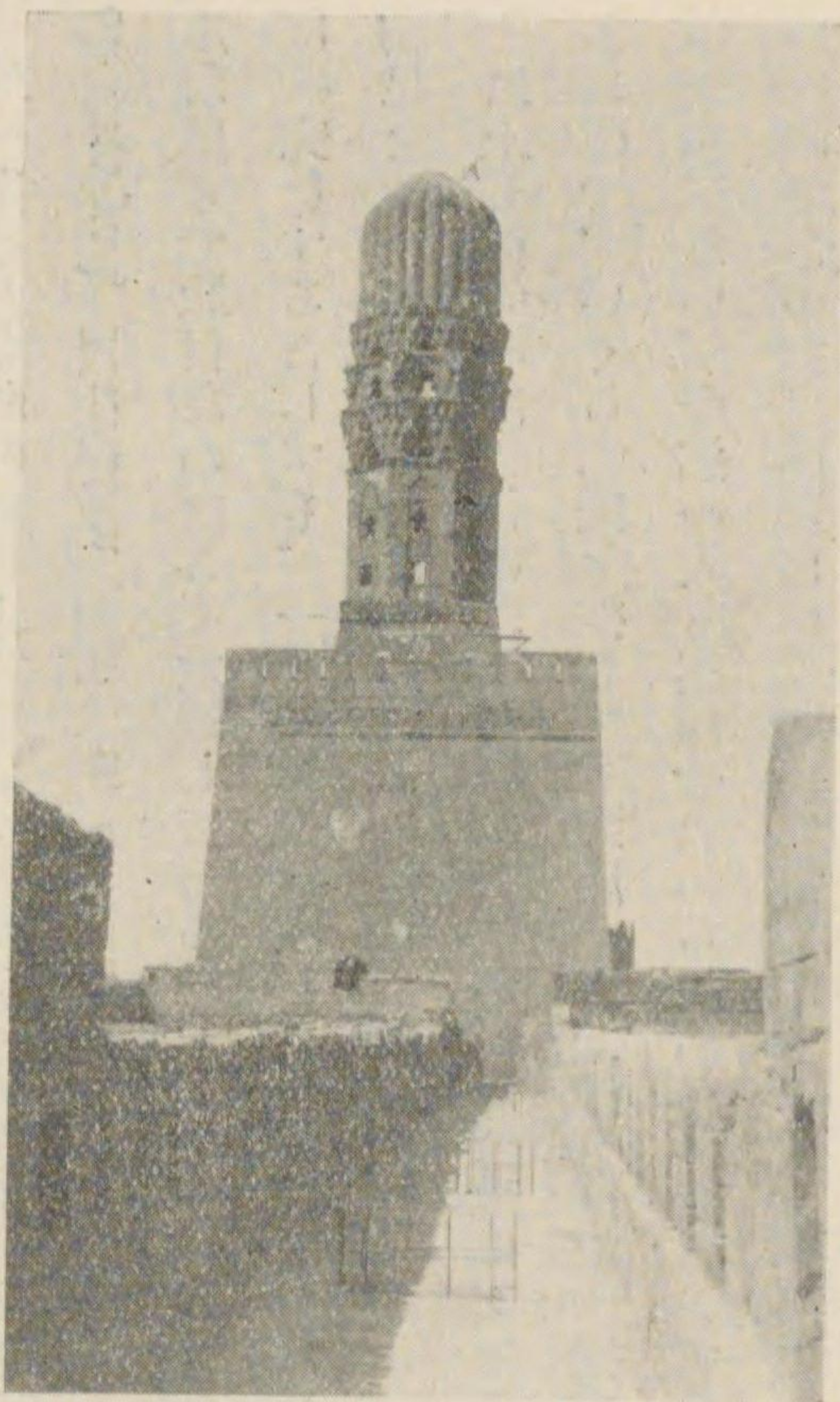
のか、『私は私が暴夜語を話せぬ事を甚だ哀むものである』といつたら、役人が何か言はうとした時先刻の給仕が切符を持つて入つて來た。矢張一箇所四ピアスタアづゝ八箇所合計三十二ピアスタア、拜觀料は何處も同じと見える。皆で三四十分も無駄にしてしまつた。

外へ出ると時間の關係上電車では間に合はぬから、通りかゝりの馬車を雇ひ Gâmi el-Mârdâni, el-Muajjad, Muristân Kalâûn, el-Ansâri 及び el-Hâkim の五箇寺を一氣呵成にすませた。こんな見方で駄目なのはよく承知してゐるが、回教寺院の研究に來た次第でもなし、よしまた來た序に研究をするとしても、一々細部迄觀察してゐる暇は到底ないとなれば、概念を頭へ入れる丈けで満足をせねばならぬのは當然であるからである。

以上五箇寺の内、後の二つが特に面白かつた。殊にアンサリ寺は、大變に狭い露地裏の様な所にあるので、いくら地圖を按じても到底一人では行けぬ、案内人のサラですら、そんな名の寺は聞いた事がない、今迄一人も案内せぬから道がわからぬと言ひつゝ、數回そちこちで尋ね漸く行きついたのであつた。開路市の地圖は此邊になるともうかいてない。大體の廣い町は可なり精しいが、土人町の細い狭い曲つた所は略してある、一人で行く等は思ひもよらぬのである。

アンサリ寺は應永十五年カイト・ベイ王の記録所主事なる Abu Bekr がアメリカニク時代末期の小寺院に型を採つたものと言はれ、徹底的の修理を経たのであるが、壁や天井によく時代の裝飾

が現はれて居り、彫刻を施したる説教壇や出入口の唐戸や柱等皆注目し値す、小じんまりした氣のきいた寺である、本名は頗る長く Abu Bekr Mazhar el-Ansâri といふ、我國なら正に祕密傳法彌勒山教王護國寺(京都東寺の舊名)か信貴山朝護國孫子寺(大和)か金光明四天王護國寺(土佐)といふところ。

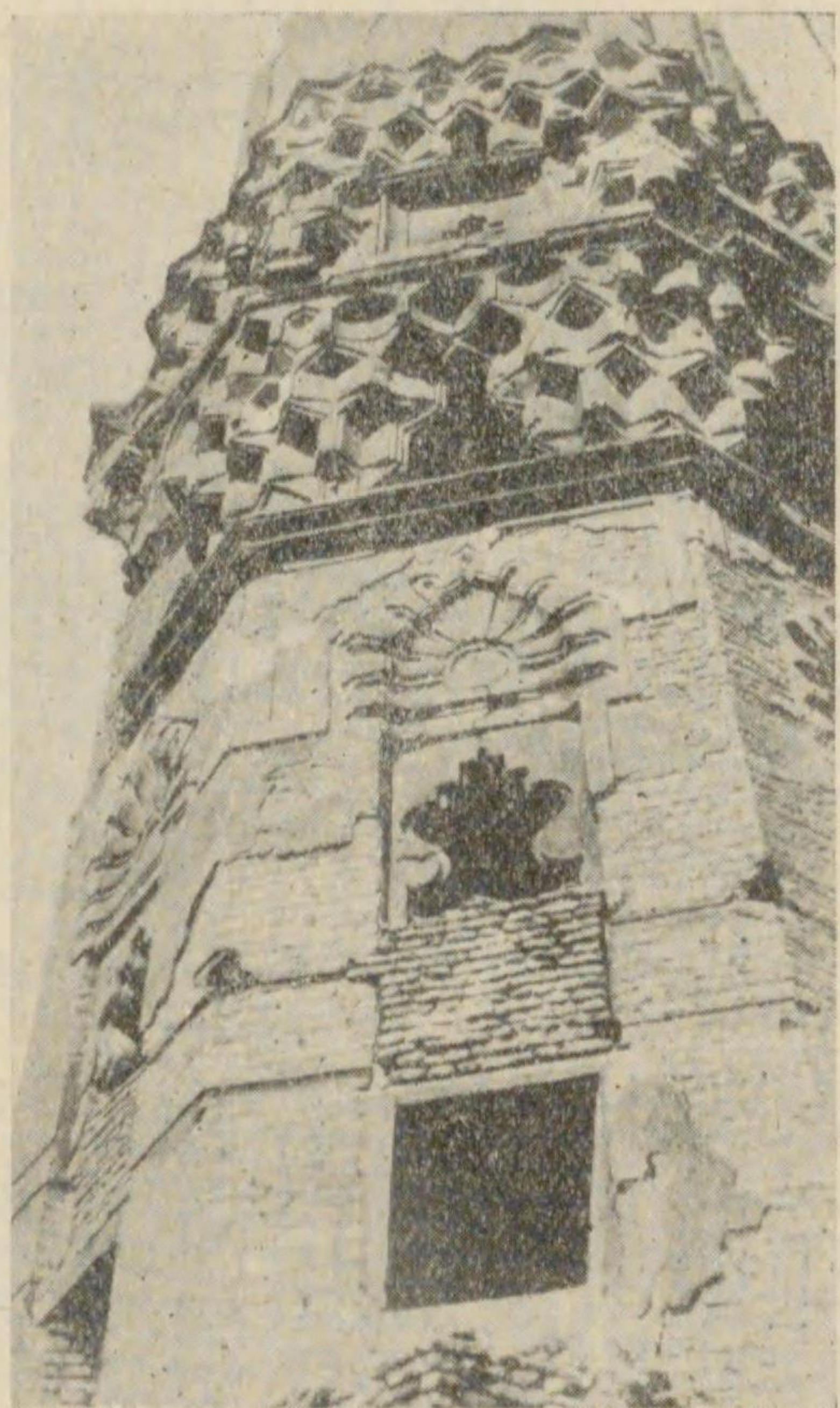


ハキム寺光塔

ハキム寺は此邊での最大な寺でナスール門に近く位置す、其特異なる小塔はよく遠方からの目標になる。正暦元年イブン・ツルーン寺の規模によりカリフ EI Aziz の創始するところで、長保四年より長和元年に渡り、其子 El-Hakim によりて完成せらる、故に Gâmi el-Hâkim (— 2) Hakem) といふ。

仁安二年十字軍侵入の際耶蘇會堂として了つた、回教寺を耶蘇教の會堂にするなんか不都合かも知らぬが、こんな例は敢て珍らしくはない、例へば Fortuna Virilis の殿堂が Sta. Maria Egyptiaca 寺になつた様なものである。

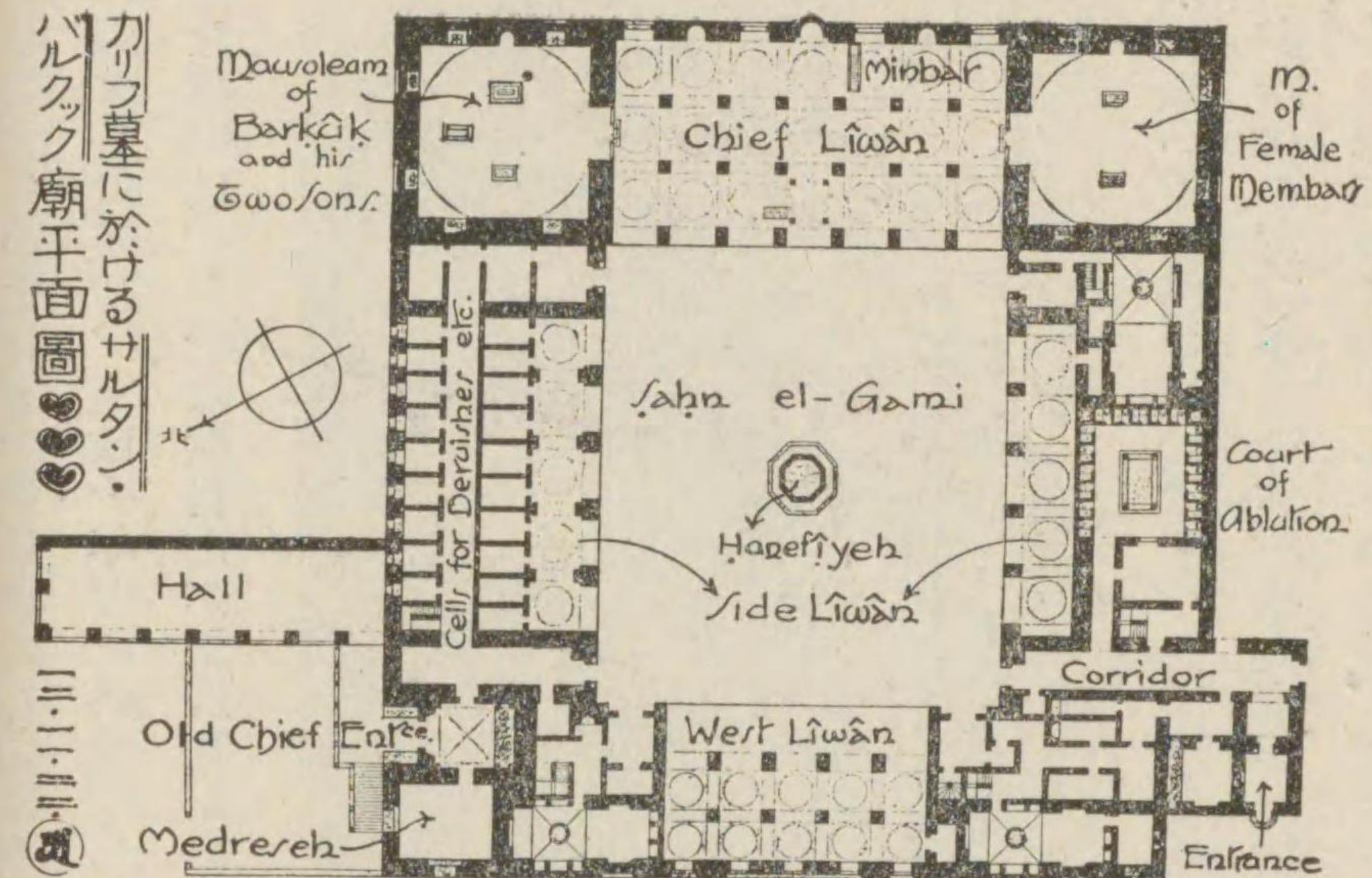
嘉元元年の大地震で寺は大破をしたが、Beybars II. これを修復した、ところが佛人が開路市を占領するに及び、寛政十年遂に兵營にして了つた。兵營にはもつて來いで、此の位しつかりした大きな建物は、今では駄目だが十八世紀末なら立派な據點になつたらうし、まことに上分別であるけれども、また一方から考へると甚だ困つたことで、史蹟なんでもは全然兵隊さん達の頭には無いのだから助からぬ。これも世界各国共通の現象だから仕方がない。我國でも、筑紫の國造磐井の墓と傳説のある、石棺の前面が露出し其前に圓體石人の立つてゐる小高い古墳の周圍に、兵隊さんが演習に



ハキム寺光塔の細部

來て長い散兵壕を掘つて了つた。今はまた埋めて了つたかも知らぬが、あのまゝで何百年かたつたら其時代の考古學者や古墳學大家在、墳墓の周圍に溝がある理由を研究するかも知れぬ。

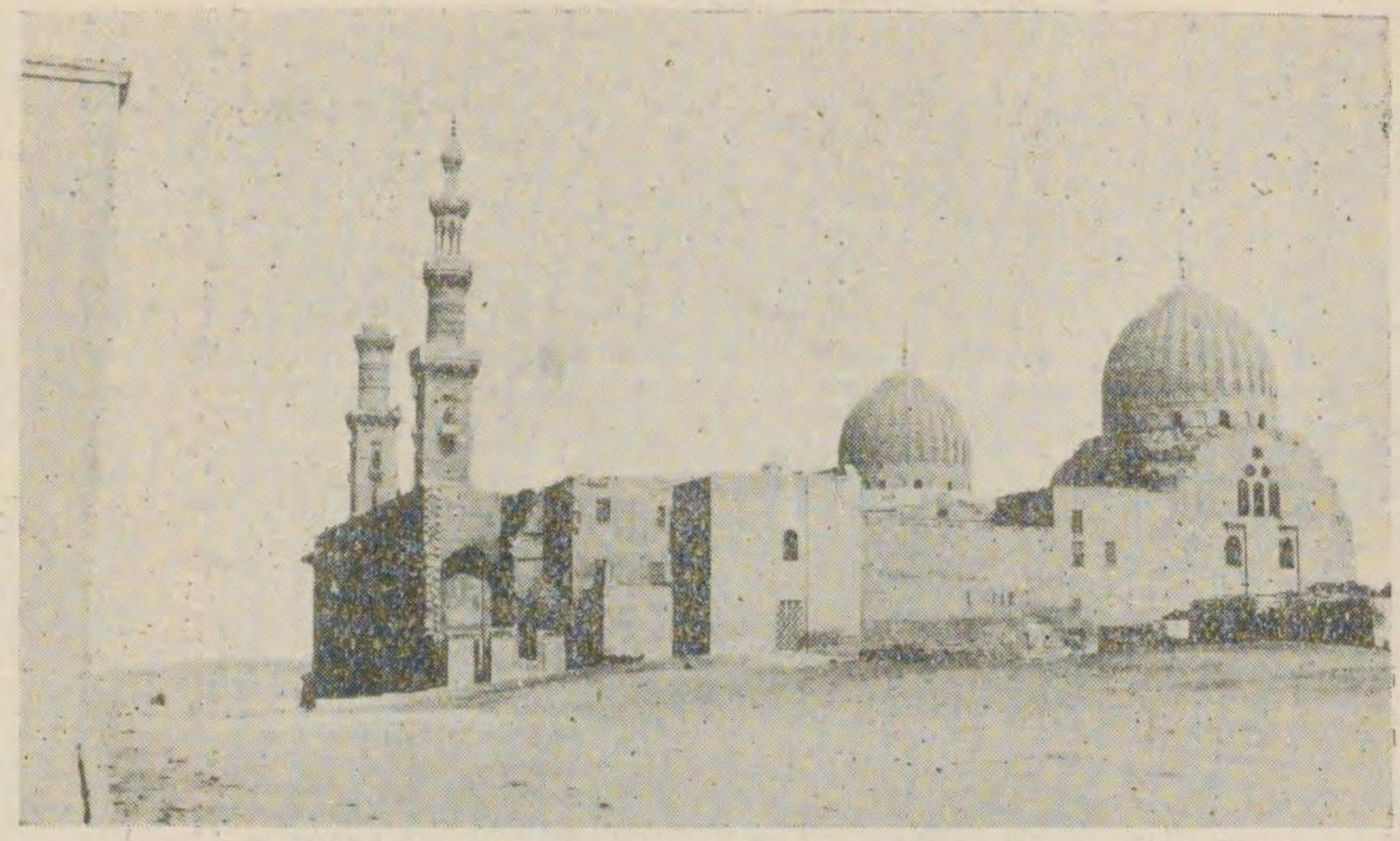
寺は現在甚だ荒果てゝゐるが、殘存せる二基の光塔は注目に値すべく、殊に其本部に於ける方形



カリフ墓に於けるバルクック廟平面圖

の部分が目につくが、此等は當初よりのものではなくて後の補加ださうな、私は二基のうち北方のをよく観たが、中々に古風であり、其鐘乳軒等は中々うまく出来てゐた。

ハキム寺の見物をすませ el-Futûh 門を出て en-Nasr 門を右にみて、細かい粉の様な土と砂——此砂は暴夜沙漠の一部だと思ふと大に興味がある——との漠々道を東に向つた。歐米人だと、こんな道には大分に辟易するのだが、我東洋君子國に「天の恵みで生れし」私は、道は天氣のいゝ時は漠々で、雨が降るとお汗粉か乃至餡ころ餅になるものと心得てゐて、さういふ所で四十面を下げる迄暮したのでから、こんな道は平氣なもの。勢よく歩くとサラは Pavement のないこんな道はさぞ歩きにくいだらうといふ。いやなに何でもないさ、早くいつてみたいから、と答へたもの



カリフ墓に於けるバルクック王廟全景。

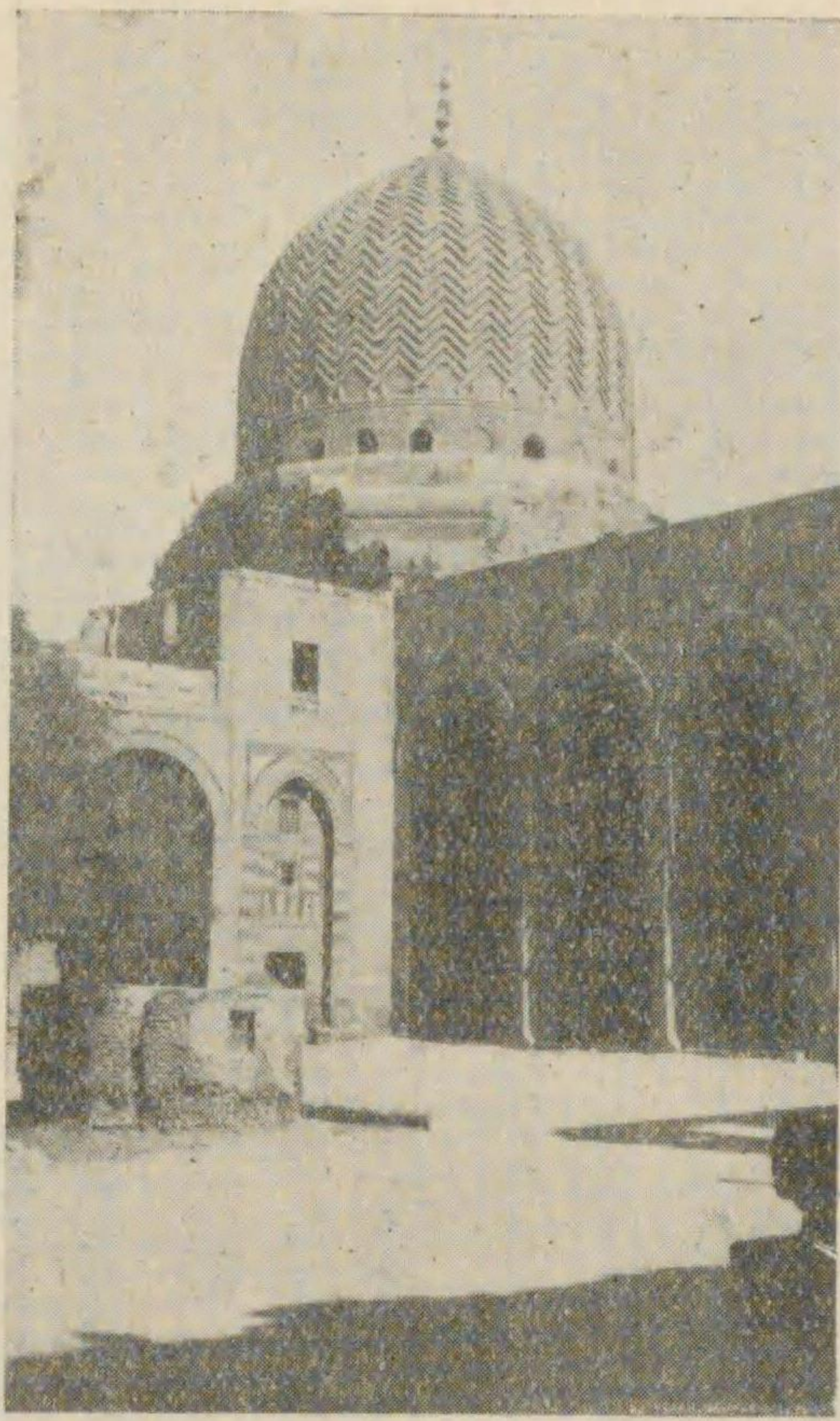
「太陽の町」から回教寺院への巡禮

の、暑くて汗をかいてゐる上に冷汗をかいて、襦袢はすっかりぬれて了つた。で愈よ歩を早め遂にカリフ墓に出て、バルクック廟とカイト・ベイ廟と二つみた、だから今日は七つ卒業した事になる。

バルクック廟 (Sultan Bargûq 又は Barkûk) は、所謂カリフ墓の北端、一木一草なき荒地に建つ。廟は建築家 Sherkis el-Halanbni の設計監督に成りしと傳へられたもので、一方には小光塔二基、後方即ち東側の兩端墓所上に大圓屋根を架せるが、其平面は約二百四十呎平方で、廟といふよりは寧ろ Medreseh (回教の學校) に似てゐる。

話は少し脇道へ入るが、此メドレセーはいろ／＼な綴り方がある、Medrissa, Medresseh, Madrasa, Madrasah 等で、何れも似てはゐるがかう澤山あつては困る。東洋の名は何故にかう異つた綴り方をするのか、今までも時々あつたが、今度のこれは五つもあるのだからひどい。我東京も

Tokyo とも Tokio とも綴つてある様だがどつちかにしたらいいではないか。嘗て蘇格蘭のある所で相不變墓調べに行つた時、墓番の爺さんと話をした事があつた。其時爺さん連りにトカイオといふ。あれはトカイオぢやない、トウキョウと讀むのだといつたら、だつて Tokyo と綴つてあるぢや

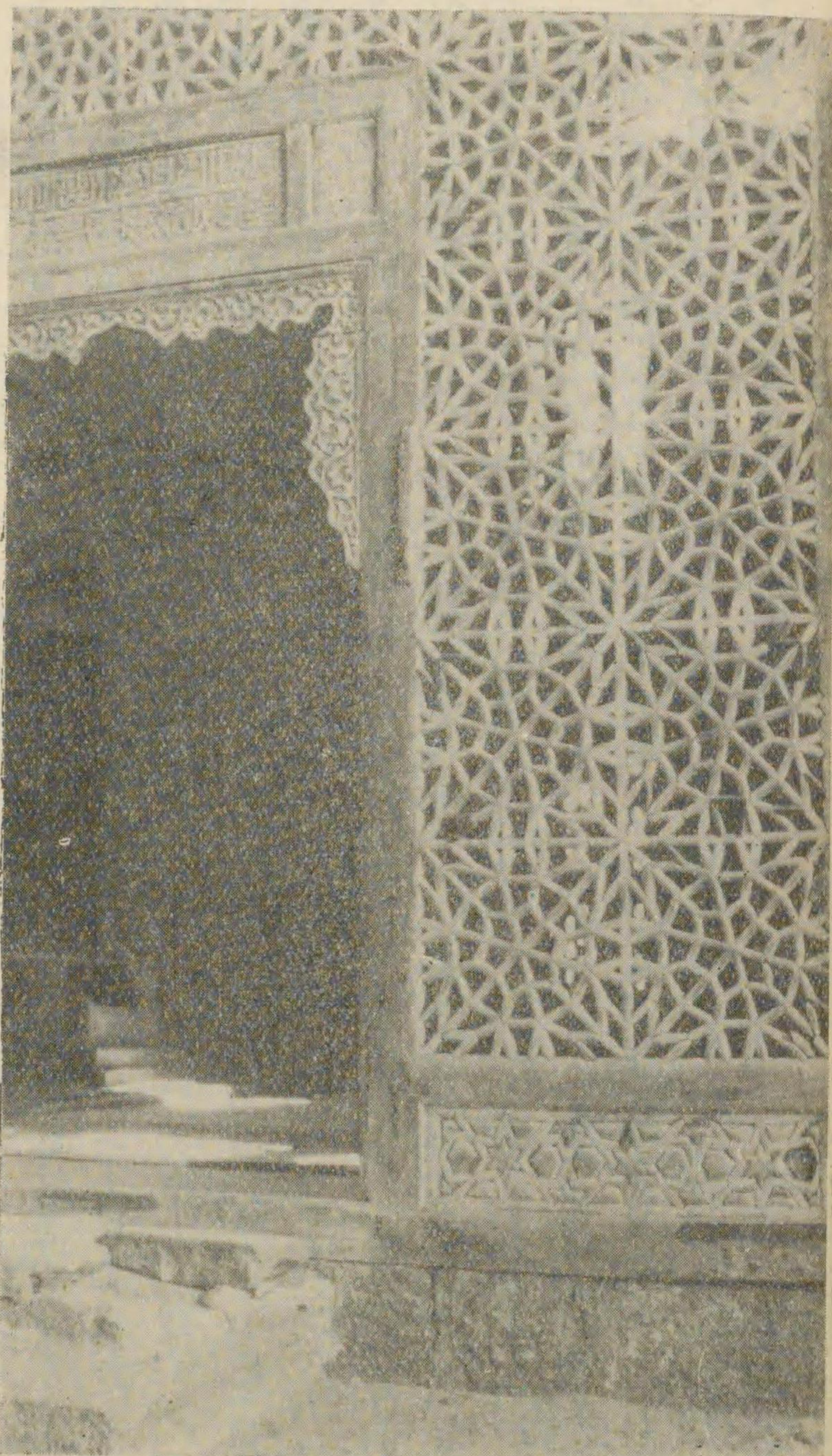


バルクツク廟中庭より東北隅を見る。正面に見ゆるはソルタンの墓所上の大圓屋根で、左手の前面に見ゆるは沐浴に嘗て用ひし古井戸、其左にタマリスク樹が半分許りみえてゐる。

ないかといつた、尤もだと思つた。井田を Iida とかくが、異人はアイダと讀む、さうすると飯田はアイアダで飯島はアイアイジャイマであらう。Tokyo とやゝ綴つておけば間違はな

いのである。澤山の綴り方があつては第一字引を引く時困る。

内部には大中庭あり、廣濶にしてたゞ其中央、二本のタマリスク樹の蔭に、殆んど壞れた沐浴用井戸があるが、勿論今は用ひず、他の部分は全部立派に修繕されてゐるのに、井戸許りは其まゝに



Sultan Barquq 廟妃妾墓入口の花狭間

この花狭間及び下方に近き文様と、印度に於けるサラセン建築の花狭間と、更に支那朝鮮建築に於ける夫れと、最後に我國の古建築に於ける棧唐戸上部の綿板其他に用ひられたる夫れと比べて見ると興味のつきぬものがあるであらう。

「太陽の町」から回教寺院への巡禮

なつてゐる。元は今東側聖殿前にある様な尖拱が四方を廻つてゐたのであらう。此東側聖殿前の尖拱は、イブン・ツルーン寺程ではないが、兎に角花車な柱上に乗つてゐるから、どこかにゴシック建築の傍がある。

此東側聖殿は最も美にして、他の例に普通なる筒形穹窿 (Barrel Vault) と異り、多くの小さな半球形の圓屋根より成る、其平面は三つの通路に分れ其一部にカイト・ベイ寄贈の説教壇を置く聖殿の南北兩端は即ち墓所にして、其北方なるものは、バルクツク及び二人の小供 Farag 及 Abd al-Aziz、南方のものは妃妾の墓で、其兩墓所の上に、暴夜建築としては最傑作の一たる大圓屋根を架す。墓所入口の「花狭間」亦四圍とよく諧調を保つてゐる。加ふるにかゝる「花狭間」は、開路に於ては稀にみる所で、他に一箇所あるのみであるといふ。

北方聖殿の後方には、澤山の僧房が並んでゐて三階をなしてゐる、往昔此所に僧侶居住し託鉢の傍ら修學したのであつたが、今は我國の各大寺に残存せる僧坊と同じ運命に陥つてゐる。

カイト・ベイ廟は、バルクツク廟の南方凡そ五町を距て、所謂カリフ墓部落の中央に在りて、附近廟墓中の最美なるもの、寛正四年の建立にかゝり、明治三十一年の修理を経て今日に至る。美なる圓屋根、高さ百三十尺の細長なる光塔、豊麗なる裝飾、諧調を保てる各部の比例等、觀者をして飽かしめぬのである。こんな風だから、此廟は頗る有名で、開路市を訪ふ人士は、史蹟に興味を有

すると否とに係らず、少閑あれば必ず拜觀するさうである。

歸途五度目でまた風車丘へ登つて景色を見た。最早開路市を退去する迄此所へは來ぬであらう、してみるとこれが最後である。高い處から開路市とカリフ墓所に別れを告げたのである。

風車丘を下つてまた例の五錢均一のバスへのつて町へ戻り、一昨日晝食をした聖ゼームス屋へ入つた。昨日の家は安くていゝが、いくらよくても餘り美味でないから、今日はこゝにした。晝食をすましたら三時半であつた。先日來の寫眞の焼付をとりに行つたら、大概はよかつたが、フォスタト發掘の油絞石と、メルカ墓内の同人立像とが失敗に了つた、石の方はまた寫しに行けるが、墓の方は到底取返しのかぬ失敗であつた。

最早今日も四時が過ぎたから、歸宿する事にした。夕食後番頭に明後月曜日朝旅行に出ると話したら、もう其事なら承知してゐますと言つた。多分ヘメダがいつたのだらう。ヘメダはどうも面白いので、今朝クツク社へ行つた時店員にきいてみたら、あれは多年案内人として勤務し、評判もよく當社でもよく知つてゐる。あれなら大丈夫間違はないといつた。これはかういふより仕方があるまい、今更何とも出來ぬ。あれは氣に喰はぬから代へてくれとも言ひかねたし、まあ大した事もあるまいとしておくより方法はない。

ツルーン王の水道 フォオスタート廢墟 赤寺

十月二十二日

(日曜、好晴)

博物館行の豫定を變更して、カイト・ベイ寺とアマア寺とにきめた。斷つておくが、カイト・ベイ寺と昨日みたカイト・ベイ廟とは違ふ、此れは市の南端に在り、彼は市の東郊風車丘を隔てた墓掘と御坊との一部落なるカリフ墓の中央に位置してあるので、物も所在地も全く異なるのである。

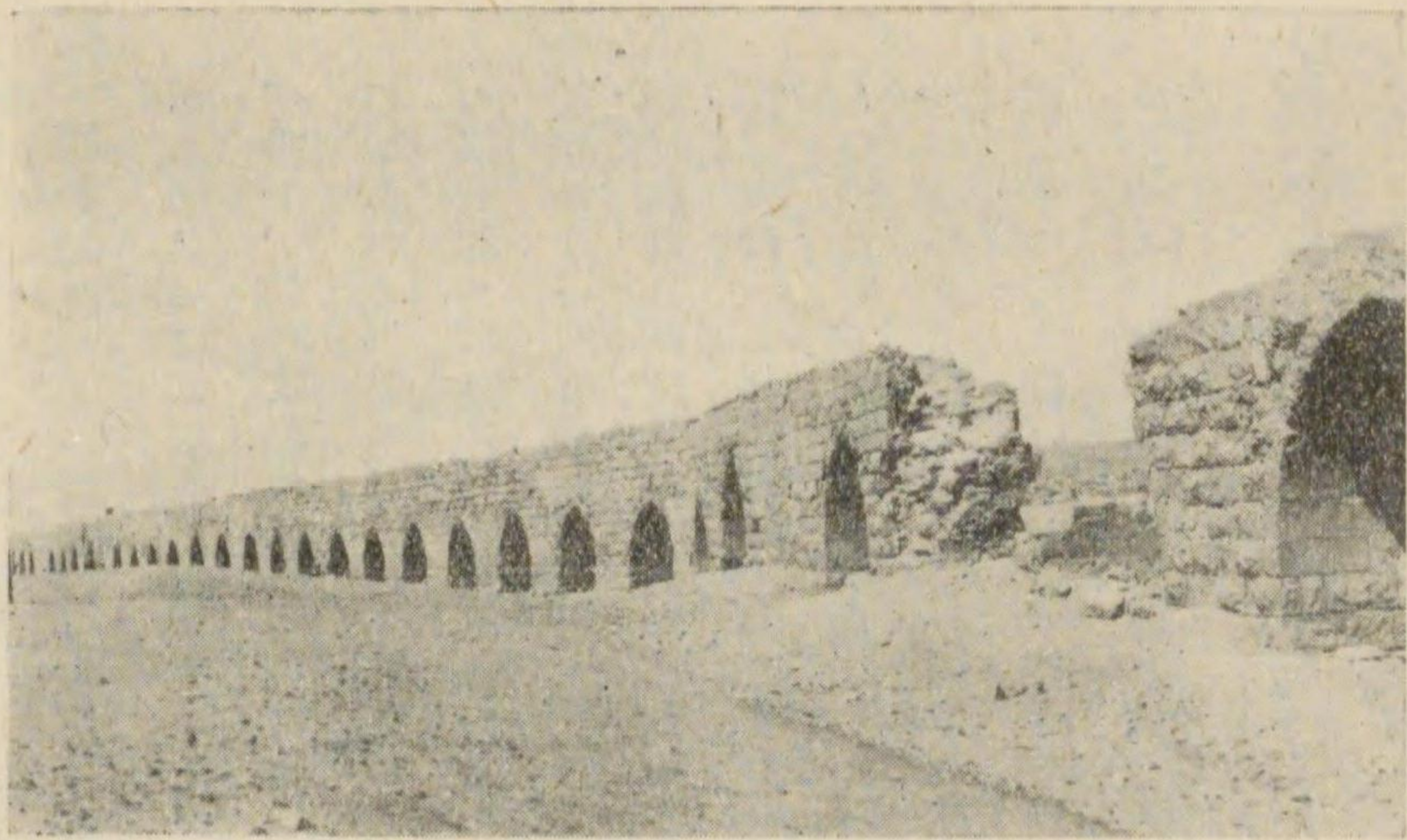
ここへ行くには、電車だと矢張サラヂンの廣場迄のるがよい。そして一度イブン・ツルーン寺へ出てから行くのであるらしく、昨日の道を其寺へ出た。然るにこゝから男を一人連れ出した、其理由をサラーにきいたら、寺をあげて貰ふ爲めに連れて行くのだと答へた。番人がむかうに居ないのかと又きくと、居ないからこゝから連れて行くのだといふ、訊いてみれば如何にも尤千萬である。併し彼等同志は土語で何やら語り合つてゐる。邪推するのではないが、サラーが途を知らぬ爲め案内人の案内人を雇つたらしい氣がしてならなかつた。

行く事五六町にしてカイト・ベイ寺の光塔の前に出たが、寺は案の如く締切で誰れも居ぬ、かゝる事もあらうと豫てから案内人に、だしぬけに行つても大丈夫かときいたのであつた、其都度大丈夫と答へながら此始末である。ツルーン寺から連れて來た男は矢張たゞの道案内であつたと見え、

黙つて立つてゐる、サラーをせめても要領を得ない。その男は鍵も勿論持つてゐず、全然開扉の能力がない、サラーの言つたうちで、「寺に番人が居ぬ」丈けが事實で、あとは全部出鱈目であつた。

怒つてみても今更追附く話でなし、愚圖々々すればする丈け時間の空費になる、止むを得ぬからあきらめてアマア寺へ行く事にした、此寺は例のフォオスタート廢墟の隣りである、今日は是が非でも油絞石の寫眞も撮り實測せねばならぬ。

カイト・ベイ寺から此所への道は、市の外廓に沿ひぐると巡るので甚だ面白かつた。途中舊水道の下を通つた。この水道は今の城寨の脚に近く宮殿を建てたイブン・ツルーン王が、殿内へ引水する爲めに建設されたものと言はれてゐる。今は随分にひどくなつてゐるが其昔しは大したもので、立派に *Agua Claudia* の向ふを張る事が出来るので



開路市外廓に沿へるツルーン王の水道

ツルーン王の水道

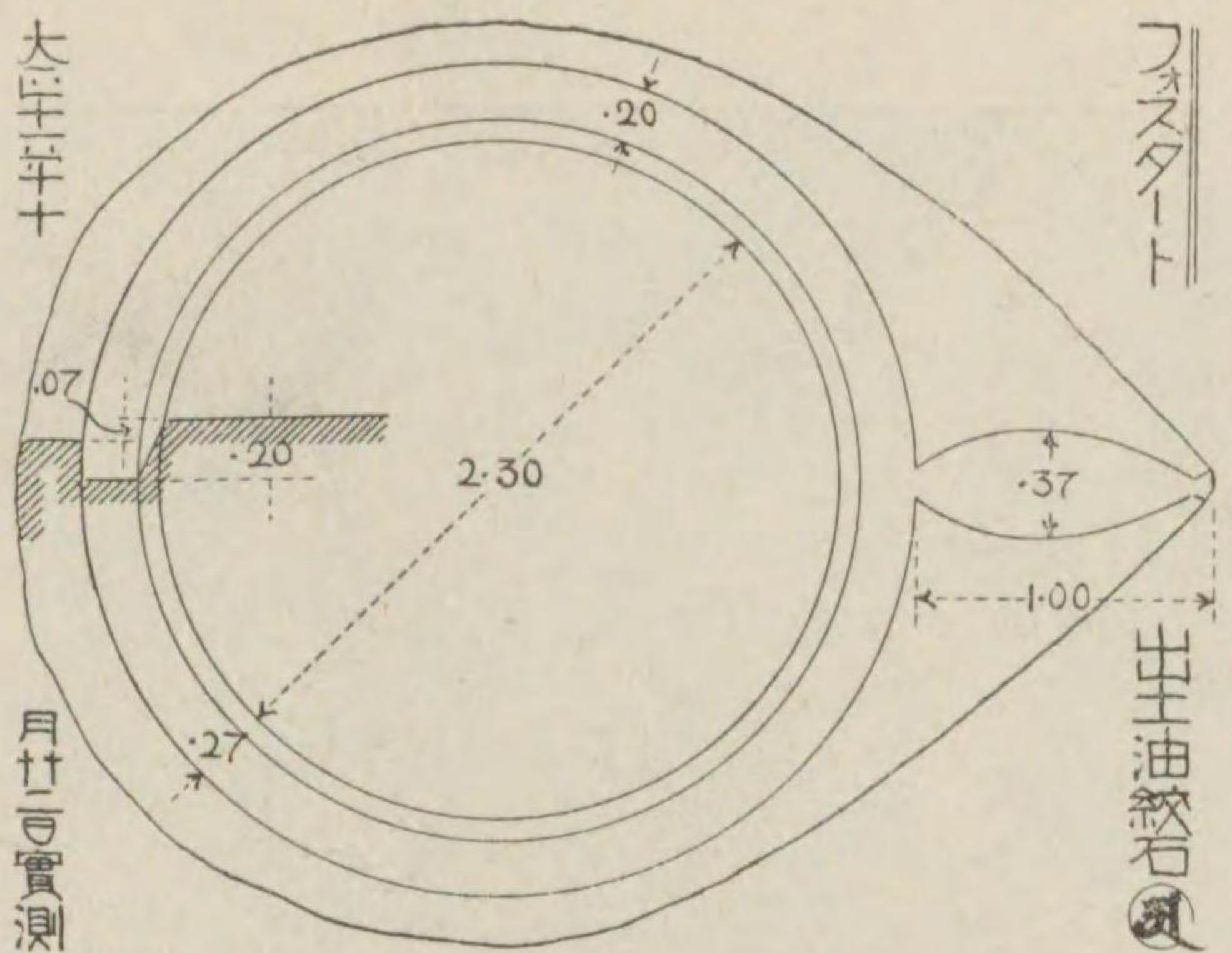
フォオスタート廢墟

赤寺

ある。王は此水道が大自慢であつたが人民が大して稱讚しないので、大分に不平であつたさうな。其せぬか知れぬが、其臣 Mohammed Ibn Abd el Hâkem 閣下の直話にこんながある。

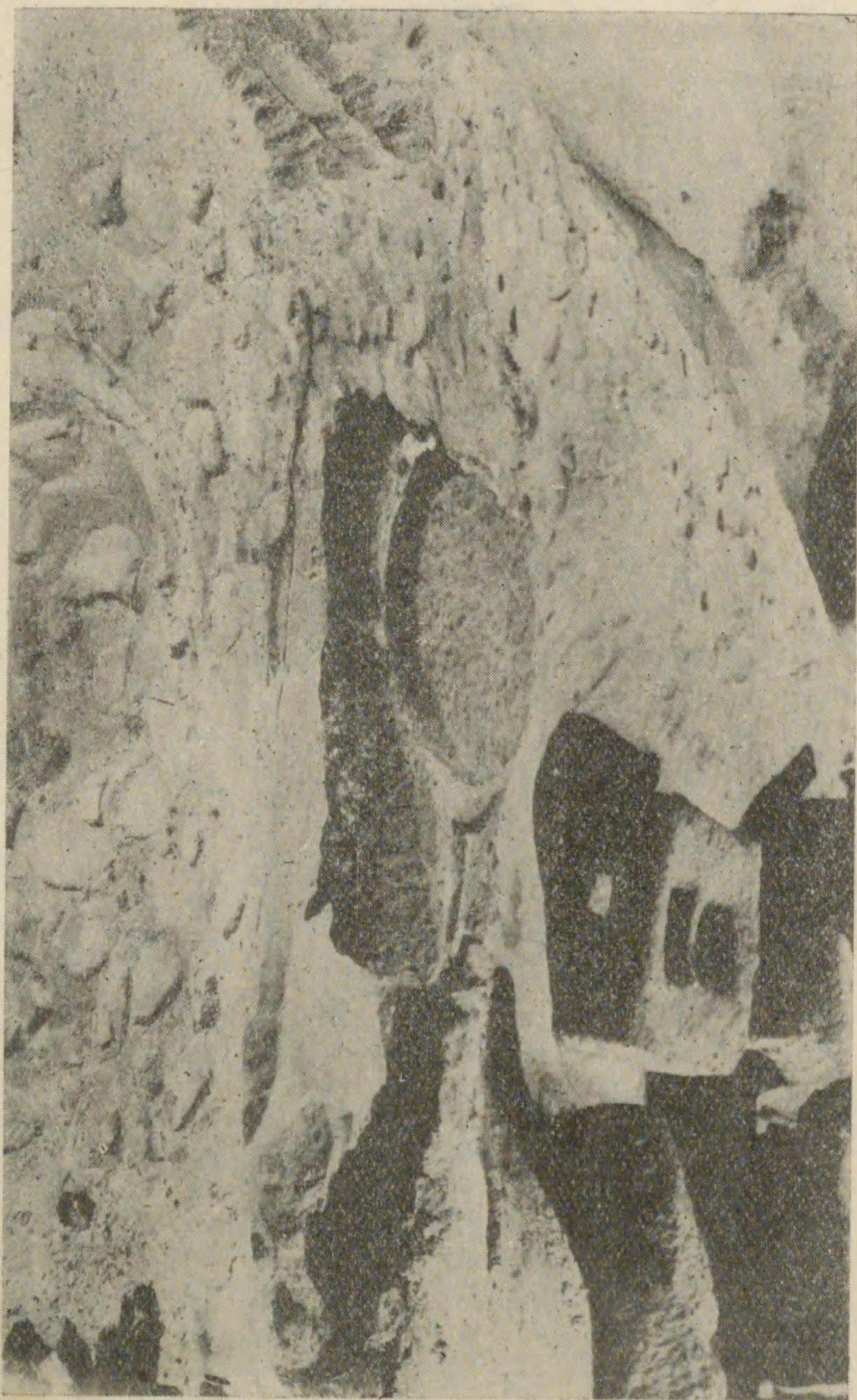
ある晩自分は家にゐたら、ツルーン王の奴隸が来て「御用有之即刻出頭すべし」といふので、驚いて馬に飛び乗り、件の奴隸の後について行つたが、行く先が分らぬから、「どこへ行くのか」ときいたら「殿下は沙漠に居られるからそこへ行く」といふ、これは大變、處刑されるに決つてゐる。「困つた事になつた、お前御用の筋を知つてゐるか」と震へ聲できいてみたら、氣の毒に思つたのか「水道の事について御下問の際は可然お答へなさい」と教へてくれた。其まゝ、驀に進んで行くと、前方に松明の光りが見え、馬上にツルーンの雄姿が水道の戸口の處に見えたから、自分は下馬して拜したが、王は知らぬ顔をして居られた。そこで私は「殿下、お召により大急馳せ参じましたので、喉が乾いてたまりませぬ、萬望水を一杯頂かせてくださいませ」といつたら、近習が早速水をくれたが、私は辭して「自分で勝手に戴きます」といつて、腹がハチ切れる程のんだあと、「殿下、極樂の川から甘露水を戴いてすつかり乾きは止まりました、この無類の水道がありませばこそこんな冷い、甘い、澄んだ清い水が戴けました」といつたら、王御機嫌斜めならず、「此者を下げいと下知あつた。先刻の奴隸耳語して「うまく圖星を指しましたね」と。

水道の拱下を潜り、城寨上のモハメツド・アリー寺を常に左にみて進むと、此邊一圓にフォスタートの土を捨てたと見え、風車丘と同じ様の陶器破片等澤山に落ちてゐる。斯る凹凸道を暫く歩くと漸くにして平地へ出る。眼界頗に展け前方遙にアマア寺の二光塔をみる、即ち目的地へ來たのであつた。



先づ第一に油絞石の寫眞を撮つた、三度目正直屹度うまく行つた筈だ、確かに手筈があつたから確かである。夫れから寸尺を測つたから、此所に圖示しておくが、いつかも書いた通り我國の此種の石造物と比較して甚だ面白く思つた。こゝへ來たのもこれで三度目で自分では最後のつもりである、だから大分にこゝの寫眞をとつた。番人頭のアブラとも言葉は通ぜぬが顔馴染になつたから別れる時銀貨數片を出して感謝の意を表したら、Goolah filter——素焼の徳利の口と身との間に意匠をこらした土こしを作つた液體濾過器(寫眞参照)——や陶器破片や節漆喰の一部等を標本にとつてくれた。此等は非常に澤山發掘さるゝので、上品丈は暴夜博物館へもつて行つて陳列し、二三等品は現場で希望者に賣るのださうな、だからつまり私は買った様なものだが、たゞ其代金が番人頭の懐中へ入つた丈の事である。

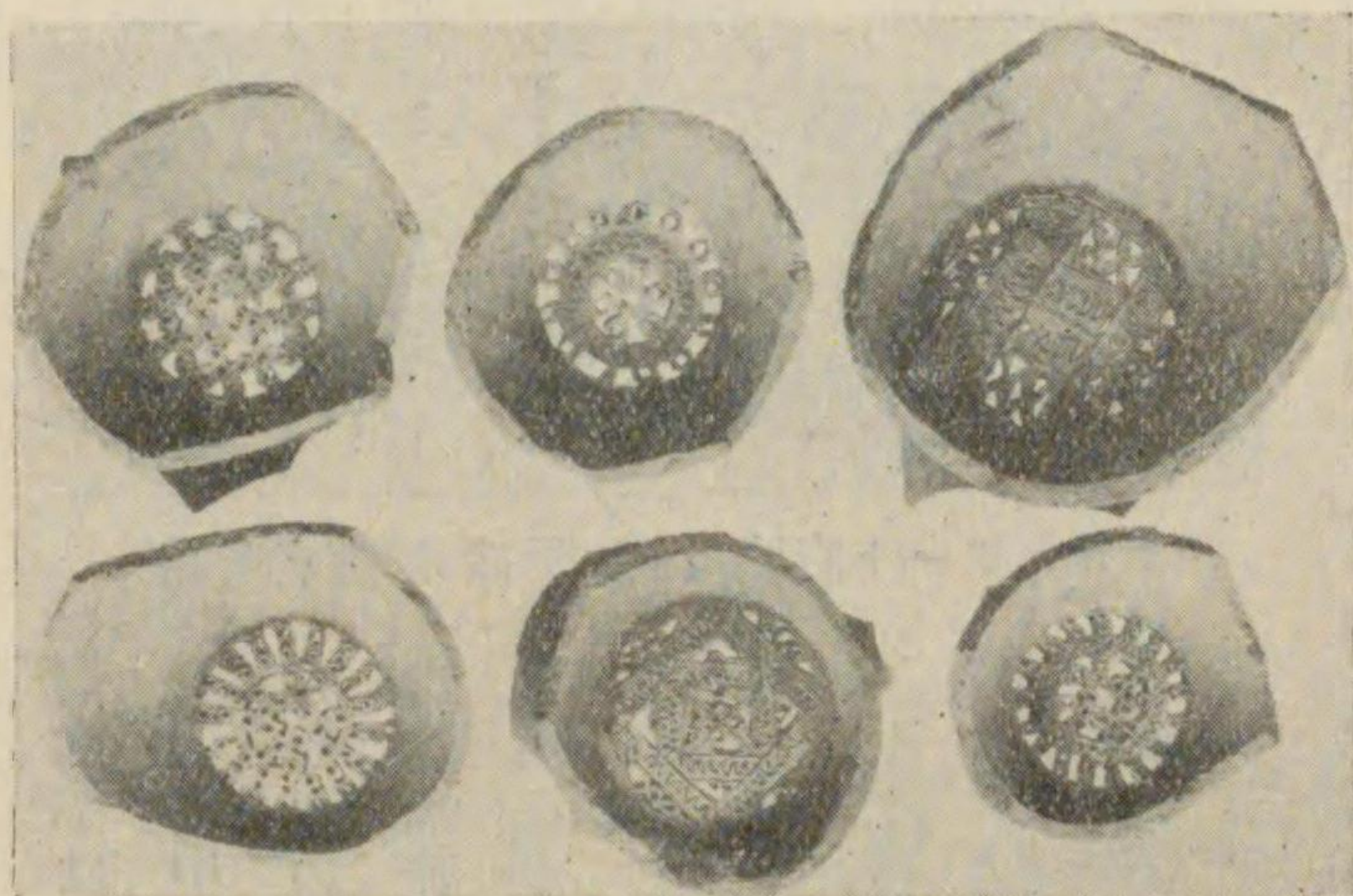
ツルーン王の水道 フオスタート廢墟 赤寺



フオスタート發掘の所謂油絞石。其後方の穿孔せし方形の石は「ヲモリ」



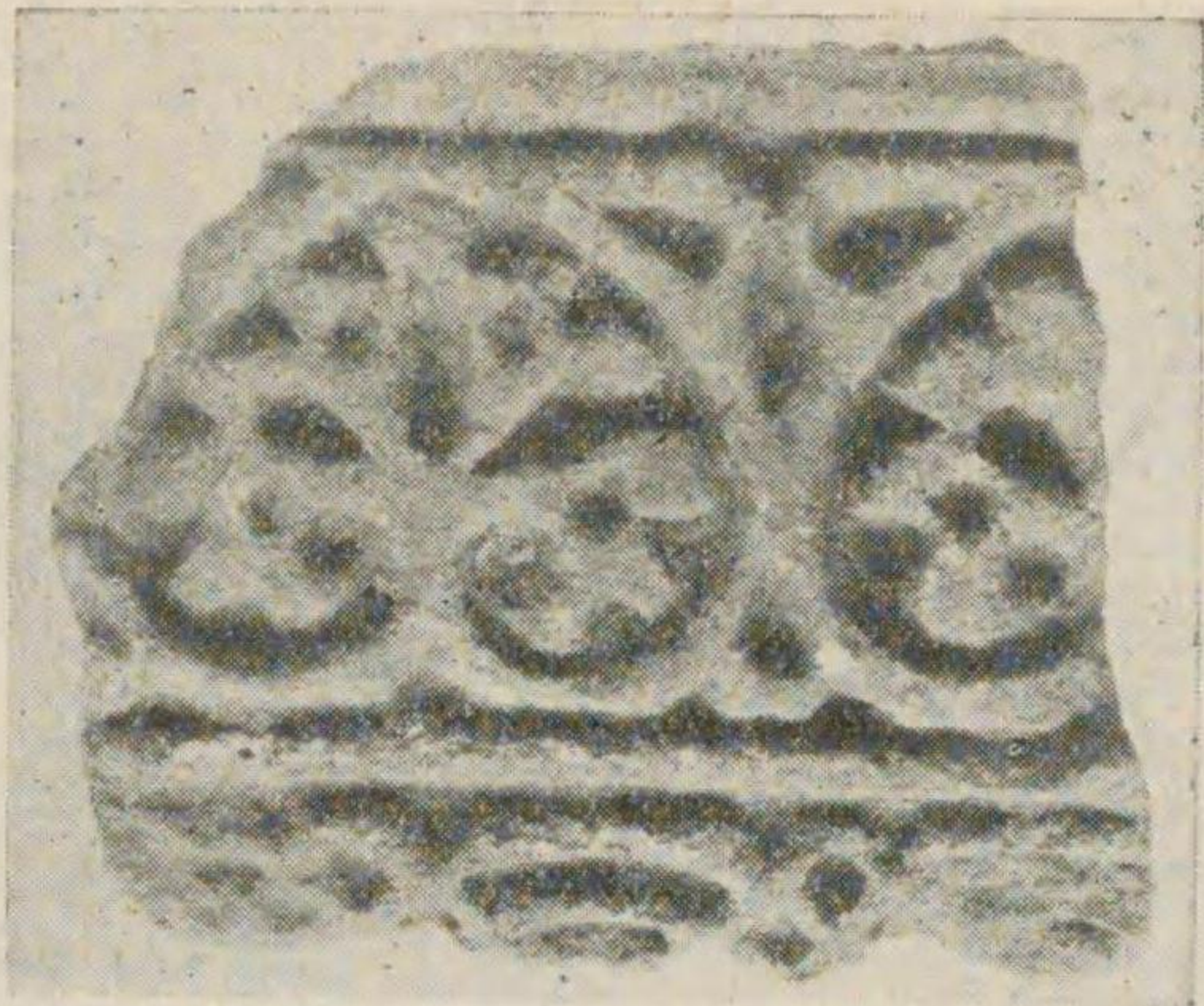
フオスタート發掘東羅馬式柱。其後方植木鉢を積んだ様なのは何れも柱頭



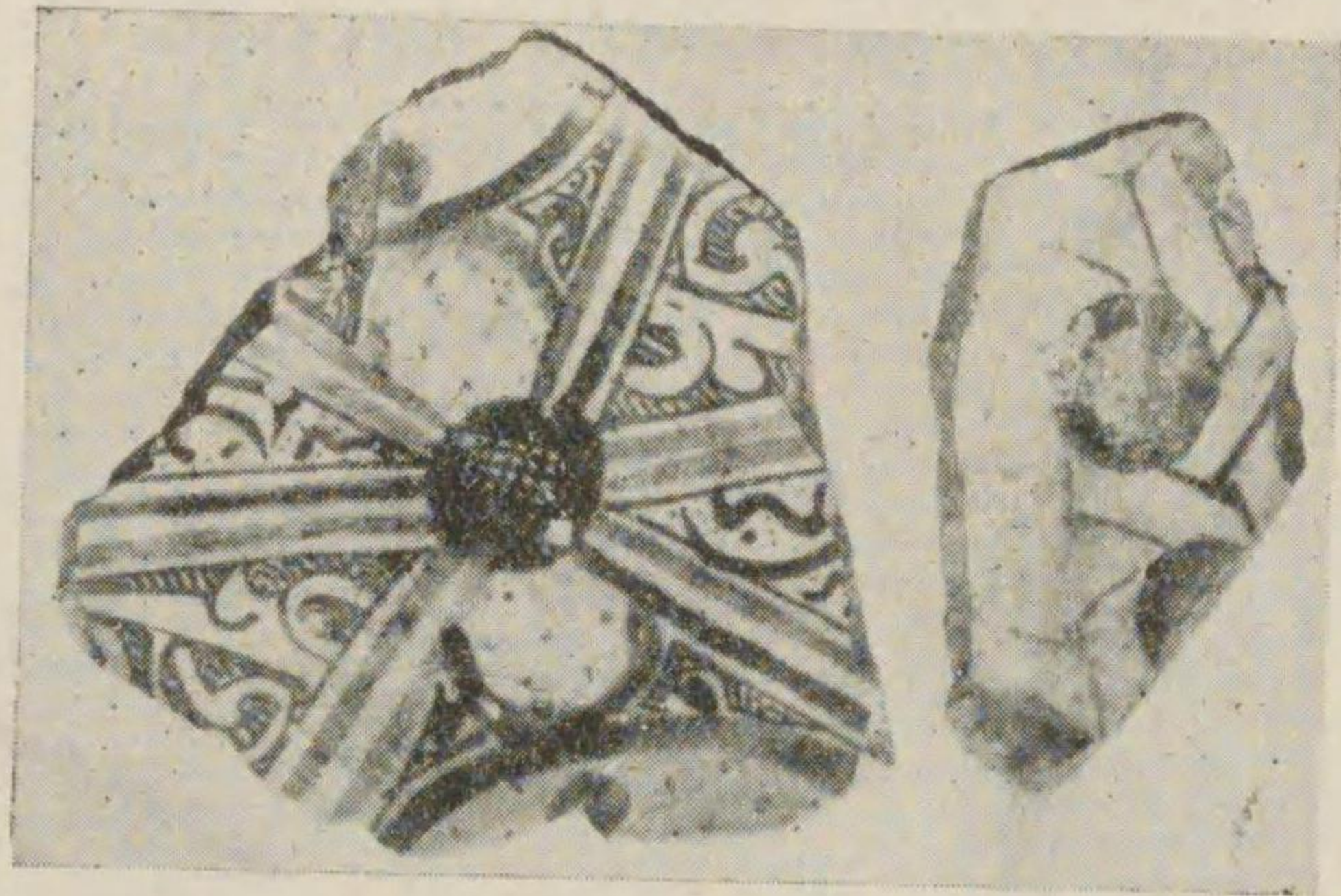
フオスタート出土ゲラー水濾六種(著者所藏)

次は赤寺(Cami 'Amr ibn el-As)見物である。寺は創立以來水害、火災、地震等で何度も何度も破壊されたが其都度再興されて今日に及んだので、埃及國中探しても此寺の様子に壊されたり建てられたりしたのは餘り他にないさうであ

る。だから古いところ等は殆んど残つて居らぬ。残つて居らぬのに見物した動機は、段々縞の二基の光塔が氣になつて目について、みたくてたまらなかつたからで、大部分は好奇心からである。



フオスタート出土飾漆喰の一部(著者所蔵)



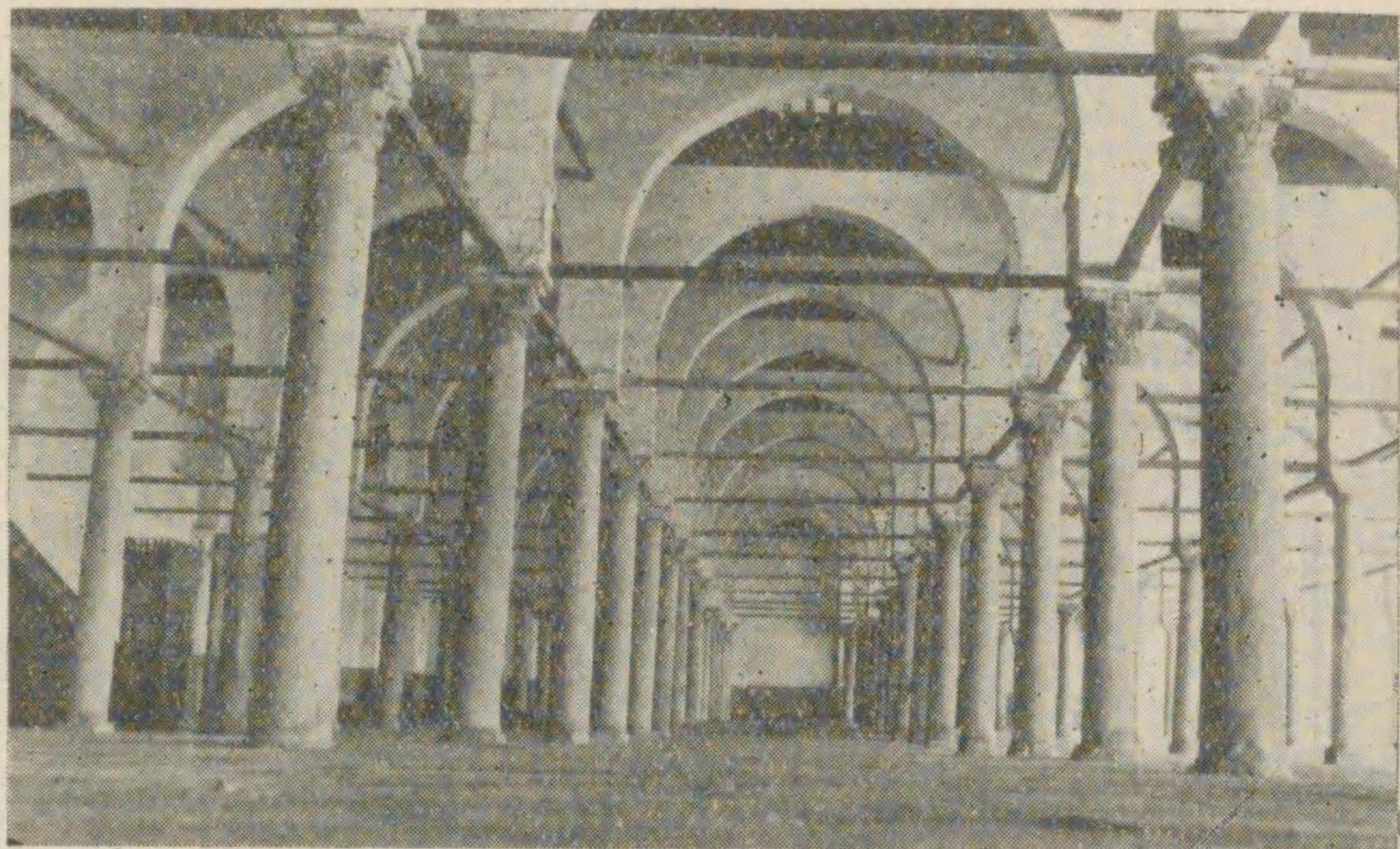
フオスタート廢墟出土陶器破片(著者所蔵)

がある。我國にだつて吉野山の吉水神社へ行けば辨慶の力釘といつて、石へ辨慶が糞力を出して大鐵釘を差込んだのがある。論より證據現物が残つてゐるから確かだらう。どうも此方が幽靈の足跡

より自慢が出来ると思つてゐたのに、井戸では負けて了つた。距離を比較する迄もなく開路とメツカの方が大和と若狭との間より遠いから。

寺は元と僅に五十六尺に二百尺の細長なる一室で、煉瓦石を積み、漆喰も塗らず、屋根も低く、光塔もなく、甚だ簡単な建物で、皇極天皇十一年に Amr ibn al-'As (または al-'As) の建つところ、天武天皇即位元年擴張せられ、朱鳥三年破却し、現在のものは殆んど天長四年 Abd-Allah ibn Tahir の再建に成つたものと云ふ。

回教徒は靈驗灼然な伽藍として今でも參詣が多い。我國でいへば先づ善女龍王とでもいふやうな格で、雨を祈ると效驗頗る著しい。嘗て文政八年から十一年にかけての大旱魃の際等には、回教徒、耶蘇教徒、猶太人等、皆なこゝへ參籠して雨を祈つたら、直に車軸を流す様な大雨が降つたといふから、うそではあるまい。今では毎年五月九日から



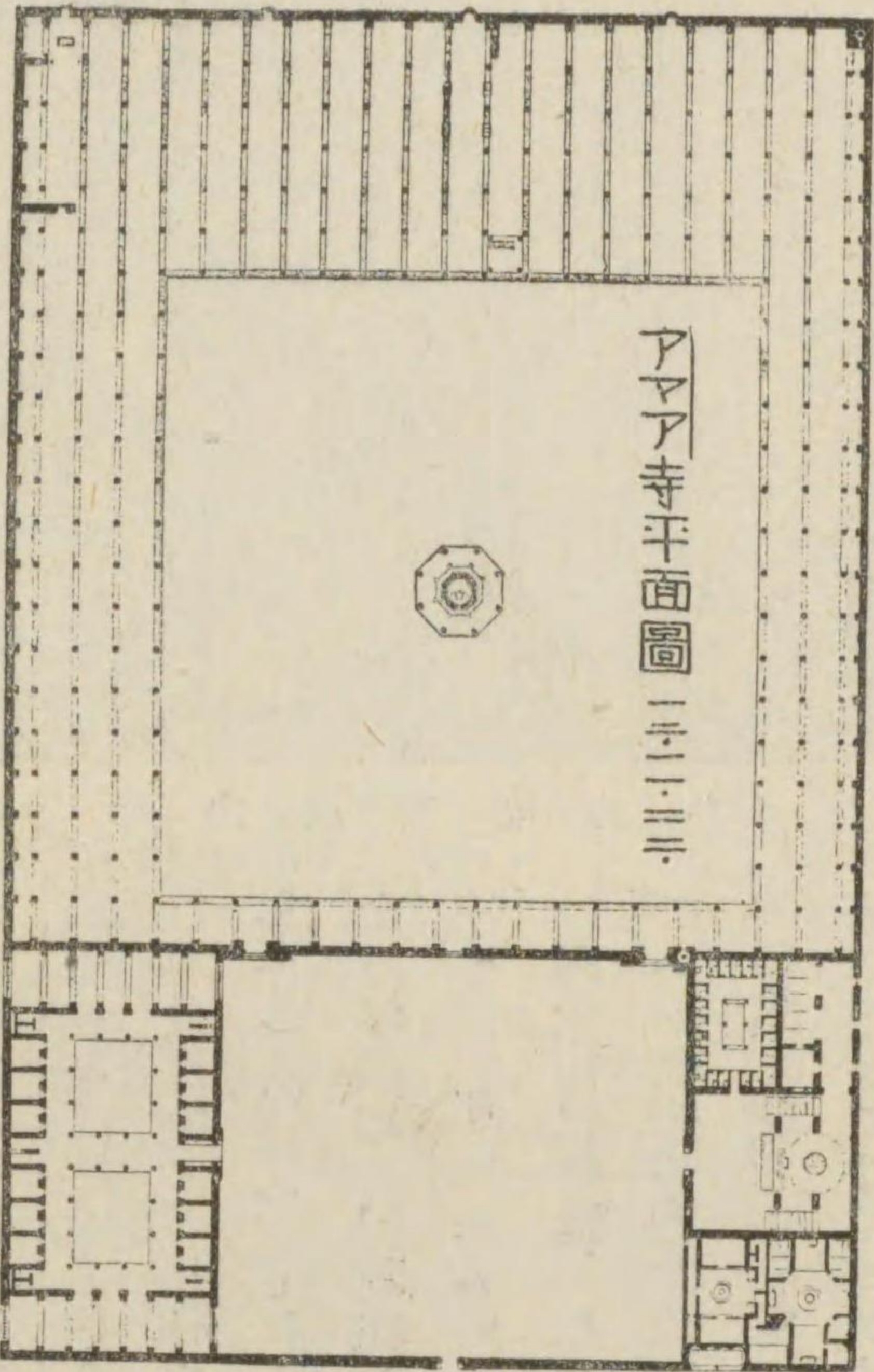
赤寺聖殿内部

六月九日迄 (Ramadan) の間の最後の金曜日に回教徒はこゝで祈禱をする事になつてゐる。

説教壇の前の鐵柵内に、灰色の大理石柱があるが、これはメツカから當地迄飛んで來たのださ

な。我國にだつて飛梅といふのがあ
る。人の建てた柱が飛んだより地面
に生えてゐる梅の飛んだ方が奇蹟で
ある、けれども距離からいふとあつ
ちの方が遠い。併しこつちには米俵
の一ぱい詰つた校倉が満米上人の鐵
鉢につて其まゝ飛んだ事さへある
から、これはこつちの方が勝ちだ。

歸りに宿の近くの大きな書店で、
記念の爲め本を一冊買ひ五磅の札で



釣をとつたら、其うちに二〇ピアスタアの銀貨があつた、其まゝ受取つて歸り晝食後宿の帳場で繪
葉書を買ひ、其銀貨を出したら番頭は一寸みて贋金だがどこで受取つた、ときくから、あすこの大
きな本屋でといつたら、今日は日曜だから今はしまつてゐるが午後の三時には店がまた開くから其

時返したらよからうといふ。成程よくみると少し變だ。大分間が抜けてゐてだらしが無いが、相手
は大書肆だしまさかと思つたのが間違の元であつた。午後二時五十分サラが來たから、八日分の
案内料金並に若干の心附を與へ、尙明朝旅程に上るも來月三日の朝歸市する故、同日午前九時再び
此旅宿に來るべく命じ、扱て先刻の贋金一件を話し試みに其銀貨を示して眞贋を鑑定せしめた所、
彼も亦一見直に確實に贋造なる旨明言したので、私は萬一の用心に彼を連れて先刻の書肆へ赴き、
往來に彼を待たせ置き、一人店頭に入ると幸ひ主人がゐたので其銀貨を出し、宿の番頭は贋金だと
いつて受取らぬから他のと替へてくれといつたら、主人は左様な事はないが、替へませうと早速十
ピアスタアの銀貨二枚出したので、助け船を呼ぶ迄もなく無事目的を達したのであつた。開路は實
に人の悪い所だ。全く油斷も隙もあつたものではないのである。袋入の繪葉書を買ふ時には、必ず
一々あけて調べぬと、袋の上にかいてある數丈け揃つてゐる事はめつたにない所である。

(大正十二年十一月二十四日稿了)

開路市よりミニア迄

十月二十三日

(月曜、好晴)

六時四十分起床、洗面をすませた後、昨夜來月初め迄預け置き度き旨帳場へ申込んでおいた荷物

開路市よりミニア迄

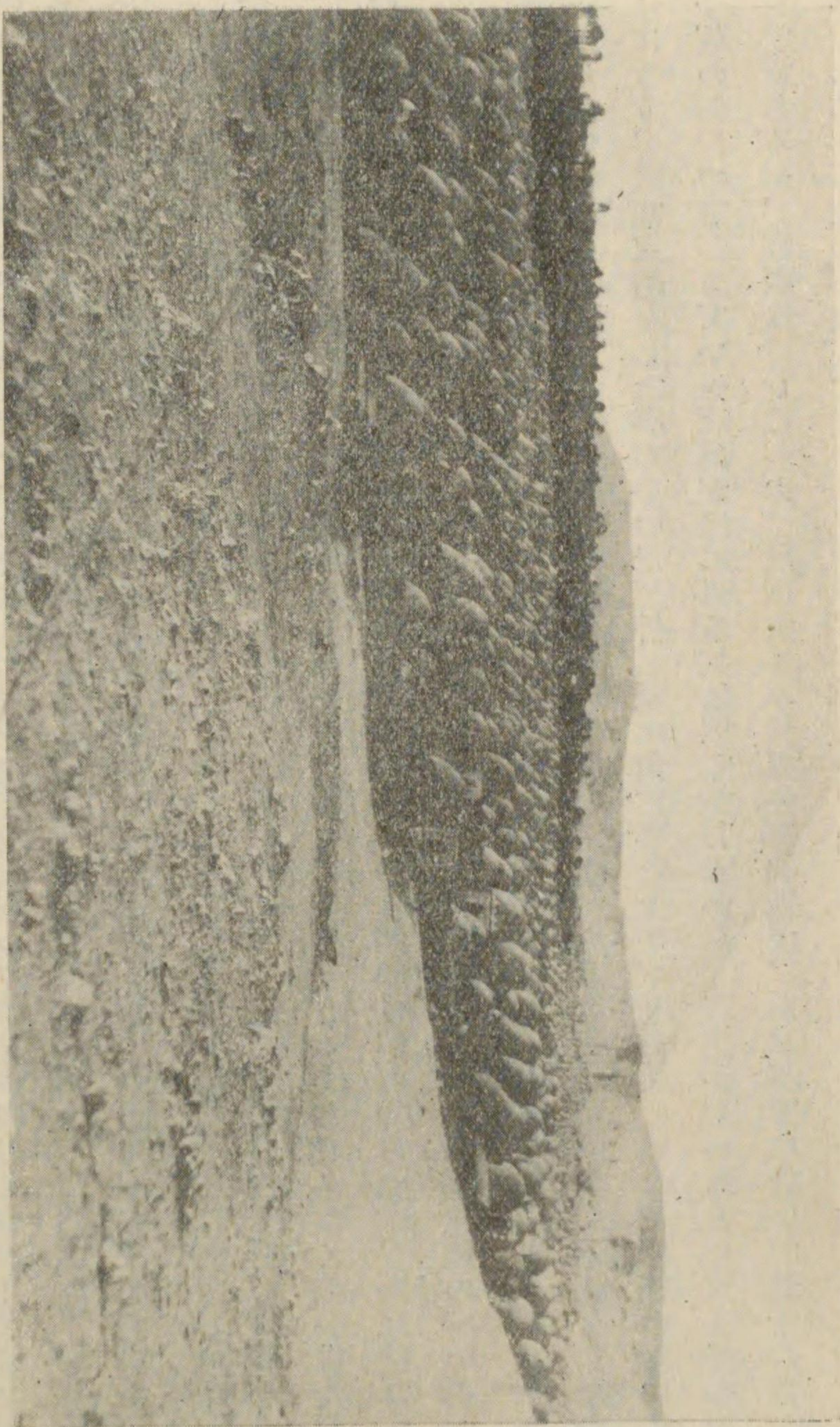
二箇を下男が取りに来た。勿論一人で樂に持てるのに、こんな時には必ず荷物の數丈け人が来る。うるさい事だ。彼此してゐるうちに七時二十分になつたから食堂へ行つた。

私にとつては此時間は、決して早い事はないのである。併しこゝらあたりへ来て泊つてゐる異人達は、大概は遊覽に来てゐるのだから、申合せた様に宵張りの朝寢坊をする。だから朝は九時過ぎでないと先づ食堂へ出ぬ、だから朝の七時二十分位には異人は皆ねてゐる。だから勿論、今朝は廣い回教式の裝飾をした食堂は私一人であつた。食事をすませて食卓を立上つた時、給仕をした土人が、私の前へ立ち塞り行手を遮つて、若干の心附を要求するのであつた。

昨夜、夕食後、私は私の食卓附の歐人の給仕頭に二包の金を、給仕人共に見ゆるが如く見えざるが如くにして渡した。此包の一は給仕頭へ、一は私の爲め去る十四日夕食以來、入れ代り給仕をした給仕人へ分配すべき心附を入れておいた。そして其由をいつておいた。だから彼等は既に貰つてゐるか若しくは未だ貰はぬにしても知つてゐる筈なのである。然るに今朝は未だ其給仕頭が来て居らぬのにつけ込んで、二重取りをしようとしたのだ。尤も去る六月下旬獨逸國ケルン市の宿屋へ泊り、いざ出發といふ時、廣間に誰れも居なかつたのを幸ひ、見たところいくら安く積つても陸軍少將は大丈夫と思はるゝ様な制服を一着に及んだ客引が、臆面なく心附をねだつたから、大枚金五十錢（五十マーク、當時は一マーク約一錢であつた）を興へたら、帽子をとり笑顔を作つてお辭儀を

した事があつた。獨逸ですらこんなだから、埃及あたりは仕方がないと言へば言ふものゝ、餘り露骨なのでいやになつたから、黙つて突き立つて其男を睨みつけてゐたら、先方が退却したので私は歩き出したのであつた。さくら宿が First Class の食堂の裝飾が Egyptian Saracenic で噴水があつて天井で電氣扇が廻つてゐても、Tunis や Nubia や Sūdān あたりから出て来た我利我利亡者の給仕ではいやになる。

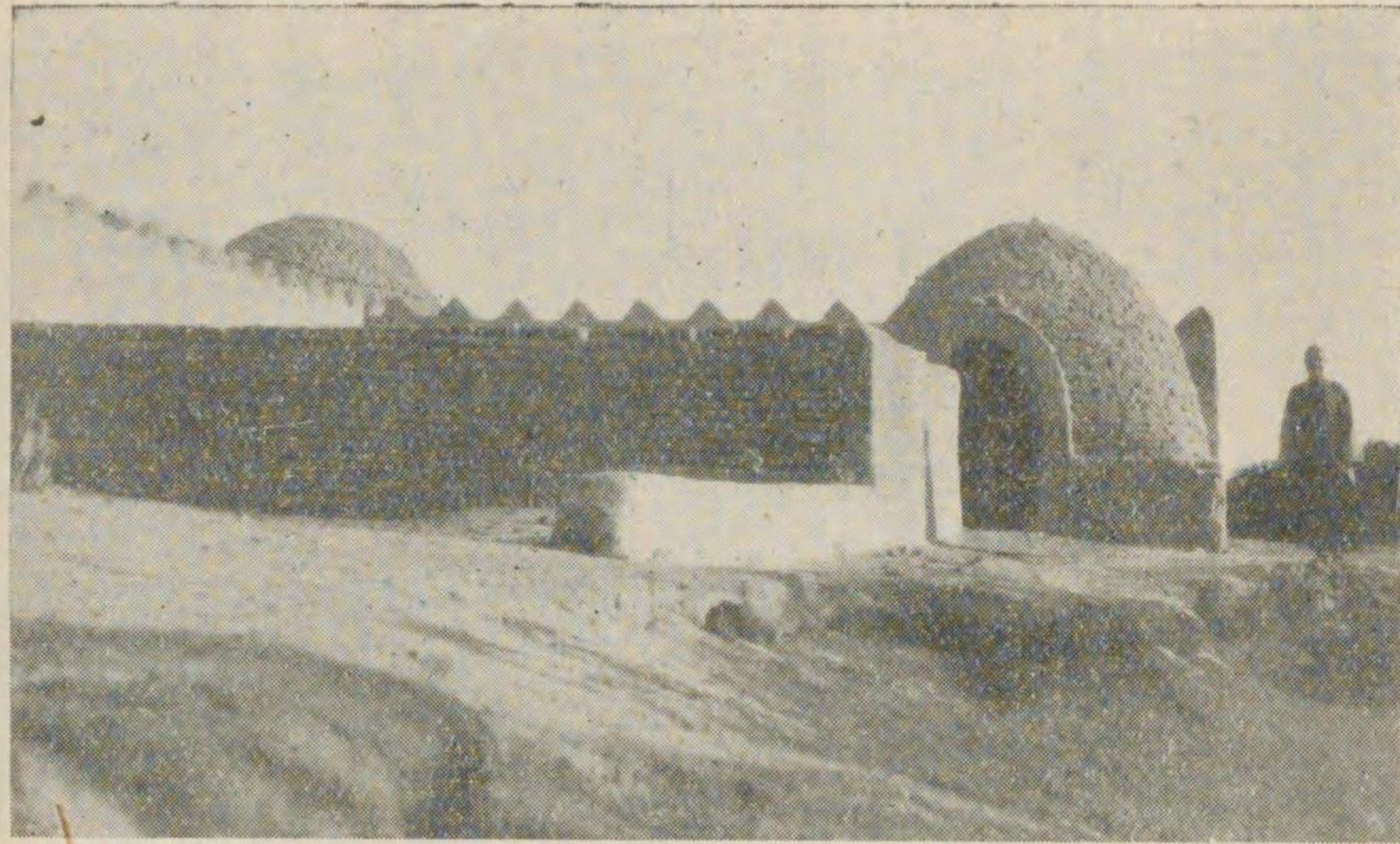
食堂から部屋へ歸る時廣間の時計をみたら、もう三分で八時だ。私のは七時四十分、いつどうして二十分も後れたのか分らぬ。併し愚圖愚圖は出来ぬから、ゆつくり休むひまもなく出かけた。此時何も用事のないものが室へ陸續やつて来る。陸續はちと形容が過るかも知らぬが、入れ代り立ち代り来て追従笑ひをする。金をいくらでもいゝから貰はう、貰はねば損だといふ意地の汚い根性をかう遺憾なく發揮されては閉口せざるを得ぬ。これも獨逸での話であるが Nürnberg 市大旅館の一なる Württembergischerhof の食堂の給仕が、食後心附をやらうと思つた矢先に催促をしたのでいやになり、減額支給をした事があつた。併し兎に角食事をサーブした丈けいゝ、同様の理由により今朝の給仕の方がまだいゝ。出がけに来る奴はけしからぬから、理窟からいふと一文もやらぬのが正當であるが、實際はさう行かぬ。此現象も亦世界各国共通で、たゞ程度に於いて若干の差あるのみであるから仕方がない。



コム・ラハマルに於けるミア人の墓全景。見渡す限り土饅頭を並べた如し

宿の Omnibus で驛へ行く、ついで来た歐人番頭大に世話を焼き、切符の買入から座席の占領に至る迄大に盡力したのであつた。又悪口になるが、開路に於ける驛赤帽の賃金は、荷物の大小に係らず一箇一ピアスタアに定まつてゐる。私は手荷物としては Suit Case 一箇丈けだつた。そこで番頭は規定通りで充分だといつたので、直に賃金をやつたら、彼は澁々退却したが、番頭が去るや再び窓口に来て帽をとり、小腰を屈め一片の白銅を乞ふのであつた。なぜ不足かといつたら、彼は分つたのか分らぬのか同じ事を繰り返すのみであつた。私が甲谷陀カルカッタから Madras 市に到着した時、赤帽賃一箇一アンナ(約四錢)なるに對し、私が一等客であるからとて四箇の荷物の運賃十六錢が正當なるべきに一ルーピー(約六十錢)を強請したので、そこは私一流の奥の手を出して美事に撃退したのであつたが、こんなのと比べると、人の悪い開路の赤帽としては餘程温順な好人物なのだらう。もう此れ限りやらぬぞといつて尙一ピアスタアを與へたら、直に消え失せてしまつた。汽車は間もなく發車した、時に八時半。

私の占領したのは客車の一番端の Compartment であつた。私は歐洲旅行の際に汽車が各驛に着く毎に、いつも窓から首を出して乗降場をみてゐた、そしたら顔が魔除けとなり誰一人其仕切内に入つて来る者はなかつたのに鑑み、此日も其通り試みたら效能顯著で頗る好成绩をあげ得たが、唯一つ困つたのは、暑氣が劇しいのに室内に電氣扇なき爲め止むを得ず窓を開放しておいたので、微細



コム・ラハマルの墓内流の泥を以て造り日光で乾かした煉瓦で築造せしもの

な砂塵が一ぱいに入り、そこいら中一面に薄赤い被膜が出来て了つた。これを手巾ではたくと舞ひ上つて噎つぽい、閉めれば暑し開けておけば此通りで何とも始末に悪かつた。併しこの塵攻は埃及で修業をしていたので、後に印度を旅行した時に大變に助けになつたのであつたが、此時は初めてこんな目にあつたので少なからず弱らされた。開路發後正に四時間を費し、午後零時半目的の Minia 驛（一に Minyeh, Minieh）に着した。

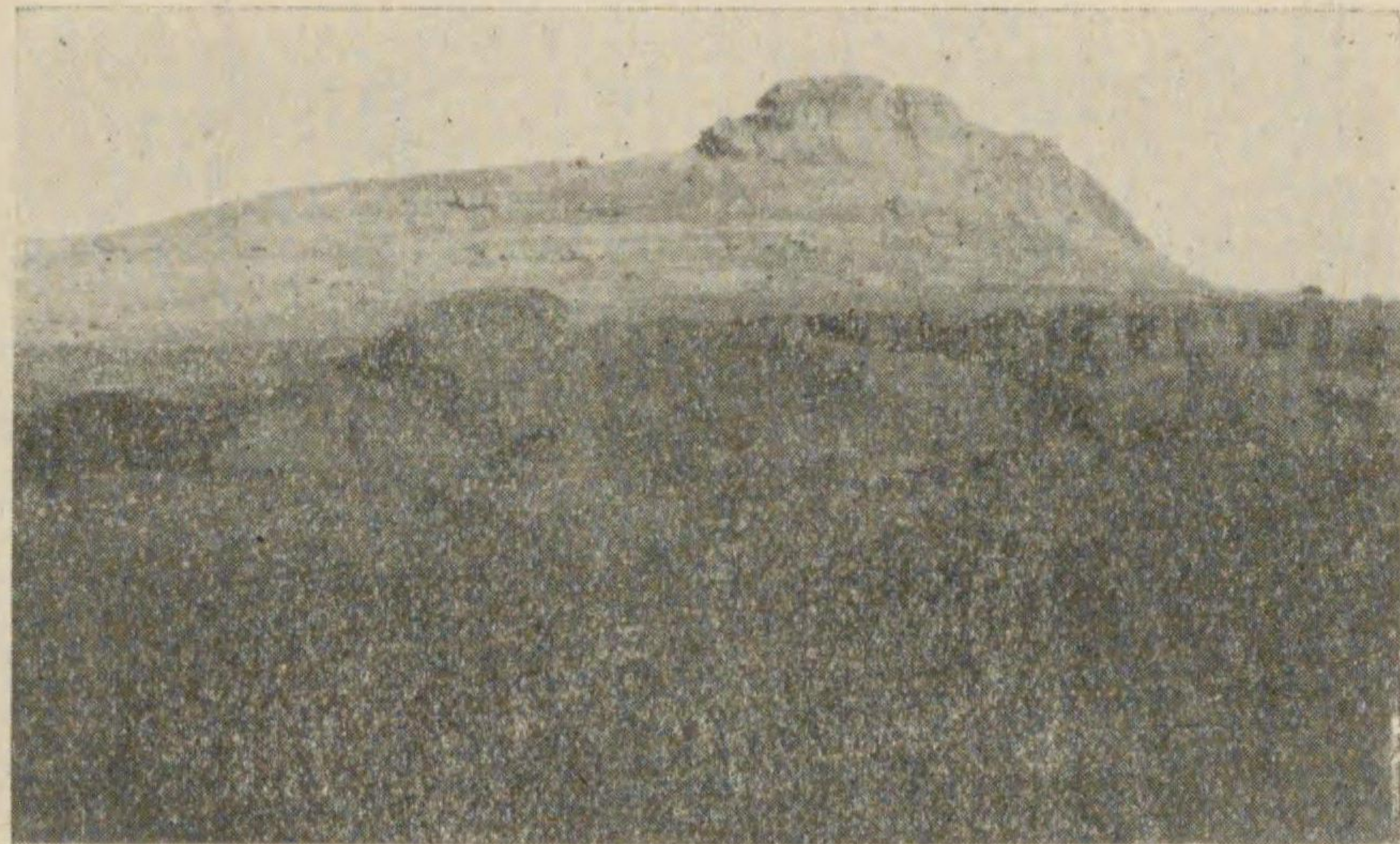
下車するとヘメダがゐた。此男先日ミニアでお眼にかゝりますといつたから、先發するのかと思つたら同じ汽車へのつて來たのだつた。其上僅に四日間にしてはいやに大きな靴をもつてゐる。荷物は赤帽に持たせ導かるゝまゝに驛より程遠からぬ Palace Hotel といふのに入つた。

大正十年十二月初旬、西班牙國ブルゴス町の伽藍見物の目的で、佛蘭西のポルドー市から汽車にのり、一日かゝつて夜晩く此町につき、Hotel de Paris と云ふのへ泊つた事があつた。田舎の町と馬鹿にしてゐたのに、夜だからよくは判らぬが、玄關も相當だし、屋號の巴里館といふのが氣に入



つた。多分少しは旨い物を食はせらうと思つたのに、翌日は晝食に白魚と鹿尾菜とをマーガリン・バターでいためた頗る生臭い油臭いのを食はされ、同行の樽仙博士は一口頬張つたが吐出す事も出來ず、眼を白黒し妙な顔をして鵜呑みにし、あとは次の料理の來るまで行儀よく膝へ手を置き、紳士然と控へてゐたのが可笑くて仕方がなかつたが、併し室は小綺麗で勿論電燈はあつた。然るに今日の御殿館はブルゴス等とは比較にならず、電燈はなく床に敷詰めた油布はボロ／＼で孔だらけで、上面の模様なんかすつかり禿げてなくなつて了つ

てゐる。戸でも窓でもたてつけはガタ／＼で、ろくには閉まらぬが、幸ひな事には熱帯で暑いから隙間洩る風の心配は少しもない。天の配劑妙なる哉と大に感心をしたものゝ、此調子では白魚と鹿尾菜を覺悟せねばならぬらしいので、大に悲觀しながら食堂へ行つてみたら、割合にうまく食べら

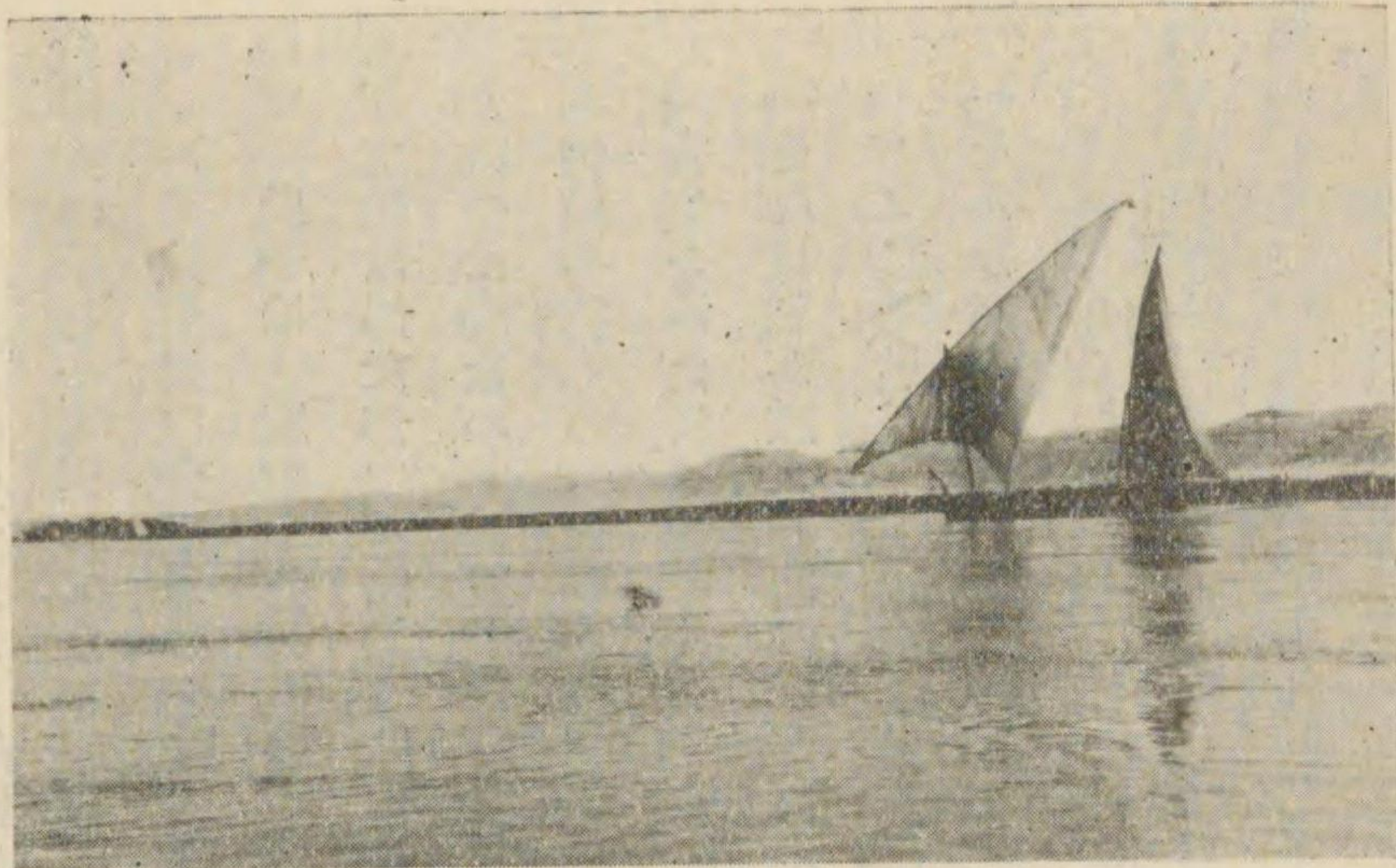


コム・ラハマル全景。前方なるは昔しの町の廢墟で後方の小高い丘の中腹には澤山の窟墓がある。これは赤い色をした丘である。コム・ラハマル(赤い丘)の名はこゝから出たのである。

れたのは勿怪の幸であつた。但し獻立表が暴夜文字で印刷してあつたには困つた。仕方なしに讀んで貰つてやつと無事に食事をすませた。

食後半日をどうするかときくから、案内記によると此町の反對側に向ひ合ひに *Kôm el-Khefara* の村があり、こゝに *Middle Empire* の墓があるとかいてあるから、夫をみるといつた。古墳は何れにしても川の右岸だからと直ちに内流河に向つた。

ミニアは人口約三萬で繁華な都會である。宿を出て徒歩約十分にして川岸に達した、こゝには大小二艘の船が舫つてあつた。船頭との談判は宿からついて來た男とヘメダと二人で可なり長時間を要した、私は早く決める、でないと時間無駄が出て困ると二度程催促をしたら、嘘



内流河の土人船(紅波山附近)

か真か判らぬが船賃が餘り高いから負けさせるのだといつた。併し約三十分を費してから漸くの事で大船は百で小船は六十ピアスタアだといふ返事であつた。いくら川が汎濫してゐて橋がないにせよ、渡船に拾圓だの六圓だのは不當な料金である。けれども中止するのも惜しいから、なぜそんなに高いのか、小さい方の船をもつと負けぬか、といつたが、夫れは何の役にもたゝなかつた。ヘメダは一磅の方を九十ピアスタアに負けさせたから、直に乗り給へといふ。かうなると意氣地のない事夥しく、反對する事も出來ず仕方なしに乗込む。此時の心理状態は、もうかうなつては仕方がないといふ諦めが半分と、内流川遊びをやつた古代の王候將相の氣分を少しでもないから味つてみやうといふ氣が半分とであつた。けれども、どう考へても渡船に九圓とは高過る。怪しからん事である。切齒扼腕しながらヘメダをみると、煙草を吹か

しながら傲然と嘯いてゐる。船頭は勝利者の様な顔をしてゐる。いやな奴計りだ。此船頭九つか十位の子を一人連れてゐる。我國なら尋常二三年の子供だが、頗る忠實に阿爺の助手を勤めてゐる。阿爺元來眼中金錢以外何物もないのである。こんな小さい間から學校へ行かずに阿爺を見習ふのだ。此子は屹度數年の後には斯道の Expert になるだらうと大に感心したのであつた。

扱て船は出たが中々向側へは行かぬ。流に溯り帆をかけて電光形の航路をとつて進んで行く、様子が大分に變なもので、三十分計り我慢をした後案内人に行く先をきいて見た。

『何處へ行くのか』

『古墳をみに行く』

『それは私が註文したのだが何處の古墳か、大變に遠いぢやないか』

『コム・ラハマルへ行くつもりで』

『そんな所があるか』

『ミアから四哩半川を溯るのです』

地圖を開いてみると、成程あつたが Kôm el-Ahmar とかつてある。これをコム・ラハマルとは難かしくて中々訓めぬ。夫れにしてもこんな所迄來るのでは、時間もかゝるし船賃も高い筈だ。

漸くにして Zâwiyet el-Amwât 村を過ると、右岸に沿ひ眼の及ぶ限り無數の土色をした半球形の屋根が見えた、此れはミア人の墓地で、古來の習慣によりミア人は、今でも死者を船にて此所迄運び、先祖代々の墓地へ埋葬するのださうな。其半球形の土饅頭の様な屋根が、南北に長い墓地一面に竝んでゐるのだから、丁度我國に類例を求むれば、舊式の大きな餅菓子屋の店頭に、隙間なく葛饅頭か何かを並べた様なもので、甚だ壯觀で到底數へ切れぬのである。此葛饅頭を通り越して船は右岸へ着いた。時に四時十五分。ミアを出たのが二時半だつたから正に一時間と四十五分かゝつた。船がつくと直に土人が二人出て來た。これ等がまた餘計な案内をして金にありつかうといふ算段である。

上陸をして直に葛饅頭の探検に行く、二人來た土人の内一人はちやんと附いて來る、近くへよつて見ると饅頭の下は四角な部屋になつて居り、夫に續き、又は其反對側に一段高い平場があり、圓屋根の入口は迫持形に開いてゐる。入つてみたが内には何もなかつた、夫れから斜めに玉蜀黍畑を抜けると、山の中腹に Ancient Empire の末葉に迄溯り得る Hebenu の皇子貴族の窟墓がある。併し暴力で掠奪したのと兼て保護が行届かざりし爲め、随分にひどくなつてゐる。其内の一番いゝのでも入口の處は全く亡くなり、内部の支柱は二本共缺きとられてゐたが、其平面は大體圖のやうであつた。墓の入口には鐵柵があつて入れぬ。時間も追々なくなるし、外から覗いた丈けでは不十分ではあるが、西向きなので夕日が内部迄さし込み、爲めに充分にみる事が出來た。

まだ此外に澤山の墓があるさうだが、概念を得た丈で充分である。夫れよりか明日は紅波山をみる樂みがある。だから今日はほんの小手調べである。だからこの位で澤山である。そこで引返さうとした時、村の長で此墓を責任を以て預かつてゐるといふ老人が、鐵砲を持ち驢馬へ乗つてやつて來た。流石に一村の長丈けあつて威風可なり堂々としてゐて、頭髮も口髭も銀色だつた。あれで顎髭さへあれば、繪にあるマホメツドそつくりであつた。かういふ老人には Sheikh なる尊稱が如何にも適する様に思はれた。

此老人が私に一禮して鐵柵をあげようかときいた。私は外からで充分だし、早くせぬと途中で日が暮れさうに思つたから、其厚意を謝し川岸に引返したら、老人は先廻りをして船着場に居り、其傍に村民十數人堵列してゐた。老人は下馬して居て私が通る時に捧銃の様な事を機械的にやつた。發條仕掛の人形の様な捧銃の禮を受けた事はあるが、夫れは今を距る十八年以前だつたし、もう忘れてゐたところへ、出拔けに發條人形をやられたので大に面喰らつた。併し此老人は敢て金が欲しい爲めではあるまい。あんな Venerable な老人は假令金に目的があるにせよ、さう考へ度くない。だが村民共は珍しいもの見たさと錢欲しさからである事、一點の疑を挿む餘地はないのである。恐らく彼等は初めて日本人をみたのであらう。物見高いのは我國のみではない。珍らしいものをみた上、錢になればこの位うまい事はないから、集まつて並んでゐるのは當然である。

かくて此地に滞在僅に三十分、四時四十五分に船出した。歸りは下りだから一瀉千里と思ひのほかで、流れと風との都合か同じく電光形に船を操る、だから中々思ふ様に進まぬ。その上不都合にも對岸へつけて土民の一群を便乗せしめたから尙更晩くなり、元の岸へ着いたのは六時二十分だから正味一時間と三十五分かゝつた。丁度往きがけと其差は十分であつた。

いふ迄もなく歸りは船の中で日が暮れた。熱帯だから暑い事は暑いが日は短かい。折から透き通る様な青空に、新月は東天に懸り無數の星はきら／＼と光り、廣い廣い内流の流れは沿岸唯一の肥料たる泥土を含んで滔々と流れてゐる。涼しい川風に吹かれながら、船の上にひつくり返つて空をみてゐると、何とも言へぬいゝ氣持である。晝間の景色も決して悪くはないが、私は初めて内流の夜景をみて雄大壯大の感に打たれたのであつた。夫と同時に、昔しの王侯貴族の川遊びの光景を思ひ浮べ、こんな暑い砂ばかりの國では、之が唯一の慰安である。だから皆好んで船遊びをしたのは尤千萬である。今は私以外には金で雇つた案内人と船頭と丈けだが、これで忠誠を抽でる臣下が大勢乗つてゐて、山海の珍味が並んでゐたら、正に身は五六千年前の埃及貴族になつたも同じである。だから私は歐米各國や開路市の博物館でみた古への内流遊覽船 (Pleasure Boat) の模型を頭に描き、盛に時代逆行をやつて獨り大に樂んだのであつた。かくして圖らず體驗を得たこの半日の船賃として拂つた九圓は、今では少しも惜しくなくなつた。

歸宿して夕食を了つたら、案内人は追々と談判を持ち込んで来た。即ち自分はアスアン迄案内し度いといふのであつた。前にも書いたが私は一日も早く此男に暇をやり度い、だから私はラクソルから先きの案内人は最早決めてあるから、お前にはアビドスで分れるのだといつたら、夫れならばラクソルから先きは誰が案内するのかときく。うるさい事だが敢てかくすには當らぬ。併し餘り喋ると場合によつては小刀細工をせぬとも限らぬ。厄介な事になつて来た。

『誰でもいい、夫れをきいて何にする』

『差支なくば名丈け聞かしてください』

『名はムスタファといふのだ』

『あの男には今朝クツク社で會ひました、英國人二人を案内してゐたから今ラクソルには居りません』

『居ても居なくても約束は約束だから、自分はラクソル迄行つてみる、夫れで若し居なかつたら夫れは其時の事だ』

『若し萬一ラクソルにムスタファが居たら、あの男には私が金をやつて破約とします。そして私にアスアン迄案内させてください』

『いや、いかん』

このムスタファといふ男は未だ會つた事はないが、開路の案内人サラが推薦したのだ、サラは坡西土の南部氏が推薦したのである。こんな關係だから大概大丈夫であらう。少なくともヘメダの様な虫のすかぬ男ではあるまい。ヘメダが餘りうるさいから、ラクソルへ着いてみてムスタファが居なかつたらお前を連れて行かうが、居たら先約だからいかん、といつておいた、そして私は殊更カリールといふ彼の姓を告げずにおいたのであつた。そしたら最後に、

『では一層の事アスアンを先きにし、ラクソルを後廻しにした方が便利でせう』

と言ひ出した。愈以ていやな男だ。果して彼が開路に居たのならラクソルに居らぬ事は確かであるから、お鉢は當然自分に廻つて来るから、こんな事を言ふ必要はない。

明日もヘメダは紅波山迄船で行かうと申出たが、一も二もなく撥つけて朝五時發の汽車にした。其爲めには四時半に朝食せねばならぬ。こんなに早く朝食するのは、去年の十二月馬耳塞の宿へ泊つた時にあつたが、正に一年目でまたそんな目に會ふのだ、併し今度は寒くない丈け餘程いい。ヘメダは其由を帳場に通じ、歸つて来て自分も同室にねていゝかときく。此室には二つの寢臺がある。別段差支ないからいゝと言つたら先へ床へ入つたが、間もなく長押の塵が踊り出す様な騒をかき出した。早速起してさう大きな騒ぢや今夜は私は寝られぬから、他の室へ行けと追ひ出したら不平さうな顔をして出て行つた。これでやつと安心をして床へ入つたのであつた。ヘメダはどこ迄もいや

な男だ。(大正十二年十二月七日稿了)

紅波山の窟墓 張玲の木賃宿

十月二十四日

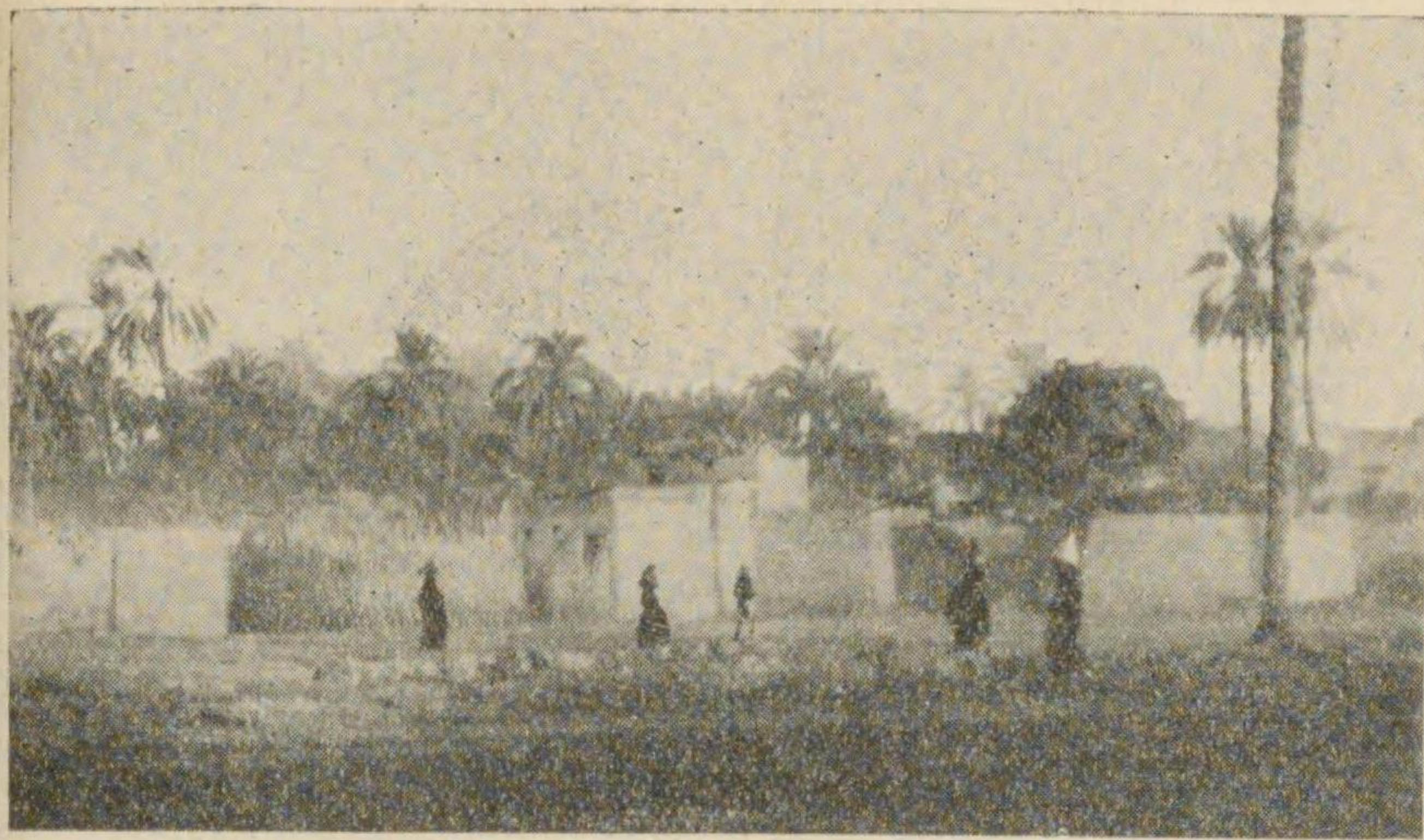
(火曜、好晴)

今朝は四時に起きた。いくら熱帯でも十月の下旬だから四時ではまだ暗かつたが、星は降る様で久し振りに參宿が頭上に輝いてゐるのを見た。氣のせいか星の光りは強く、空氣は透明で冷く風は涼しく、非常に爽快であつた。四時半朝食を了り、五時下り列車につてミニア驛を發す。僅に四十分で Abou Kerkas 驛着。下車して荷物は一時預けとし、驢馬を雇つて乗る。實のところ私は初めて驢馬へ乗つたのだが、落ちる心配はなし、萬一落ちても怪我をする心配もなし、頗る吞氣な間の抜けた動物である。Donkey とは如何にもうまい名である。どう見ても Donkey 然たる動物である。

田舎道を行く事約四十分で内流河畔に出た。途中小徑に沿ひてコプト墓數十あり、これも亦四角な上に圓い屋根をかけたので、昨日の葛饅頭に似てはゐるが、一寸面白いので寫眞がとり度くなつたが、早朝光線不足につき、歸途にとる事にして行過ぎた。ヘメダは途中少しく後れたので、私人馬丁と共に、朝霧で玉蜀黍畑も河面も一面に模糊として霞んでゐる中を、河岸に沿へる細い道を行く、忽ち對岸即 Benihasan (1) Beni Hassan、紅波山のあて字はどうか)の窟墓のある丘の後方より、朝日が昇つたので急に世界が明るくなつた。此瞬間は實に偉大なる美觀であつた。頼山陽だとうまい併し難かしい形容詞を並べて記事文を作るのであらうが、私には夫れは愚かもつと遙に拙い文すら作りかねる。此の一人でみるのは惜しい景色を止むを得ず獨り觀賞しつゝ、六時三十五分渡場の何とかいふ寒村につき、下馬して休むひまもなくヘメダは追ひつき、直に渡船の談判を始めたのであつた。

折柄素焼の徳利を頭上にのせた村婦等、水汲みの爲め川と家々との間を往復してゐるのが絡繹として絶えぬ。何れも例の黒布を頭より冠り跣足である。其面相衣文をそばで見ても興醒むるが、遠方からみると中々に捨て難い風情がある。萬綠叢中黒數點が寫眞に出てゐるが、何れも朦朧としてゐる。併しこれは歩いてゐるのを寫したから、活動してゐるところがよく現はれてゐるので、作りつけの人形でない證據である。

埃及人はよく頭へものをのせて歩く、殊に水汲女は素焼の徳利を必ず頭へのせる。歐洲でも師子里島では此風がある。バルカン半島にもある。小亞細亞、中央亞細亞邊は知らぬが、印度に於いても同様である。朝鮮亦然り。我國でも八瀬大原は此風俗がある。十年許り以前に木村鷹太郎氏の著書で、日本人は Greco-Latino 人種だといふ説を讀んだ様に記憶してゐる。此木村式を應用すると頭へ物を



内流河畔紅波山窟墓への渡船場村落に於ける婦女の水汲み(前六時半頃)

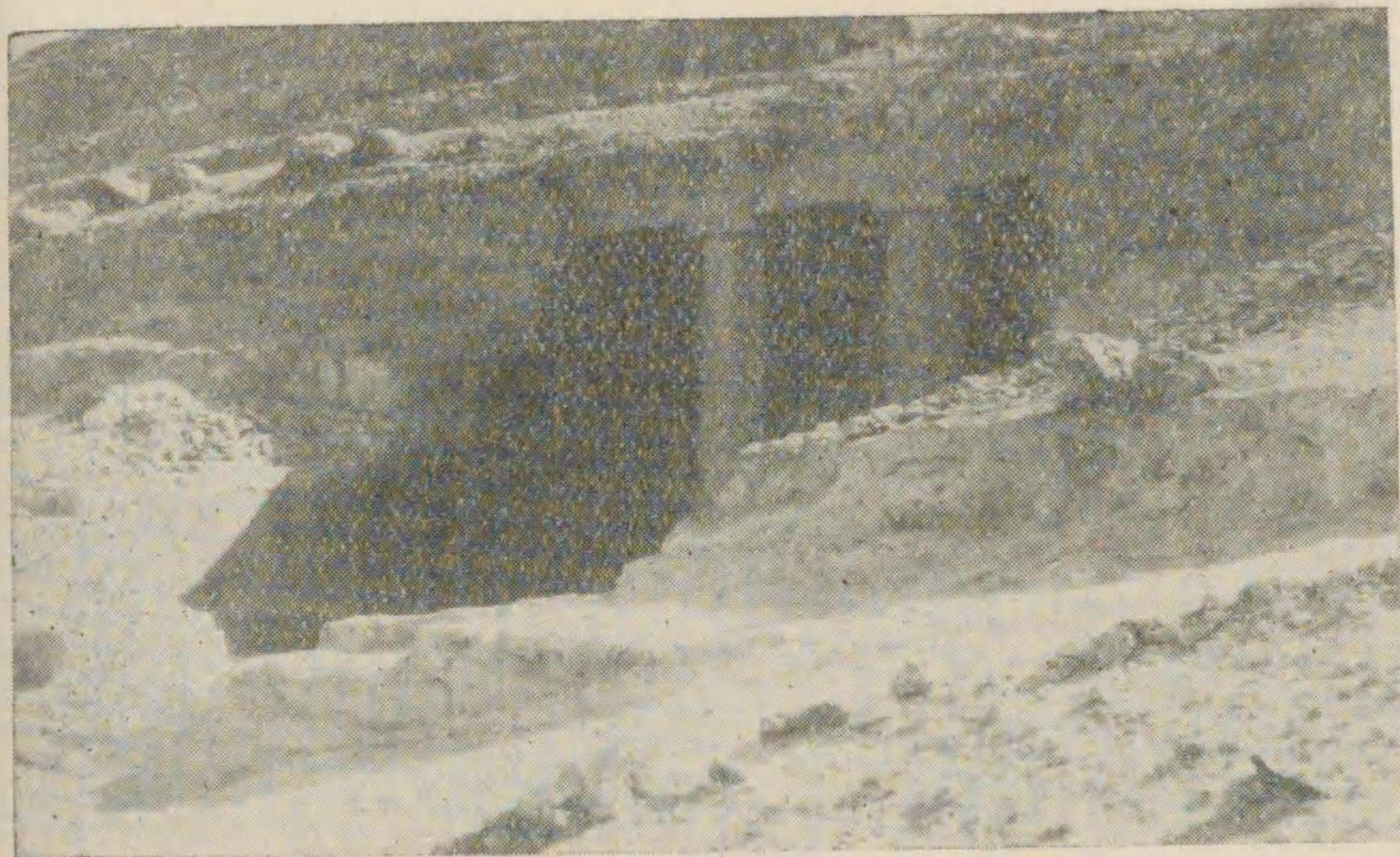
のせる點から、少なくとも八瀨大原女は Indo-Egyptian 人種が土着したのだと言へる理窟だ。花川戸助六がシケリクスの轉訛だなんて言ふより、此の方が理窟があると思ふ。尤も北亞米利加の Pueblo Indian の内にも、物を頭にのせる風がある。さうすると八瀨大原は亞米利加にも關係がある様になり、埃及印度人種丈けでは物足らぬが、反つて亞米利加印度人の原は、諸説紛々たる中に、日本人だといふ説がなくもないやうである。してみるとこつちが本家で、むかうが分家である。それなら何も心配するには當らぬ。とにかく頭へ物をのせて運搬するのは、大體が東洋式で頗る面白い。

埃及はいふ迄もなく水に乏しいから、村落は必ず河畔にあるといつていい。河口の三角洲こそ一圓豐饒で水もあり普通のところと同じだから、村々も散在して

あるが、開路以南は河に沿ひ若干の地域丈けが耕作に適するのみである。だから人の住むに宜しいのも同じく此地域丈けである。だから村落は必ず河畔にあるのである。そしてこの河の水が飲み水にもつかひ水にもなる。汎濫期には屢ば記した通り澤山の泥土が混り、其無數の小粒が浮泛の状態にあるから、牛乳が白色に見えたと同様、全體が褐色に見える、夫れを一種の形をした素焼の徳利に汲み、頭上にして家に運び、をどましておいてのむ。だから色が少し薄くなる位で、泥土は同じく交つてゐる。だから結局泥水をのむのである。併しこの水は假令泥が交つて居ても、飲んで決してあたらぬさうだ。この河は Victoria Nyanza 以北沿岸住民の生命の親である。水汲みは女の毎日の大切な仕事の一つである。だから村婦は何れも朝第一に水汲みをするのである。

扱て對岸へ渡る一段であるが、船はそこにあるけれどもさう直に用意が出来ず、漸くにして客も驢馬も、船頭、水夫、世話役の輩合計十名許り乗込んでから、曳船をして十町計り左岸を溯る、それから帆をかけて斜に河を横切り中の島へつけ、復た同様に曳船をして島を廻り、愈對岸へ着けるのだが、これが中々容易でない。流れが早いのと風が全くなかつたので、船頭や水夫が随分に踏張つたが思ふ様に行かず、大分に押し流され漸く着いたのは八時十分であつた、丁度河を渡るのに一時間ばかりかゝつたのであつた。

船から出で又一所に積んで來た驢馬へのつて行く。丘の近く迄は無難であつたが、其麓に臨時の



紅波山に於けるアメニ墓外部

川が出来てゐた、これが中々入念な川で巾も割合に廣く且つ深く、村の鼻つ垂らしが河童の眞似をしてゐた。こんなだから到底驢馬では越せぬし船もなし、そこで可なり廻り道をして浅瀬を探して恙なく向ひ側へ渡る事が出来た。

川を渡ると直に斜面で、こゝは徒歩で上らねばならぬ。此時私は案内人に向ひ、上の窟墓は自由に入れるか、若し入口に柵もあるなら、開閉のための番人はゐるかと思つたら、柵はあるが番人は直に来ると答へたので其まゝ登つた。そして先づ第一に出たのは第二號墓の前であつた。

此丘の中腹には西を向いて合計三十九の墓が竝んでゐるこの全部が所謂紅波山の窟墓として雷名天下に轟いてゐるのであるが、併しこのうちには帝王のは一つもなく、何れも當時の貴紳の夫れである。第二號墓はアメニ(Ameni又はAmeni-emhet)の、第十二王朝なる Sesostrius I. 時代即ち約前二〇〇〇年の人だつたさうである。墓の形は入口

に二本の八角柱があり、内部には四本の十六面體柱、所謂 Proto Doric と言はれてゐるので、各面の淺い Flutings が判然と見へた、内部の様子は柵外からであつたが、光線が充分だつたので明らかに見る事が出来た、其天井が Segmental Vault になつてゐるのも面白かつた。

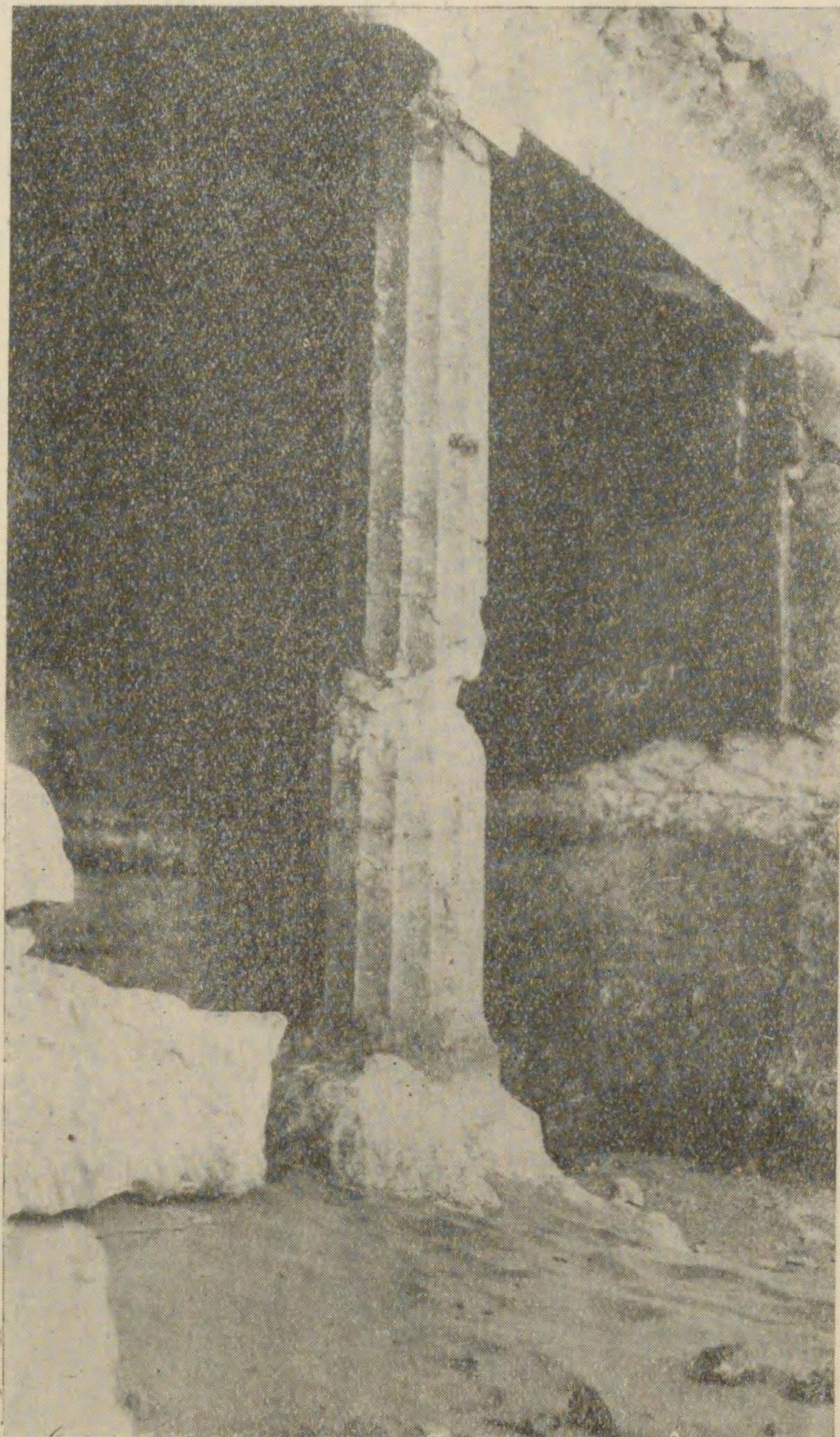


紅波山窟墓内部の蓮蕾柱

この十六面柱を Proto Doric とはふものゝ眞正の Doric との重なる相違は、Echinus のなき事、礎盤のある事、時々象形文字を刻する爲め Flutings のなき事等であるといつて、此説に反對する向もある様である。併し又一方からいふと、其相違が即ち Proto Doric の名の起つた所以で、これに Echinus があ

つたり Base がなかつたりしたら、ほんとの Doric であり、Proto Doric なんて字はいらなくなる。其相違があるからこそ面白いのである。私はだから Proto Doric 説に賛成しておく。

かゝる様式の柱はこゝ丈けと許り思つてゐたのに、さうではなくて數日後に Karnak 及びその



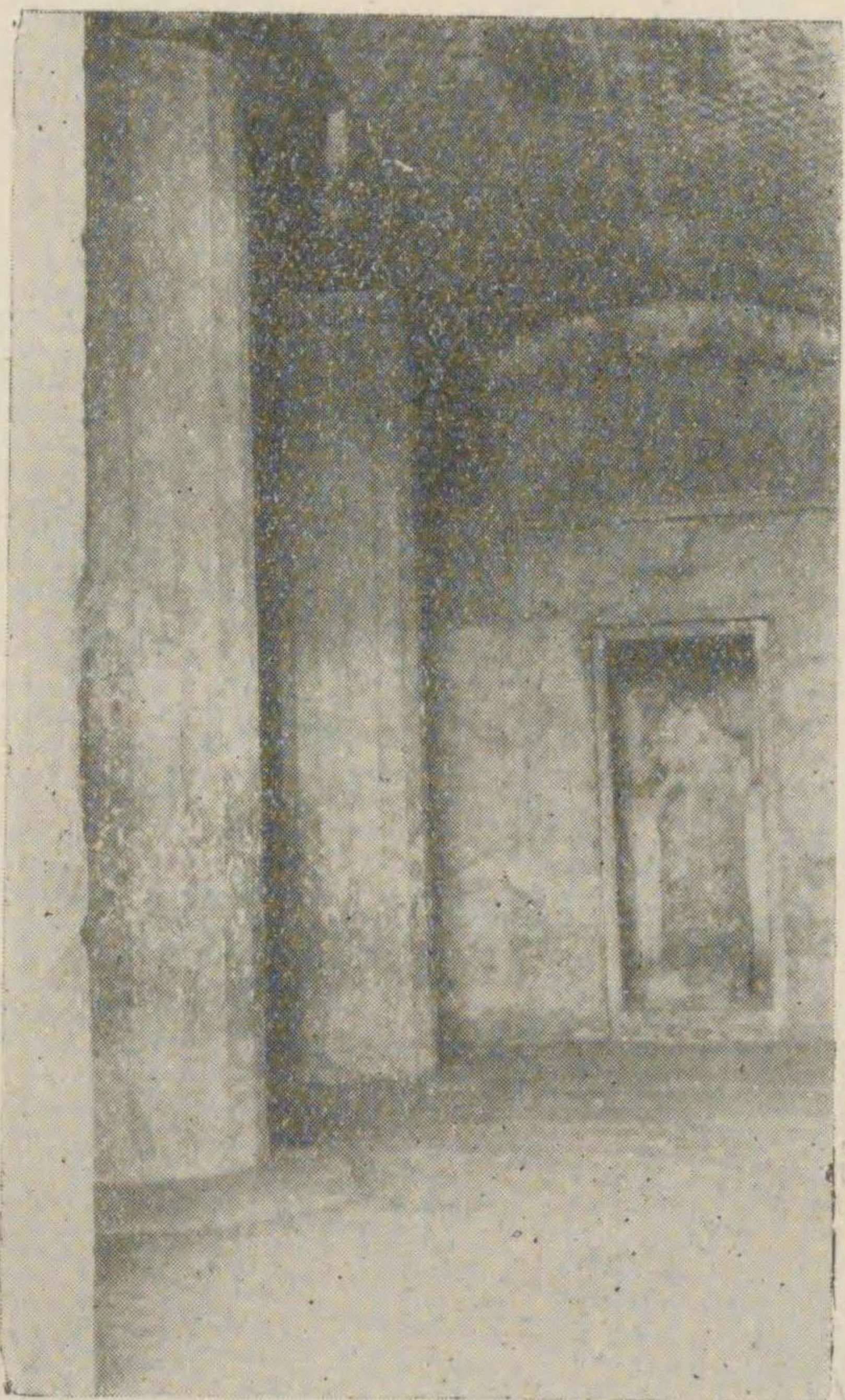
紅波山に於ける窟墓の外部に用ひられたる所謂ドーリア式原柱

對岸 Deir el-Bahari に於ける名高き女王 Hatshepsut の殿堂に於てもみた。案内記には Assuan にもあるとあつたが、それはつい見なかつた。かく後には相當に類例をみたが、今日は初めに思ひがけなくこれにぶつかつたので、其隣間私は『あゝこれか』と思はず獨語し、案内人から何の御用ですかときかれて一寸まごついたのであつた。

此墓の隣りは第三號で、こゝにも鐵柵があつて入れなかつたから外から覗いて置いた、墓の番號は忘れたが、墓の前面に同じく十六面 Flutings 付のがあつた、夫れは寫眞に示す如きものだが、光線の工合で寫眞ではさつきより明瞭である。

以下澤山の窟墓の並んでゐるうち、第十五及び第十七墓が特に有名である。前者は第十一王朝時代の縣知事 Beket 後者は其子で父と同じ役を勤めた Kheti ので、殊に Kheti のは蓮蕾柱が立ち、之れに施せる色彩もまだ残つてゐるのが珍らしい。其隣りの墓には番號がかいてなかつたか、又はあつたのを見落したか、今では分らなくなつたが、順に行けば第十八號であらう。其内部は柵がないので自由に入れたが、こゝには同じく蓮蕾柱が十本刻み残されてゐる。併しそのうち完全なのは僅に五本で、それも半分作つてやめたのか、基部に近く未成のまゝ残してある、其一部を寫眞にとつたのをこゝに挿入したが、其左の方二番目の柱は、柱身がすっかり壊されてゐる、だから柱頭が天井からぶら下つてゐる様で頗る奇觀であるが、そこは窟墓の都合のいゝ所で、元々岩

を剥貫いて作ったのだから落ちる氣づかひはない、柱頭の宙乗りなんかはめつたに見られない圖である。



紅波山に於けるアメニ墓の内部。ドーリア式原柱と、上の筒形穹窿(Barrel Vault)とに注意せよ。

絶対禁止で御座ると来たので、大に悲觀してゐたが、番人が居なければ構ふまい。夫れに別に禁止の掲示も出て居らぬから、若し私が役人にきかずにゐたら夫れ迄で、禁止の事は知らぬ筈である。だからさう假定して寫したのである。中學校で代數や幾何を習つた時代から、假定をする事は先生から教はつてゐた、夫れを今回應用したのである。

前にも記した通り丁度朝なので、逆光線ではあつたが柵外からでも可なりよく見えたし、又例へ内部へ入つても一々ベデカと引合せて感心してゐては、三日や五日では足りぬから、例によりざつと一通りにしておくより仕方がない。さうかうしてゐるうちに案内人は時間がなくなるといふ。きいてみると汽車は午後一時にアブウ・ケルカス驛を出て、七時にバリアナへ着く、夫れをはずすと今度は午後三時の Slow Train で、十時でなくては着かぬといふ。昨夜四時間位ほかねて居らぬから今夜十時着の汽車では遅くなりすぎて困る、どうしても一時のに乗り度い、其爲めにはもうそろそろ出かけぬとあぶないさうである。

威かしもあるらしいが、歸りにはまた河を渡らねばならぬ、往きに一時間かゝつたが、歸りは同じ位かゝるか、もつとかゝるか全然見當がつかぬから、きいてみたが矢張判然せぬ、だから相當の時間をみておかねばならぬ。さう思ふと例によりもう氣が落付かぬ。驛の一町位手前迄漸く近づいた時汽車が出る様に思はれてならぬ。だからもうすつかり諦めて了ひ、歸らうといふと、案内人は内部を見ないでもいゝのかといふ。先刻から急がしておき乍ら何をいふのか分らない。そこでこんな問答を始めた。

『いつ迄待てば番人が來ると思ふか』

紅波山の窟墓 張圻の木賃宿

『分りません、多分居ないのでせう』

『汽車の時間があぶないさうぢやないか』

『三時のにするつもりならゆつくり出来ます』

『一時のに乗り度いがもう何分位いゝか』

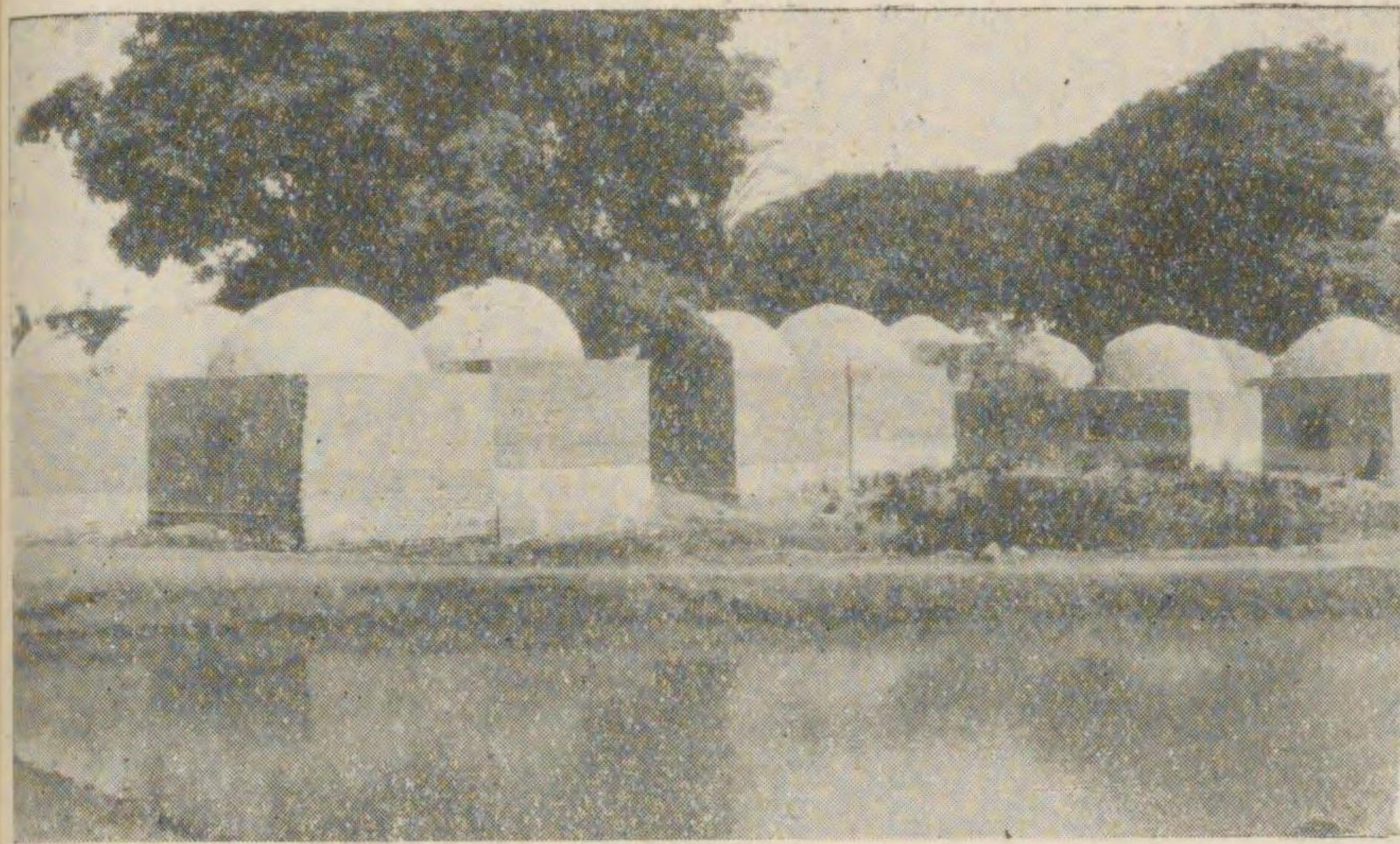
『もうそろ／＼出かけた方が安全です』

愈よ思ひ切つて山を下り、驢馬へのつて先刻の川のところ迄來ると、入れ違ひに番人が二人山に登つて行く、夫れを馬子が見つけて呼び戻す。此時案内人は私にもう一度上つて内部をみるかときくから、時間はいゝのかときくと、今から上つて見て來る位の時間はあるといふ。さつきから案内人の言はまるで信用が出來ぬ事になり、何を言つてゐるのか薩張分らぬ。もうかうなると厭氣がさし痛癢は起る。もうやめつちまへといふ氣になり、兢々しながら川を渡つた、理由は萬一驢馬が轉ぶか乃至は尻餅でも搗いたら、折角逆光線に工夫して寫した寫眞を全部フイにしなければならぬのが恐しかつたからである。

漸く渡り了つたところへ番人が追ひつき、案内人と何か言ひ合つてゐたが、遂にヘメダは私に向ひ、若し今からもう一度上つて内部をみるなら、此番人二人で川を渡して連れて行つてあげるが、見る氣はないかといふ。時間をきいてみたら、今から行つてみても一時の汽車に充分間に合ふと云つた。こんな事なら先刻山の上でもう少し待つておればよかつたのだ。矢張ヘメダはいかん。職業的案内人根性をまるだしに出したのであつた。そこへもつて來て被案内人は、大概の場合發車前三十分に停車場へ行つて待つてゐる癖がある男だから始末に悪い、とう／＼斯様な事になつて了つたのである。

併し考へてみると——考へてみないでも分つてゐるが——もう一生に二度と來る事はあるまいから、やめれば機會は永久に去つて再び歸つて來ないのである、だから此際奮發した方がいゝ。もう一度川を渡つてあの斜面を上る事にしやう、と決心をした。

墓番二人が竝んで左右の腕を組み合つたところへ、私は腰をかけて、兩腕で二人の首つ玉へ嚙り附いたが、どうも少しく不安定だ。そこへ馬子が後ろから來て私の尻を押したまゝ、つまり三人がかりで川を渡したのだ。此時番人の一人は持つてゐた杖を貸してくれたから、其お蔭で割合に早く且つ樂に斜面を上つた。そして第一に第二號墓に入り、先刻外からみておいた十六面柱をそばでよく觀、大體測つたら一面の幅約七寸、「しやくり」の深さ中央にて約三分あつた、内部の壁畫も一通りみて外へ出ると、川の向ひ側で待つてゐたヘメダは大聲を出して呼んだが、此時は彼に對する反感も手傳つたせい、大に氣が落付き、知らぬ顔をして第十五、第十七の二窟をみた、其の爲め色彩の可なり残つてゐる蓮蕾柱もそばでよくみる事が出來た。彩色した人物船家畜等は他でもみられ



アブウ・ケルカス郊外コプト墓

るから大概にしてやめ斜面を降り川を渡り、往がけにみておいたコプト墓の寫眞を撮り、順路を驛へ歸着した、時に午後零時二十分。發車迄にはまだ四十分もある。けしからん事で、案内人の不親切と、自分の間抜けとに原因して、初めから失敗して了つた。第三號も充分見られたのに最早今となつてはどうする事も出来ぬ。

ヘメダは心附として馬子に十五ピアスタアやつてくれといふ、それから驢馬の借賃はいくらかときくと、一人往復二十四ピアスタアだといふ。怪しいから試みに驛長にきいてみたら、これは間違なかつた。さうすると案内人と二人で四十八ピアスタアになる、夫れに對してなら五ピアスタアでいゝのに十五ピアスタアは多過ると思つたが、さつき川を渡る時手傳つて大に功があつたから、枉て夫れをやる事にした。考へてみると驢馬賃往復二十四ピアスタアは高くない。内流沿岸旅行前後十二日、安價と思つたのはこれだ

けであつた。

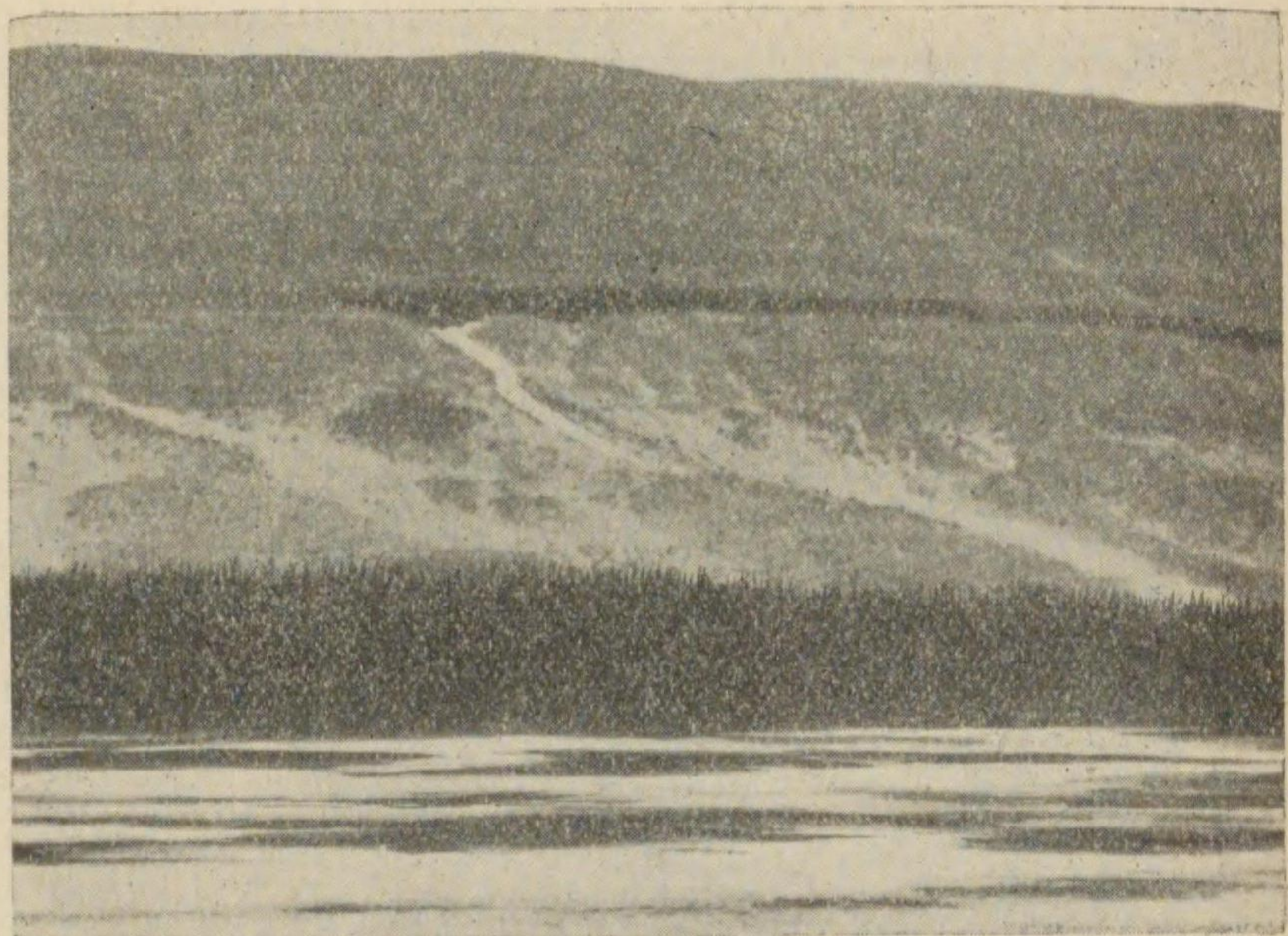
驛の一二等待合所でミニアの御殿館より持參の辨當を開く。そこへ乞食が物貰ひに来る。私は例により知らん顔をしてゐたがヘメダは一片の白銅と食物の餘りをやつた。いづれこの白銅は數倍にして私から取り立てるのだらう。飛んだところで時候はづれの Santa Claus になつたものだ。

乞食といへば埃及や印度では仕方がないが、歐洲に於いても、少なくとも西班牙と伊太利とでは汽車の窓へ来る。去る大正十年の十二月の十五日、西班牙國はセビーアより愚樂灘に向ふ途、いくら南國でも日の暮れは可なり寒いから、窓は閉めておいたのだが、汽車がある田舎の寒驛へ停つた時、大供子供の乞食が一二等車を物色し、窓外より客の顔をみて物をこふのであつた。彼國では驛の構内構外を我國の様に廢物の枕木の柵で嚴重に區別せぬから、入つて来る事は自由である。各乞食は列車の踏段へ上り窓硝子を外から敲き、先づ客の注意を惹き續いて何か言つて手を出す、其聲長く尾を引き如何にも悲哀の調を帯びて人の肺腑を抉る、可愛想になつたが暫く様子をみてゐる内に汽車は發した。そして次の驛へ停ると同じ奴がまた來た、次も復來た、丁度三四驛の間はかうして汽車について來た。これは汽車のどこかへとりついて只乗をしてきたか、或は三等車へのり停る度に出てきたかであらう。流石は大乞食は汽車については來なかつたが、窓外に立つたのが二三驛あつた。伊太利では烏井野驛で停車中大乞食が窓外へ來た。印度では枚舉に暇がなかつた。北京の

正陽門驛では露西亞の乞食が歩廊へ立つて物を乞ふ。未だ他國でも來るのかも知れぬが、私は経験がないから知らぬ。日本で來ぬのは國民全體が勤勉で乞食なんか一人も居ないのではなくて、萬一乞食の輩が廢物利用の親玉なる枕木の柵から入らうものなら、掃除夫や驛夫がお巡りさんの様な態度で怒鳴りつけるから、夫れで來ないので旅客はうるさくないから助かる。

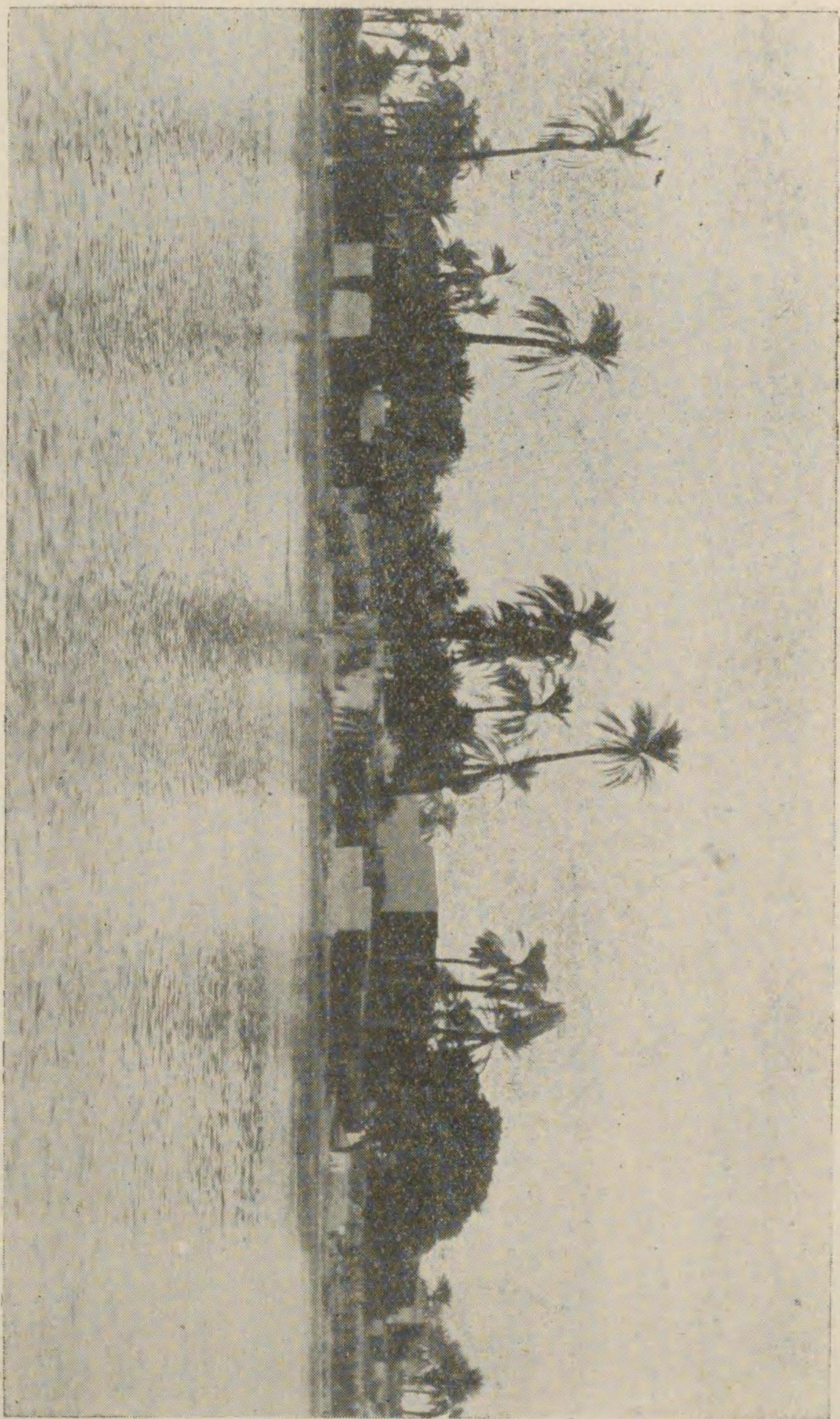
汽車へのるには此所から更に切符を買はねばならぬ。ところが賣口は唯一つで、停車場の側面外部に向つて居り、可なり混雜してゐたから、どうやら出來かけてゐるらしく見えた Queue の最後らしいところへ立つた。暫く立つてゐる間に、これはキューではなくて、たゞさうらしく見えたのであつた事が判つた。即ち後に來た連中は無遠慮に間へ割り込む。だからいつ迄まつても私は依然として同じ所にゐるので、少しも進む事が出來ぬ。だからいづ迄まつても私は依然腹の内では我國で切符を買ふのも同じ事だ、東洋人は決してキューを作らぬ、そして作れぬ人種であらうと思つたのであつたが、敢てかぶれた次第ではないが歐米が少々美しくなつた。

改めて記す迄もなく歐米人は、切符を買ふのも郵便切手を買ふのも、小包郵便を出すにも貯金をするにも、電車へのるにもバスへ乗るにも、必ずキューを作り決して先を争はぬ。一例を挙げると嘗て倫敦の近郊セント・オルバンズ (St. Albans) へ 勿論見物に行つた時、此所へ Golders-Green 間通ひのバスへ乗る爲め停留場で待合はしてゐた事があつた。暫くして倫敦から着いたバスが客を



紅波山窟墓全景。圖の中央より斜左上に向へる斜線は登り道で、突き當りがアメニ墓、前景は内流にして河岸に茂れるは玉蜀黍である。

全部下ろし、一廻轉して大勢待つてゐる前へ來て停るはずが、さう都合よく行かずに少し手前、即ちキューの尾に近く停つた、此時尾に居た人は直にのれるのにさうはせず、先頭より一列側面縦隊のまゝ、逆戻りして乗つたが勿論乗れ切れぬ、今しも筋骨逞しき英國製の熊さんが階段に片足かけた。此時車掌軽く片手を擧げ "Full up" と注意するや、熊さんは手を放し次のを待つ事にした、其後ろにゐたものは勿論熊さんに従つた。私は目前に之をみて、流石に英國製はちがつたものだ、和製ではかうは行かぬと思つて大に感心をしたのであつた。これはほんの一例に過ぎぬ。歐米人にとつては普通の事で何でもあるまいが、人を押しつけても先へ出やうとし、禮儀を守

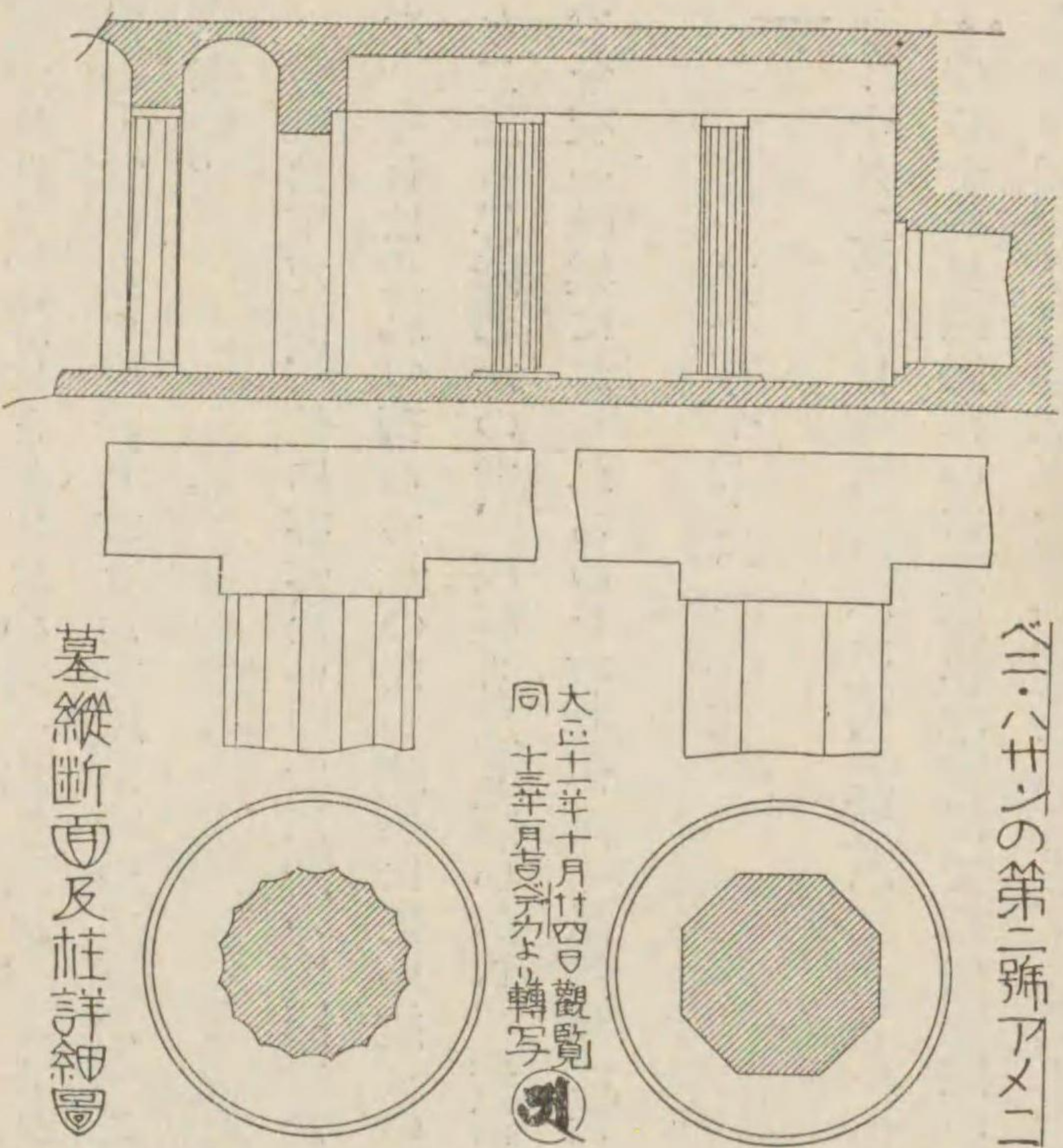


内流河畔の村落（紅波山窟墓への渡船場）

つてゐるのは馬鹿正直だと言つて笑はれる様な所で大きくなつた者には、斯様な行動は如何にも立派に見える。

然るに埃及へ來ると、もうさうは行かぬ。我國に於いても巡査や驛夫が聲をからして怒鳴つて漸く列を作らせるのだ、どうも東洋は西洋に比べて文明が後れてゐるのは情無い。併しこれも亦東洋式の一つである。

一時の汽車へ乗つたお蔭で、豫定通り七時バリアナ驛着、馬車で約半里を距れる内流河畔の安宿へ着いたのは同三十分であつた。二階に上ると直ぐそこが廣間で、其三方に室があるが、扉は何れもガタ／＼で、向て左側の綿板に白ペンキで念入の拙い字



ニ・ハ・サンの第二號アメリ

大正十年十月廿四日觀覽
同十年十月廿六日より轉写

墓縦断面及柱詳細

で番號が書いてある。私は突き當りの第五號室、即ち往來に面した、從て内流河に面した景色のいい筈の、此宿では第一等の室を占領した。

紅波山の窟墓 張圻の木賃宿

ところが驚いたのは、室はいつ掃除をしたのか到る所塵埃堆く、椅子は壊れ蒲團は破れ、寢臺はガタガタ動き蚊帳は性がなく、床は驚張で紙張の天井は幾多の珍らしい朽木模様が出てゐる。勿論電燈はなく、燈火としては小皿へ水を入れ、高さ約八分徑約一寸の蠟燭を其中央に置き、點火をしたのを背の低い頭許り大きな番頭が持つて來た。これでは暗くて仕方がない、日記をつける事すら出来ぬ。

食堂は下だが、他に客がないので二階の廣間でたべた、そして兎も角も寢臺の上にひつくり返つた。今日は生れて初めて鐙のない驢馬に長い途をのつた上、途中大分に駈けだし、紅波山では斜面を二度も昇降したので、脹脛も尻も痛いから、安宿で寢臺が塵だらけで彈機が壊れてゐても、こゝで今夜一晚樂にねられるのを有りがたく思はねばなるまい。(大正十三年一月十一日稿了)

アバイドスの遺跡

十月二十五日

(水曜、好晴)

去る廿一日開路市の古蹟保存事務所で市内寺院の拜觀券を買つた時、待つてゐる間に役人と話をしたが、其うちに私が Abydos をアバイドスと言つたら、役人はアバイドスは間違であればアバイドスと發音するのだと教へてくれた。どうも初めてきいたので、耳馴れぬせいか何だか變で調子も頗る悪い。併し苟も開路人士の言だから間違はあるまいと思つたが、試みに字引を引いてみたら、二種の發音があるが、其何れも頗る微妙な發音で、我國の假名ではアバイドスとかくより仕方がない。其上此名の町は昔しの Mysia 國にもあつたので敢て埃及の專賣ではなかつたのだが、私は少しも知らなかつた事を正直に告白する、乍失禮恐らく知らぬ人も相當にあらうと思ふから、序にこゝに書して置く。

Abydos を埃及人は Abohw 又は Abtu とさうだ、アボツなら「阿保津」の字が丁度いゝが、この方は通用せぬから、も一つのアバイドスでなくてはいけない、さうすると「阿倍度」ではどうだらう。併し大概の人はアバイドスと言ひ、夫れで立派に通用してゐるが、英語として間違は事は明らかである。

八時に木賃宿の支關へ横附にしたガタ馬車へ乗り、大きな音と砂煙をたてながら、六哩半を一直線にアラール・マドフーナ村 (Arābat el-Madfuneh, Arābat al-Madfunah. 即ち "Abydos" の暴夜名) に入りセトス一世堂の前に停つた、此處から西北にかけて所謂阿倍度の廢墟で、此村から隣の El-Kherbeh 村に及んでゐる。

私が當國へ來てから今日迄見たものは、回教寺院か寶形塔か、乃至横穴窟墓の類のみで、未だ嘗て一度も出遇つた事がなかつた實物の殿堂に、初めてこゝでぶつかつたのであるが、惜しい事に一

大特徴たる大門はいつの頃にか破壊されて了ひ、何も残つて居らぬのみならず、第一中庭も跡を留めず、漸く第二中庭の後半以下が助かつてゐる、だから馬車を降りて第一に見えるものは、正面入口前に行列せる方柱である。



セトス一世堂第二中庭
正面の列柱一部

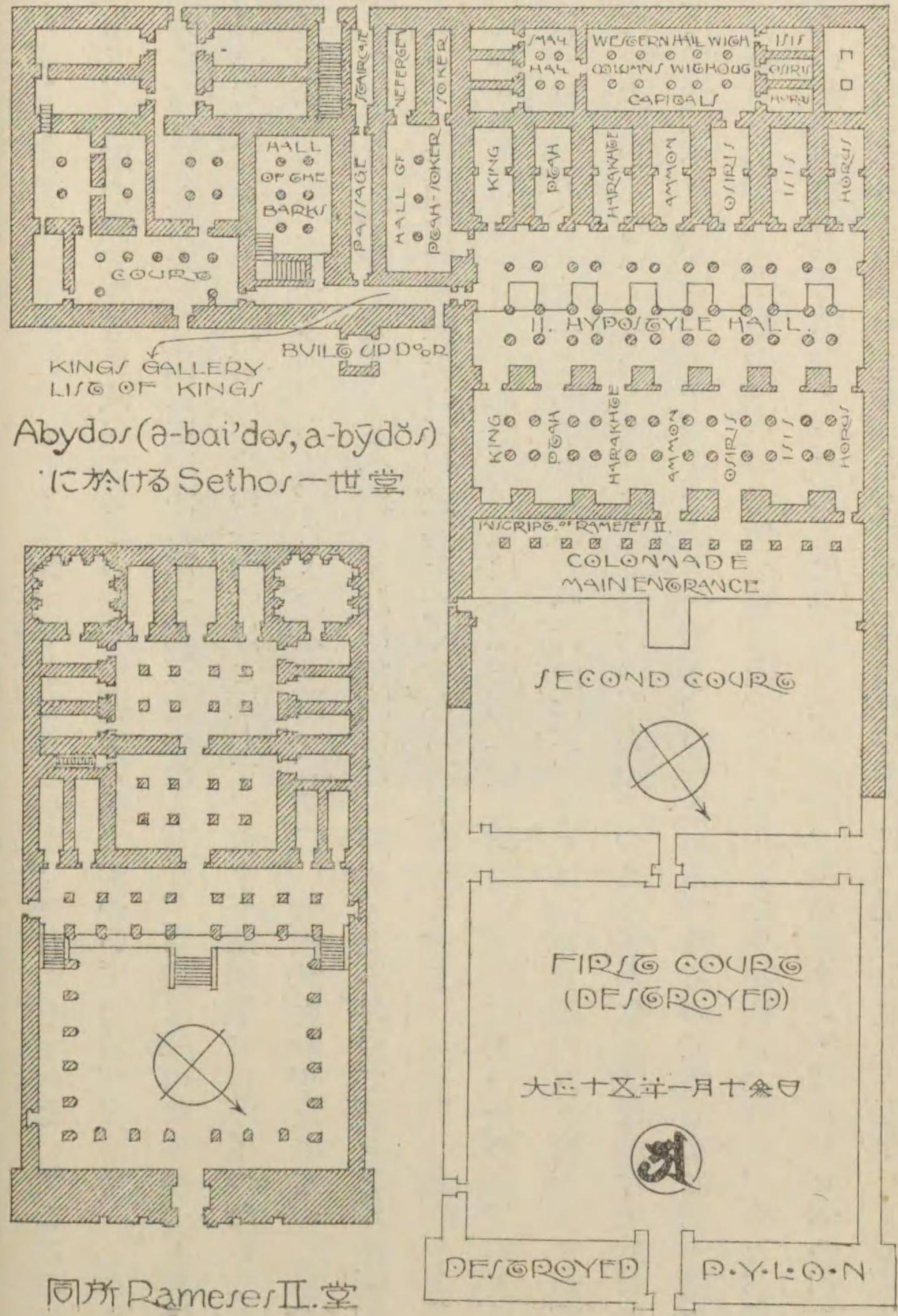
此堂はセトス一世此を創め、ラムセス二世によりて完成せられたもので、安政六年に總督の aid Pasha が施主となり、マリエツトが發掘をしたのである。其壁は密理の石灰石より成り、柱其他必要な部分には幾分質の堅緻なを用ひてある。

其平面が他の埃及大殿堂と著

しく異なつてゐるのは注意すべきである。先づ普通此種の堂では内陣が一つであるのに、此れは七つあり、其天井は筒形穹窿をなしてゐる。併し眞の迫石を用ひたのでないと言ふ迄もない。そして内陣の突き當りには何れも false door が彫つてある、其壁面の彫刻に施せる色彩は、極めて鮮明に残つてゐるのは驚く許りである。この七つの内陣には、向つて右より順にホーラス・アイシス・オサイリス・アモン・ハラクテ・プター及び此王を祭つてあつた。夫れから次に異つてゐるのは翼堂のある事で、本殿の向て左方に直角に各種の室や廣間や階段等がついてゐる。

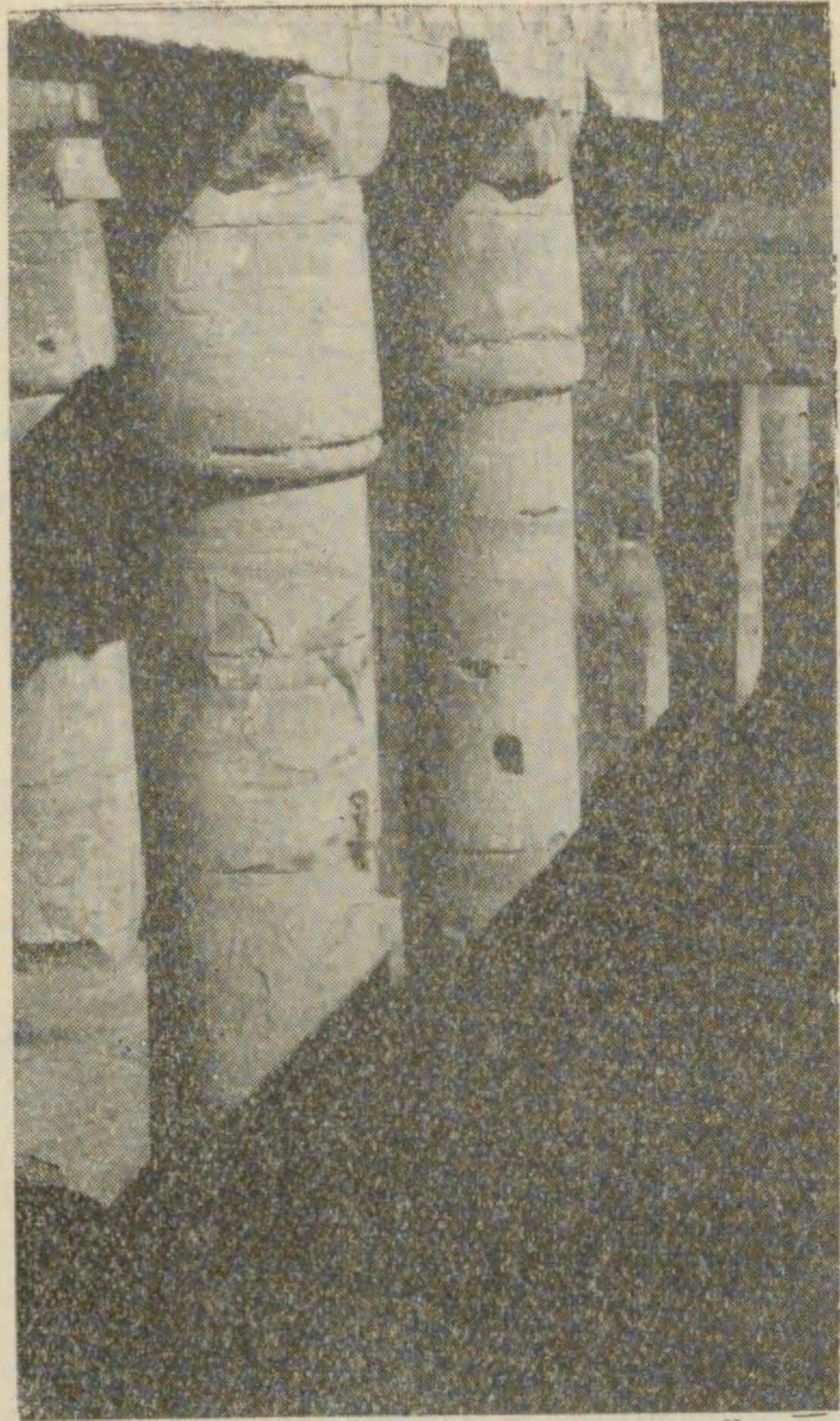
記し方が少々前後したが、第二中庭から第一列柱堂への入口は、當初は一つに一つづゝ合計七つあつたさうだが、ラムセス二世は中央の一つ丈を残して、他を全部締切にして了つたさうだ、故に現今は中央から出入をするのである。こゝを入り第一、第二の列柱堂を過ぎ左に曲つて石階を昇れば屋上へ出られる。少し足元にさへ注意すれば危険はないから、上へ昇つて壁上を歩き列柱堂に建てる太い柱の柱頭や、内陣上の構架式等を近くでみる事をお勧めする。

堂内に寫眞禁止の掲示は出てゐたが、私は公然と寫眞機を肩から下げて入つたのに、番人は知らぬ風をしてゐた、そして私人勝手に奥の方へ行つたが、番人は入口で案内人と話をしてゐて少しもついて來ぬ。だからいくらでも寫眞は撮り得たのである。つまり番人は故意に避けて旅行者をして希望に任せ勝手に寫眞をとらせ、後で心附にありつかうといふ寸法なのである事は明々白々である。夫は分らぬとしても、撮影禁止の場所へ寫眞機をもつて入るのを制止せぬのは、先方が悪いのでこつちの知つた事ではない(？)。ほんとに寫して悪ければ、羅馬のサン・ピエトロ寺の如く、入口で機械をとりあげる可きである。先づこんな理窟をつけ、且つ掲示を見ぬと假定をして大分に寫



した、成程泥棒にも三分の理窟があるといふのが正に明瞭に解つた。罪滅しのために寫真を二つ挿畫として置く。

堂内を巡つてゐる間に、何故か大變に喉が乾いて來たから、何か飲むものはないかときくと、珈琲



セトス一世堂第二列柱室の柱

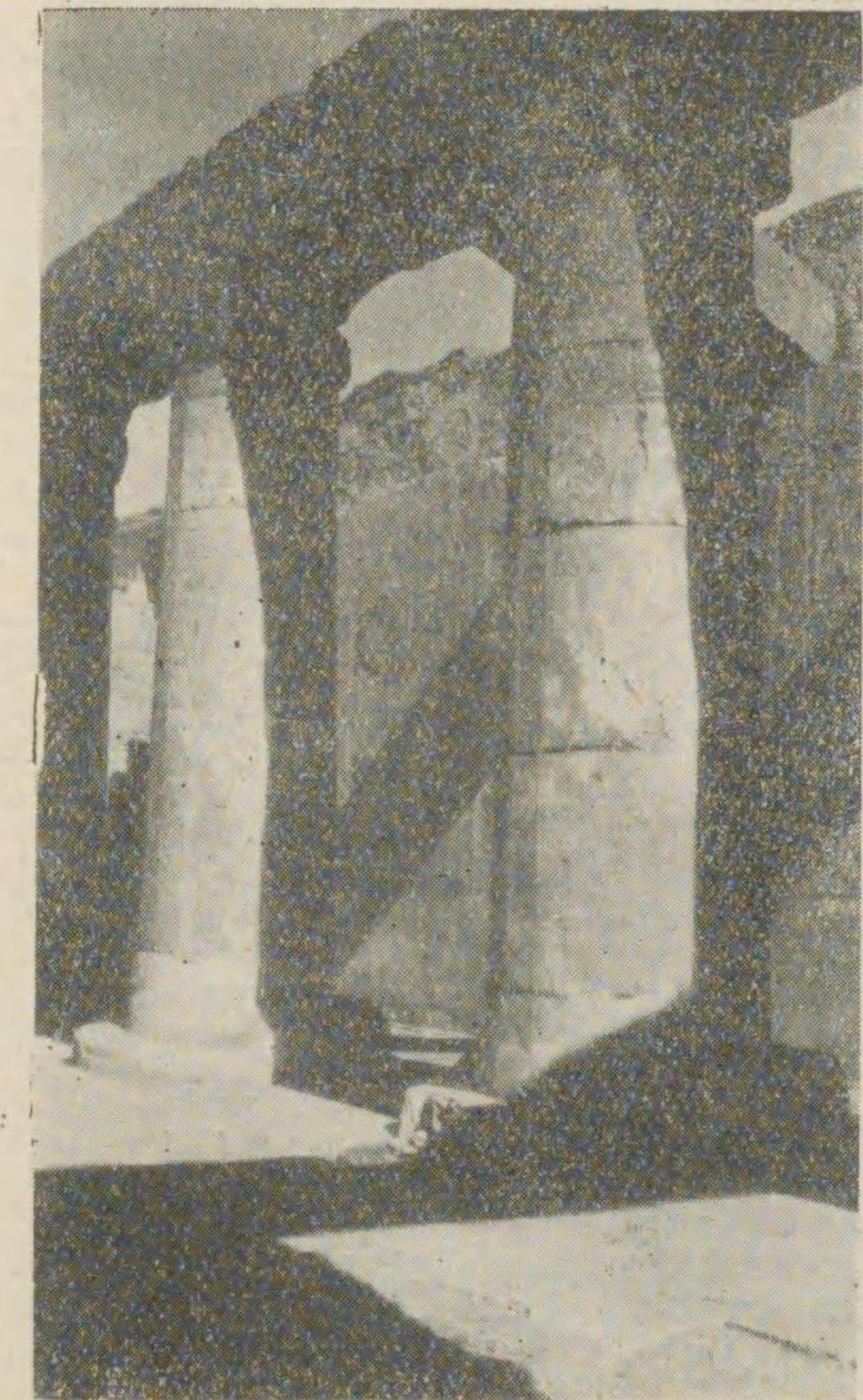
ならあるといふ。埃及式珈琲は牧羊館でも何回も試みたが、餘りに濃くて甘くて毒々しくて、飲む度に際立つて頭が悪くなる様な氣がした。いくら甘黨でも辟易せざるを得ぬ。だから珈琲はいやだといつた。夫なら水はどうかといふ。仕方がないから大概あたるまいと勝手に決めて命じたら、早速硝子

のコップに一杯持つて來た。みると薄赤い色をしてゐるから、赤砂糖を入れた砂糖水を持つて來るとは甚だ氣がきいてゐる、斯様な田舎には白砂糖はないから、此以上は要求する方が無理である。何にしる有難いと大に喜んでコップを握むなり、一いきに半分以上飲みほしてやつと氣がついた。

アベイドスの遺跡

砂糖どころの騒ぎではない、泥臭いので正に内流の泥水を飲んだのである。

此の泥水は埃及人には決してあたらぬさうであるが、日本人に安全といふ保証はついて居らぬ。萬一腸管扶斯にでもなつたら大變である。常にさうとは限らぬが、飲料水から傳染する事が多いと



Sethos 一世堂西堂の柱。(象形文字を刻む爲の平たき部分に注意せよ)

本にかいてある以上、甚だ以て心配であるが、今更どうにもならぬけれども、これから出来る丈け汗を出して身體中の水分を全部蒸發せしめ、黴菌を殺す事にしやうと思つて、今から阿倍度の廢墟全部、沙の漠漠たる中を頭から太陽に照りつけられて歩くと決めた。

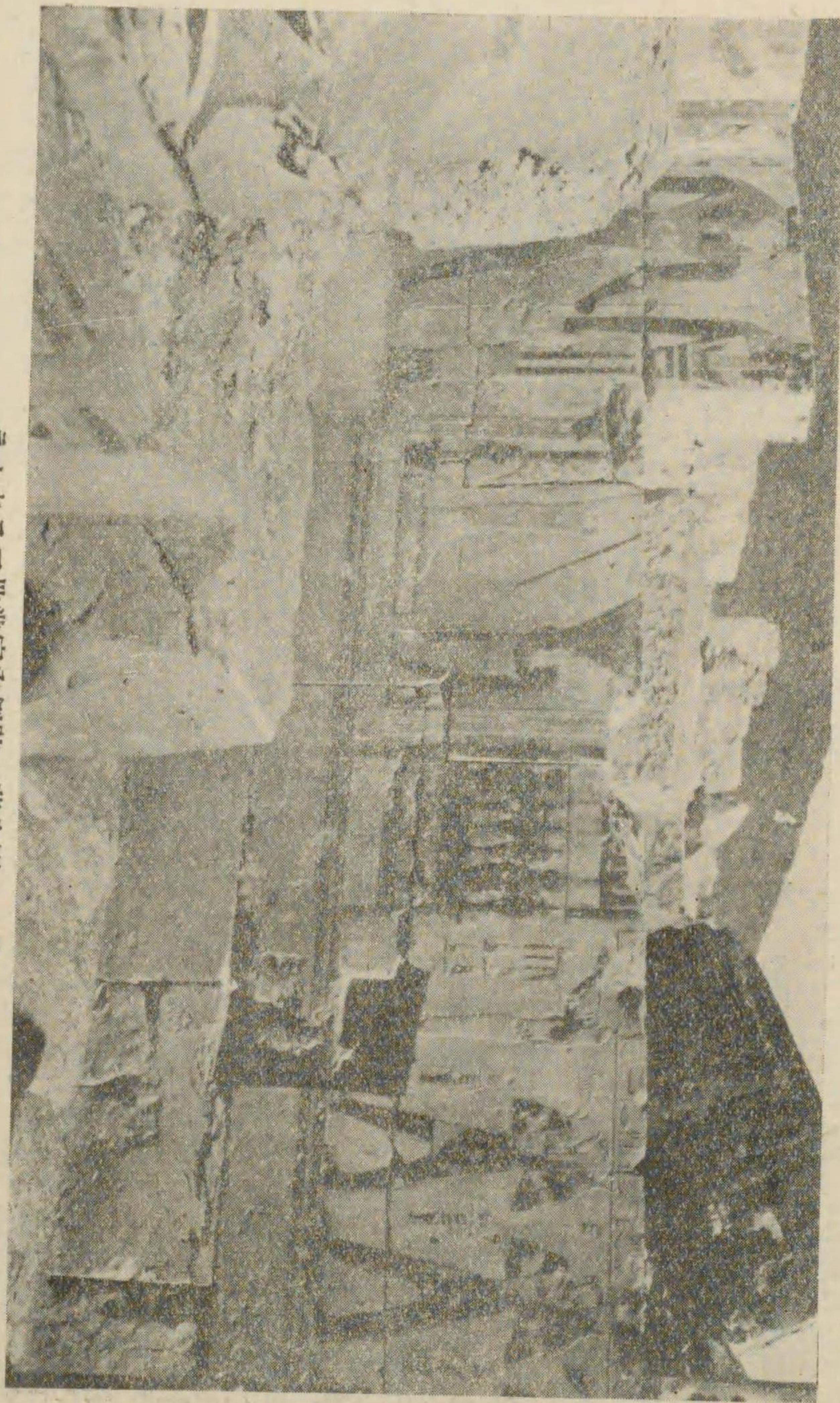
そこで堂を出で、其後方に今から九年前に發掘したといふ Birth House を見、其西方に當つて位置せるラムセス二世の殿堂へ行つた、此は此王がオサイリスに奉獻したもので、前世紀の初めに佛軍が埃及を占領した時迄は、殆んど昔のまゝ立派に建つてゐたが、此時以降さんくなく目に遇は



ラムセス二世堂に於けるオサイリス立像殘闕

してひどく壞はして了つた、だから今日では壁等漸く五六尺の高さに残つてゐる丈けである、けれども壁面の彫刻に塗つた色彩は、未だ充分に残つてゐるから、ゆつくり研究したら面白いであらう、併し中庭に立つてゐたオサイリスの像は胴から上を全部壞はされて了つてあつた。

故に若し埃及が佛軍にさへ占領されなかつたなら、此堂も今日迄無事に残つてゐたのであらう。前にもかいたが、兵隊さんに史蹟といふ觀念のないのは、世界各國共通だから止むを得ぬ。とはいふものゝ實は兵隊さん許りでもない伊太利では Colosseum や Pantheon から石材をとつたり、印度に於いても、英國が暴威を振り出した當時、土木技師が貴重な佛蹟を破壞して石をとりて道普請に用ひたりした。我國でも、大官大寺址から礎石をとり、碎いて樞原神宮の礎に用ひた神職もゐたし、珍らしい刻文のある板碑を倒し内を凹形に割りとり、田の畔へ伏せて樋にしたり、



ラムセス二世堂室内側壁の薄肉彫の一部

歌を刻みつけた奈良時代の板石を小川の橋に使つたりした例はいくらでもある。河内にあつた田邊伯孫墓と傳ふる偉大なる古墳は、十年許以前に完全に破壊されて了つたのである。だから此れも亦古今東西共通の事實で、致し方がなかつたのである。

此等の建物の詳細を記すと、勢ひ埃及建築史の講義になり、従つて書物の受賣になり、専門家でない以上少しも興味を惹かぬから、これ等は案内記や書物に譲り、總て省略しておく。次に私は、此堂からエル・クルベール村の西に隣れる古都廢墟の中にオサイリス堂の址を訪ふた。

古都の當初の規模がどの位あつたか知らぬが、今見えてゐるところは左程廣くない。一體古への阿倍度は第十一、第十二王朝時代(今より約四千年前)に隆盛を極めたので、古來埃及第一王朝の王(今より約五千五百年前) Menes の都たりし阿倍度に擬せられたが、Mariette の徹底的發掘の結果によると、此想像は大分怪しくなつたさうである。夫れ程潜心研究して初めて其位の事が判る位だから、其方面の智識の皆無な東洋の一旅客が、大急一過した位に何も判るものではない。各所に露出してゐる泥土煉瓦の壁體の壞れをみて、たゞこんな所かと思つた丈けであつたが、此の一部凹地にあつたオサイリス堂は、殆んど全部破却され僅に基礎の一部位が残つてゐる丈けであつたが、周圍が薄黒い色をした泥土煉瓦の破片と砂だから、堂礎の輪廓極めて明瞭で、様子が一目に判つて大に都合がよかつた。更に此古都の東方にコプト僧庵 (Coptic Convent) があるので此れに向つた。案内記には“……”

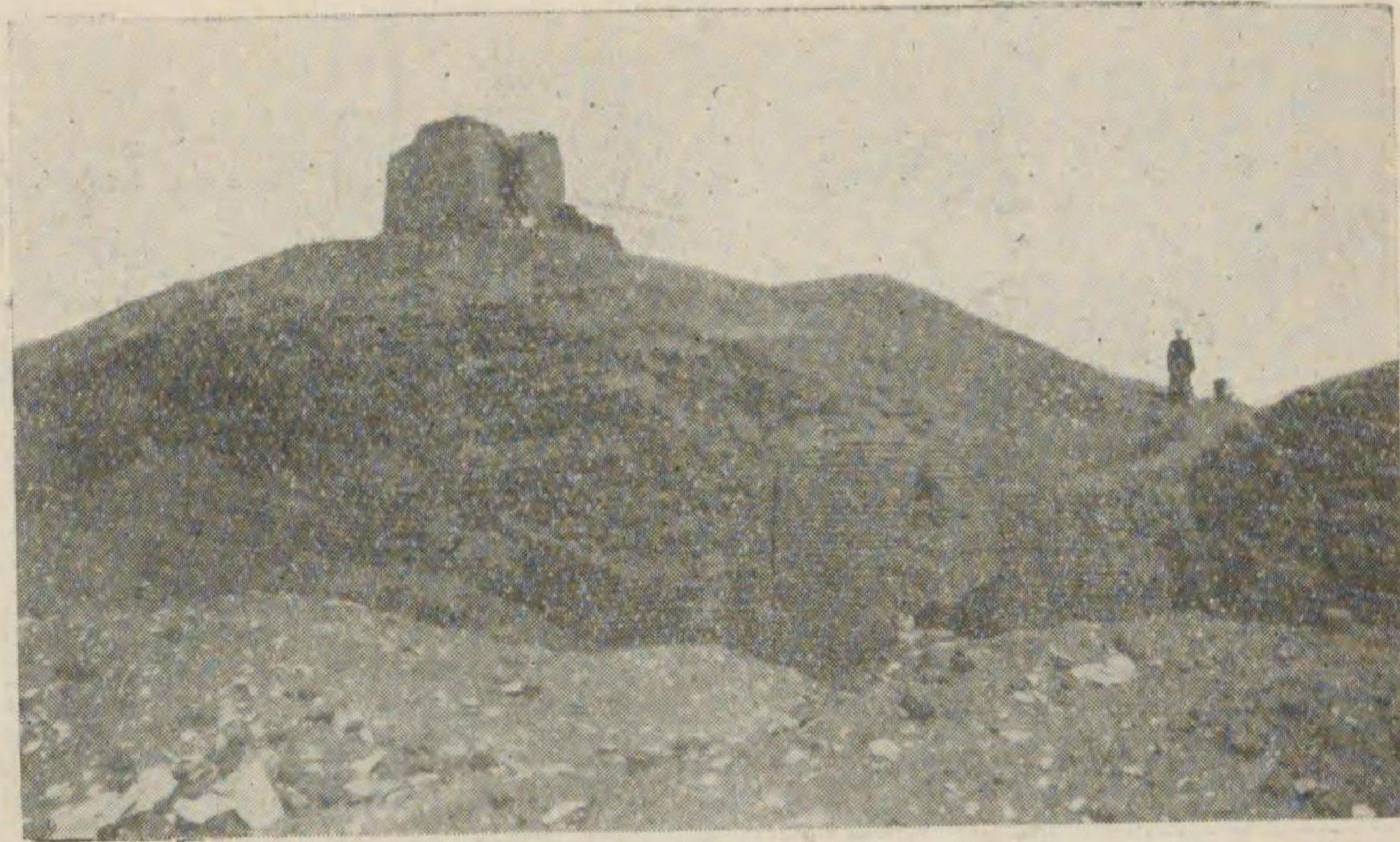


ラムセス二世堂内の一部

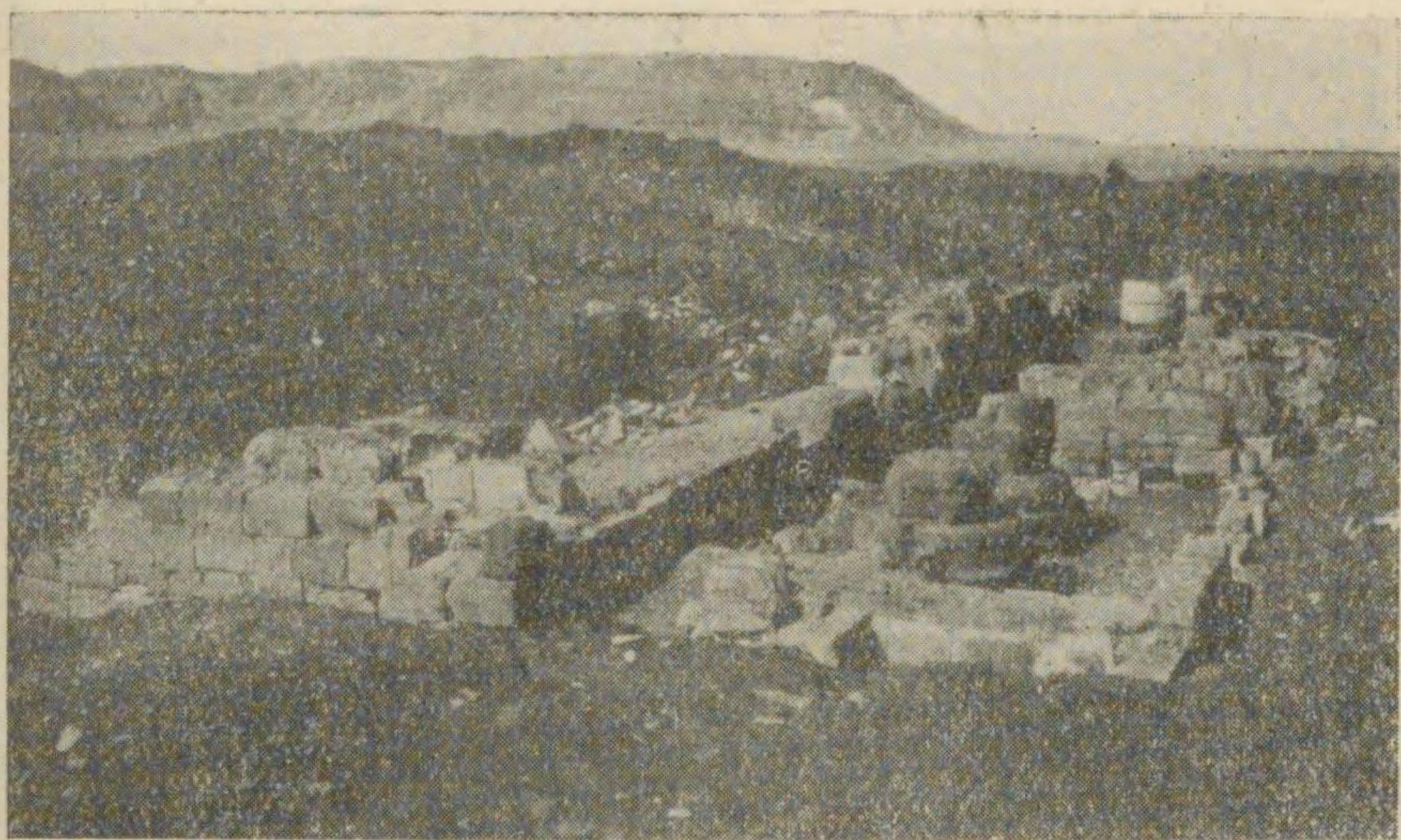
.....the convent scarcely repays a visit” とあるが、そんな事には一切頓着なく出来たら一見するつもりであった、何でも見度いだから仕方がない。

ところが殆ど寺へ行きついでから當惑した事が一つ出来た。即ち金を少しも持つて来なかつたのであつた。夫れでもヘメダでも居ればよかつたが、あの男はラムセス二世堂迄ついて来て、夫れから先はそこ迄同じく一所に来たセトス一世堂の番人を連れて行つてくれといった、勿論自分はずるける氣である。何度もかいた通り初めから彼は虫が好かぬから、私も丁度いゝ事にして宜しと許り番人を連れて歩き出したのだ、だから今ヘメダは傍にゐない。故に金を立替させる事が出来ぬ。そこで番人に私は金を持たぬから見せて貰つても坊さんに謝禮は出来ぬが、お前はいくらか持合せはないかときいたら、男は夫れなら心配はいらぬ、遠來の珍客だから見てやれば坊さんは喜ぶので、金等の心

アバイドスの遺跡



阿倍度の古都廢墟



阿倍度の古都廢墟に於けるオサイリス堂

配はいらぬといふ。埃及としては少し勝手が異ふが、コプト寺の住職はそんな鄙劣な考へは持つてゐぬのかと半信半疑で寺の前に立つてゐたら、やがて男は坊さんと呼んで来た、みると一寸風采がよかつたので先づ安心をした。此坊さん頗る氣持よく堂内を案内してくれたが、成程大したものではなかつた。歸りに入口のところが一寸面白かつたので寫眞を撮らうと思つたらば、坊さんは自分も一所に寫して貰ひ度いといふので、序に番人の男も並べて寫した。挿畫にあるのが夫れで、向て左方の白衣が住職である。私は金で謝禮が出来ぬから、寫眞がうまく出来てゐたら、開路へ歸つてから送るから、名と番地をかいとくれといつて紙片を出したら、暴夜文字で認めたから、讀んでくれといつたら讀んだがよく聞きとれぬ、いづれ後に誰かに訊かうと思ひつゝ、つい折がなく心ならずも違約をしてつた。この寫眞をみる度に坊さんに申譯のない様な氣がしてならぬ。

コプト僧庵から東南方、前に記した古都の西南方に、二重の煉瓦壁で圍まれた一の廢墟がある、これをシュエネット・ザ・ビツプ (Shūnet ez-Zebib, Shūnat az-Zabib) と云ふ。壁の壞れから自由に這入れる。ベデカによると、*"It has been supposed to be an ancient fortress, but is more probably a tomb."* とある、さうかと思ふより他に仕方のない代物であつた。

夫れから古帝國時代の墓地を通りぬけて元のセトス一世堂へ歸つて来たが、入口に近づくとき雷の如き駭聲がきこえた、左程大きくはないのだらうが、今を距る事三千二百年前に出来た大殿堂の第一列柱堂内に反響して、大音をたてゝゐたのであつた。何ほ何でも怪しからぬ。あく迄人を馬鹿にした仕打と大に憤慨し、大きな聲を出して怒鳴りつけたら、流石の彼も直に飛び起きて何とか頻りに申譯をしてゐた。

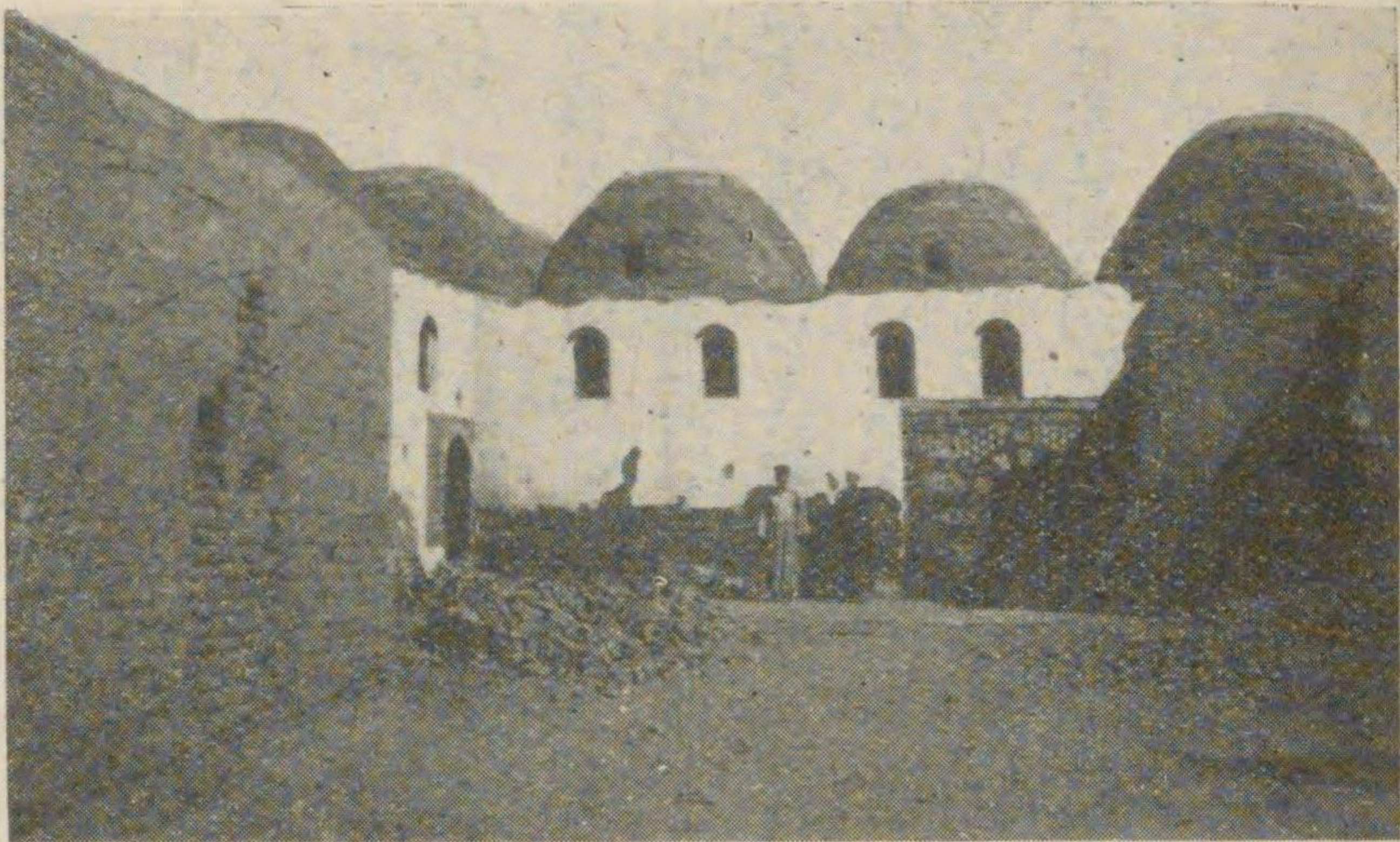
今歩いたところは全部で約一里半ある、お蔭で先刻の内流河の泥水は勿論、身體中の水分悉く蒸發して了つた、今度は水や珈琲以外の飲料はないかといつたら、ラムネならあると言ふ、ラムネはちとあぶないが、瓶を倒にしてみても大して澱みもなし、水よりはよささうだから早速二本たてつゞけに平けた、大概腸窒扶斯は大丈夫だらう。

小憩の後、も一度堂内を巡り扱て歸らうとしたら、番人はまだ他に見せるものがあるといふ。何か知らぬがついて行つたら、附近のとある土人の家へ連れ込んだ、やがて主人は首飾やスカラツ

ブヤいろいろの古物を持ち出して私の前へ並べたが、眞偽を鑑定する能力もなし、又努力もせず頗る冷静に構へてゐると、案内人は此家の品は眞正で安價だから買はぬかといつた。そこで私は、高い金を出してこんな物を一つ二つ買って夫れが何になる、こんな物を買ふ金があるなら Kharim 迄行つてみるのだ、と言つて横を向いて了つた。到底駄目とあきらめて案内人は歸るかときいた、時に一時。丁度此家で三十分ぶしたけれども、着した時が九時半で、夫れから午後零時半迄正味三時間あつたから、この間に阿倍度の簡易速成科を目出度卒業して了つた。

歸りの馬車の中で、今夕七時發の汽車でケナ (Kena, Keneh) へ向ふ豫定を變更して明朝六時の汽車とし、張玲へもう一泊と決め午後休養してはどうか、とヘメダが發案をしたから、私はこの案に賛成をして泊る事にして、歸宿をしたのが二時半で晝食を了つたのが三時十五分であつた。

宿の前は幅三四間位の道路があり、其次はナイル河になつてゐる、そして河に沿ひて納涼臺が張出して設けてあるが、此れは此宿の所有と見えて村の衆が来て涼みながら、ヘボ將棋をさす事我國と同じである。さうすると宿の店頭に並べてある酒や煙草の類が賣れる。さうでもない、こんな田舎の木賃宿へは季節以外には餘り客はあるまいから、宿屋業丈けではやつて行けまい。亭主は希臘人で六十五六歳なるべく、此所に宿屋を開業してから四十年になるさうで、能く談し能く笑ふ、瘦せてゐるが一癖ありさうな面魂だ。併しヘメダとは比較にならぬ。彼は幾度となく季節毎に



コプト僧庵入口 (向て左に立てるは住職)

客を引すり込むと見えて、此亭主と大分に親しいらしい、互に胸襟を開いて儲口の相談をしてゐる様であつたが、暴夜語だから珍紛漢でこれは保證の限りではない。

午後此納涼臺の騒々しさはお話にならぬ。リップにある Kings Head Inn の前に村の衆が集つて喋つてゐるところは Arthur Rackham の上手な挿繪にあるが、繪でも可なり騒々しさうである。歐米の片田舎の宿屋の前は今でもかうかどうか知らぬが、我國の田舎宿の夕暮は随分賑かである。丁度これと同じ現象に、埃及國張玲村の木賃宿の前で出遇つたのだから面白い。

暮れ方になつて不圖氣がついて蚊帳を検査したら、大孔が四つ五つあいてゐた。昨夜痒くて困つたのは全く此孔から蚊が入つて來たに違ない、そこで豫てから荷物の一隅に入れておいた針と糸を取り出して、早速孔綴に取りかゝつた、ところが蚊帳が古くて性がなから、一通り綴るの

に一時間餘りかゝつた。

愈よ暗くなつても燈火をもつて來ぬ、六時半迄寢臺に轉がつてゐたが果てしがないので、廣間にかけてあつた舊式反射鏡附三分心の石油燈を自分で取つて來て點火したので漸く明るくなつた。もう一晩の辛棒で、明晩は Luxor Hotel だから最早こんな事はあるまい。

宿がこんな風だから、こつちも其積りで大略式ですます。晝食の時は半袖の縮の肌着とズボンでやつつけた。而も此肌着たるや去る大正三年に大枚九十錢で買得たもので二三個所膏藥が貼つてある歴史的の品である。此肌着をきて阿倍度の見學を了り、宿ではむき出しで晝食をしたのだから大に記念になる。而も晝食は例により廣間で食べたので、此室も晝間觀察すると隨所膏藥だから丁度よく似合つてゐた。其上番頭兼給仕はスミルナ生れださうで、子供の時水頭症を病つたと見え、特別の大頭で脊が低い、だから小亞細亞製の福助である。こゝは元の土耳其領で、希臘に取られたり土耳其に取返されたりした揚句の果に焼かれたり、いろいろなめに遇つた變挺な所だ、其變挺な所に生れ親兄弟に別れ、張玲迄流れて來て、木賃宿の給仕になつてゐるといふ頗るお芽出度い景物附だから甚だ以て振つてゐる。

夕食後ヘメダは三度談判を持ち込んだが、今日はどう／＼引導を渡して了つた。彼はラクソル迄行くつもりで用意をして來たのに残念だと言つた。どうも初めから四日間にしては靴が大き過ると思つた。

九時半床へ入つたが、村の若い衆が騒ぐので表は中々やかましくて眠られぬ。漸くつかれて一寢入したと思つたら、往來で人の罵り合ふ聲でまた眼がさめた。その瞬間 "Suppose you are drowning in the sea, any one……" と丈け確かにきこえたが、「ワン」からあとは何か判らなかつた、それから暫く二人以上の人物が何か言ひあつてゐたが、遂に大きな音をたて、案内人を供に連れた客が二階へ上つて來て、どこかの室へ入つて市は榮えたが、此客は夜半宿屋の前で馬車の別當か荷持かに大分ゆすられたらしい。晝間でもさうだが、まして夜間十二時近くでは、此邊は全くの無警察である、こんな時には宿の主人は必ず寢たふりをしてゐるので役になどたゝぬ。だからこんなに晩く着くのが悪いのであるといふより仕方がない。(大正十三年二月十一日稿了)

張玲 ケナ デンデラ ラクソル

十月二十六日

(木曜、好晴)

昨夜の騒ぎで眼が冴へて了ひ、漸く眠つたのは彼是一時頃であつたらう、ところが朝迄に身體中が痒くて三四度も起きた。搔くと少し痛いのは確かに南京蟲らしい。併し眠いのが勝つてたう／＼寝て了ひ、四時半に案内人に起されたが、起きてみたら足や手や頸の圍りに、立派な證據が澤山に

張玲 ケナ デンデラ ラクソル

残つてゐた。

此蟲の偉大なる種類が、倫敦市の目貫の場所、High Holborn の建築書院 Batstord の店にさへ棲息してゐるのだから、埃及國の張玲村にゐるのは寧ろ當然である。此頃は客がないから、屹度幾日も斷食して丁度空腹のところへ、珍客が泊つたので總勢擧つて大歓迎をしたのであらう。

起きて支度をして待てども待てども食事にならぬから、其爲め汽車に乗り後れては大變だし、幸ひ昨日命じておいた馬車はとうに來てゐるから、朝食をやめて驛へ行かうと言ひ出したが、案内人はもう直に食事が出来るし、まだ大丈夫だといつて中々動かぬ。けれども氣が氣でないから、自分で荷物を持つて下り、直にも自分丈け出かける様に見せかけ、大々的に示威運動をやらかしたら、彼も仕方なしに續て階下へ來た。そこへ漸く食事が運ばれたから、殆んど鵜呑みにして驛へ駈付たら、丁度下りの一番と私の馬車とが同時に驛へ入つた。勿論切符買入のひまがなかつたから、案内人をして驛長に無切符乗車を談判せしめ、辛ふじて乗車する事を得たのであつた。

斯様な際どい場合には、埃及の鐵道従業員は歐米各國に於けると同様、至極わかりがいゝ。どこかの狹軌線許りの國の鐵道雇員の様に、杓子定規一點張で少しも融通がきかず、旅客を失望させる様な間の抜けた動作は決してしない。印度でも此通りで、時には緩に失しはせぬかと思はれる様な點さへあつた。かうなつてはいけませんが、規則のゆるす範圍で常識をもつて萬事旅客の便宜を圖る事は大に必要である。故にその狹軌國でも月給の高い人許りでなく、車掌や改札掛を常識養成の爲め、在外研究員として歐米へ在留を命じたら數年の後にはいくらか改良が出来るだらう。

夫れは兎に角、私は危いところで汽車に乗れた事と、張玲滯在中白魚と鹿尾菜とを喰はされなかつた事とを喜ぶと同時に、二夜世話になつて南京蟲と蚊とに攻められた木賃宿の屋號を逸した事を



女神ハソール立像。喜樂愛情の神。天上の神で兼て黄泉の神。Dendera, Aphroditespolis 崇拜され、又墓地の守護神として Thebes でも拜まれた。『古埃及神話傳説集』より複寫

大に遺憾とするのであらう。No. 57の Hotel Baita 仰ぐ Egyptian Station Ry. の線路たるや開路市を發して直に内流河を渡り、左岸に沿

うて走るが今日はまた鐵橋を渡つて右岸へ來ると、前七時四十分にはケナ驛へ着したので下車、直に Dendera の Hathor 堂に向つた。又渡船で彼岸へ渡らねばならぬ。若し此の線路が開路市をでてから紅波山迄は右岸を、そこからデンデラ迄左岸を、次に再び右岸へ渡つてラクソル迄來てゐるのだと古蹟觀覽の爲めには甚だ都合だが、鐵道を敷く時技師はそこ迄考へなかつたと見え、こつち

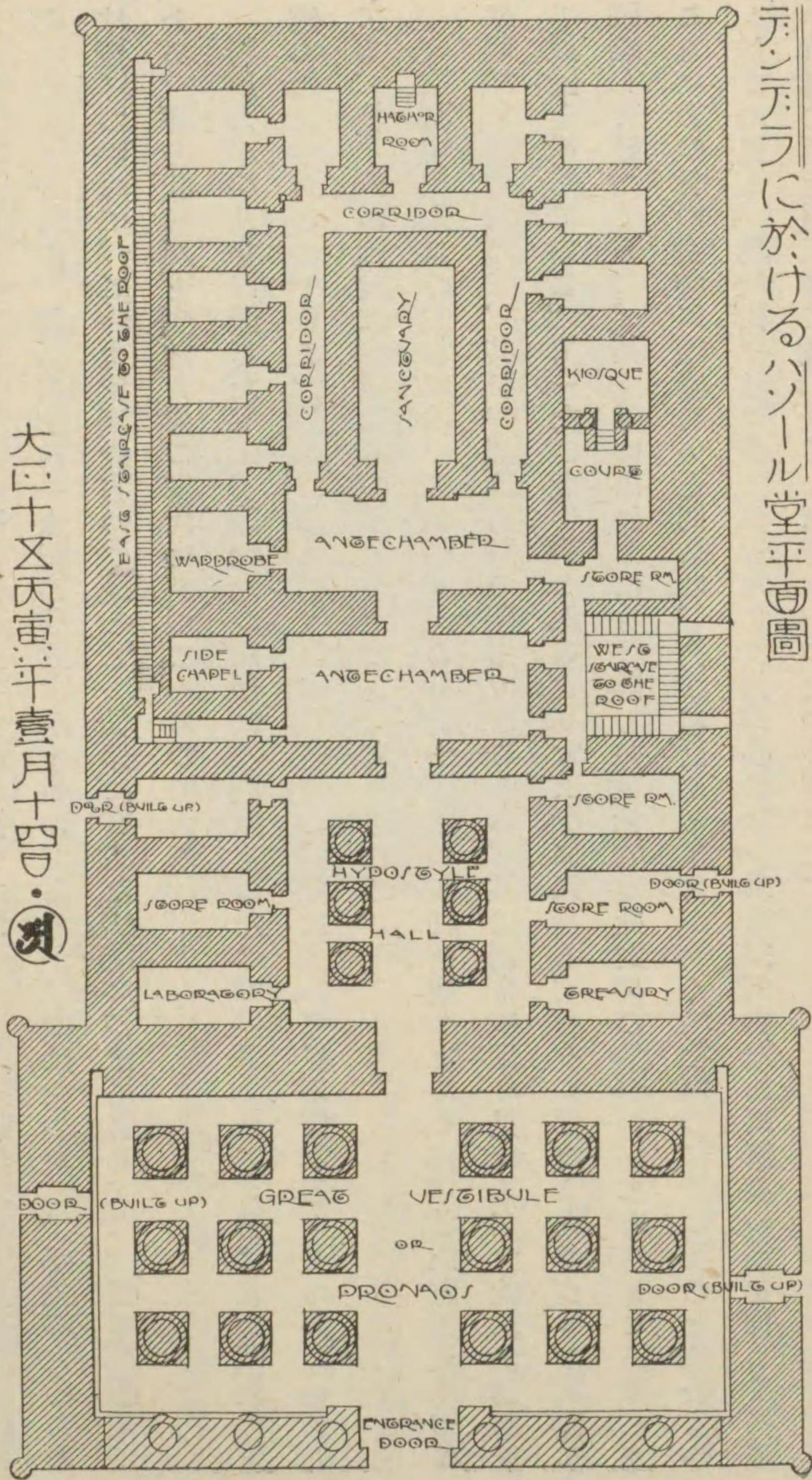
の思ふ様に出来てゐぬから、時間に無駄が出ていけない。併しさうだと、ミニアで船遊びが出来なかつたらう。だから二ついい事はない。どつちか犠牲にしなければならぬ。だからまあ仕方がないとしておく。

驛から渡船場まで二十分かゝつた、夫れから相當に時間をかけて對岸へ渡つた、時に八時五十分こゝら驢馬へ乗つて途中を急がせ、九時半に漸く目的地に着いた、だから今朝停車場へ着いてから二時間かゝつたのであつた。

Dendera (一曰Denderah) は希臘人の所謂 Tentyra であり、埃及に於ける著名な古都の一に數へられ、昔しは上埃及第六縣の首府であつたが、今此地に淋しく一大殿堂が建つてゐる。其祭神は Hathor と呼ぶ喜樂愛情の女神で、天上と兼て黄泉の女主人であり、希臘人は Aphrodite にあててゐる、主として當地及びラクソルに近き Aphroditopolis に於いて禮拜されたので、其姿は氣高い婦人の立像であるが、時には牛頭人身の形で出現する事もある神である。嘗て非常の信仰を集め、帝王を初めとし善男善女の參拜引きも切らぬ有様であつたが、今は内々陣もからつぽだし、そんな殊勝な心懸で来るものは一人もなく、たゞ堂を見物するためだけであるのは言ふまでもない。

當堂は上埃及に於ける此種の建築としては、寧ろ普通の型であるが、多くの場合の様に正面に大門及び中庭を缺いてゐる、だから正面に直に大玄關を見ることが出来るのである。ナイル沿岸に於

テンテラに於けるハソール堂平面圖



大正十三年丙寅平壹月十四日

張玲 ケナ デンデラ ラクソル

ける最も新しい古蹟の一で、今を距る僅に二千年前、換言すればトレミー時代末葉より羅馬時代初期にかけてのもの、即ち西紀前一世紀の建立にかゝるのであるが、實はたつた二千年位等といふのは贅澤の沙汰で、これも我國最古の建築として世界に有名な法隆寺の堂塔より正に七百年の先輩である。即ち我國だと崇神天皇の御代に當つてゐるのである。

羅馬人が埃及を占領した事は、建造物の保存に大貢献をしたので、ドミシアン帝は北大門全部を建てたといふことである。果して然らばラクソル以北の諸堂に於いて見る様な形のものでないとしても、埃及式の相當に立派なものであつたことは考へられる。

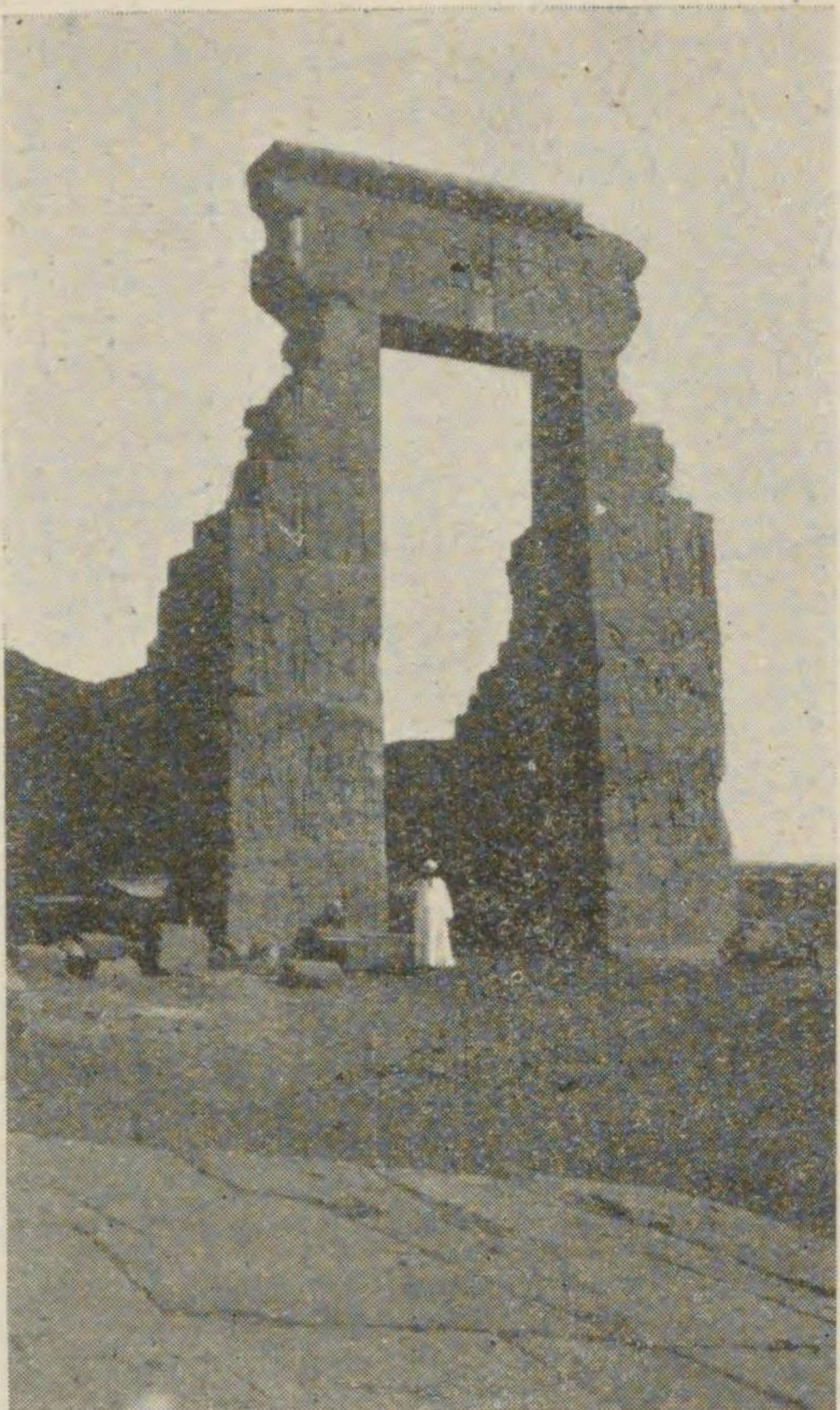
大玄關中央入口の左右には十二本づゝ、合計二十四本の大柱が建つてゐるが、其内左右三本づゝは側柱になつてゐて、其下半部は石壁で積んであるから、柱は割合に低く見ゆるが、此れが爲め反て威嚴を増してゐる。で一たび此中央の入口より大玄關に入ると、そこには残り九本づゝの大柱が遊離して建つてゐて、其上部には如何にも物淋しい厭世的な此女神の顔がついてゐるところは、まことにあの世の女神に相應しいと同時に、彼女に對する信仰が全く地を拂つて了つたのを悲むものゝ如くに見え、異教徒で且つ豫てから大して信仰心のない私も、何となしに憐哀の情を催し、何度か女神の顔を見上げて低徊去るに忍びなかつたのであつた。

此大玄關の後ろに列柱堂がある。こゝの柱も同じくハソール柱であるが、大玄關のより細く従て

短く、且つ數も六本ほかない。日本の神社に當嵌めると、大玄關が拜殿、この列柱堂が石の間、其後ろにある二つの Antechamber は本殿の外陣、内陣で、まん中の Sanctuary を内々陣に擬して丁度よからう。其周圍の各室は何れも附屬物だから問題にしないでおく。かう考へると、我國の國權

現造にあたるから、誰れにでも早判りがしてよからう。

この内々陣は、全く光線がなく、たゞ正面に入口がある許りで、今でこそ古蹟觀覽券さへもつてゐれば大威張で誰れでも入れるが、往昔はたゞ王様丈けが、夫れも年に唯一回丈け參拜し得るのみであつ



ハソール堂正面大門の内側より見る。

たのである。

奥へ行くに従ひ漸く光線は不足して來るし、此上此室には玄室 (Crypt) もある。幅は狭いしとして僅に其一部分を見せる丈けであるが、其壁には當時の Relief が一面にあるから、行つたら是

非一寸でもいゝから見るべきである。こゝに於いて懐中電燈が必要になる、私は其用意がなかつたので止むを得ず蠟燭を試みたが、これでも充分であつた。

地下室へ降りる石段は少しく急だが、反對に屋上に出るには、本殿内向て左側の厚壁の間に造りつけてある極めて緩勾配の長い直線の階段を昇るのであるが、扱て大玄關即ち拜殿の屋上に立つてみると、南方は眼の及ぶ限り強烈なる日光に照らされたりビアの砂漠は渺茫として際涯なく、北方は直下左方に所謂 Birth House とコプト僧庵の廢址を見、遠く兩岸に緑に繁茂せる玉蜀黍畑を有せる内流河を望み得、阿弗利加氣分を充分に味ふことが出来るのである。尙ほ本殿の屋上西北隅には氣のきいた小堂があり、また同じくハソール柱を建つ。

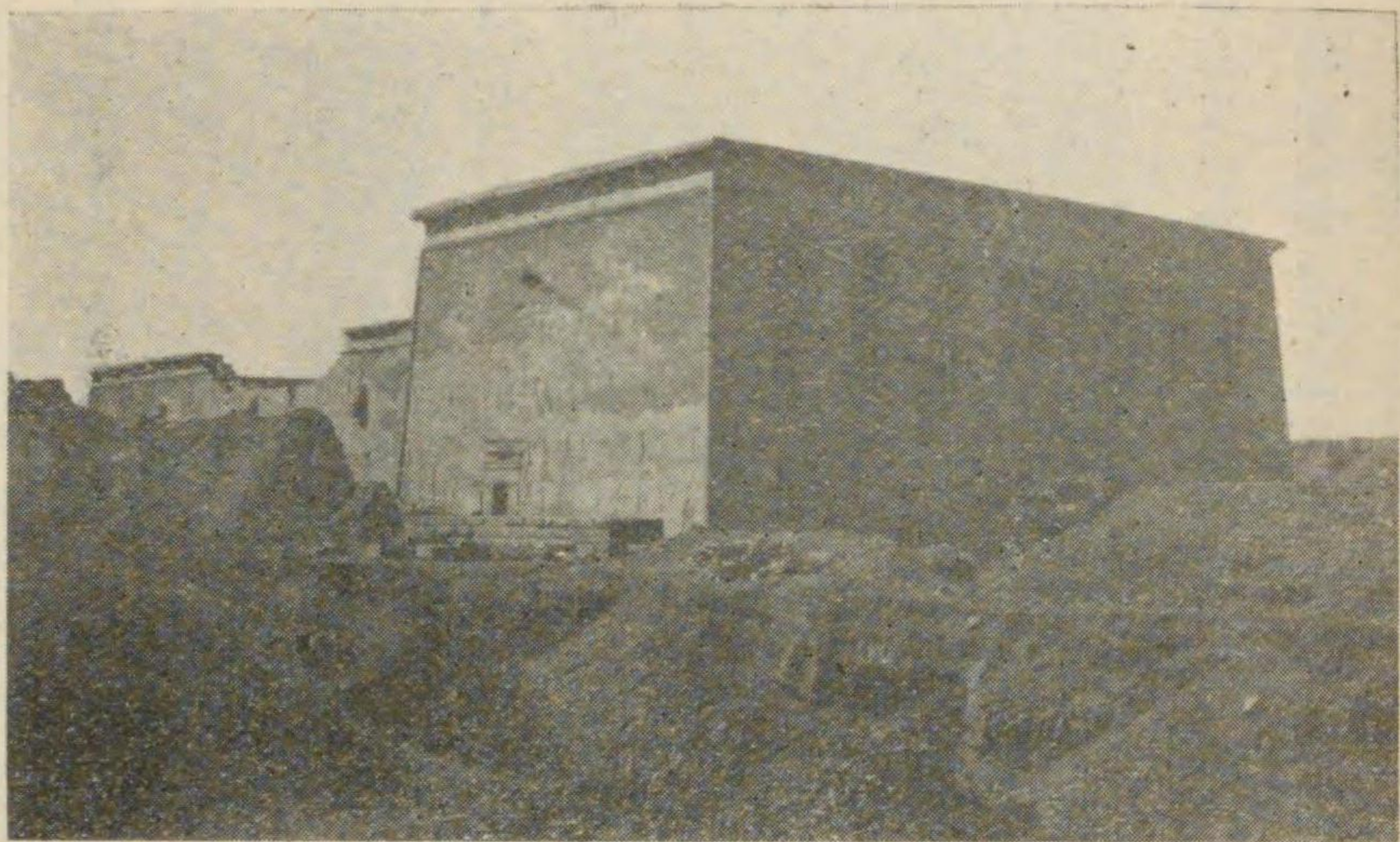
堂の周圍の壁には相不變の彫刻が一面にある、其後方、中央より向つて左の方に、Cleopatra 及び其子の Caesarion が刻んであるといふので、こゝへ来る程の人は誰れでも後ろへ回つてみる。大したものではないが話しの種にはなるから、一瞥するがよからう。壁面から外方に突き出してある獅子の頸は屋根からの水吐き (Gargoyle) である。

堂の西北隅に並びたてるコプト僧庵と所謂 Birth House の内、前者は左して興味を惹かず、後者とも數日後にみたエドフウ堂附屬の夫れよりは落るが、こゝで私は初めて開花せる Composite Capital をみたので、拜殿、石の間及び屋上小屋の女神柱と等しく、深く頭の内刻みつけられたの

であつた。他に西南隅に本殿を少し離れてアイシスの小堂が建つてゐるが、これは頗る平凡であつた。

* * * * *

昨日飲んだ内流河の泥水のお蔭か、今日は少しく下痢の氣味がある、飲物を節する位の事は心得てゐるが、どうも暑いせいか渴いて仕方がない。他に何も無いから止むを得ずラムネを命じたが、今日のは下方に澱がある。水を取りよせたら昨日と同じ赤砂糖入だ。最早再び此水を飲む氣にはなれぬから、漉した水をくれと云てみたがこれはお生憎様ださうで得られなかつた。こゝら邊の堂守の胃腸は先天的に強健なる事牛馬鶏犬の夫れの如くである。彼等は決してあたらぬと信じて飲むのだから、泥水だつて差支はない。又實際紀元前四千年頃から未だ曾てあたつた事はないのだから、漉水なんて手のかゝつた愚なものをつくる必要はないのである。私はやむを得ず



Dendera の Hathor 堂。東北方より見る。

遂に思ひ切つて我慢して了つた。我慢が出来たのだが、これ則ち左程渴いてゐなかつた證據かも知れないが、實は随分苦しかつた。將來内流河沿岸を旅行せらるゝ人は、必ず魔法瓶のなかへ宿屋から飲料を入れて行かれる事が必要であると思ふ。

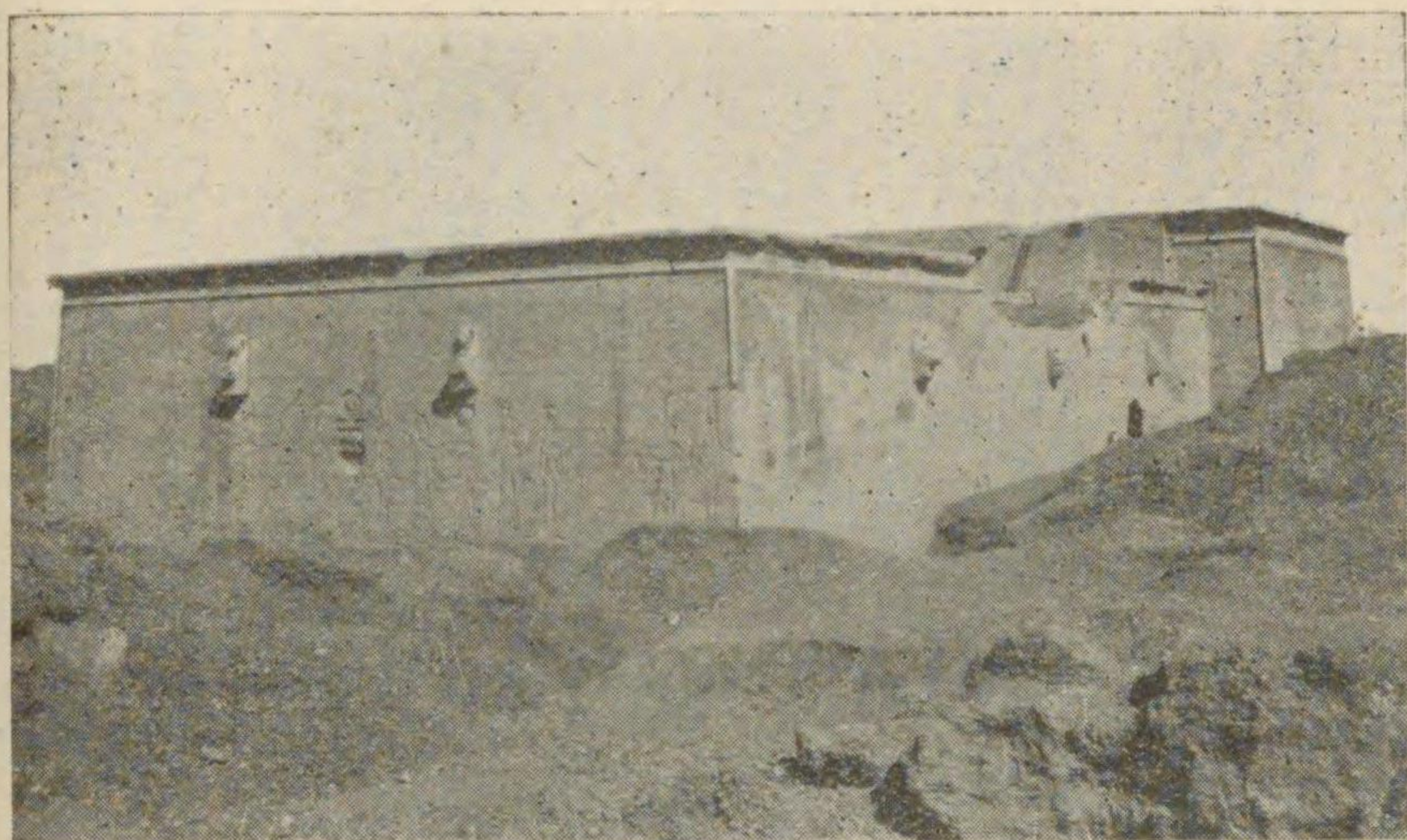
正午十二時に堂を辭し、途中驢馬を急がして川畔迄戻つて來たら、丁度渡船は岸を離れたところであつた。馬方や案内人が大聲を張り上げて喚いたが、船は知らん顔で出ていつて了つた。仕方がないので次の船を待つ間、川に面せる村のある大きな家の入口に腰を下ろして休んだ。此時は最早到底辛棒の出來ぬ程に咽喉が渴いてゐたから、漉し水があつたら一杯くださいと申込んだら、早速出してくれた、今度は透きとほつてゐたから大喜びで大分に飲んだので生き返つた様な心持になつた。續て主人は紅茶を出した。一口飲んでみたら妙な味と變な臭ひとがした。尤もこの妙だの變だのといふのは、不斷飲みつけてゐるのに比較していふので、決して不味といふ意味ではない。恐らくこれは村々の大百姓である埃及つ子の平生の飲料であらう。さう考へると洵に千載の一遇であらうから、もう一杯ほしかつたが、水をさんさんやつた揚句だから、折角の厚意を辭し、二杯目は遠慮してゐた。さうしたら、今度は牛乳をくれるといふので心中大に喜んだ。屹度搾りたての水の交らぬ上等のをくれるのだらう。どうも此家は村一番の大世帯らしい、だから主人は必ずや好意を以て——好奇心を以てとは考へ度くない——東洋の珍客を待遇するのだらう。バクシーシュ (Bakshish, Bakhshish = Gratuity, tip) を異口同音に叫び、手を出してうるさく付き纏ふ乞食の様な人間許り住である埃及でも、矢張上流人士はちがつたものだと連りに感心して待つてゐると、やがて大鉢を盆へのせ、小皿と匙とをつけ別の皿にこれも土人の常食なる埃及麩包を添へてもつて來た。

鉢の中をみると、豫想は全く當らなかつた。夫れ丈けならよかつたが、實はすつかり失望して了つた。搾りたてどころか、すつかり凝固してゐて見たところ胡摩豆腐の如く、色は純白で且異臭鼻を衝く。我國で一時流行した——今でも流行してゐるかも知れぬが——ヨーグルドとか呼ぶものは、私は



大玄關内部 Hathor 頭柱。

試みたことはないが、人のたべてゐるのをみたとき、丁度こんな風で變な臭氣があつたと記憶してゐる、多分其種類であらう。此溫氣に腐つた牛乳等義理にも食へるものかと思つたが、此邊の而も立派な暮しをしてゐるものゝ常食である以上、食べたところで虎列刺になるとも限りはしまい。こ



Hathor 堂を東南方より見る。後面の壁の彫刻の内、向て左より三つ目及四つ目が夫れ夫れ Caesarion 及 Cleo atra の像であるといふ。壁面より突出せる獅子の首は Gargoyle である。

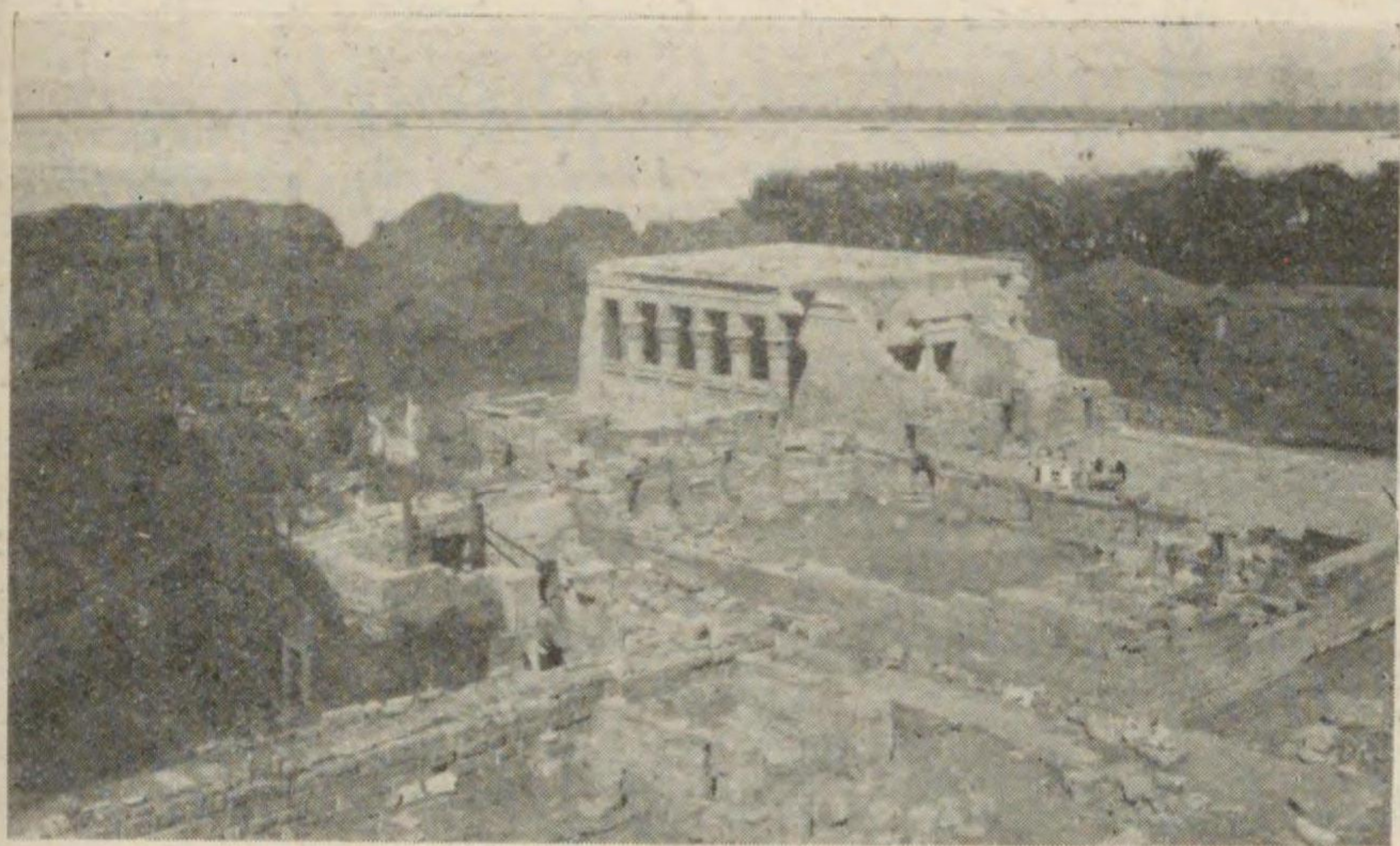
んな機會は再び得難いから、話しの種にしやうと思つて、一所に出て來た埃及麪包へつけて少し味つてみたが、うまいどころか牛乳の臭氣で何とも致し方がなかつたから、いゝ加減にやめたが傍をみると Donkey Boy も案内人も舌鼓を打つて盛んに平げてゐる。蓼喰ふ蟲もすきすきからといふ諺があるから、敢て抗議は申込まぬが、よくあんな臭いものが喰へるなど大に感心をしてみてゐた、此も亦千載一遇。合計二遇であつた。

漸く渡船の用意が出來たので夫れに乗り、ケナ村の Hotel Dandara へついた時に正三時。此屋號は看板をみるなり直に『段段館』といふ當字が出來たので素敵に氣に入つたが、建物はミニアの御殿館と伯仲の間にあり、張玲の木賃宿よりいくらかいゝ位の程度であつた。未だ晝食をして居ら

ぬが先刻の牛乳が胃の中で固まつてゐる様な氣がしてゐてさう大して食べ度くない。其上、連日努力したせい或少しく疲勞を覺え、ねむくなつたから、晝は抜く事にして直に寢臺の上にひつくり返り、氣持よく一寢入して起きたら四時半であつた。顔を洗つて日記をつけ出した時、到底望みがなるとあきらめへメダは金の請求に入つて來た。

彼は先日來立替の金額は此通りといつて、暴夜文字で認めた紙片をひろげ、毎日使つた金額をいふので、夫れをかきつけて計算してみると可なりの金額になる。大分多い様だか故障を申込む餘地もなし、全く手のつけ様がない。信用あるクツク社からいゝのを差向けるといつてよこしたのだから、いづれ其通りなのだらう。蟲が好かぬのは仕方がない。つけがけ等決してせぬ——但し夫れは表面丈で、内證では随分悪い事をする——ものとしておくより他に方法はない。

夕食の時、案内人は私が開路へ歸つた時分には再び引張り出さうとして、盛に誘惑を試みた。先づ自分の家はギザの寶形塔の附近にある、そして景色も極めていゝから、當國退去迄に是非一度來てはどうか、二時間もあれば充分だから、宿屋へ迎へに行くといふ。斷る。では市場へ案内しやう。市場の光景は一寸他で見られぬ、充分話しの種になるといふ。市場なんか少しも興味がないからいやだといふと、今度は他へ誘ふ。何故かくうるさく付き纏ふか、大凡の見當がつかなくもないが、乍憚其手には乗らぬので、少なくとも表面好意的に見ゆる彼の申出を一つも受付なかつた。彼は暫

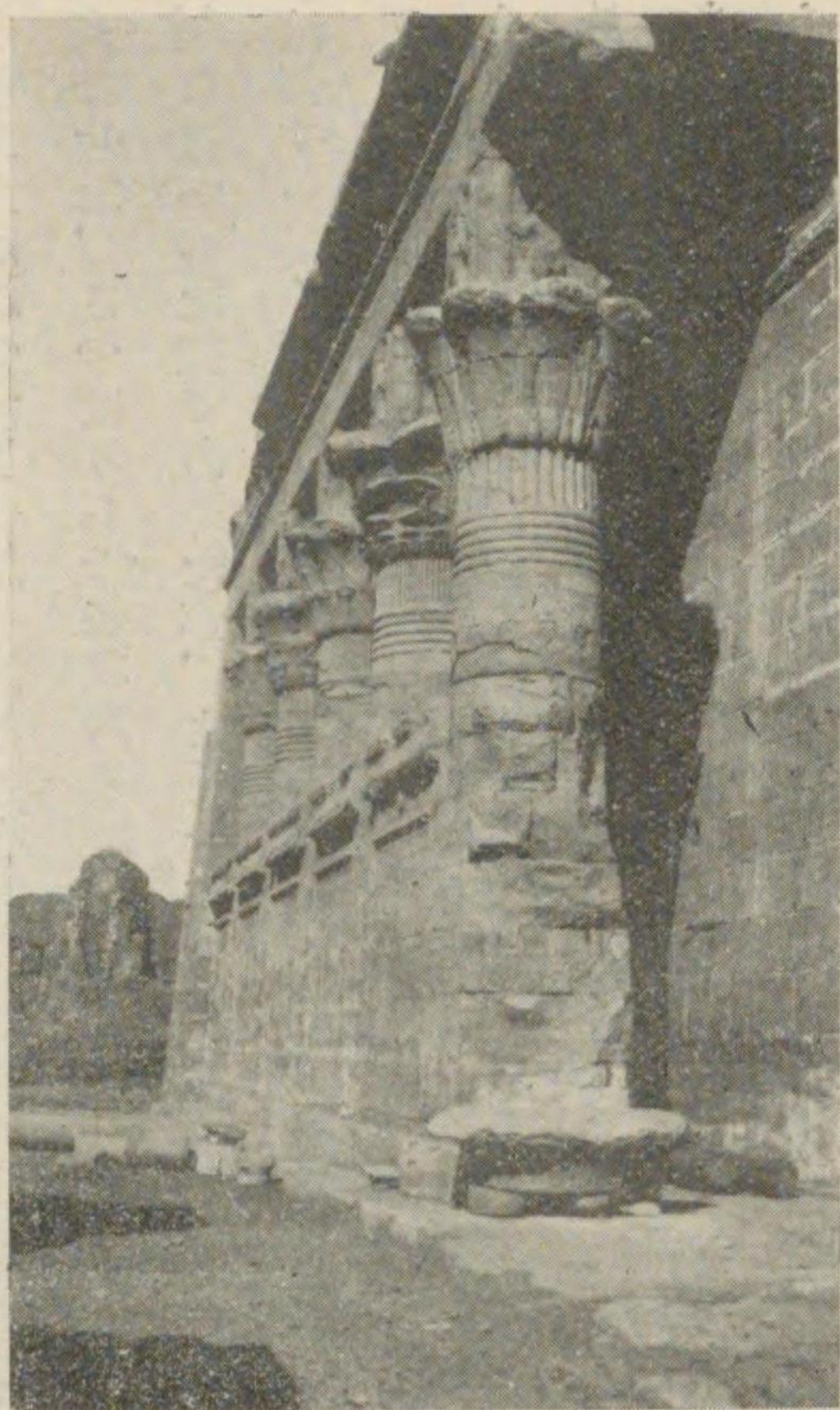


Hathor 堂の玄關上より所謂 Birth House 及びコプト僧庵
廢址を俯瞰す。遠景は内流河である。

時考へてゐたが、然らば九月三日の正午頃牧羊館へ出
向き、五日迄の間に適當な日時を伺ふ事にし度いとい
つたから、私は宿屋へ来るのは勝手だが待つてはゐな
い、折角だがお前の家へ遊びに行く時間があるなら、
一つでも餘計に寺でも見た方がいゝ、ギザは先日一日
かけて充分にみたから、再び行く必要はないのだ。と
いつた。實の所思ひ切つてこれ丈けいつたのだ。もし
たら彼は妙な顔をして黙つて了つた。即ち此談判は私
の勝利に歸したのであつた。

食事を了つた時、彼は突然『ことによつたら、ムス
タファが下に來てゐるかも知れぬから、一寸探してみ
ませう、其間どうかあなたは此處で待つてゐてくださ
い』といつた。私は承諾はしたが、此命令に服従する
程人がよくもなく、間も抜けて居らぬつもりである。
豫て開路の案内人 Ahmed Salah に命じ、二十六日午

後當地迄來る様に Mustapha に宛て、電報を打たしておいたのである、だから先刻からもう來さ
うなものだと思つてゐた所であつた、だから Hemeda が階下へ行つた時分を見計ひ、直にあと
ら下りて往來に出てみたら軒下に卓を間にして彼とも一人背の高い男と話をしてみたら所であつた、



所謂 Birth House。側面の開花複
合柱頭（前圖の遠景に見えてゐる
建物の柱）。

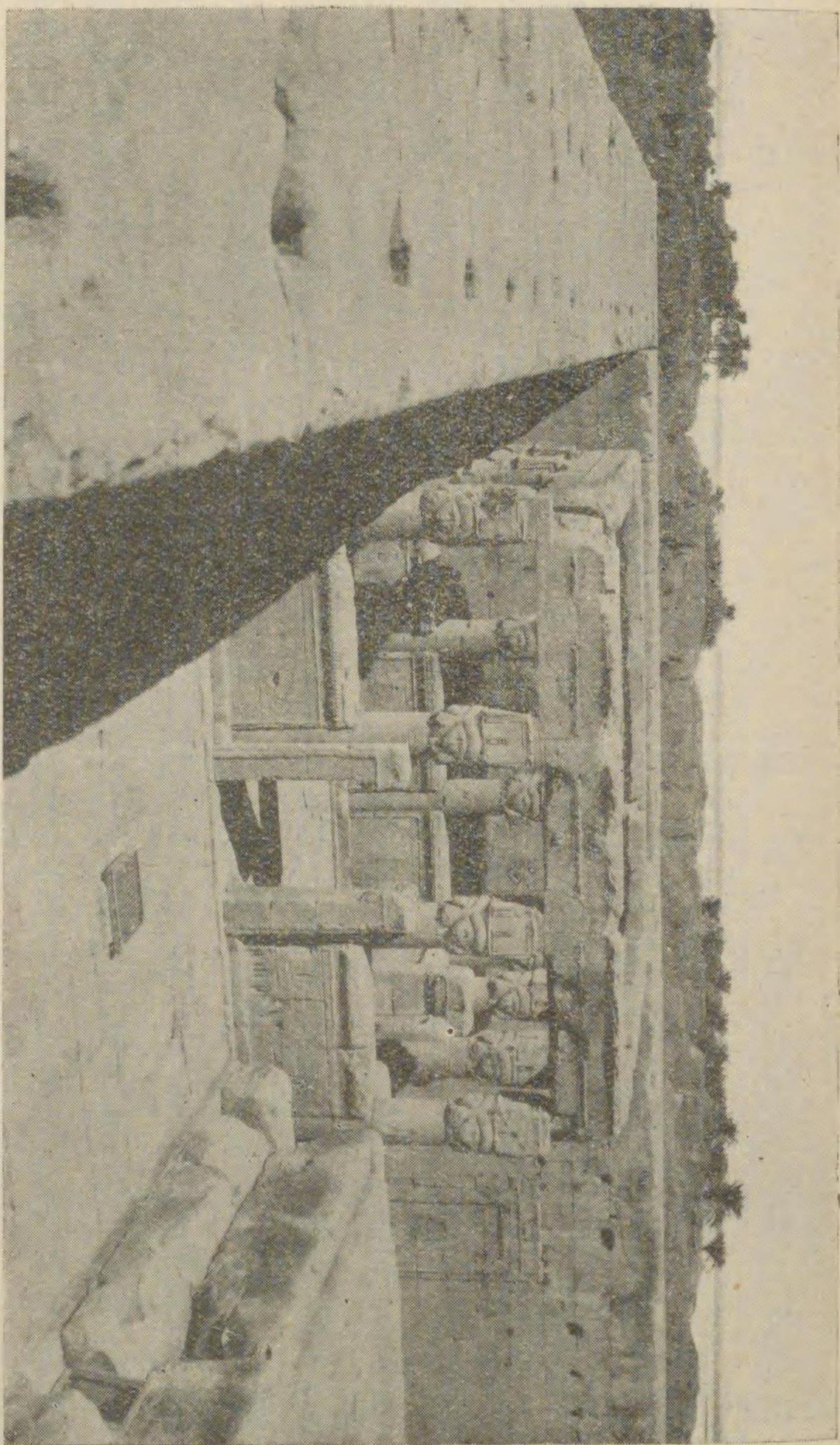
背高男は私をみるや直に立
つて一禮し名刺を出した。
此時こそ全く案外だつたと
見え流石のヘメダは大分に
まごついた様子がありあり
と見えた。してみると割合
に彼も人がいいのかも知れ
ぬ。同時にムスタファはサ
ラーの電報で先刻こゝに着

き、待つてゐましたといつた。斯くしてヘメダの計劃は全く晝餅に歸して了つたのであつた。

新しい案内人が來て、そして其男が——どうも職業的案内人だから格別の事はあるまいが——今
日迄いやいや連れてゐたのより、遙かに好人物らしい顔をしてゐるので、私は大に安心をした。か

うなると、ケナ村唯一の、そして御殿館と大差なき段段館の二階にいつ迄もゐるより、一層驛の乗降場で涼しい夕風に吹かれ乍ら汽車を待つ方が、どの位いゝか分らぬ。

發車迄にはまだ大分に時間があるから、開路行上り列車が出たあと乗降場は私とムスタファとたつた二人になつて了つた。彼といろいろ話をしてゐる間に、偶然(?)今日雇つた Donkey boy が來合せた、さつぱりした暴夜服を着てゐたので風采頗る揚り、最初私の前へ來て一禮した時は誰か判らなかつた位であつたが、よくみたら今日確かに私の驢馬について駆けてゐた男であつた。此男は何やら暫く新案内人と喋つてゐたが、やがて後者は私に向つて『先刻の案内人は驢馬、三十五ピアスタア、ラムネ三本で三ピアスタア、合計三十八ピアスタアくれた丈で、牛乳等を出したが何もくれなかつた』と言つてゐると告げた。してみると紅茶を出したり牛乳を出したりしたのは Donkey boy の家であつたのかと思はれるが、實はこれは少しく變だ。あんな大きな家のよし主人でないにしても、Donkey boy をせぬでもいゝ筈だ。また假に道樂で馬方をしてゐるとしても、頼みもせぬのに紅茶や牛乳を出しておき、其謝禮をあてにするやうな身分でない事は明らかである。且つ今日此男も私共と一所に食べてゐたのだから益々あやしい。故に合計三十八ピアスタアも勿論あやしいが、ヘメダは今日の驢馬賃六十ピアスタア、ラムネ十五ピアスタア、合計七十五ピアスタアを請求したのだから、若し馬方の言を確實とすると、案内人は五割儲けてゐることになるが、萬事



Hathor 堂屋上西南隅小堂。背景は内流河

こんな調子で四日間搾られたらしい。但し無論證據はないのだが、兎に角ヘメダの不都合な事丈けは確かだ、尙ムスタファは『あの男はどうも性質が悪くて、あんな手で今迄にためた財産が、七八千磅といふ噂だ』と附加へた。商買仇のいふことだから多少お負けもあらうが、搾る手段は遙に悪辣の方法を講じたらうと思はれる。私も開路へ歸つてから、うかと彼の言にのつて遊びに行つたら大事になつたのであつたらう。將來埃及遊覽を企てらるゝ諸君は、御注意が最も肝要である。

ケナからラクソル(Luxor)迄汽車は二等へ乗つたが、幸ひに大變すいてゐた、其上に好かぬ男を追拂つて安心をしたせいも、汽車のうちで寝込んで了ひ、ラクソルへ着いたとて起され、下車すると宿から番頭が乗物を用意して迎へに来てゐた。此時此邊の案内人が蝟集して来て、各々私を擒にし様とかゝつたが、機をみてムスタファが『I am your dragonman』——暴夜語 Turgunan 通辯人——と口を出したので、皆な黙つて引込んで了つた。かくて順路 Luxor Hotel へ着し、明朝の時間を約して案内人を歸らしめ、第六十七號室へ無事に納つたのは十一時半であつた、早速紅茶を命じたら、もう晚いからラムネにしてくれといふ。取寄せてみたら流石にこゝのは上等であつたら、一息にのみほして直に床へ入つた。靜かで綺麗でおそろしく氣持がよかつた。

(大正十三年三月十四日稿了)

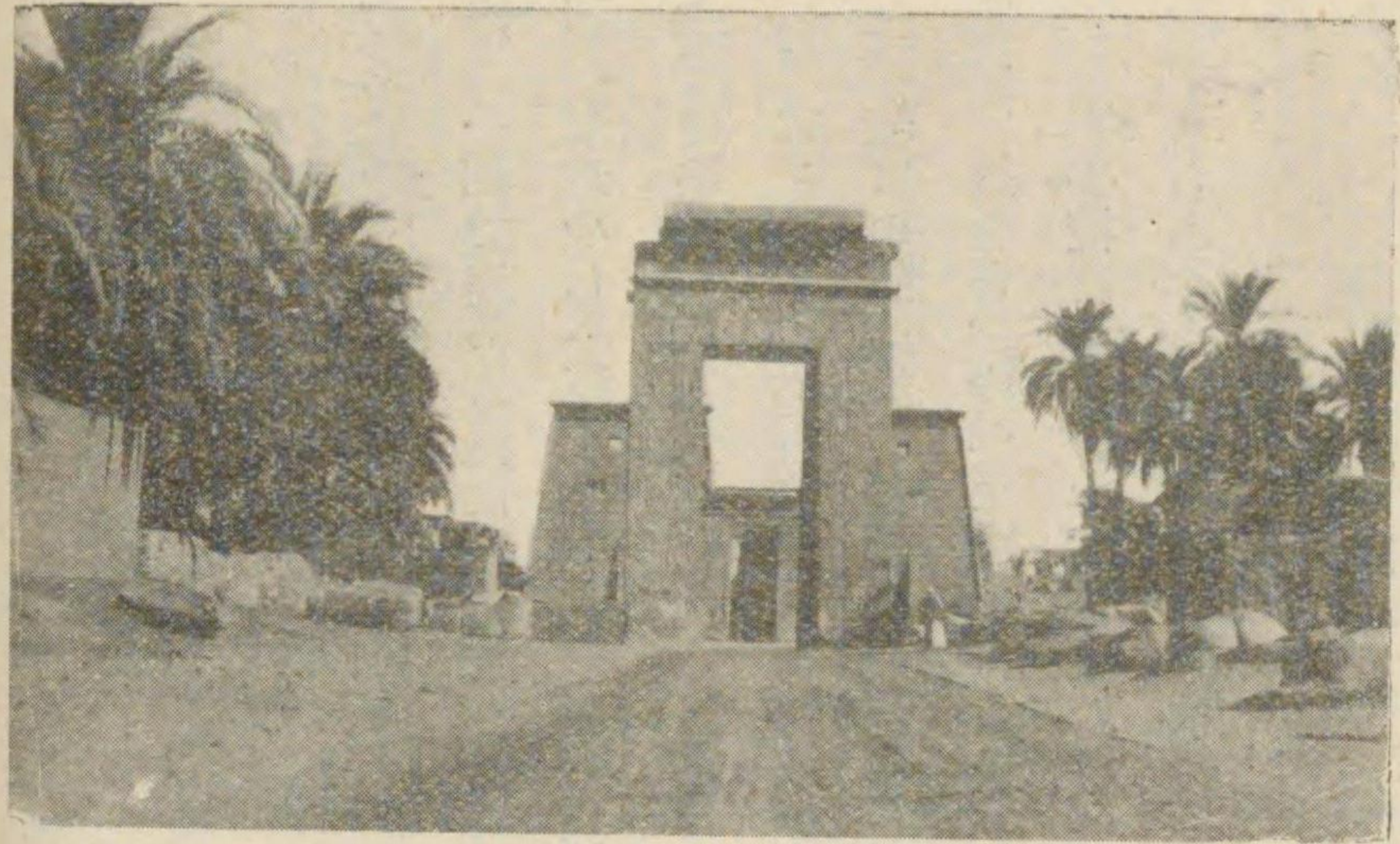
シープズ東岸の一日

十月二十七日

(金曜、好晴)

ラクソルの町からカーナツクの堂迄ざつと二哩位だから、歩いて左程時間もかゝらず、其上町の工合等もよく見えるから其方が都合がいゝ、併し案内人は頻りに馬車を勧めた、同じ馬車でも印度の一部で用ゆる様な Tonga か Ekka 位のものなら知れてゐるが、上等の Victoria だから費用の點が少し心配でないでもない。併し初日から吝嗇坊だと思はれるのも不得策だから、相當に金のありさうな顔をして「うん、馬車にするがよからう」とやつてさう決まつた。

そこで昨夜から注文しておいた辨當と炭酸水を積み込み、午前九時威風堂々(?)宿屋を出かけた、總ての點に於いて張圪より大分に上景氣である。幅は狭いが我國のよりは遙にいゝ道路を北に向つて進むと、やがて右側にある大きな建物が眼についた、きいてみたら米利堅が經營してゐる女子寄宿學校だといつた、こゝには同國人の布教團があるので、其仕事ださうな。どうも米利堅は油斷がならん。金があるに任せ何度も埃及へ遠征隊を送り、砂つばらを穿くり返し、出たものを國へ持つて歸り、博物館へ並べておく。時には墓全體そつくり其儘館内へ建てたのさへある。今だつて紐育の中央美術館の埃及室は大したものだ、あの調子だと今に英國博物館を追ひ越すだらう。其上



Karanac の Avenue of Sphinx. 突き當りは Khons の堂

布教團を派出したり學校を建てたりして少しづつ、胡麻化するのだらう。癢にさわるが指を銜へてみてゐるよりほか仕方があるまい。

不圖氣がつくと道の兩側にスフィンクスが並んでゐる、これが即ち Avenue of Sphinx である。もう来たかと思つて前方をみると大きな門がある、間もなく馬車はこゝで停つた、これは希臘羅馬時代の王 Euergetes I. の建つるところで、漸く前三世紀のものである。此門を入ると直に Khons (Khonsu) 堂の大門 (Pylon) がある。序に書いておくが、手前にあるのは Propylon の如く見えるけれども、復原圖によると Pylon になつてゐる。だからこれは其兩脇にある重厚な梯形の大きな塔が壊れてしまつたのであらう。

實際、私は生れて初めて實物の大門を観たのである、而も夫れは割合に形が完全に残つてゐた、且つ此堂は建築歴

史の挿畫等で以前から大分お馴染になつてゐたから一層懐しく思つた。奥へ進んで行つたら、こゝでまた一種のドーリヤ式原柱に出遇つた。内部を一通り観て外に出てアモン大堂に向ひ、遂に其正面スフィンクスの行列の間の、トレミー時代第一大門の前に立つた時、其意外に大きいのと、此一



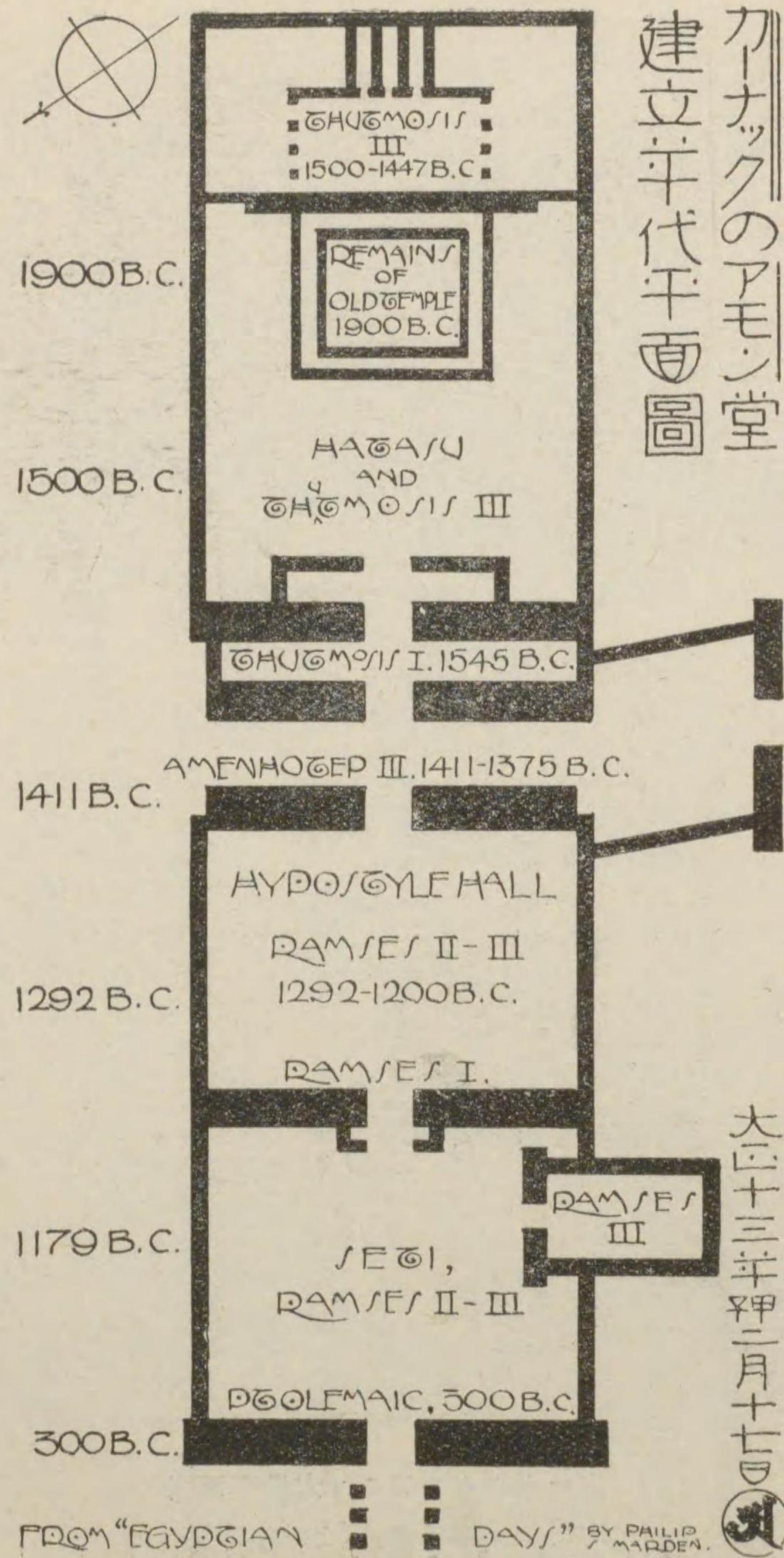
コンス堂に於けるドーリア式原柱

區劃内に中帝國以降前三世紀に至る約一千六七百年間の歴史、そして其のうちには紅一點の Hatasut 女王も出て来る此大堂を、今から充分に觀覽する事が出来る幸運を感謝せずには居られなかつた。と同時に其大門が随分ひどく壊れてゐて、Pylon の佛が殆んどなかつたのに少なからず驚いたのであつ

た。

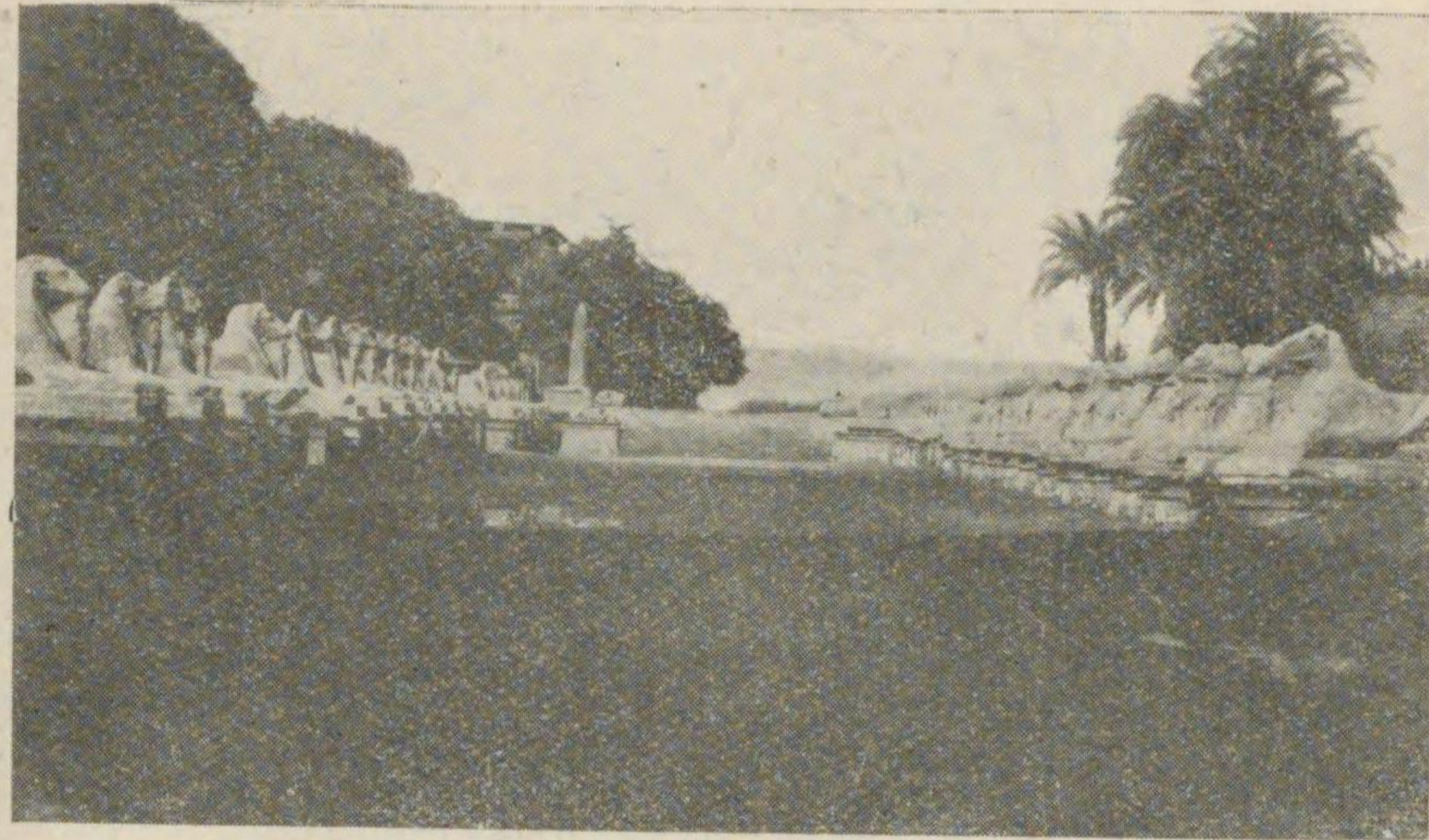
入口の鐵柵は直に番人によつて開かれた、入るとそこは第一中庭であつたが、前方をみると其昔左右前後に合計十六本の柱の立つてゐた Taharka の所謂 Kiosk は、今たつた一本の柱が残つて

シエズ東岸の一日



カーナクのアモン堂
建立年代平面圖

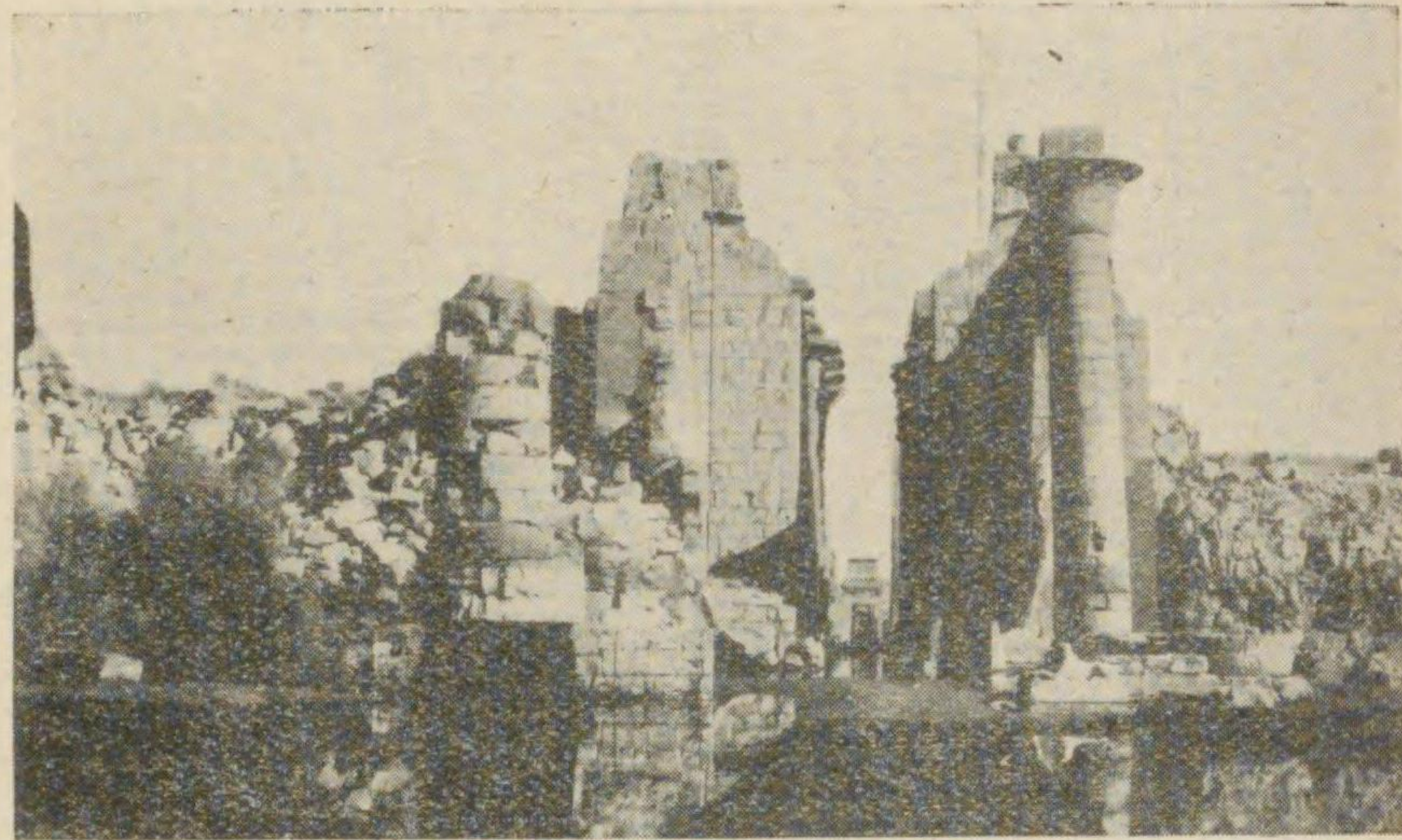
大正十三年甲二月十七日



Karnac の Amon 大堂前 Sphinx の行列

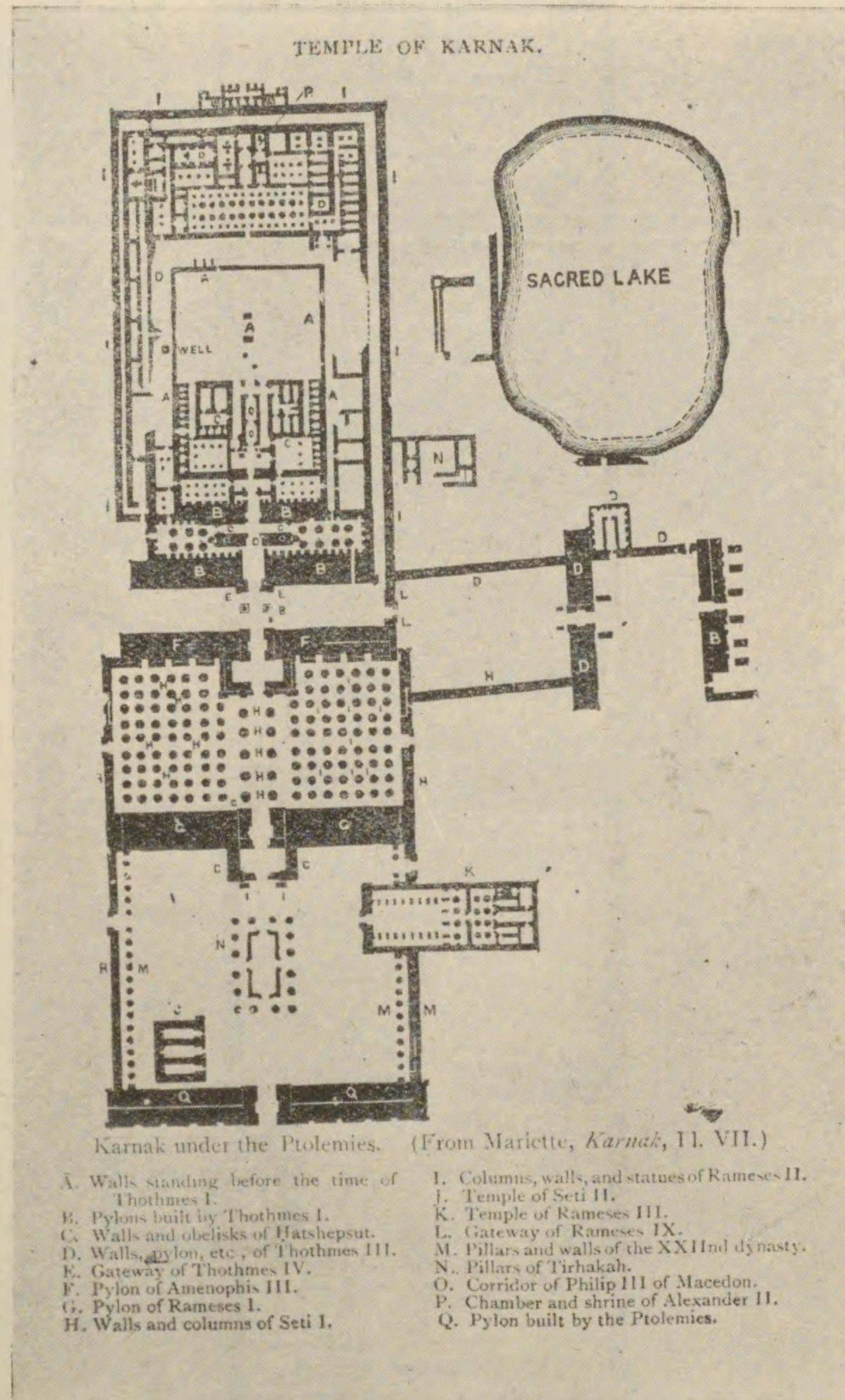
ゐる許り、第二即ちラムセス一世の大門兩脇の大塔は殆んど全部倒潰して混亂に陥り、たゞ地上累々たる石塊が亂雑に積まれてゐて、あれが大門兩脇の塔の崩れたのだといつても、容易に首肯出来かねる位にひどくなつてゐる。そして此 Kiosk の前には凹むところに一面に水が溜つてゐて而も其水たるや、大分永い間あると見え、まるで池か沼の様で到底向ふへ渡ることは出来なかつたから、斷念して遠方で且つ逆光線ではあつたが、遙に見ゆる奥の院の、コバルト色の雲の棚引ける方向に向つて敬意を表し、更に第一大門の上——といつても大分に崩れてゐるから、これは勿論今の頂上の意味である——へ昇つて西側をみたら、内流河を隔て、遙にリビアの褐色をした山岳を望み得た。こつちは丁度順光線で實に明瞭に見えたのであつたが、反對に東方を見下したら、此大堂及び其の附近を俯瞰し得たけれども、たゞ壊れかけた幾つかの大門兩脇の塔丈けが眼立つた





Amon 堂の大中庭 (東方を望む)

けで、あとは全部ごちゃごちゃで、何が何だか殆んど判らなかつた。
 此所を下りて大堂の北側の、發掘した土や何かで凸凹の甚しいところを歩き、プター堂をぬけて大堂の後面即ち東側へ出た、其とりつきにあるのが Thutmosis III. の葬禮堂であるが、殆んど全部壊れてゐて僅かに壁が少し許り残つてゐる丈けであつた。次に後方の一劃へ入つたが、こゝにも亦十六面柱も Tent Pole 柱頭の柱もあつた。此邊を一通り済して、次は中央の一劃が目的である。こゝにはハタス女王の室もあるし、同女王及び Thutmosis I. (Thotmes I.) の方尖柱、神聖なる蓮を陽刻した方柱等いろいろある。尙こゝに一大方尖柱の頭部の幾分が倒れてゐた、若し私が今 Surt Case へ入れてラクソル館に置いてある礬水引薄美濃と蠟墨さへ持つてゐたら、其面に陰刻してあつた象形文字を全部摺る事が出来たのに、こんな上等な獲



カーナツクのアモン大堂平面圖
(『埃及蘇丹便覽』より複寫)

物があらうとは知る由もなかつたので、全く惜しい事をしてしまった。其代りに私が其一端に耳をつけ、案内人が反対の端を軽く敲いた音をきかされたが、まるで金属を敲いた時の様な高い細いよく響く音が聞こえた。丁度羅馬の S. Giovanni in Laterano 寺の洗禮堂に於いて扉を開閉する時、其軸が軋んで一種の音を出すのを聞かされた様に、こゝでも少しく田舎漢抜ひにされた傾があつた。

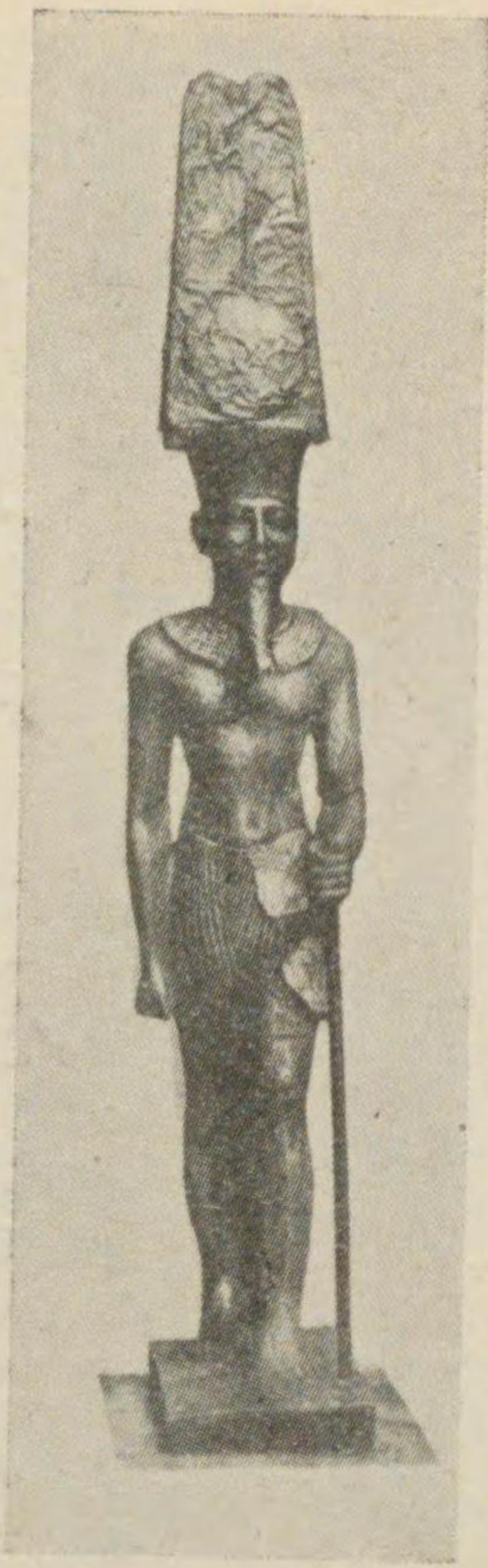
最後に第三大門 (Amenophis III.) の南塔へ昇り、近く紙草薺の形をした柱頭をみたが随分大きい。人なんか到底及ばぬ。先づ其頂板迄入れると、ざつと大人の二倍ある、柱身は周圍二十七尺餘といふから直徑にすると八尺五六寸になる。若し夫れ中陣の二列十二本の大柱に至つては、其直徑約十二尺、高約七十尺、柱頭高約十一尺といふ素晴らしい寸法のものであるから、我國に於ける世界第一の木造建築だといつて威張つてゐる東大寺大佛殿の柱なんか比較するのも馬鹿氣てゐる。が併し斯様な數字で寸法を示された丈けでは大して感ぜぬ、行つてみるに限る。直徑二間の柱といへば我國田舎間の八疊間一杯になる。柱頭の高亦約二間だから、普通の家であつたら八疊の座敷へ此開花柱頭丈けが入らぬのである、かゝる寸法の柱合計百三十六本が此列柱堂に樂に建つてゐるのであつて、試みに其大きさを調べてみると、幅内法三百二十尺、奥行同百六十尺だから、其面積約千四百二十二坪となる、そして此列柱堂の面積は大堂全體の約七分の一であるから、共全面積は極く内輪に積つても約一萬坪、境界壁内——即ちコンス堂をも取り入れたる境内——東西約四町四分、



カーナツクのアモン大堂に於ける蓮柱

南北約四町七分、即ち面積方約二十町六八となるのである。

今此を我國奈良時代の大寺に比するに、當初の大佛殿は現今の曲尺で約一三一五坪餘(奈良尺にて桁行二十九丈、梁間十七丈) だつたし、今ので約八七二坪である。木と石と材料は勿論、其他種々條件は異なるが、かれと我とは約二千年の差があり、堂の面積は當初のを以てしても、僅に我は彼の約百分の十三にばかり當らぬのである。次に其境内を比較してみると、約方一里を占領してゐた東大寺は姑く措き、自



ラ人の複製
アメン神の立像
神像の文化

餘の諸大寺のうち、西大寺、(東西八町、南北四町、東北隅の方一町を除き、境内三十一町) 及び興福寺(内廓方四町、南北計十二町を) 西北門前の四町合算して二十八町)の次に位するので、元興(方四町に北側の四町を加へ二十

町)・大安(東西三町、南北五町)・薬師・招提・菅原・秋篠の諸寺は何れも及ばなかつたのであつた。

此大堂が、假令當初は僅に總坪數約一千四百坪餘の小規模のものであつたにせよ、歴代の帝王によりて多少なりとも増築せられ、遂にトレミー時代に至り、斯る程度に迄擴張せられたことは、洵に驚歎すべきであつて、此事實はまた一方に於いて、太陽の神なる Amen-Ra (一々 Amon-Re) 即ちアモン神 (Amon, Ammon, Amun) が、シープズに於いて如何に崇拜され、永い年月の間信仰

の對象となつてゐたかを物語るものである。

午前の仕事はこれで先づ一通り了つた。餘りあれもこれもと頭の内へ詰め込んだせいか、恰も初めて正倉院を拜觀して外へ出た時の様に、たゞ頭がぼんやりして萬事夢の如くであつた。そこで少しく頭を休める必要が起つたから、第七大門の北側、丁度日蔭で涼しいところに腰を下ろし、眼前に大列柱や方尖柱を眺めつゝ、ラクソル館より持參の辨當を開いた。

暫く休憩の後第八、第九、第十大門及び Amenophis II. の堂をみて南側境界壁上に昇り、アモン堂を大觀して其東南隅にある神聖地 (Birket el Mallaha = Lake of the Salt Pit.) の邊に出た。此池の西北隅に近く Amenophis III. が Amon-Khepre (蟲頭人身の太陽神) に捧げた赤花崗岩の大甲蟲がある。此甲蟲は普通 Scarab と呼ばれ、昔埃及に於いて大に尊崇されたのであつて、アモン神も時には蟲頭人身の形で出現したこともあつたのである。此蟲は其形我國のカブトムシ (Xytrupes dichotomus, L.) 一名サイカチムシの雌と殆んど同じで、雌雄間に大して相違のない蟲である。何れも金龜子科 (Scarabaeidae) に屬するものだから似てゐるのである。此彫刻は寫生的に中々よく出来てゐて寫眞に撮り度かつたが、水があつて正面からは駄目だし、岸からでは後ろ向きの上に逆光線で迎ふものにならず仕方なしに見合せた。

夫れから序だから Mut 堂と Mont 堂とへも行き度かつたが、案内人はどちらも今もう何も無い

といつた。ベデカには平面圖が立派に出てるのだから、何かありさうに思つたので是非行つてみると主張したが、夫れよりも Luxor 堂を観た方がいゝだらう、實際本の挿圖と實際とは大分に異



蟲頭人身にて出現せるアメン・ラーと女神アイシス (エヴェリン・ポール筆) (『古埃及神話傳説集』より複製)

ふといつて案内人も言ひ張つた、さうなると或はさうかも知れぬといふ氣もおこり、旁々暑熱と疲労と兩方から攻められて意志頗る薄弱となり、遂にやめて了つた。

そこで一先づ外へ出て更に一回轉して再び正面の大門を入り大中庭の具合を再び観たが、此時丁

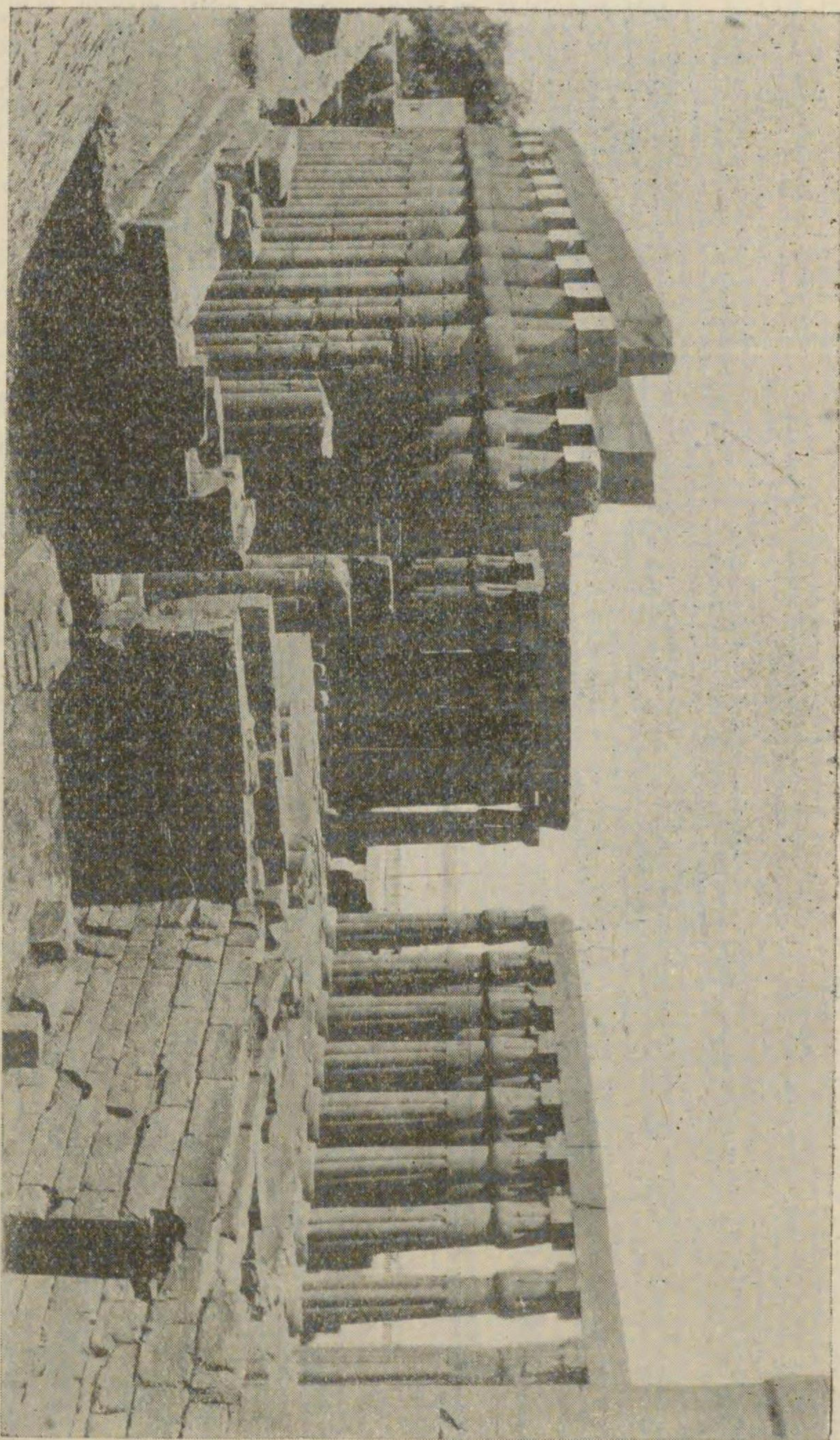
度光線もよくなつたので、こゝから第二大門の方を觀た寫眞を撮り、愈よ思ひ切つて退却と決め大

堂に永久の別れを告げ、ラクソル堂へ向つた。
ラクソル堂は内流の沿岸に建つ、第十八王朝の天子 Amenophis III. の創始するところである。正門の大門からは入れぬから、西北側の中程へ廻らなければならぬ。この側は即ち河岸で、午後行くと全體に西日を受けて、割合によく残つてゐる紙草の集合蓄柱及び開花柱が、まことに氣持よく見える、實際、これ程集つてゐるところは他にはあるまい。

前記川岸の入口を入ると、アメン・フキス三世の中庭に出る、こゝからラムセス二世の中庭へ行く間二列に建てる十四本の紙草の開花柱は、其大きさに於いては勿論アモン堂の夫れに比すべくもないが、如何にも整然として其輪廓も頗る明瞭に見える。こゝから逆に戻つて堂の西南部には尙種々見るべきものがある。

ラムセス二世の大中庭の一部柱の間に、此の天子の立像がある。こゝは私の行つた時には、二尺以上の深さに水が溜つてゐて到底歩いては行けなかつた。併し番人は玩具の様な小さい木船を浮べておき、希望者をのせて自分は水の中を押して行つて見せるので、私もこの方法で一通り試みた。元より船へ乗たからには別に所謂お心持も出すので、これは當然番人の懷中へ入るのであらう。だから悪くとると、態々水を溜めたとも思へる。即ち雨が溜つたのを大事にとつておいて夫れによつて番人が餘分の収入を得るのかも知れぬ。

この小舟で見物してゐるうちに、西南隅に近き壁面に於いて、殿堂の正面即ち大門の圖が陰刻し



メタンル塔の列柱

であるのをみた。元來大門兩脇の梯形塔の正面にある凹所——例へばカーナツクのコンス堂の夫れに於いてみるが如き——は、旗竿を樹つるに便なる様に造つたものだと思つてゐたが、こゝに初めて繪にある通り旗竿を此凹所に沿ひて樹てゝあるのであつた。拓本だつて樂にとれるところだが、前記の理由により割愛しなければならなかつた。

此中庭の先きが大門であるが、其大門を表から一寸入つたところ、即ち此中庭の東の隅の一部分は、新しく回教の Abou el-Haggag 寺が喰ひ込んでゐる。此の現象も亦各國共通だから敢て珍らしくもないが、我國の寺と異なり何れも石造だから、互に喰ひ合つてゐるところ新舊相並んで甚だ奇觀である。

大門の前には、此中庭と同じくラムセス二世の像があり、前方尖柱もある。此等を觀やうと思つたら、どうしても外から廻らねばならぬ。寫眞を撮らうと思つたら朝早く行かぬといけない、さなくば日没位の時でないといふ、間はいつも光線の工合が悪い。

* * * * *

アモン堂からラクソル町迄は、今朝雇ひ入れた馬車で歸つて來たが、町のある骨董屋の前で馬車が停つた。これはムスタファが停めたので、彼は私に此家は自分の伯父の家で、極く正直者で決して模造品は賣らぬ、何れも正しいものばかりだから、兎も角も一通りみてくれといつた。見たつて

どうせ買はぬのだからと思つて、店頭を一巡してさつさと出て了つた。出ると直に硝子玉か何かの首飾りを賣りつけやうとする、うるさく付き纏ふので知らん顔をしてゐると悪口雑言をする。最も奇抜だつたのは蠍と毒蛇を嚙いてみつけて捕へてみせるといふ男であつた。折角だが兩方共よく知つてゐるから捕へてくれないでもいゝ、そんな物は大嫌だといつたら膨れ面をして行つて了つた。

寫真屋へフキルムを買ひに入つたら、是非現像をさせて呉れといふ。切抜けて今度は繪葉書屋へ行つたら、そこが寫真屋兼業であつて、混血の番頭か何かと『あなたは十一の二十五で寫しましたか夫れとも十一の五十ですか』ときくから、返事をせず繪葉書を撰つてゐると、傍へ來てうるさくきく、癩に觸つたから語氣荒く『おれの思ふ通りに寫したんだ、寫つてゐやうとゐまいとおれの勝手だ』といつてやつた、そしたら彼は『話したつて別に差支はあるまい、露出時間と絞りの關係は中々難かしいから、忠告をして上げやうと思つてきいたのだ』といつた。『親切はありがたいが多年の經驗でやつてゐる、まだ埃及では一度も失敗したことがないんだ』と言つてやつたら、あきれたと見えて遂に沈黙して了つたが、私がこの店を出て堂の正面の方へ行つたら、番頭があとからついて來て、兎も角もために一本丈け現像させてくれといつていつ迄もついて來た。併し此男もまた例の秘法で撃退したが、一つでも仕事をとらうといふので其しつこいことは、到底一度出合つたものでなくては判らぬ、丁度倫敦の濃霧がいくら話をしても話丈けでは判らぬと同じ様に。

今日突然右眼周邊角膜潰瘍にかゝつた、昨年出がけに病つた丈けで幸に今日迄無事であつたが、悪い時になつたものだ、旅中で湯が不自由だから仕方なしに硼酸水を作り冷罨法を初めた、生兵法大疵の基位のことでは心得てはゐるが、兎に角硼酸だから大した事はあるまい、やらぬよりいゝだらうと思つて始めたのである。

斯如にしてラクソルの第一日は過ぎて了つた、餘すところ二日ほかない。この二日でいやでも左岸を一巡せねばならぬのである。
(大正十三年四月十四日稿了)

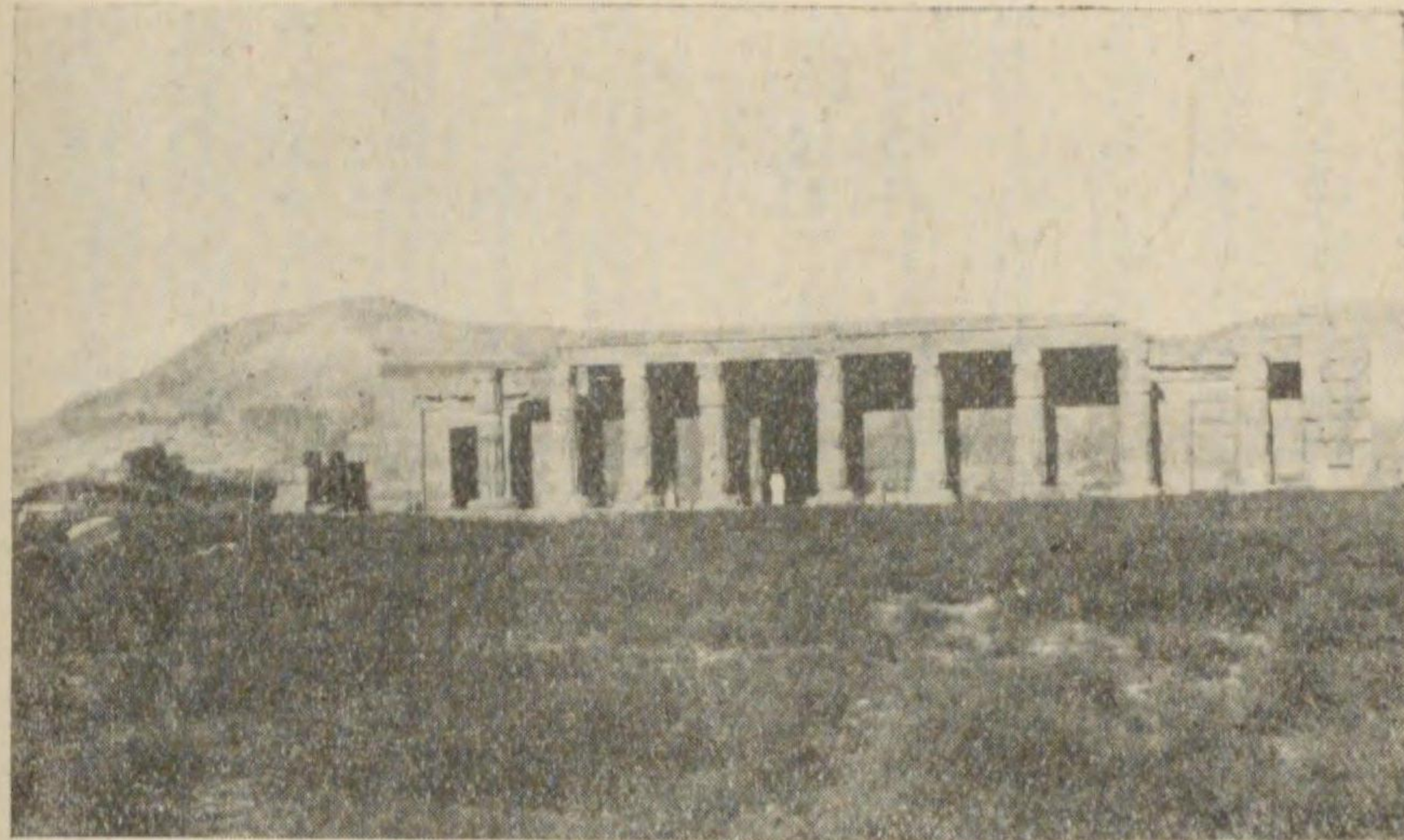
シーブズ西岸の第一日

十月二十八日

(土曜、好晴)

七時四十五分に宿を出た。勿論このためには前夜から七時に朝食と同時に辨當を用意する様に命じておいたのであつた。今はまだ季節以前だから宿はがら明きで、客はたつた三人きりであつた。こんな有様だから、朝少し早く食事をすると、食堂はいふ迄もなく私一人である。

私の食卓附の給仕人は、こんな時を狙つてゐたものと見え、料理を運んだ序にあたり人の居ぬのをみすまし、氣味の悪い笑ひ方をして『毎日中々御勉強ですな。昨日の辨當には不都合のところはありませんでしたか、今日も入念に作つておきました、どうかあなたの辨當を作つた給仕人を忘



クルナに於けるセトス一世堂

れないでください』と揉手こそしなかつたが、人の顔を覗く様にして臭いいきを吹きかけ乍らいつた。丁度此時給仕頭が食堂へ出て来たので、彼は急に澄して知らん顔をして往つてしまつた。いやな奴だが憎氣のない男だ、開路の牧羊館の給仕より稚氣を帯びてゐる丈け可愛らしい。

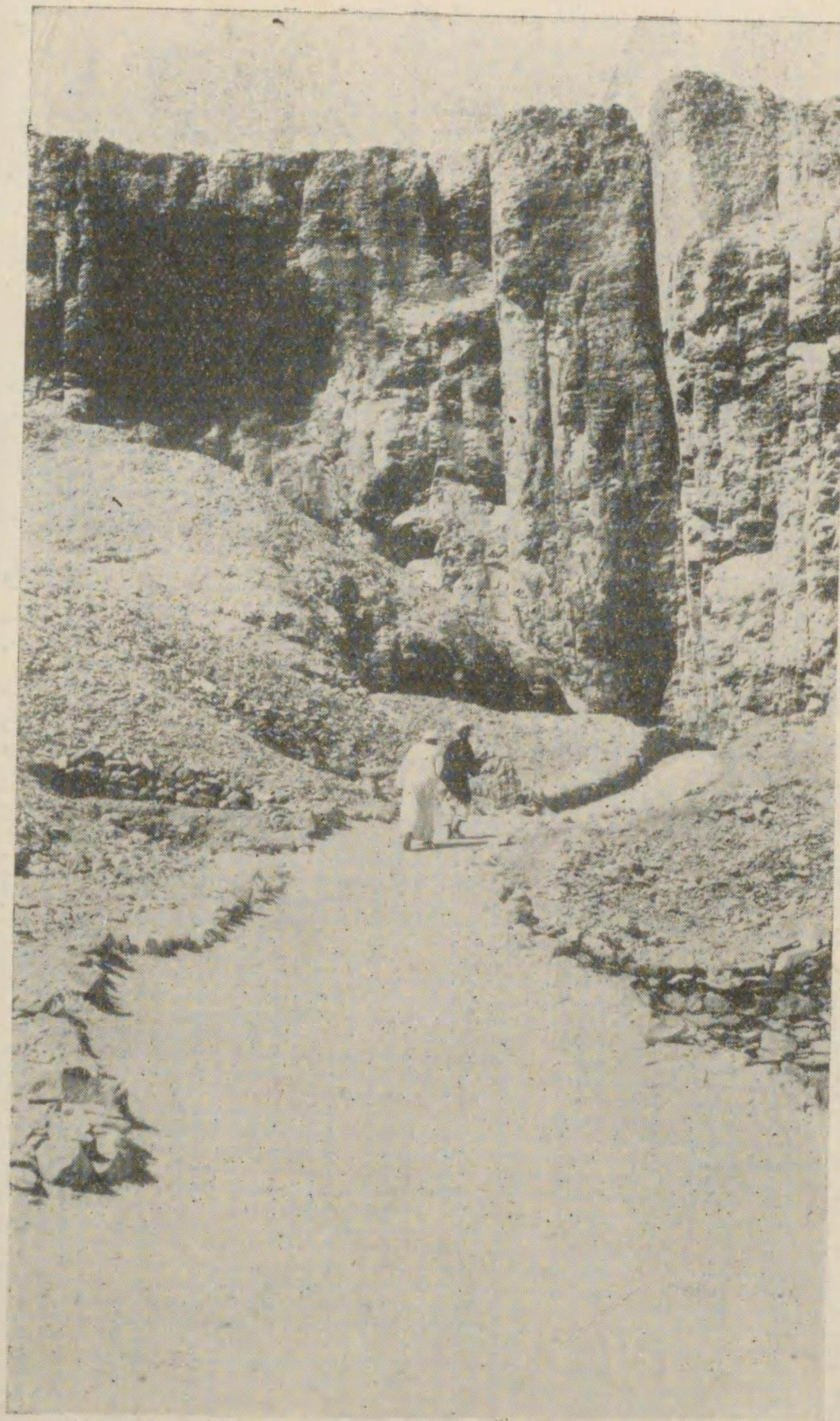
辨當籠は此男の手から案内人に手渡された。案内人は夫れを後生大事に抱へ、昨日みたラクソル堂の裏手から川邊へ行くと、そこに小船が待つてゐたのでつたら、僅に五分で對岸へ着、上陸すると驢馬が待つてゐたから夫れへつた。今日のは鎧があつて上等であつた。玉蜀黍畑の間を駆ること暫時にしてクルナに於けるセトス一世堂の前に出た。渡船や驢馬は前以て案内人が手配をしておいたのか、或はタクシーや辻車の様に客待をしてゐたのか、其邊は聞き洩らしたが、大分連絡の工合がよかつた。

當堂はセトス一世が父のラムセス一世記念の爲めの建立

したもので、其子ラムセス二世此を完成して、更に父なるセトス一世即ち創始者に奉獻したものである。だから此堂は言はゞ Cenotaph 卽ち、一の記念堂に過ぎぬのである。大門や中庭は既に破壊されて了ひ、今残つてゐるのは正面十本の柱の内九本だが、何れも紙草の集合柱である。

現在の正面中央の入口を入ると、直ぐそこが列柱堂で六本の柱が立ち、其左右に小室が澤山に配置せられてあるが、こゝで一つ面白いことは、此堂の工合がある點に於いて、アバイドスのセトス一世堂によく似てゐるといふことから、恐らく同一の美術家が計劃をしたのであらうといふ説がある。かゝることも亦到る處ありがちで、殊に昔し技術者の少ない時代にはさうであつたのである。たゞ其名が傳はらなかつたから、確言が出来ぬといふ迄である。其經過の年代に於いては比較にならぬが、大和の靈山寺本堂と藥師寺東院堂とは、弘安六年と同八年とに、同じ大工棟梁の未清と人夫頭の國重とが建てたと同じで、甚だ面白いことと思ふ。

一通見物をしてから裏へぬけ、こゝから北へ進むと Drah Abu'l Neggah の墓地の脇を通る。こゝはシープズに於ける最古の墓地の一であるか、大部分は破壊されて了ひ、今丘の斜面にある窟墓は新帝國時代以降のものだといふ。こゝから先きは岩石岬々、往々にして絶壁をなせるリビア沙漠の山脈の間の狭い溪を大きく大きく迂回すること約一里にして所謂『王陵』(Bihâr el-Mulûk) に出るが、此間烈日に直射せられて驢馬へのつての旅行は、決して樂な仕事ではなかつた。綠色のも



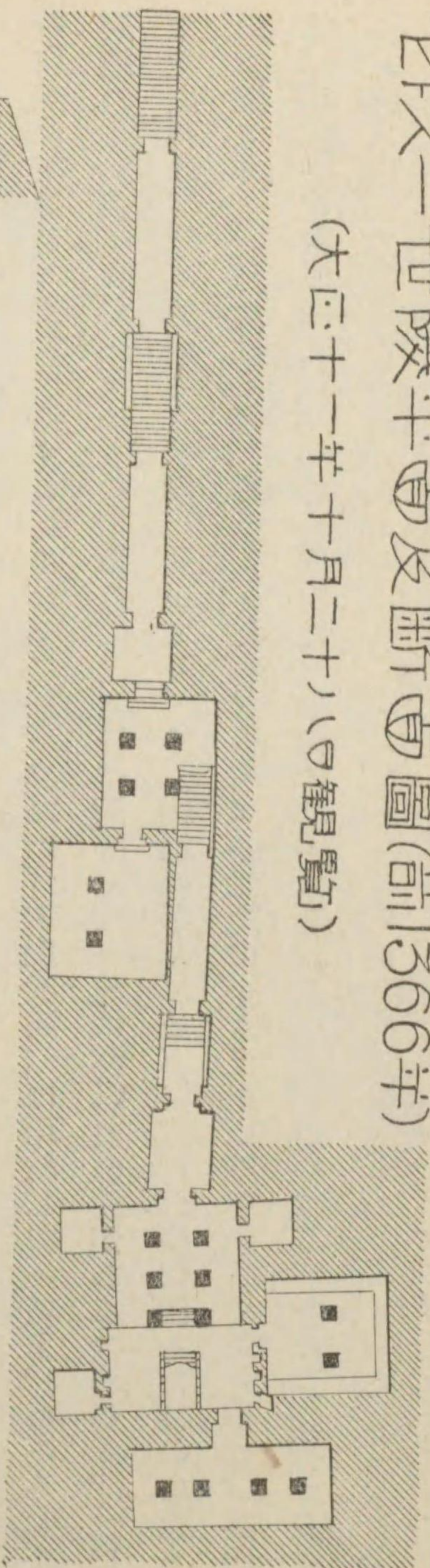
「王陵」に於ける Amenoph's II. 陵への道(午前十一時頃の光景)。黒衣の人物は墓番で、白衣は私の案内人 Mustapha.

のといつては一つもなく、總てが褐色で一滴の水もなく、上の方には青空が帯の如く見えてゐる乾び切つた所に、どういふものか Nymphalidae の蝶が一つゐたのには全く驚かされた。こんなところでも食物があるのか、夫れとも紛れ込んだのか、或は驢馬の糞が目的か、兎に角クルナの堂を出てから『王陵』迄の間で、動物では此蝶をみたばかり、澄み渡つた空には生憎鳥一羽飛んでゐなかつた。

漸く王陵に着いたので、番小屋の下で驢馬を下り、澤山の墓の内第九(ラムセ) 第十一(同三)、第十七(セトス) 及第三十五(アミノフ) の四つ丈けをみてあとは割愛して了つた。此等孰れ劣らぬ大したもの、残念ながら我國の古墳なんか到底傍へもよりつけない。孰れも横穴で入口を入つてから自然に下降して玄室に達する様になつてゐる、だから丁度我國のに比較してみると、おそろしく美道の長い古墳と思へばいゝのである、而も柱や壁等には一面に極彩色の繪があるのだから、愈て我國のは規模に於いても裝飾に於いても、また経過の年月に於いても、百歩位譲らなければならぬ有様である。茲には参考に資せんが爲め、セトス一世陵の平面及断面圖を示しておくから、其内部分が如何に複雑であるかと判ると同時に、如何に地團太を踏んで悔しがつても、我は到底彼に及ばぬと諦めるにも都合がいゝであらう。

其主要なる窟墓内は何れも電燈の設備があつて觀覽に便ならしめてある。殊に第三十五即ちAme

セトス一世陵平面及断面圖(前1366年)
(大正十一年十月二十日(日)觀覽)



(From Lepsius, DENKMÄLER, Abth. 1, Bl. 96.)

大正十三年三月九日

クラク社出版 埃及蘇丹使覽より轉写

nophis II. 陵の玄室には、今尙埋葬當時のまゝの状態に於ける此王の木乃伊が置いてある、案内人は得意になつて其説明をする。此王の崩御は前一四二〇年だから、木乃伊は今を距る約三千三百四十餘年前のものである。

私は British Museum に於て Men-ka-u-Ra と推定されてゐる木乃伊及其他をみた。開路の Egyptian Museum では Sethos I. や Rameses II. (the Great) の夫れをみた。如何に保存並に學術研究に資する爲めとは言ひながら、苟も古代の帝王であつた人々の尊き遺骸を硝子箱に入れて曝しものにするとは怪しからぬ事である。正に人道上の大問題である。必要ならばナポリ博物館の特別室の様に、相當の研究家のみを入れる事とし、有象無象には見せぬ様にした方がよからう。いつ迄もあんな暴戻なことをしてゐると、廻る因果といふことがあるから、いつか我身の上になんで來ると覺悟せねばならぬ。實際、あの硝子箱に入れてある乾びた人間のひもの、而も夫れが古代の帝王であるのだから、かうなつては the Great も糸瓜もあつたものではない。到底正視するに忍びずして、いゝ加減に瞥見しておいたが、今日の此の尊骸も同様にくくにはみずして、せめても思つて心からの敬禮を一つしておいたのであつた。

尙もう一つ此王陵に就いて記さねばならぬ事がある。丁度私共が初めてこゝへ着いて驢馬を下りた所、即ち道路から番人小屋へ上らうとする邊に於て Lord Carnarvon と Howard Carter とが

豫てから土穿をやつてゐたが、遂に其勞空しからず、此時から約一ヶ月後、即ち十一月下旬に於いて、世界を震撼させた大発見をしたのであつた。夫れはツータンカーメン王——ほんとうの發音はツート・アंक・アーメンださうな (Tutankhamen, Tut-ankh-Amen, Tut-enkh-Amun) ——の陵を掘りあてたので、此陵からは種々なる珍寶家具の類が澤山に出て、學術上にも多大の貢獻をしたと同時にうんと金も儲かつたのである。私は孟買市へ上陸して間もなく新聞紙で大発見の輪廓を承知し、こんな事ならせめて入口の様子でもみて來たのに、今更何とも致し方がないとあきらめて了つたが、昨年三月號の *Scientific American* で稍々詳細なる発見の記事をみ、再び思ひ出して一寸行つてみたい様な氣がしなくなつたが、更に本年三月八日の大阪毎日新聞——朝日も同じ。其他のは見ぬから知らぬ——は『牡羊をにへに埃及の發掘式』と題し、ラクソル六日發の電報を載せてあつた。文に曰く

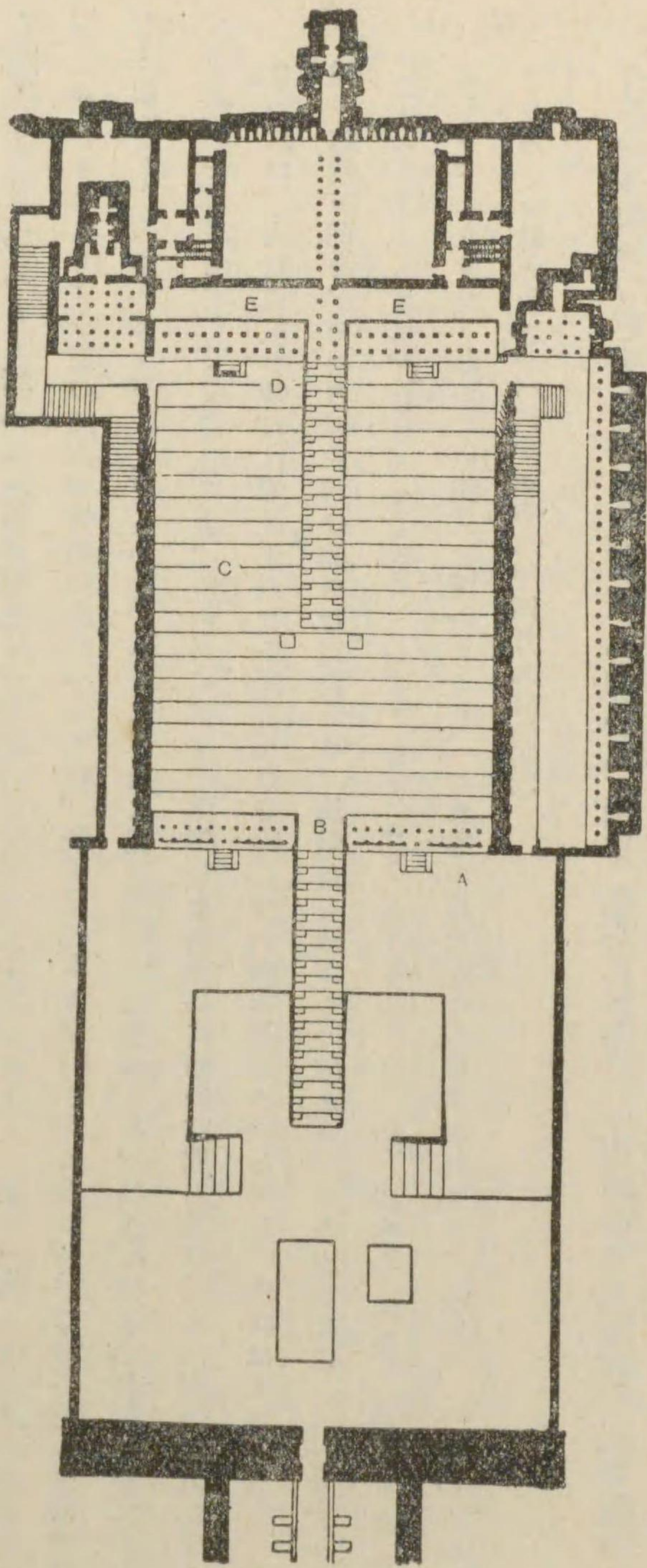
(埃及ラクソル六日發國際) 世間を騒がした古代エジプトのツータンカーメン王の墳墓は本日午後埃及政府で發掘の式を挙げ金色燦爛たる柩を内覽に供した、埃及駐在英國代表アレンビー元帥を始め顯官約二百名は特別列車で式場に臨席した、式は善美を盡し古代王朝時代の慣習に隨ひラクソル市の中央で二頭の牡羊を犠牲にあげ市中は各戸國旗を掲げ夜は盛宴を張り煙花を舉げた、併し墳墓の眞の発見者ホワード、カーター氏及び其の隨行者は一人も臨席しなかつた。

こゝに於いて私は三度思ひ出して愈よもう一度行き度くなつた、ラクソル滞在の三日間の出來事を一つ残らず思ひ出し、地圖と日記とをひろげて、開路市から特別列車で英國代表者が着した時の光景を想像したり、夜の盛宴は屹度川に面した特等旅館の *Winter Palace Hotel* であつたらうと思つて見たり、引いては歐米列強の埃及に於ける發掘事業を羨しく思つてもみたり、夫れから夫れと際限もなくいろ／＼考へさせられた。

ツータンカーメン王の陵及び其副葬品については、既に單行本も發行されてゐるが、二三年前の分は雑誌 *“Wonders of the Past”* pp. 21—35, 87—95 に澤山に圖を入れた記事がある。最近の分は、本年一月二十七日發行 *“Illustrated London News”* に六頁に亘り、副葬した貴重品其他の寫眞を掲げ、また同紙二月二十六日には、表紙に『本號には未發表のツ王陵出土の寶物の大色刷寫眞あり』と記し、内容は七頁を費して各種の寫眞を載せ、そのうち三頁は美事な三色版で、絢爛目を奪ふものばかり、その説明には *“Jewels and annals on Tutankhamer's mummy. Their deposition according to the Ritual of the ‘Books of the Dead’”* とある。難かしい論文を読むよりも、これ等の繪をみた方が早わかりがするから、一般の人にはこの方をお勧めする。(此項昭和二年四月九日追記)

こゝから山一つ越すと有名な *Deir el-Bahri (Dār al-Bahari)* へ出るのであるが、山を登りきる迄は歩く方が樂だ。そこで登り詰めてから驢馬へ乗つたが、頗る危険な絶壁上の凸凹の劇しい道

所謂「北僧庵堂」平面圖（『埃及蘇丹便覽』より複寫）



を行くので大分にあぶない。やがて右側直下に目的の堂が見えたが、真直に下りることは出来ず、大迂回をして山の尾に沿うて降らねばならぬ。

降り道が曲り曲つた急斜面で、大分に際どいところへ来たので再び馬を下り、徒歩して漸く降り石を向いたら、正面絶壁の下に堂の正面全景が見えた、夫れと並んだ Menthu-hetep 堂は、こゝ

からより反つて先刻の絶壁上から見下ろした方がよく様子が判る。

此堂は今日 Temple of Deir el-Bahri (北僧庵堂) として知られてゐる。Deir el-Bahri (ディール



女王 Ha'asu の像（『埃及蘇丹便覽』より複寫）

エル・バハリ) とは暴夜語 Northern Convent (北僧庵) の意で、名の起原は其昔耶蘇教傳來の際、僧團が此堂を占領して僧庵としたからであつて、當時亂暴にも壁面にあつた幾多の貴重な彫刻を削りとつて了つたのであつた。随分怪しからぬ行爲であるが、めつたに人のことは言へぬ。我國にだつて神佛分離の際今日の國寶と同等以上の佛像を積み上げてやきすてたり、二束三文に賣り飛ばしたり、神社に保存してあつた梵鐘に一面に細字で刻みつけてあつた銘文を、全然削つたので、其神宮寺たりし寺の沿革を判らなくして了つた例等はいくつもあるから。

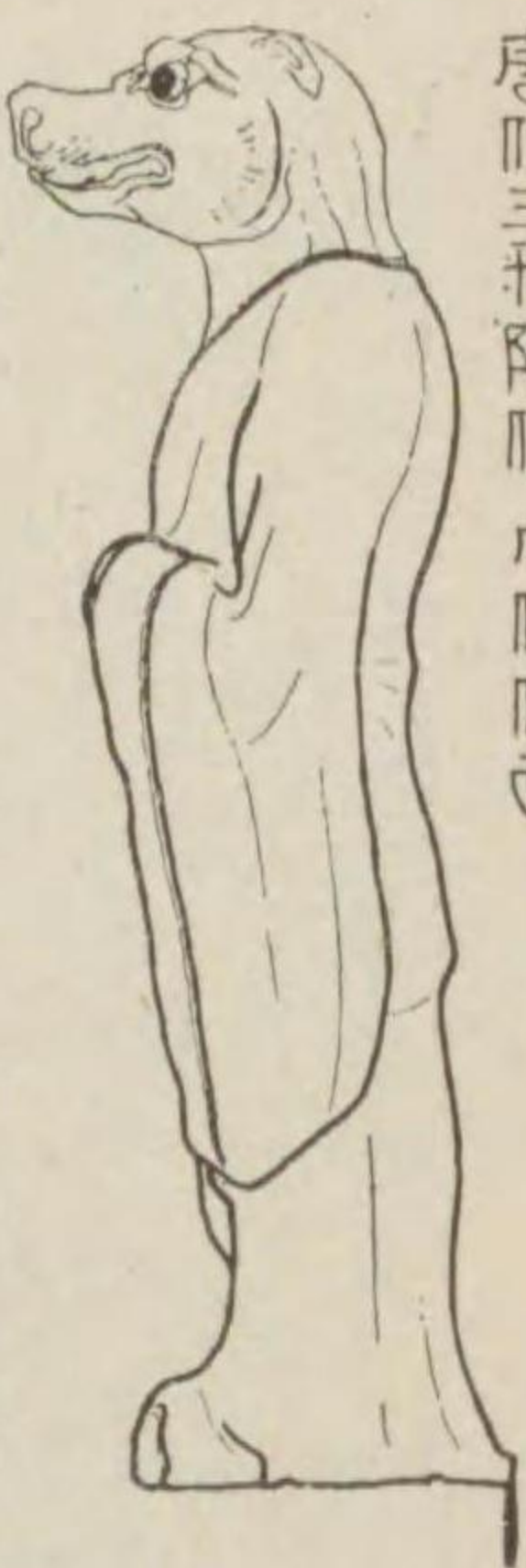
そして此堂は Queen Hatsu — 此他に此女王はまた Hatshepsut, Hatshepsowet, Makewre 等の名で呼ばれてゐるが、Hatsu が一番短くて始末がいい。案内人はハテシュと發音した——が

建てたので、主としてアモン神を祭り、尙女神ハソール及び死の神なるアヌビスをも合祀し、其上に種々の目的に用ひられたる各種の室もあつたのである。其規模は平面圖に示すが如し。

話は少し脇道へ入るが、私は豫てから Anubis を大變面白く思つてゐた。といふのは、此神は頭が Jackal (豺の類) で身體は人間である、そして左手に杖をついて立つてゐる。重ねて記すが死の神でそして Osiris の子と考へられてゐる。我國に於ける奈良佐保山の所謂隼人石なるものは獸頭人身で兩手を杖にのせて立つてゐる、其三種は『好古小録』に、拓本を縮圖したのが『集古十種』に出てゐるのは、大概の人は知つてゐらるゝであらう。今は奈良の佐保山、聖武天皇の皇太子那富山の墓の境域内にたてゝある。『大和志料』には犬石とし、頭部は狗で肢體は人だから『即ち隼人の犬人に象れるものなり』と説明してあるが、其一の上には『北』字がかいてあるし(挿圖)、『海東金石苑』所載の十二神畫象や、支那朝鮮の陵墓等から考へてみても、これは多分『子』即鼠であらうが、どうも其本家はこのアヌビスで、十二神は分家ぢやあるまいか。其他唐代三彩陶俑(十二うち戌像能勢)(挿圖)等から想像して、兎に角此際、埃及・西域・支那・朝鮮・日本といふ様な事を一寸考へてみ度い様な氣がしなくもない。尙ほこの所謂隼人石については、友人能勢丑三氏の面白い研究があるから、いづれ他日發表せらるゝであらう。といふ事を附加しておく。

Hatasu 女王の誕生に就いても面白い神話がある。造化の神なる Khnumu はアモン神の命を受

唐代三彩陶俑戌像側面



大正十三年四月二十四日能勢丑三氏原圖

大和國奈良佐保山碑の一・大正十三年三月十三日高田十一



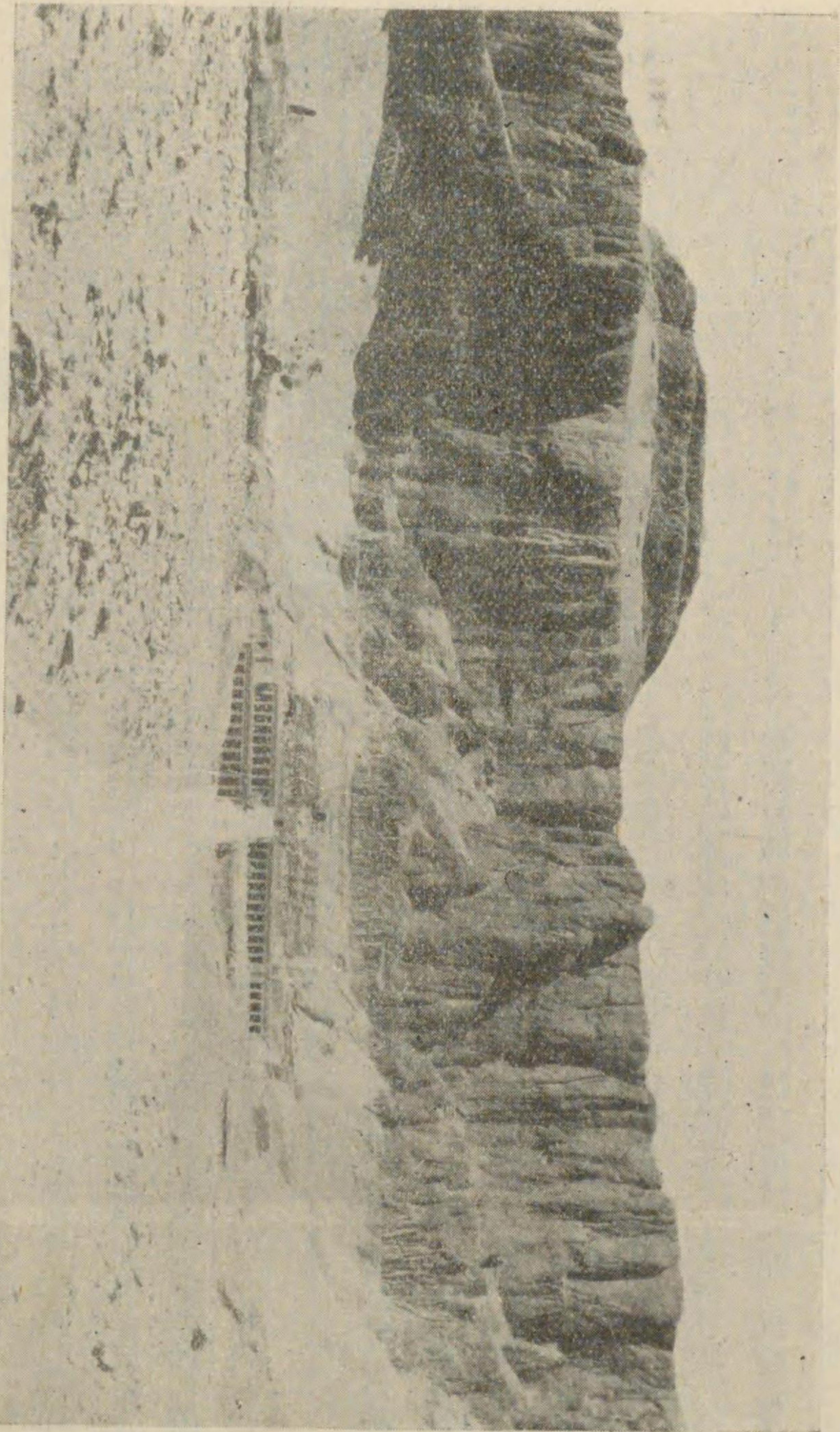
即任所藏の拓本より縮写(好古小録の所謂隼人石)

アヌビス立像



大正十三年四月二十九日能勢丑三氏原圖

けて、粘土を以て最も美なる容貌の人形を造り、生命の神なる Hekt が此の土人形に魂を吹き込み、かくして埃及否世界一の美女は埃及の朝廷に生れたのであるさうだが (Myth and Legends of Ancient Egypt)、實は第十八王朝初期に於ける男勝りの女王で、カーナツクのアモン堂とこゝとに立派な記念物を遺した人である。所謂北僧庵堂の全景は、埃及に於ける私の最も好きなものゝ一つである、砂は灰色に、背景なるリビアの絶壁は赤褐に光り輝き、澄み渡つた青空は、唯さへ青いとところに赤褐の餘色の關係上一層濃藍色に見え、絶壁の麓なる段形の壇上に配置された僧庵の列柱は白色に光り、各列柱間は深き陰影の爲めに際立ちて黒色に見えた。此時あたりに入らず、正午に近き太陽は直上より照りつけて

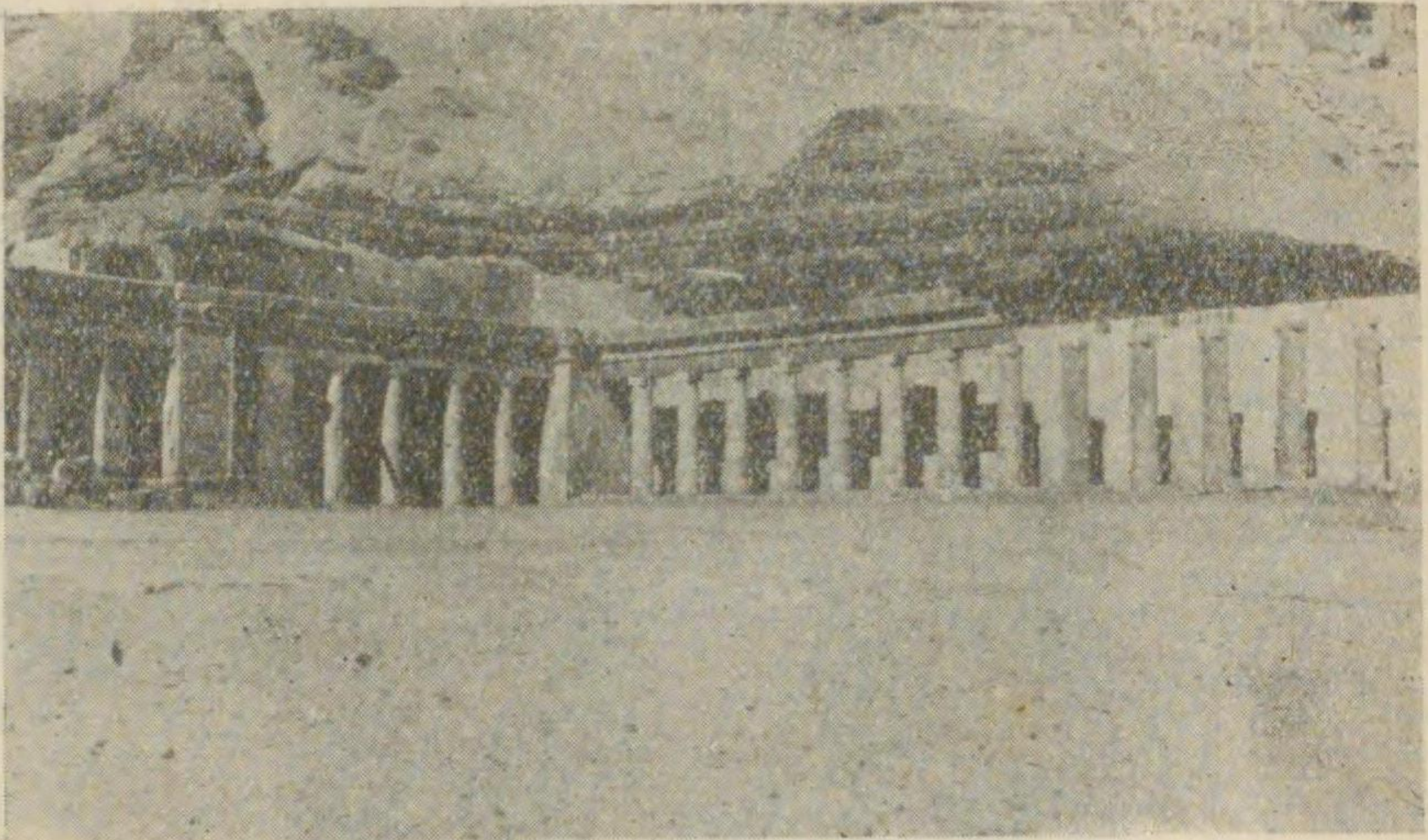


羊神廟の柱

ある丈けで、風もなく雲もなく萬籟闕として聲なく、全く静まり反つてゐたから、遺憾なく前千五百年迄時代の逆行を試み得たのであつた。

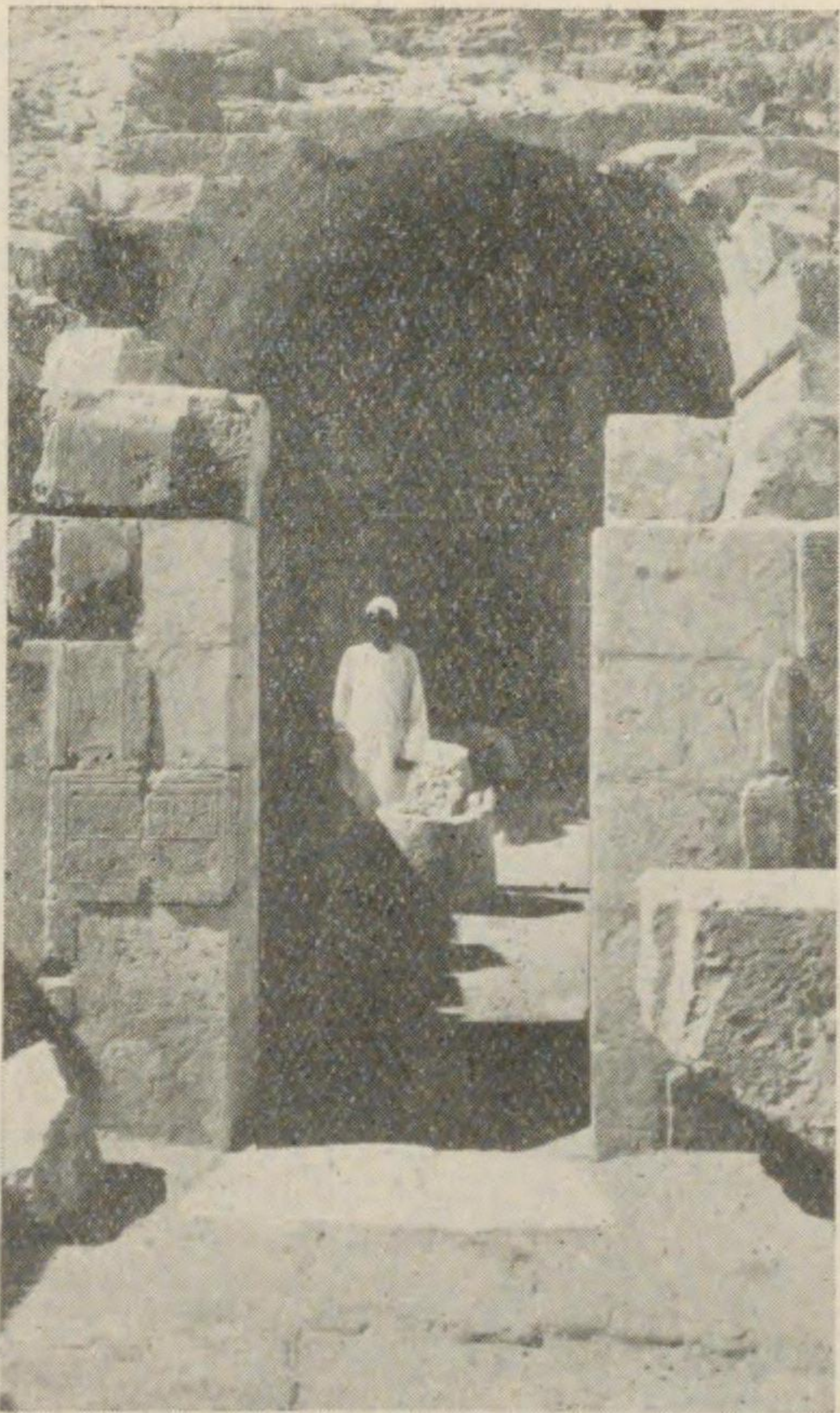
此と並び建てる Mentu-hetep 堂は、周圍に列柱があり、堂内に入ると大柱三列に並び、其中央に寶形塔のある大分變つた堂で、仔細に調べると頗る興味あるものであるが、時間の關係上止むなく遠方より眺めておいて、あとは案内記を読むこととし、ラメセウム迄行つて、其壞れて一部丈け残つてゐる列柱堂の影で辨當を開いた。

Paneseum はラムセス二世の建立する所で、例のアモン神に捧げたのであるが、大分ひどくなつてゐて今は全體の半分丈けが漸く建つてゐる有様である。正面の大門は裏側の方こそ相當に残つてゐるが、表側はまるで石切場同然である、第一中庭は跡形なく、そこにあつたラムセス二世の大像も亦無慘の最後をとげてゐるけれども、僅に胸、腕、



北僧庵堂列柱（何れも十六面柱）

脚の残闕から當初の大きさを想像し得る。例へば腕の直径四尺八寸、食指長三尺三寸で、當初の總高五丈七尺餘と見積られてゐる。我が奈良の大佛は座像で約五丈三尺あるから、立てばラムセス二世を眼下に見下し得るのであるが、坐つたまゝでは四尺負けになる。大野寺の有名な摩崖の彌勒立像も残念ながら六尺餘り背が足りぬ。第二中庭には Osiris の像が澤山あるが、何れも肝心の頭が闕けてゐる、そしてその柱は紙草の蕾、大列柱のは夫れの開花せる柱頭をもつてゐるが、何れも大した裝飾なく簡單なもので、殊に蕾の方はアバイドスのセトス一世堂のものと同じく



北僧庵堂に於ける犠牲室。天井の筒形穹窿の構造に注意せよ。

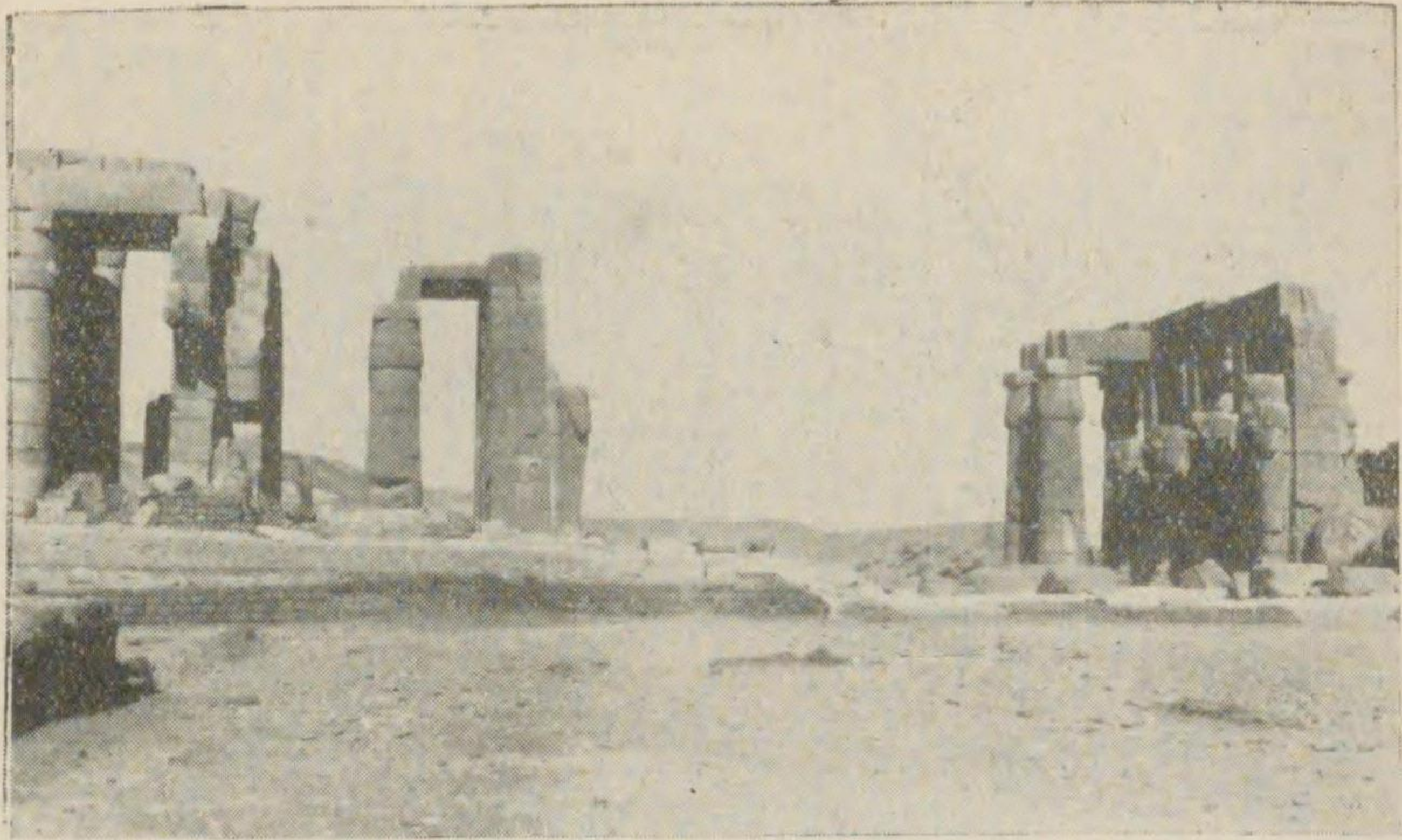
Blunt Cone であつた。

堂外西北に當る小高い所に、所謂 Sheikh の墓が大分に残つてゐるが、それ等は總て割愛して遠方から敬意を表し、これ以上詰め込むのは少し無理だから、今日はこれ丈けにして、また驢馬に跨

り渡船場に向つた。

川を渡る時上流遙に土人船一艘、笛と太鼓と鐘とで節面白く囃しながら下つて來るのを認めた。其調子が如何にも我國のに似てゐたから、お祭りでもあるのかと尋ねてみたら、何のこと葬式だといふ。併し私には、どうしても村の鎮守の祭禮とほか思へなかつた。

此時よりすつと後、即ち大正十二年一月十九日、南印度の Madura — Mathura (Muttra) ではない——市の郊外約一里餘なる Teppa Kulm をみに行つたことがあつた。我國なら襟巻に外套で震へてゐる様な時分だが、常夏の國では恰も盛夏の如くこげつく様な暑さだつたから、淨水を湛へた大神聖池の附近は、廣びるとして靜かで何とも言へぬいゝ氣持であつたが、こゝで休んで少しく眠氣を催したとき、突然此池の裏手に當り同じ様な調子の笛太鼓鐘の囃子が始まつた、此時私は一番先きに我國の祭禮を、次に此



Ramesseum の一部



ラメセウム大門の右翼を内側よりみる。前方に見ゆる礎石は中央に線り出しありて我國飛鳥末より奈良時代に渡りて、廣く用ひられたる礎に似てゐる。大門翼と柱礎との間に茂れるはタマリスク樹。

ナイルの葬禮船を思ひ出したのであつた。

こんな風で私には、元來音樂を聞き分ける様な微妙な高等な耳は持合せて居らぬから、甚だ以て怪しいが、埃及や印度の囃子はどうも我國のによく似て居り、殊に其太鼓は西洋の Drum と異なり、所謂東洋風の音を出すから、私共には一種の懷みを感じると同様に、歐米人には東洋式氣分が横溢してゐて野蠻音に聞こえるのだらう。そして氣候の加減で赤い圓筒形の厨子の内から浮かれ出した歡喜天の拙い踊の様な、淫靡な踊を踊る時に伴奏するピーク／＼／＼を以て最上の佳調だと考へてゐるのだらう。近時我國でも此歡喜天踊に憂身を襲してゐる連中があるやに聞いてゐるが、あんな亡國踊は宜しく排斥して、もつと剛健の氣風を養成せぬといかんだらう。さうしないと踊に

夢中になつてゐる間に夫れこそほんとの Grave Consequence が起り、揚句の果ては位置も名譽も何も彼も失はねばならぬ様になり勝ちである、恐るべく慎むべきである。

歸宿したのは四時半であつたが、室内はもう薄暗かつた。日が永ければ暑いし、暑い時には屹度日が永いと昔しから決まつてゐて、此場合は逆は常に眞であつたのに、こゝでは日が短くて暑いのであるから、随分に勝手が違ひ様子が變である。旅行をするといろ／＼な目にあふから自然種々のことを覚えるものだ。

* * * * *

セトス一世堂では十人許りの物賣が、出口の兩側に一列横隊に並び、偽物の首飾やスカラツプや乃至拂子——之は蠅を拂ふ爲め——やを賣りつけやうとした。デイル・エル・バハリでは一人、ラメセウムでも一人、随分根氣よく付き纏つた、まるで蠅と同じ事で、三度や四度では到底追ひ拂ふ事は出来なかつた。實際ラクソルの蠅は大變なものであつて、宿屋の食堂でさへもつてきた食物の上に蠅が一寸でも止まつたところを捨てゝゐては、まるで何にも食へることが出来ぬ有様である。顔頭手足の區別なく群をなして止るのだからやり切れぬ。我國ではうるさいを『五月蠅』とかくが、埃及では『年中蠅』とかくねば事實と一致しない。

蠅は蠅として、其うるさい物賣であるが、こんなに大勢ゐて而もこんなに執拗いのも、猶且需用

供給の原則に従つてゐるので、即ち買手も相當にあることを物語つてゐるのである。嘗つて西班牙國は愚樂灘なる聖ニコラス寺に近きある畫室で、一美術家がアルハンブラの寫生畫を賣つてゐたのを見たが、孰れも入念に拙い水彩畫で、學校で習つた以來唯一枚の畫すらかいた事のない私にも、あの位のならいつでも描けさうに思つたが、彼は夫れを賣つて口を糊してゐるのであつた。同國セビーアのアルカザアの庭にも、水彩畫の即席販賣人がゐたが、その時はこんな畫でも買手があると、世の中は廣いものだ、何をしてでも食へるものだと思つたのであつたが、今になつてみると彼等は最上等の部であるので、こゝら邊では、あんな偽物賣がうぢやつこい程ゐて、夫れで各々が相當に食つて行くのだから、全く以て驚かざるを得ぬ。

* * * * *

挿畫の内アヌビス及び犬頭人身の『戌』立像の二つは、能勢丑三氏が特に私のために、前者は寫真銅版より、後者は高さ約九寸の實物より寫生して寄贈されたものである。記して其厚意を謝する次第である。

(大正十三年四月三十日稿了)

シブズ西岸の第二日

十月二十九日

(日曜、好晴)

昨夜はつかれたせゐか近頃になく熟睡して今朝は六時五十分に起きた、此位よくなると平素朦々朧々たる頭も割合に透明な様な氣がして、甚だ心地はいゝが困つた事には少し寢過したので、少々慌氣味になり、手早く食事を了り支度をして、對岸に渡るべく昨日と同じ様に河岸に出た。

今日はどうしてもシブズ西岸の西半部を片付ねばならぬ、其爲めには見られるものから先きにしておくのが一番いゝ、そこで先づ第一に所謂『メムノンの大像』へと志した、案内人は歸りにした方がよからうと言つたが、朝でないと言つて正面に日があたつてゐぬから寫眞が撮りにくい、だから是非朝にするといつて頑張つた結果さう決つた。

二軀の大像は何れも坐して東面し、砂原に立つてゐる、昔は大堂の大門の前に安置されたのであるが、今堂も門もすつかり亡びたから自然砂原に立つ様になつて了つたのである。

其南方のものは、元總高約七十尺あつたが、今は六十四尺だそうな、だから今度は奈良の大佛がいくら威張つても及ばぬが、併し此れは腰を掛けてゐるのだし、大佛の方は結跏趺坐してゐるのだから、立上つたら兩方大概同じ位であらう。これはメムノンの大像として知られてゐるが、其の實は Amenophis III. であるけれども、夫れでは通用せぬのださうな。で此の像をメムノンだと言ひ出したのはいつ頃からかといふに、羅馬帝政時代からださうである。

讀者諸君はどうか知らないが、私には此の名が大變に懐しく聞える。夫れはメムノンが希臘神話